

千葉県匝瑳郡光町

# 神山谷遺跡(2)

－ひかり工業団地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

2002

千葉県企業庁  
財団法人 東総文化財センター

千葉県匝瑳郡光町

かみ やま たに い せき  
神 山 谷 遺 跡 (2)

- ひかり工業団地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ -

## 序 文

九十九里平野の中央部に位置する光町は、九十九里平野のほぼ中央部に位置し、北部は下総台地、南部は太平洋に面した平野となっています。そして、この地域特有の温暖な気候は豊かな自然を育み、数千年に及ぶ人々の暮らしの跡が遺跡として、私たちの周辺に数多く残されています。

ひかり工業団地造成地内に所在する篠本遺跡群は、城山遺跡、夏台遺跡、神山谷遺跡、新台遺跡の4遺跡からなり、発掘調査は、平成4年12月から始まり、平成10年6月に実施した新台遺跡の調査を最後に終了しました。

このたび第IV冊として刊行いたします神山谷遺跡C区は、台地斜面部と台地裾部にあたり、古代から中世篠本城に関連する建物跡や遺物が多く発見されました。本書が学術資料としてだけでなく、郷土史・地域史の資料として活用され、広く文化財に対する理解を深めるための一助としてなることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至まで、ご協力のご指導いただきました千葉県企業庁、千葉県教育委員会、光町教育委員会をはじめ関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成14年3月

財団法人 東総文化財センター  
理事長 江波戸 義 治

## 例 言

- 1 本書は、千葉県企業庁によるひかり工業団地造成に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県匝瑳郡光町篠本字神山谷1105ほかに所在する神山谷遺跡である。
- 3 神山谷遺跡の遺跡コードは、H29である。遺跡コードのHは光町の略号、29は『千葉県埋蔵文化財分布地図』（平成10年）と『千葉県埋蔵文化財地図』（昭和62年）の分布地図に記載されている光町の遺跡番号である。
- 4 発掘調査から報告書に至る業務は、千葉県企業庁の委託を受けて、千葉県教育委員会及び光町教育委員会の指導のもとに、財団法人東総文化財センターが実施した。
- 5 発掘調査及び整理作業の経緯については第1章第1節に記した。
- 6 本書の編集・執筆は、主任調査研究員 本多昭宏が行った。
- 7 発掘調査及び整理作業、報告書作成にあたっては、千葉県教育庁文化課、光町教育委員会、高橋 誠、中山俊之、宇田教司、林田利之、阿部寿彦、青木幸一、中野修秀、大内千年、藤澤良祐、佐野元、小笠原永隆、井上賢、石橋宏克、加瀬靖之の諸機関・諸氏のご指導とご協力をいただいた。
- 8 遺跡の位置図には国土地理院発行2万5千分の1「多古」・「八日市場」を使用している。
- 9 本書で使用した図面の方位はすべて座標北である。
- 10 本書中に掲載した遺構・遺物の縮尺については、遺構は竪穴住居跡・掘立柱建物跡が1/80、竈が1/40、落とし穴・炉穴・土坑が1/40。遺物は、縄文時代石器1/1または1/2、実測した縄文土器が1/2乃至は1/3、土師・須恵の各土器は1/4、鉄器は1/2などである。縄文土器のうち繊維土器には、断面に網掛けした。また須恵器は、断面を黒塗りしている。その他、使用した網掛けは各挿図に凡例を記した。
- 11 第4、88、143、214、230、243図のコンタラインは調査前のものである。



## 本文目次

### 序文 例言 目次

#### 第1章 調査の概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡の環境	
1. 地理的環境	5
2. 周辺の遺跡	5
第3節 調査の方法	7
第4節 各地区の概要	8

#### 第2章 C1・C2区の調査

第1節 縄文時代	
1. 竪穴住居跡	11
2. 炉穴	24
3. 落とし穴	33
4. ビット群	36
第2節 遺構外の出土遺物	
1. 縄文土器	37
2. 土製品	80
3. 石器	81

#### 第3章 C3区の調査

第1節 縄文時代	
1. 遺構	99
2. 遺物	99
第2節 古墳時代から平安時代	
1. 竪穴住居跡	101
2. 土坑	104
3. 遺構外の出土遺物	105
第3節 中世	
1. 掘立柱建物跡	107
2. 横穴状土坑	110
3. 地下式坑	114
4. 水利土坑	119
5. 土坑	119
6. 溝	120
7. 遺構外の出土遺物	124
第4節 近世	
1. 掘立柱建物跡	132
2. 土坑墓	136
3. 門柱跡	137
4. 円形連結土坑	137
5. 水利施設	
a) 横井戸	140
b) 水利土坑	146
6. 井戸	156
7. 炭窯	157

8. 竈	158
9. 室	158
10. その他の土坑	158
11. 溝	162
12. 遺構外の出土遺物	168
<b>第4章 C4区の調査</b>	
<b>第1節 縄文時代</b>	
1. 遺構	181
2. 遺物	184
<b>第2節 古墳時代から平安時代</b>	
1. 竪穴住居跡	185
2. 掘立柱建物跡	226
3. 土坑	231
4. 遺構外の出土遺物	242
<b>第3節 中世</b>	
1. 土坑	243
2. 溝	250
3. 遺構外の出土遺物	252
<b>第5章 C5区の調査</b>	
<b>第1節 縄文時代</b>	272
<b>第2節 古墳時代から平安時代</b>	
1. 竪穴住居跡	273
2. その他の遺構	278
3. 遺構外の出土遺物	281
<b>第3節 中世</b>	
1. 掘立柱建物跡	281
2. 土坑	281
3. 溝	284
4. 遺構外の出土遺物	284
<b>第4節 近世</b>	285
<b>第6章 C6区の調査</b>	
<b>第1節 縄文時代</b>	289
<b>第2節 中世</b>	
1. 掘立柱建物跡	289
2. 地下式坑	292
3. 土坑	294
4. 溝	304
5. 遺構外の出土遺物	304
<b>第7章 C7区の調査</b>	
<b>第1節 縄文時代</b>	306
<b>第2節 平安時代</b>	308
<b>附章 神山谷遺跡の自然科学分析</b>	311

## 挿図目次

第1図	周辺の遺跡	2	第43図	ⅢB群土器(2)	52
第2図	ひかり工業団地内の遺跡 及びクリッド分割図	4	第44図	ⅢB群土器(3)	53
第3図	調査区分割図	6	第45図	ⅢB群土器(4)	54
第4図	C1,C2区縄文時代遺構配置図	10	第46図	ⅢB群土器(5)	55
第5図	SI-137実測図	12	第47図	ⅢB群土器(6)	56
第6図	SI-137出土遺物(1)	13	第48図	ⅢB群土器(7)	57
第7図	SI-137出土遺物(2)	14	第49図	Ⅲ群土器底部	58
第8図	SI-137出土遺物(3)	15	第50図	Ⅳ群土器(1)	59
第9図	SI-138実測図及び出土遺物(1)	16	第51図	Ⅳ群土器(2)	60
第10図	SI-138出土遺物(2)	17	第52図	Ⅳ群土器(3)	61
第11図	SI-138出土遺物(3)	18	第53図	Ⅳ群土器(4)	62
第12図	SI-139実測図及び出土遺物	18	第54図	Ⅳ群土器(5)	63
第13図	SI-142実測図及び出土遺物(1)	19	第55図	Ⅳ群土器(6)	64
第14図	SI-142出土遺物(2)	20	第56図	Ⅳ群土器(7)	65
第15図	SI-143実測図及び出土遺物	21	第57図	Ⅳ群土器(8)	66
第16図	SI-144実測図及び出土遺物	22	第58図	Ⅳ群土器(9)	67
第17図	SI-145実測図	23	第59図	Ⅳ群土器00	68
第18図	1号炉穴群 (FP-1~5) 実測図 及び出土遺物	25	第60図	V群土器(1)	69
第19図	2号炉穴群 (FP-10,11,17~20) 実測図及び出土遺物(1)	26	第61図	V群土器(2)	70
第20図	2号炉穴群出土遺物(2)	27	第62図	V群土器(3)	71
第21図	3号炉穴群 (FP-14,15,21~23) 実測図及び出土遺物(1)	28	第63図	V群土器(4)	72
第22図	3号炉穴群出土遺物(2)	29	第64図	V群土器(5)	73
第23図	FP-6~9実測図及び出土遺物	31	第65図	V群土器(6)	74
第24図	FP-12,13,16実測図及び出土遺物	32	第66図	V群土器(7)	75
第25図	1号,2号,4号,5号落とし穴実測図	34	第67図	V群土器(8)	76
第26図	3号落とし穴実測図	35	第68図	V群土器(9)	76
第27図	落とし穴出土遺物 (2号:1~4,3号:5~7)	35	第69図	Ⅵ群土器	77
第28図	C2区ピット群	36	第70図	Ⅶ群土器	78
第29図	I群土器(1)	38	第71図	Ⅷ群土器(1)	79
第30図	I群土器(2)	39	第72図	Ⅷ群土器(2)	80
第31図	Ⅱ群土器	40	第73図	Ⅷ群土器(3)	81
第32図	ⅢA群土器(1)	41	第74図	土製品	82
第33図	ⅢA群土器(2)	42	第75図	単独出土旧石器	83
第34図	ⅢA群土器(3)	43	第76図	石鏃(1)	84
第35図	ⅢA群土器(4)	44	第77図	石鏃(2)	85
第36図	ⅢA群土器(5)	45	第78図	石鏃(3)未製品	86
第37図	ⅢA群土器(6)	46	第79図	剥片石器(1)	87
第38図	ⅢA群土器(7)	47	第80図	剥片石器(2)	88
第39図	ⅢA群土器(8)	48	第81図	剥片石器(3)	89
第40図	ⅢA群土器(9)	49	第82図	搔器・削器(1)	90
第41図	ⅢA群土器00	50	第83図	搔器・削器(2)	91
第42図	ⅢB群土器(1)	51	第84図	石核・剥片	92
			第85図	磨製石斧	93
			第86図	打製石斧	94
			第87図	礫石器	95
			第88図	C3区遺構配置図	100

第89回	落とし穴 (SK-241) 実測図 及び出土遺物	101	第124回	水利施設 (SK-209.212.213) 実測図 及び出土遺物	150
第90回	C3区出土縄文土器	102	第125回	水利施設 (SE-200.SK-233.221.222. 215A・B.216.237) 実測図	152
第91回	SI-200.201実測図及び出土遺物	103	第126回	水利施設 (SE-200.SK-233.221.222. 216) 実測図及び出土遺物	153
第92回	SI-202実測図及び出土遺物	104	第127回	井戸 (SE-201) 水利施設 (SK-230.235) 実測図及び出土遺物	154
第93回	SI-203実測図及び出土遺物	105	第128回	水利施設 (SK-217~219). 井戸 (SE-204) 実測図	155
第94回	土坑 (SK-234) 実測図及び出土遺物	106	第129回	炭窯200実測図及び出土遺物	156
第95回	遺構外出土遺物	107	第130回	炭窯201,炭窯202実測図	157
第96回	SB-201実測図及び出土遺物	108	第131回	土坑 (SK-207.236.220.SX-202) 実測図 及び出土遺物	159
第97回	SB-203.204実測図	109	第132回	土坑 (SX-200A・B・C・D.SK-203.206) 実測図	160
第98回	SB-205~208.211.212. SK-252.256実測図	111	第133回	土坑 (SX-200) 出土遺物	161
第99回	横穴状土坑 (SK-254.255. SX-206.211) 実測図及び出土遺物	113	第134回	溝 (SD-200~203) 実測図	163
第100回	地下式坑 (SK-238.239.SD-216A.216B) 実測図及び出土遺物	115	第135回	溝 (SD-204.205.209) 実測図	165
第101回	地下式坑 (SK-242) 実測図 及び出土遺物	116	第136回	溝 (SD-204.209) 出土遺物	167
第102回	地下式坑 (SK-245~247.250.251) 実測図及び出土遺物	117	第137回	溝 (SD-206.211.221.SK-226) 実測図	169
第103回	水利土坑 (SK-248.253) 実測図 及び出土遺物	118	第138回	溝 (SD-207.210), 井戸 (SE-203) 実測図及び出土遺物	171
第104回	土坑 (SK-244.249A・B・C) 実測図	120	第139回	遺構外出土遺物(1)	173
第105回	溝 (SD-213.214A~F) 実測図	121	第140回	遺構外出土遺物(2)	174
第106回	溝 (SD-213.214) 出土遺物	123	第141回	遺構外出土遺物(3)	175
第107回	溝 (SD-215.220) 実測図	125	第142回	谷奥 (城山, 神山谷C4~C6区) 遺構配置図	182
第108回	溝 (SD-215) 実測図及び出土遺物	127	第143回	C4区遺構配置図	183
第109回	溝 (SD-212) 実測図	129	第144回	SK-307.319実測図	184
第110回	溝 (SX-203) 実測図及び出土遺物	131	第145回	C4区出土縄文土器	185
第111回	SB-200.土坑 (SK-208.224) 実測図 及び出土遺物	133	第146回	SI-301実測図及び出土遺物	187
第112回	SB-202実測図	135	第147回	SI-302実測図及び出土遺物(1)	188
第113回	SB-209.210実測図	136	第148回	SI-302実測図及び出土遺物(2)	189
第114回	土坑墓 (SK-243) 実測図及び出土遺物	137	第149回	SI-303実測図及び出土遺物	190
第115回	門柱跡 (SK-200・201), 円形連結土坑 (SK-202・204.210・211・225) 実測図 及び出土遺物	138	第150回	SI-304実測図及び出土遺物(1)	192
第116回	水利施設 (SX-208.227~229) 実測図及び出土遺物	141	第151回	SI-304出土遺物(2)	193
第117回	水利施設 (SX-209A・B.210A・B) 実測図及び遺物出土状況	142	第152回	SI-305実測図及び出土遺物(1)	194
第118回	水利施設 (SX-209B.210A) 出土遺物	143	第153回	SI-305出土遺物(2)	195
第119回	水利施設 (SX-205.207) 実測図	144	第154回	SI-306実測図及び出土遺物	196
第120回	水利施設 (SX-207) 出土遺物	145	第155回	SI-307実測図	197
第121回	水利施設 (SX-204A・B・C) 実測図 及び出土遺物	147	第156回	SI-308実測図及び出土遺物	197
第122回	水利施設 (SK-232.223.231) 実測図	148	第157回	SI-309実測図及び出土遺物(1)	198
第123回	水利施設 (SK-223.232) 出土遺物	149	第158回	SI-309出土遺物(2)	199
			第159回	SI-310実測図	200
			第160回	SI-311実測図及び出土遺物	200
			第161回	SI-312実測図及び出土遺物	200
			第162回	SI-313実測図及び出土遺物	201

第163図	SI-314実測図及び出土遺物(1)	202
第164図	SI-314出土遺物(2)	203
第165図	SI-314出土遺物(3)	204
第166図	SI-315~317実測図及び出土遺物	205
第167図	SI-319実測図及び出土遺物	206
第168図	SI-318実測図及び出土遺物	207
第169図	SI-320実測図及び出土遺物	207
第170図	SI-321実測図及び出土遺物(1)	208
第171図	SI-321出土遺物(2)	209
第172図	SI-322実測図及び出土遺物	209
第173図	SI-323実測図及び出土遺物(1)	210
第174図	SI-323出土遺物(2)	211
第175図	SI-323出土遺物(3)	212
第176図	SI-324実測図及び出土遺物	213
第177図	SI-325実測図及び出土遺物	214
第178図	SI-326実測図及び出土遺物	215
第179図	SI-327実測図及び出土遺物	216
第180図	SI-328実測図及び出土遺物	217
第181図	SI-329実測図及び出土遺物	218
第182図	SI-330実測図及び出土遺物	219
第183図	SI-331実測図及び出土遺物	219
第184図	SI-332実測図及び出土遺物	220
第185図	SI-334実測図及び出土遺物(1)	221
第186図	SI-334出土遺物(2)	222
第187図	SI-335実測図及び出土遺物	222
第188図	SI-336実測図	223
第189図	SI-336出土遺物	224
第190図	SI-337実測図及び出土遺物	225
第191図	SB-301実測図及び出土遺物	227
第192図	SB-302~304,306実測図 及び出土遺物	228
第193図	SB-305実測図	229
第194図	SX-303実測図及び出土遺物	232
第195図	土坑(SK-308, 320) 実測図 及び出土遺物	233
第196図	土坑(SK-309~311) 実測図 及び出土遺物	234
第197図	土坑(SK-317,316,323,318) 実測図 及び出土遺物	235
第198図	遺構外出土遺物(1)	236
第199図	遺構外出土遺物(2)	237
第200図	遺構外出土遺物(3)(須石器)	238
第201図	遺構外出土遺物(4)(転用硯・砥石)	239
第202図	遺構外出土遺物(5)	240
第203図	遺構外出土遺物(6)	241
第204図	遺構外出土遺物(7)	242
第205図	土坑(SK-301,302) 実測図 及び出土遺物	244

第206図	土坑(SK-303,304) 実測図 及び出土遺物	245
第207図	土坑(SK-305) 実測図	246
第208図	土坑(SK-325~336) 実測図	247
第209図	土坑(SK-306) 実測図及び出土遺物	249
第210図	土坑(SK-314) 実測図及び出土遺物	250
第211図	溝(SD-301,304) 出土遺物	251
第212図	遺構外出土遺物	251
第213図	遺構外出土遺物(転用砥石)	252
第214図	C5区遺構配置図	271
第215図	C5区出土縄文土器及び石器	272
第216図	SI-501A実測図及び出土遺物	274
第217図	SI-501B実測図	274
第218図	SI-501B出土遺物	275
第219図	SI-502実測図及び出土遺物	276
第220図	SI-502出土遺物, SI-503,504実測図 及び出土遺物	277
第221図	SI-505実測図及び出土遺物	278
第222図	溝(SD-502) 実測図及び出土遺物	279
第223図	遺構外出土遺物	280
第224図	SB-501実測図	281
第225図	土坑(SK-501,502,506,507) 実測図 及び出土遺物	282
第226図	土坑(SK-504,505,508~510) 実測図	283
第227図	遺構外出土遺物	283
第228図	火葬施設(SX-501,502) 実測図	285
第229図	C6区出土縄文土器	289
第230図	C6区遺構配置図	230
第231図	SB-601,602実測図及び出土遺物	291
第232図	SB-603実測図	292
第233図	地下式坑(SK-601~603,605) 実測図	293
第234図	地下式坑(SK-602,603,605) 出土遺物	294
第235図	土坑(SX-602,SK-604,614) 実測図 及び出土遺物	296
第236図	土坑(SD-601A,B) 実測図	297
第237図	土坑(SD-601C) 実測図	297
第238図	土坑(SD-601) 出土遺物	298
第239図	土坑(SK-615~619,625~628) 実測図	299
第240図	土坑(SK-610~613,633A~E) 実測図 及び出土遺物	300
第241図	土坑(SK-630,632,SX-601), 溝(SD-603,604) 実測図及び出土遺物	301
第242図	遺構外出土遺物	303
第243図	C7区遺構配置図	306
第244図	C7区出土縄文土器(1)	307
第245図	C7区出土縄文土器(2)及び土製品	308
第246図	SI-701実測図及び出土遺物	309
第247図	遺構外出土遺物	310



## 表 目 次

第1表	C1・C2区縄文時代整穴住居跡計測表	11	第22表	C4区整穴住居跡計測表	186
第2表	C1・C2区縄文時代炉穴計測表	24	第23表	C4区掘立柱建物跡計測表	226
第3表	C1・C2区落とし穴計測表	33	第24表	C4区土坑計測表(1)	230
第4表	C1・C2区縄文時代土製品一覧	83	第25表	C4区土坑計測表(2)	243
第5表	C1・C2区旧石器・縄文時代石器一覧	96	第26表	C4区溝計測表	250
第6表	C3区整穴住居跡計測表	99	第27表	C4区古代出土遺物一覧	253
第7表	C3区掘立柱建物跡計測表(1)	107	第28表	C4区中世出土遺物一覧	270
第8表	C3区土坑計測表(1)	110	第29表	C5区縄文時代石器一覧	272
第9表	C3区土坑計測表(2)	114	第30表	C5区整穴住居跡計測表	273
第10表	C3区土坑計測表(3)	119	第31表	C5区土坑計測表(1)	281
第11表	C3区溝計測表(1)	124	第32表	C5区溝計測表	284
第12表	C3区掘立柱建物跡計測表(2)	132	第33表	C5区土坑計測表(2)	285
第13表	C3区土坑計測表(4)	139	第34表	C5区古代出土遺物一覧	286
第14表	C3区土坑計測表(5)	139	第35表	C5区中世出土遺物一覧	288
第15表	C3区土坑計測表(6)	157	第36表	C6区掘立柱建物跡計測表	289
第16表	C3区土坑計測表(7)	158	第37表	C6区土坑計測表(1)	292
第17表	C3区溝計測表(2)	162	第38表	C6区土坑計測表(2)	295
第18表	C3区古代出土遺物一覧	176	第39表	C6区古代出土遺物一覧	305
第19表	C3区中世出土遺物一覧	177	第40表	C6区中世出土遺物一覧	305
第20表	C3区近世出土遺物一覧	177	第41表	C7区出土遺物一覧	310
第21表	C4区落とし穴計測表	181			

## 図版目次

図版1	遺構周辺の航空写真	図版19	C1・2区(縄文) 遺構外石器(搔器・削器、石核、剥片、磨製石斧、打製石斧、礮石器)
図版2	C3区 空中写真	図版20	C1・2区(縄文) I群土器
図版3	C3区 空中写真	図版21	C1・2区(縄文) II群、III A群土器
図版4	C4・5・6区 空中写真	図版22	C1・2区(縄文) III A群土器
図版5	C5・C6区 空中写真	図版23	C1・2区(縄文) III A群土器
図版6	C1・2区 空中写真、SI-137,138,139,142	図版24	C1・2区(縄文) III A群土器
図版7	C1・2区 SI-142,143,144,145,1号炉穴群	図版25	C1・2区(縄文) III A群土器
図版8	C1・2区 1号,2号,3号炉穴群	図版26	C1・2区(縄文) III A群、III B群土器
図版9	C1・2区 3号炉穴群、FP-6,7,8,9,12,13,16	図版27	C1・2区(縄文) III B群土器
図版10	C1・2区 2号,3号,4号,5号落とし穴	図版28	C1・2区(縄文) III B群土器
図版11	C1・2区(縄文) SI-137出土遺物	図版29	C1・2区(縄文) III B群土器
図版12	C1・2区(縄文) SI-137,138出土遺物	図版30	C1・2区(縄文) IV群土器
図版13	C1・2区(縄文) SI-138,139,142出土遺物	図版31	C1・2区(縄文) IV群土器
図版14	C1・2区(縄文) SI-142,144出土遺物	図版32	C1・2区(縄文) IV群土器
図版15	C1・2区(縄文) 1~3号炉穴群出土遺物	図版33	C1・2区(縄文) IV群土器
図版16	C1・2区(縄文) FP-7,9,13,2号,3号落とし穴出土遺物	図版34	C1・2区(縄文) IV群土器
図版17	C1・2区(縄文) SI-137,1~3号炉穴群出土石器、遺構外土製品	図版35	C1・2区(縄文) IV群土器
図版18	C1・2区(縄文) 遺構外石器(旧石器、石鏃、剥片石器)	図版36	C1・2区(縄文) V群土器
		図版37	C1・2区(縄文) V群土器
		図版38	C1・2区(縄文) V群土器
		図版39	C1・2区(縄文) V群土器

- 図版40 C 1・2区(縄文) V群土器  
 図版41 C 1・2区(縄文) V群土器  
 図版42 C 1・2区(縄文) V群土器  
 図版43 C 1・2区(縄文) V群土器  
 図版44 C 1・2区(縄文) V群土器  
 図版45 C 1・2区(縄文) VI群土器  
 図版46 C 1・2区(縄文) VI群土器  
 図版47 C 1・2区(縄文) VII群土器  
 図版48 C 1・2区(縄文) VIII群土器  
 図版49 C 1・2区(縄文) VIII群土器  
 図版50 C 1・2区(縄文) VIII群土器,  
 C 3区(縄文) SK-241及ひ遺構外縄文土器  
 図版51 C 4・5・6区(縄文) 遺構外縄文土器  
 図版52 C 7区(縄文) 遺構外縄文土器  
 図版53 C 3区 SK-241,SI-200,201,202,203,SK-234  
 図版54 C 3区 SB-201,203,204,205~208,211,212,  
 SD-215,SX-211,206,SK-238,239,SD-216,  
 SK-242  
 図版55 C 3区 SK-245,246,247,251,250,248,  
 SD-213,214,212  
 図版56 C 3区 SB-200,202,SK-200,201~204,206,  
 210,211,225,SX-200,調査風景,水利施設群  
 図版57 C 3区 SX-208,228,229,SX-205,209,210,  
 207  
 図版58 C 3区 SX-204,SK-231,水利土坑群,  
 SE-200,SK-233,221,222,215A・B,237  
 図版59 C 3区 SK-230,235,219,SE-203,  
 炭窯200,201,202  
 図版60 C 3区 SK-220,SX-200,SD-200~203,204,  
 206,211,205,209,水利土坑群と溝,SD-206  
 図版61 C 3区(古代) 出土遺物  
 図版62 C 3区(中世) 出土遺物  
 図版63 C 3区(近世) 出土遺物  
 図版64 C 3区(近世) 出土遺物  
 図版65 C 3区(近世) 出土遺物  
 図版66 C 3区(近世) 出土遺物  
 図版67 C 4区 SK-307,319,SI-301,302,303,304  
 図版68 C 4区 SI-305,306,307,308,309  
 図版69 C 4区 SI-310,311,312,313,314,315,317  
 図版70 C 4区 SI-318,319,320,321,322,323  
 図版71 C 4区 SI-324,325,326,328,329,330,331  
 図版72 C 4区 SI-332,334,335,住居跡群,  
 SI-336,337  
 図版73 C 4区 SB-301,305,SK-308,320,SX-303,  
 SK-301,302  
 図版74 C 4区 SK-303,305,306,324,335,SX-302,  
 SD-302,303,調査風景  
 図版75 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版76 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版77 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版78 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版79 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版80 C 4区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版81 C 4区(古代) 出土遺物  
 図版82 C 4区(古代) 出土遺物  
 図版83 C 4区(古代・中世) 出土遺物  
 図版84 C 5区 空中写真, SI-501A,501B,502  
 図版85 C 5区 SI-503,504,505,SD-502,SX-501,502  
 図版86 C 5区(古墳・古代) 出土遺物  
 図版87 C 5区(古代・中世) 出土遺物  
 図版88 C 6区 空中写真, SK-601,602,603,604,605  
 図版89 C 6区 SX-601,602,SD-601C,  
 C 7区 SI-701  
 図版90 C 6区(古墳・古代・中世) 出土遺物  
 図版91 C 6区(中世) 出土遺物

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査の経緯

千葉県企業庁は、千葉県匝瑳郡光町篠本地先にひかり工業団地造成を計画し、平成3年11月30日付けで事業範囲27.6ヘクタールにおよぶ埋蔵文化財の有無及びその取扱いについての照会が光町教育委員会経由で千葉県教育委員会あてに提出された。千葉県教育委員会は、事業地内の埋蔵文化財の所在について分布調査を実施した結果、対象区域内に所在する遺跡が確認された。これらの遺跡の取扱いについて、千葉県企業庁と千葉県教育庁文化課との協議の結果、現状保存が困難な部分についてはやむを得ず発掘調査を行って、記録保存の措置を講ずることとなった。発掘調査は、財団法人東総文化財センターが千葉県企業庁からの委託を受け実施した。

事業地内に所在する遺跡は、夏台遺跡、城山遺跡、新台遺跡、神山谷遺跡の4遺跡である。城山遺跡及び神山谷遺跡は、篠本城跡の領域に含まれ、中世の遺構群を色濃くとどめている遺跡である。発掘調査は、城山遺跡と神山谷遺跡の範囲を篠本城跡の領域として認識し、台地上面を占める城山遺跡をA区、神山谷遺跡の台地上面をB区、城山遺跡と神山谷遺跡の台地の間に入り込む支谷に面する斜面をC区として工事の進捗に伴い断続的に行った。

C区とした斜面は、主に中世に行われた台地整形によって幾つかの籬壇状の平坦面を伴っており、C1区からC7区に地点を分けて調査を実施している。発掘調査後の整理・報告では、A区とした城山遺跡と城山遺跡東側斜面（C区の一部）を合わせ、平成12年度に「財団法人東総文化財センター発掘調査報告書第21集」としてすでに報告書を刊行しており、本報告書では、神山谷遺跡の一部となるC1区からC7区について報告するが、その一部についてはB区の報告書（第25集）に含めて報告を行う。

発掘調査及び整理作業の実施期間、担当職員、内容は以下のとおりである。

### 発掘調査

平成4年度

期間：平成5年1月11日から平成5年3月31日

担当職員：道澤 明、鈴木美成

内容：確認調査

平成7年度

期間：平成7年4月6日から平成8年3月15日

担当職員：道澤 明、鈴木美成、赤塚弘美、本多昭宏、實川 理

内容：本調査（A区の一部調査を含む）

平成8年度

期間：平成8年4月1日から平成9年3月31日

担当職員：道澤 明、鈴木美成、小林弘美、本多昭宏、實川 理

内容：本調査（A区の一部調査を含む）

平成9年度





期間：平成9年4月1日から平成9年10月9日

担当職員：道澤 明，鈴木美成，小林弘美，本多昭宏，實川 理

内容：本調査（B区の一部調査を含む）

#### 整理作業（B区を含む）

平成5年度

期間：平成5年4月1日から平成5年6月30日

担当職員：道澤 明

内容：水洗・注記の一部

平成8年度

期間：平成8年4月1日から平成9年3月31日

担当職員：道澤 明，本多昭宏，實川 理

内容：水洗・注記の一部から実測の一部

平成9年度

期間：平成9年4月1日から平成10年3月31日

担当職員：宮内勝巳

内容：水洗・注記の一部から実測の一部

平成10年度

期間：平成10年4月1日から平成11年3月31日

担当職員：宮内勝巳，本多昭宏

内容：図面等整理から実測の一部

平成11年度

期間：平成11年4月1日から平成12年3月31日

担当職員：宮内勝巳，鈴木美成，本多昭宏

内容：図面等整理から原稿執筆の一部

平成12年度

期間：平成12年4月1日から平成13年3月31日

担当職員：道澤 明，宮内勝巳，本多昭宏

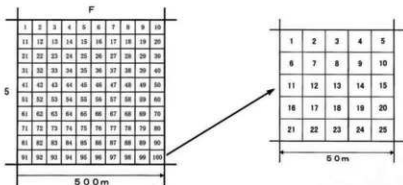
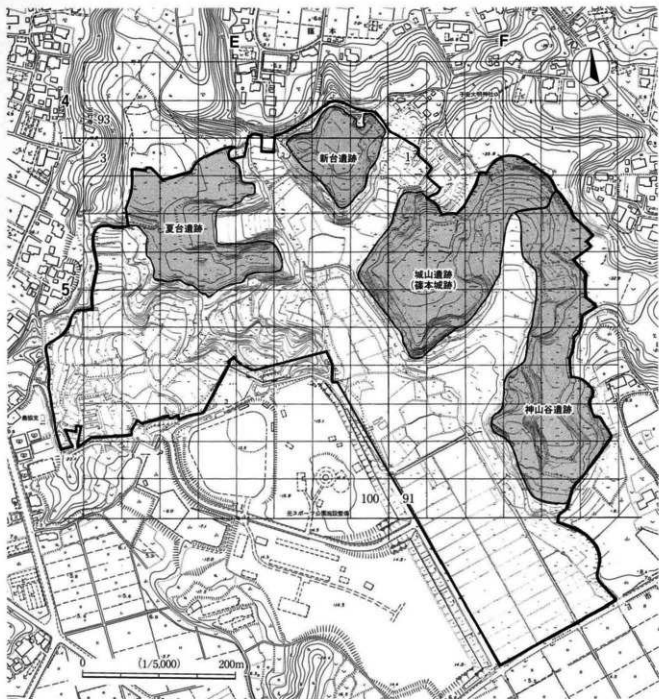
内容：実測の一部から原稿執筆の一部

平成13年度

期間：平成13年4月1日から平成14年3月31日

担当職員：宮内勝巳，本多昭宏

内容：原稿執筆の一部から刊行



第2図 ひかり工業団地内の遺跡及びグリッド分割図

## 第2節 遺跡の環境 (第1図)

### 1. 地理的環境

ひかり工業団地造成事業予定地内の遺跡群は、千葉県匝瑳郡光町篠本に所在する。遺跡が所在する光町は、千葉県の北東部に位置し、東は八日市場市、北は借当川を境として香取郡多古町、西は栗山川を境として山武郡横芝町、南は九十九里浜となる。北部の大半は、下総台地で占められている。下総台地は場所によって開析が進んで谷地形が発達し、幾つかの段丘面に区分されており、高い部分から下総上位面、下総下位面、千葉段丘の3つに大きく分けられる。遺跡が立地する台地は、南側を九十九里浜低地に、東を「椿海」低地に、北、西側を栗山川に区切られた八日市場台地（千葉県1979）の西端に位置し、下総上位面が大半を占めている。この八日市場台地は、樹枝状の開析が著しく進み、台地平坦面がほとんど残されていない。台地の標高は、40m前後で旧海食崖付近で最も高く、北西側に向かって低下していく。西側を流れる栗山川に接する地域には、標高30m～35mの下総下位面が分布する。ひかり工業団地予定地周辺は、この下総下位面にあたり、栗山川に面する台地には広い平坦面がみられる。さらに低くなると沖積低地との間に千葉段丘面がわずかに点在する。多古町島地区などがそれにあたる。神山谷遺跡が所在する台地は南北に細長く、すでに報告されている城山遺跡とは北部でつながっている。台地の上面の幅は最も狭い所で東西40m程度で、台地の東側半分は比較的急峻な斜面となっているのに対して、西側台地との間に入り込む支谷に面した斜面はゆるく、古代の堅穴住居跡などが検出されている。また中世に台地整形が行われ斜面中段に平場が造成されているが、大規模な造成を行わなくても平場を造成しやすい緩斜面がもともと存在していたものと考えられる。台地の最も高い場所は、標高34mを測り、斜面中段の平場は標高20m前後に位置している。

報告する神山谷遺跡C区は台地西側の斜面（一部は東側斜面）にあたり、斜面中段に造成された平場を含めてC1区～C7区に分けて調査を実施している。

### 2. 周辺の遺跡

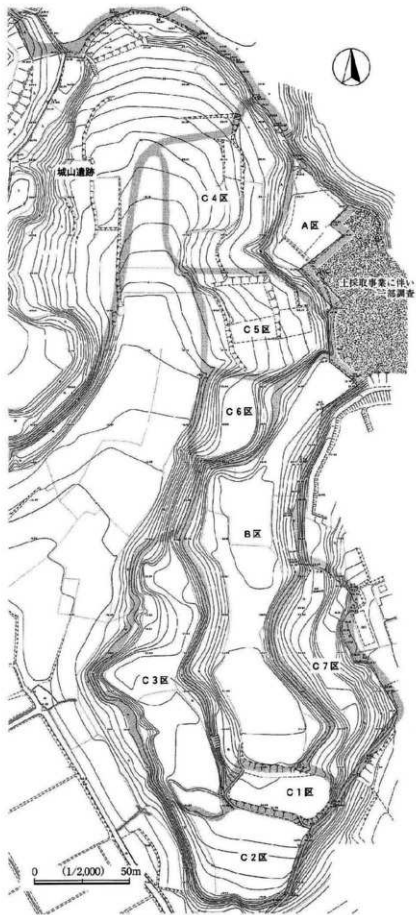
ひかり工業団地造成事業予定地内には、神山谷遺跡、城山遺跡、夏台遺跡、新台遺跡の4遺跡が位置している。今回報告する神山谷遺跡は、台地北部で城山遺跡とやせ尾根でつながっているが、その接続部分は調査区外にあたるため、遺構分布は明らかでない。一方、両台地の間に入り込む谷頭下にはぐるりと取り囲むように古代の堅穴住居跡を多数検出しており、台地上だけでなく、低地での集落跡の存在も確認している。

城山遺跡、夏台遺跡については既に報告しているが（東総文化財センター2000）、この報告と関連する遺構・遺物について時代別に触れることとし、さらに主要なあるいは既に調査された周辺の遺跡を概観する。

縄文時代 城山遺跡で落とし穴4基（撚糸文期）、炉穴2基（条痕文期）が見つかった。落とし穴は斜面に散在し、炉穴は台地上中央に並んで分布する。中世に大規模な造成が行われているため、その他にも消失したものが多数あるだろう。遺物は草創期から晩期まで出土しているが、特に撚糸文期の花輪台式がまとまって出土し、その他の時期の土器は少ない。

夏台遺跡でも落とし穴11基（撚糸文期）、炉穴36基（条痕文期）が見つかった。比較的多くの遺構を検出できたが、出土した遺物は少ない。

周囲に目を向けると、八日市場市飯倉鈴歌遺跡、吉田遺跡で調査が実施されている。飯倉鈴歌遺跡では



第3図 調査区分割図



条痕文期の堅穴住居跡1軒、住居跡から離れた地点で炉穴が46基見ついている（飯倉遺跡発掘調査会1992）。吉田遺跡でも条痕文期の堅穴住居跡が5軒検出された。このうち1軒は大型住居跡（ロングハウス）である。明らかに炉穴と判断しうる土坑は見つっていない（東総文化財センター1997）。早期後半、本遺跡も含めた小さい分布域で、異なる集落形態を確認することができる。

**古墳時代** 城山、夏台の両遺跡とも古墳、墓坑及び堅穴住居跡を検出している。夏台遺跡では古墳、墓坑（有天井土坑）がまとまって分布する一方、集落の存在は窺えない。城山遺跡でも堅穴住居跡が8軒見ついているが、3軒見ついている台地上の住居跡では遺物の出土が少なく、一般的な集落の様相は窺えない。逆に谷に分布する5軒の住居跡は遺物量が豊富で、C4区で検出した中・後期の住居跡とともに谷を取り囲むように分布している。

北に3km付近には吉田遺跡（塚原古墳群）（八日市場市1982、東総文化財センター1997）、大道筋遺跡（南神崎古墳群）（八日市場市1982、東総文化財センター1998）が所在する。前方後円墳、円墳など古墳銀座の景観を呈しており、加えて集落も分布している。その西側の台地崖面には横穴墓も多数存在する（八日市場市1982）。一方、南に2km付近には東総域ではほとんど出土しない埴輪を列した小川台古墳群（小川台古墳群調査団1975）が所在する。高塚墳と横穴墓という異なる埋葬形態を採用した背景、それを採用した集落との関係についてはいまもって検討すべき課題である。

**奈良時代から平安時代** 夏台遺跡では前代に続いて遺構の検出数は少ない。一方、城山遺跡では住居跡は古墳時代に続いて奈良時代も大半が谷に分布する。平安時代になると谷だけではなく、台地上にも分布するが、土坑墓との関わりが確定されており、土地利用のあり方は継続している。谷（低地）でも多数の住居跡が確認できたことは、本書で扱うC4区とともに東側台地上のB区と関わりをもつものであろう。近年、低地に立地する芝崎遺跡、中島遺跡で、奈良時代から平安時代にかけて耕作溝とともに多数の住居跡が見つかっており（東総文化財センター2001）、従来の台地上での集落観では説明しがたい遺跡の調査が増えている。

**中世** 城山遺跡でもっとも隆盛した時代で、堀で区画された中に掘立柱建物跡、地下式坑、土坑などが多数検出されており、それに伴って多くの遺物が出土している。夏台遺跡では遺構、遺物は少ないが、谷を隔てた西側台地の新台遺跡では、城山遺跡同様多くの遺構、遺物が見ついている。台地整形や遺構分布の粗密で土地が区画されるものの、堀割がなく、城跡の様相は呈していない。城山遺跡との性格の違いが窺える。

周辺には要害台城跡や寒風城跡（東総文化財センター1997）が所在するが、この他にも支谷により開析された台地ごとに中世城郭、砦が分布している。

**近世** 夏台遺跡で火葬施設、城山遺跡で炭窯を検出したにとどまる。

### 第3節 調査の方法（第2図）

**調査区の設定** 当センターでは、東総管内を公共座標に合わせて500m四方の方眼網を設定している。これらは東西にA、B、C…、南北に1、2、3…と名称をつけ、それぞれ組み合わせることによって大グリッドの名称とした（例5F）。今回の調査では、これらの方眼網を50mごとに1から100まで分割して中グリッドとし（例5F95）、中グリッドをさらに10m四方に1から25まで分割して、それぞれ小グリッドとした（例5F95-1）。

**上層確認調査** 縄文時代以降の上層の確認調査は、調査区全域に全対象面積の10%にあたる面積のトレンチないしはグリッドを設定して、重機による表土除去を行ったのち、人力で遺構・遺物の分布を確認した。

**上層本調査** 本調査の開始にあたって、遺構・遺物に影響を及ぼさない深さまで重機により表土を掘削した。その後、鋤塵で遺構の検出に努め、各遺構は土層観察用の畔を設けてから調査を行った。調査の進捗に合わせて遺物の出土状況、平面図等実測図を作成し、並行して写真撮影も行った。

**遺構名・遺構番号** 予想できる遺構の性格に応じて、以下のような記号を番号の前に附して遺構名とした。調査の段階で附した記号が、整理段階で異なる性格の遺構と判断した例が少なからずあったが、当初附した遺構名及び番号のまま変更せずに掲載している。そのため、名称に遺構の性格を反映していない例がある点をあらかじめお断りしておく。

SI:竪穴住居跡, SB:掘立柱建物跡, SK及びSX:土坑, SD:溝

#### 第4節 各地区の概要 (第3図)

先に記したように、本書では神山谷遺跡のうち、台地下の斜面部を調査した遺構、遺物について、便宜的にC1区からC7区にわけて報告している。同時代で見ると、各地区の遺構・遺物に多寡はあるものの、それぞれ有機的な関わりがあった可能性はおおいにある。以下、各地区ごとの遺構・遺物の特徴を記す。

**C1・C2区** 縄文時代の早期熱糸文期から中期加曾利E式期にかけての土器、石器及び土製品が多量に出土している。遺構では、早期前葉(熱糸文期)の落とし穴、早期後半(子母口式期)の竪穴住居跡と炉穴、前期前葉(黒浜式期)の竪穴住居跡を検出した。特に、早期後半の竪穴住居跡と炉穴は規則的な配置状況が窺え、集落形態を検討する好資料である。他の地区で検出した縄文時代の遺構・遺物は少ないことから、限定された場所で集中的な土地利用が行われたと判断しうる。なお、弥生時代以降については神山谷遺跡(1)の報告書に掲載している。

**C3区** 中世及び近世の遺構・遺物を多数検出した。中世は北側の第1区画に、近世は南側の第2区画で遺構・遺物が集中しており、時代をまたいだ重複はほとんど見られない。それぞれの時代に台地を整形して生活面を確保している。このうち近世は、斜面からの湧水を溜めた横井戸が多数検出できた。これらは溝を介して他の土坑と連結しており、水利施設群として機能している。

**C4区** 古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡を37軒検出した。時期がわかるものの内訳は、古墳時代6軒、奈良時代10軒、平安時代20軒である。同時代の住居跡は台地上のB区及び隣接する城山遺跡でも多数検出していることから、広範囲にわたる集落が営まれている。台地上、台地下にどのような選地目的があったのか、検討する上で好資料である。また、平安時代末の住居跡も検出しており、中世(鎌倉時代)にかけての集落のあり方を検討できる資料であろう。施設の構築に際しては平場確保のために幾分造成されており、特にSB-305は専用の土地を確保するかのように台地整形が行われた場所に立地している。中世には古代よりも標高の高い部分を造成しているが、北側に偏って地下式坑、土坑が集中して見つかっており、南側では検出することができなかった。

**C5区** 平安時代の竪穴住居跡、溝、中世の土坑が北側でわずかに検出できたにとどまる。堆積層が厚く遺構の遺存状態はよいと推測していたが、調査の結果、遺構密度は低かった。北側でC4区と南側でC6区と接続する。出土した遺物も少なかった。

C 6区 は中世の遺構で占められる。地下式坑をはじめ、比較的規模の大きい土坑が目立つ。中央部がやや窪み、それを境に南北に類似した遺構がそれぞれ分布する。造成された面積からすると、遺構密度は高い。出土した遺物の中で、石塔を再利用して砥石としたものが多数出土している。

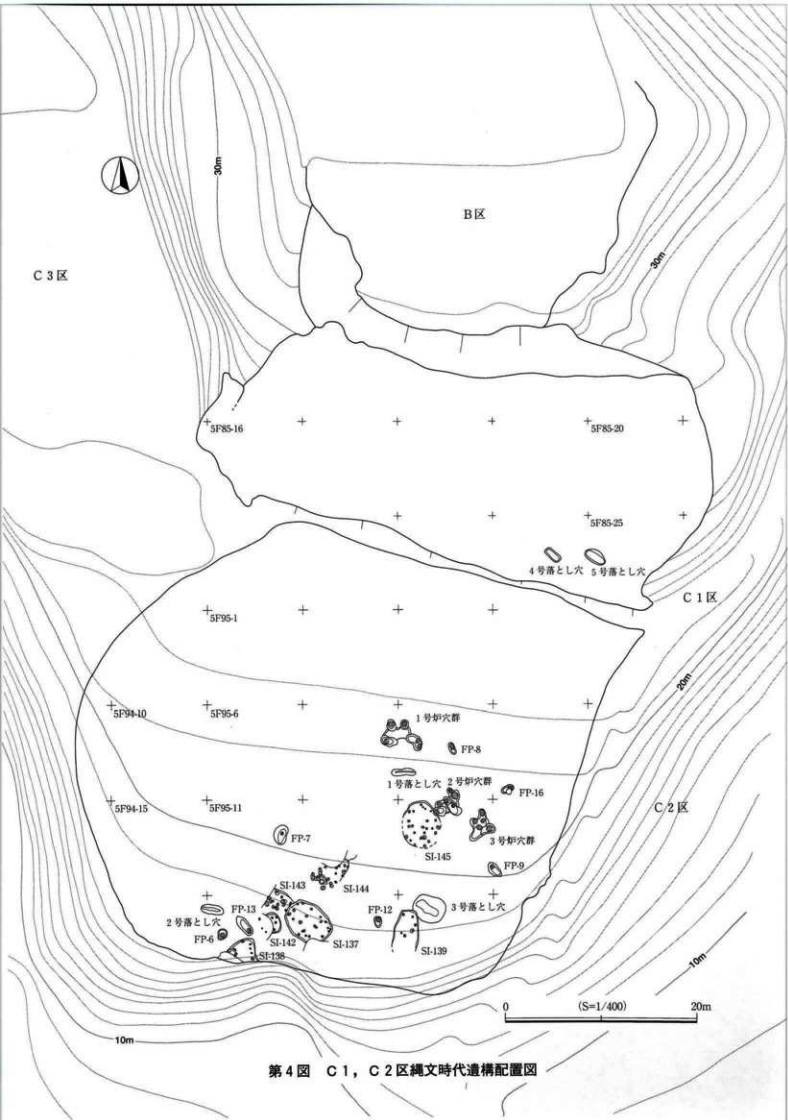
C 7区 縄文土器、平安時代の竪穴住居跡1軒を検出したにとどまる。縄文土器は大半が熱系文系のもので占められている。竪穴住居跡からは火打石と火打金がともに出土した。

以上が各区画の概要である。それぞれ遺構・遺物の多寡や種類に違いがあり、有機的な関係のもとに土地が利用されていたことが窺える。次章以下、各地区の遺構・遺物について詳述する。

#### 参考文献

- 【角川日本地名大辞典12 千葉県】1984  
千葉県 1979 【土地分類基本調査 千葉】  
小川台古墳群調査団 1975 【下総小川台古墳群】  
八日市場市 1982 【八日市場市史】  
飯倉遺跡発掘調査会 1992 【飯倉鈴歌遺跡】  
館東総文化財センター 1997 【東総文化財センター年報】1  
館東総文化財センター 1997 【寒風城跡】  
館東総文化財センター 1998 【大道筋遺跡】  
館東総文化財センター 2000 【篠本城跡・城山遺跡】  
館東総文化財センター 2000 【夏台遺跡】  
館東総文化財センター 2001 【東総文化財センター年報】7





第4図 C1, C2区縄文時代遺構配置図

## 第2章 C1・C2区の調査

C1区及びC2区は、台地の南端に位置する(第4図)。C1区は一段高い場所にあり、調査前の状況は標高30mを測り、東西50m、南北18mの長方形の平地となっていた。C1区は、古墳時代後期の竪穴住居跡2軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡13軒、時期不明1軒を検出している。B区との境である斜面裾では竪穴住居跡が検出できなかったことから、中世以降の造成によって削られてしまった可能性があるが、古代にもある程度の造成が行われたようである。またC2区は、一段低い位置の南に向かう緩傾斜地で、調査前には標高20mを測った。竪穴住居跡は縄文時代7軒、弥生時代5軒、古墳時代14軒、奈良・平安時代20軒をはじめ、多くの遺構、遺物が見つかっており、C1区のような中世以降の造成をほとんど受けていないものと考えられる。かつては台地上面からC1区、C2区にかけて南に向かう緩斜面が続いていたと推測される。台地上面で検出された竪穴住居跡群とC1区及びC2区のそれとは密接な関係があると考えられることから、本書では縄文時代の遺構・遺物のみを扱い弥生時代以降の遺構、遺物については台地上面の神山谷遺跡(1)とともに報告することとした。

### 第1節 縄文時代

すでに記したように、C1区は古代以降に台地造成が行われているため、造成以前の古い遺構、遺物の遺存状況はよくない。本節で報告する縄文時代の遺構、遺物は、落とし穴2基を除いて、C2区にほぼ限られている。竪穴住居跡7軒、炉穴10基、落とし穴5基などを検出したほか、縄文時代早期から中期にかけての土器、石器が出土している。

#### 1. 竪穴住居跡

弥生時代以降の竪穴住居跡をはじめとした遺構群の攪乱により、縄文時代の竪穴住居跡は全形を知り得るものは少ない。7軒の竪穴住居跡を検出しており、内訳は早期が4軒、前期が3軒である。前期の住居跡は大半が他の遺構と重複しており、平面プランは把握することができず、遺物の出土状況、炉の存在により判断した。

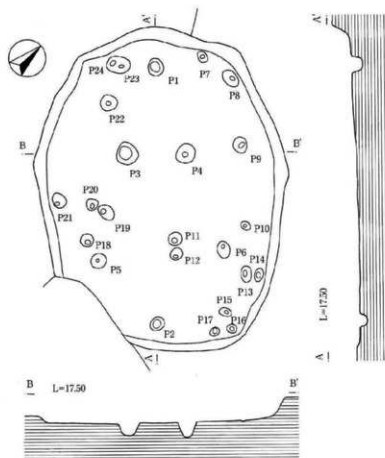
第1表 C1・C2区 縄文時代竪穴住居跡計測表

( ) は推定値 < > は遺存値

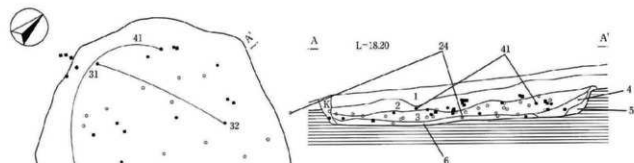
遺構番号	時期	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	備考
SI-137	ⅢA群期	5F95-17	N-47°-W	5.2	3.9	0.4	
SI-138	Ⅳ群期	5F95-16	N-25°-W	<3.2>	<2.8>	0.2	
SI-139	Ⅲ群期	5F95-18	N-15°-E	<4.1>	2.6	0.2	
SI-142	Ⅲ群期	5F95-16	N-67°-E	<1.0>	2.2	0.1	長軸は2.6m前後に復元できるか。
SI-143	Ⅳ群期	5F95-16	不明	-	-	0.1	
SI-144	Ⅳ群期	5F95-12	不明	-	-	0.1	
SI-145	ⅢA群期?	5F95-13	N-5°-W	(5.1)	(4.0)	0.3	住居廃絶後に2号炉穴群が重複。

#### SI-137 (第5～8図)

検出状況と竪穴構造 5F95-17に位置する。縄文時代前期や弥生時代の竪穴住居跡に壊されているが、



番号	深さ(cm)
P1	18
P2	12
P3	20
P4	25
P5	21
P6	16
P7	26
P8	14
P9	14
P10	11
P11	12
P12	12
P13	16
P14	20
P15	5
P16	5
P17	9
P18	13
P19	16
P20	15
P21	19
P22	23
P23	19
P24	44



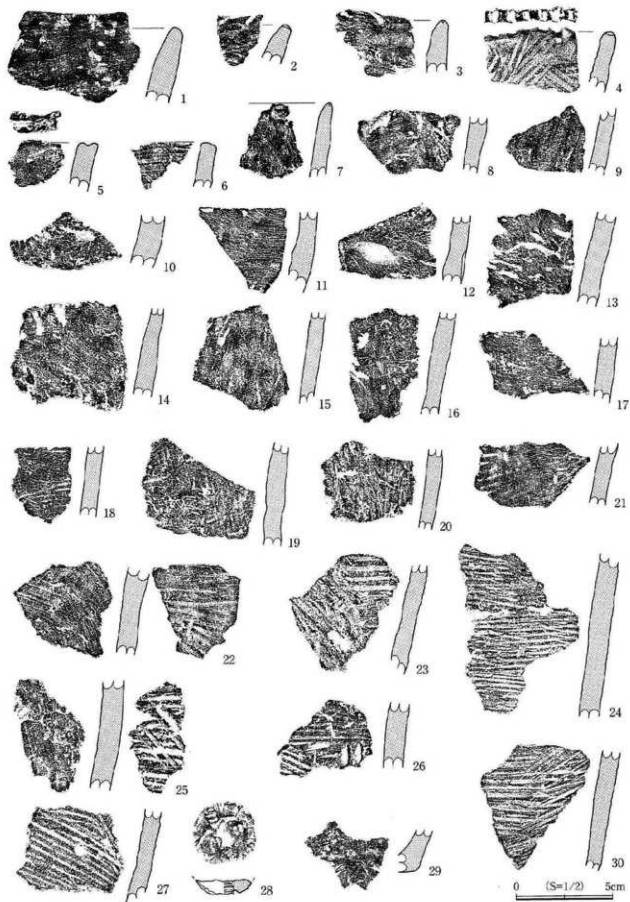
137号住居跡土層説明

1. 暗赤褐色土。やや砂質味を帯び、軟質。
2. 黒褐色土。ロームをわずかに含み、やや締まる。
3. 暗褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
4. 暗褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
5. 暗褐色土。ロームが少し混じり、締まる。
6. 暗褐色土。ロームが混じり、締まる。

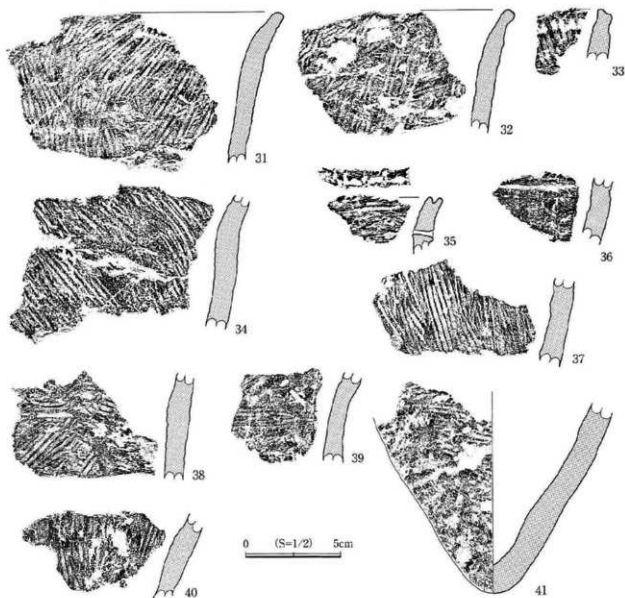
0 (S=1/60) 3m

- III A群
- III B群
- その他

第5図 SI-137 実測図



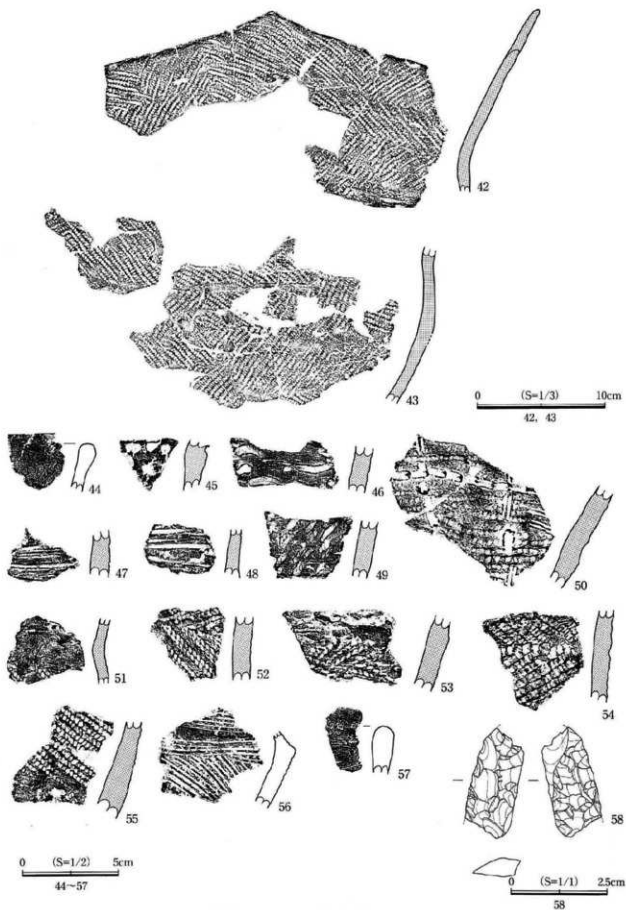
第6図 SI-137 出土遺物(1)



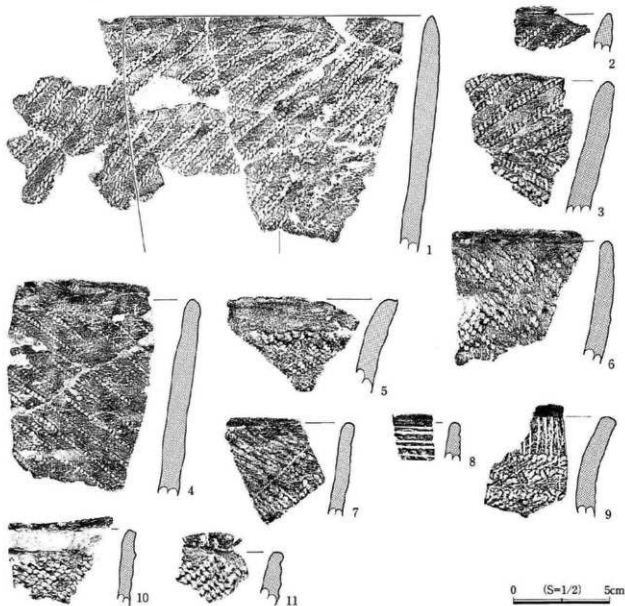
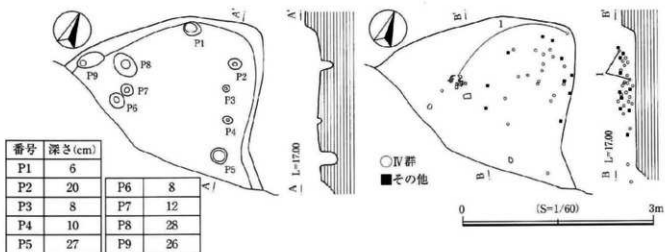
第7図 SI-137 出土遺物(2)

比較的良好に遺存している。覆土は暗褐色土で占められている。平面形態は楕円形を呈しており、支柱穴とするには小規模で浅いピットを床面で多数検出した。この時期一般的とは言い難いものの、P1, P2を長軸線として、その他のピットが線対称となる配置の可能性もある。床面は平滑だが軟質で、炉跡の痕跡はなかった。

遺物と出土状況 床面からやや高い位置で、口唇部にきざみ、刺突を施し、器面には擦痕状の調整を伴うⅢA群土器が出土している。ほぼ同じ高さでは、口唇部がゆがみ、繊維痕が顕著で、貝殻条痕を地文にもつⅢB群土器も出土しているがややまとまりにかける。また、第78図-32も本竪穴から出土した石礫未製品である。このほかⅣ群土器やⅠ, Ⅴ, Ⅵ群土器が遺構埋没後の層から出土している。本竪穴はⅢA群期のものと判断した。

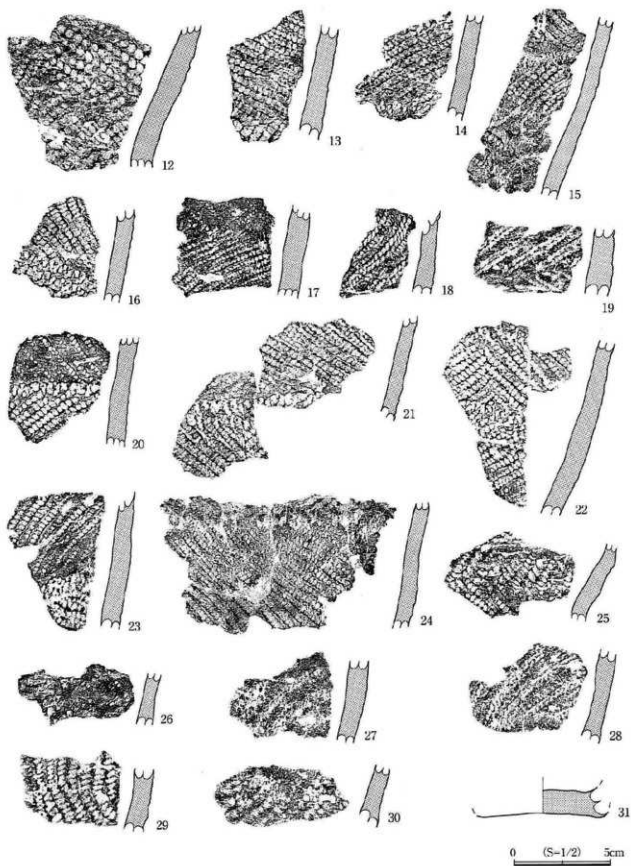


第8圖 SI-137 出土遺物(3)



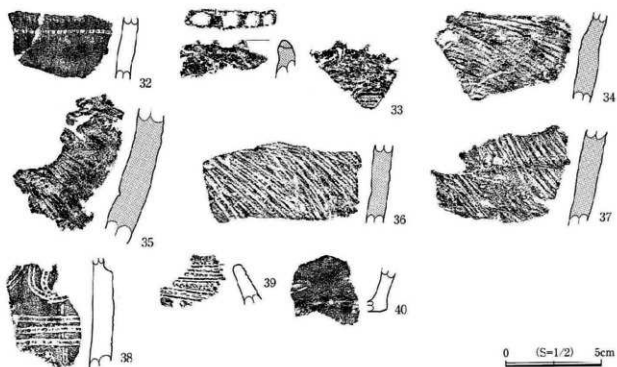
第9図 SI-138 実測図及び出土遺物(1)



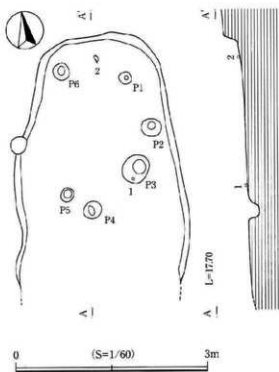


第10圖 SI-138 出土遺物 (2)

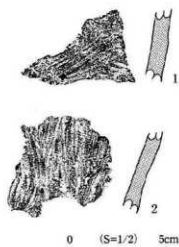




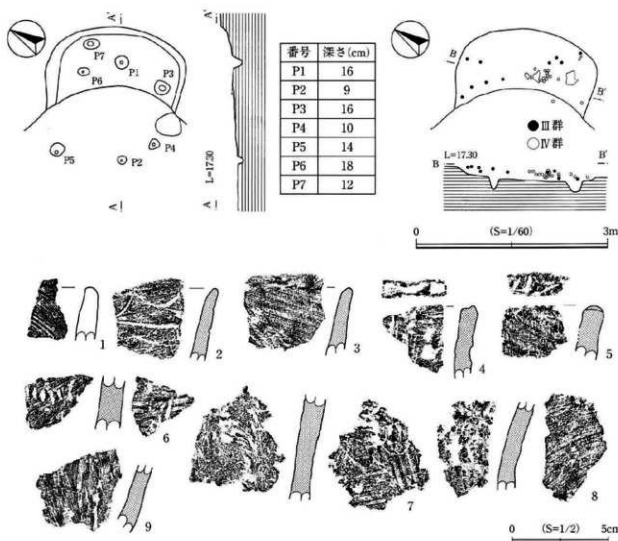
第11図 SI-138 出土遺物 (3)



番号	深さ(cm)
P1	20
P2	15
P3	22
P4	15
P5	22
P6	12



第12図 SI-139 実測図及び出土遺物



第13図 SI-142 実測図及び出土遺物(1)

SI-138 (第9~11図)

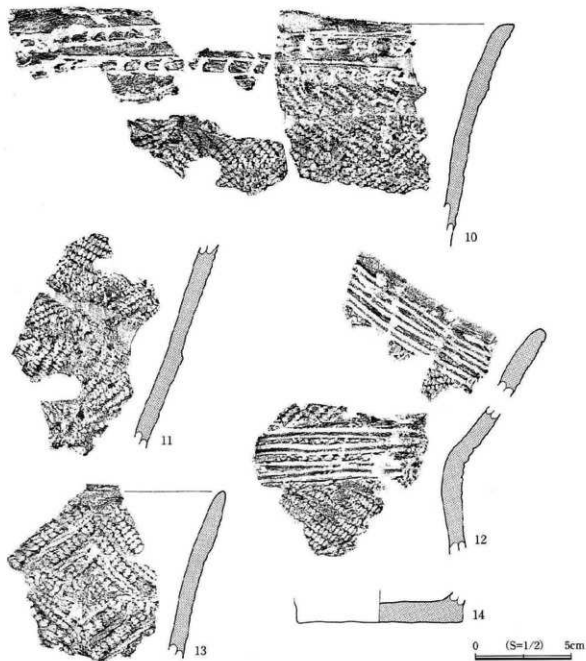
検出状況と竪穴構造 5F95-16に位置する。後世に削平されており、竪穴の遺存状況は良好でない。平面形態は長方形であろうか。ピットは浅く、壁際で検出されているものの、その配列に規則性は見だしにくい。炉跡は検出できなかった。

遺物と出土状況 IV群土器が主体を占めている。このほかII, III, V, VI群土器が若干混入している。本竪穴はIV群期のものと判断した。

SI-139 (第12図)

検出状況と竪穴構造 5F95-18に位置する。3号落とし穴と重複している。南側は消失しており、平面形態は明確ではないが、長方形を呈すると思われる。ピットは浅く、不規則で、その配置に規則性は窺えない。覆土は下位に暗褐色土、上位に黒褐色土が堆積していた。炉跡は検出できなかった。

遺物と出土状況 出土遺物は少なく、擦痕状の調整痕を伴うIII A群土器、貝殻条痕を地文にもつIII B群土器が出土している。遺構の時期は判断し難いため、III群期としておく。

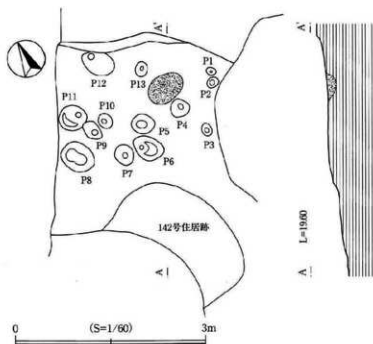


第14図 SI-142 出土遺物（2）

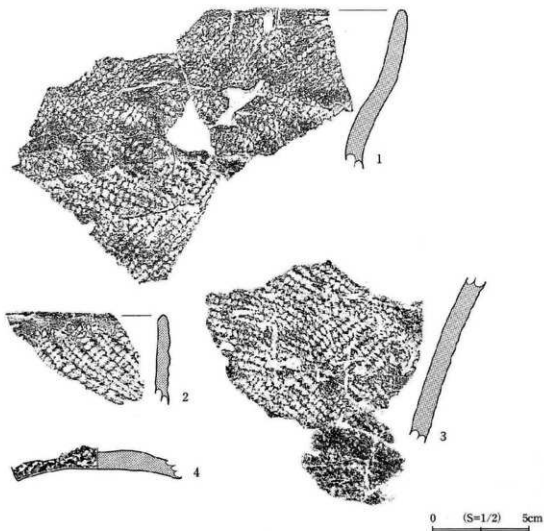
SI-142（第13，14図）

検出状況と竪穴構造 5F95-16に位置する。SI-131，SI-143と重複しているため遺存がよくない。平面形態は、楕円形ないしは俵形であろうか。ピットは浅く、支柱穴とするには貧弱である。平面規模は長軸で2.6m前後と推定する。炉跡は検出しなかった。

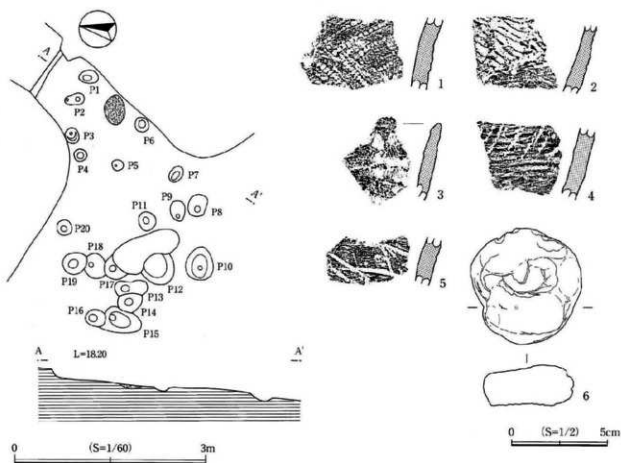
遺物と出土状況 前期の住居跡と重複していることから、出土遺物には早期と前期の土器がある。北側で早期の土器が、南側で前期の土器がまとも出土している。Ⅳ群土器はSI-143に帰属すると思われる、本竪穴にはⅢ群土器が伴うと判断した。



番号	深さ(cm)
P1	8
P2	14
P3	9
P4	25
P5	23
P6	35
P7	28
P8	18
P9	48
P10	23
P11	28
P12	17
P13	11



第15図 SI-143 実測図及び出土遺物

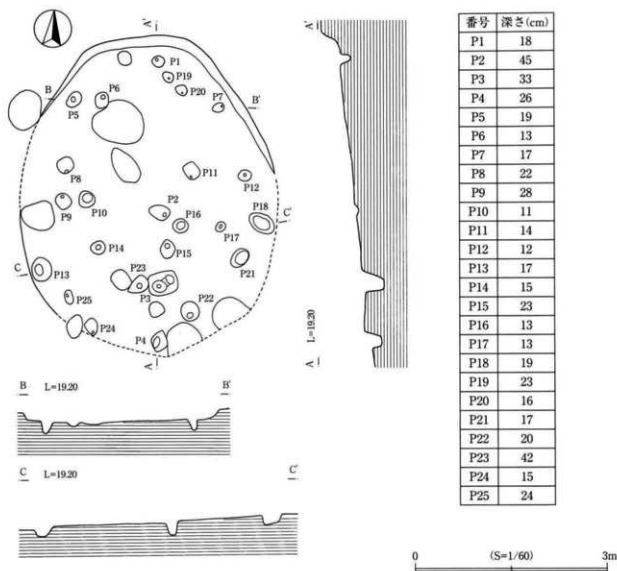


番号	深さ(cm)	番号	深さ(cm)
P1	19	P11	35
P2	8	P12	11
P3	16	P13	14
P4	8	P14	49
P5	11	P15	16
P6	7	P16	10
P7	8	P17	11
P8	35	P18	18
P9	8	P19	21
P10	14	P20	9

第16図 SI-144 実測図及び出土遺物

SI-143 (第15図)

検出状況と竪穴構造 5F95-16に位置する。SI-121によって大半が壊されているほか攪乱も受けており、壁も一部検出できただけで、竪穴の構造や規模は判断しがたい。炉跡が北東壁際に検出されたが、壁際に近接しすぎている。被熱による焼土の厚さは8cmほどに及ぶ。この時期の柱配列には、主柱穴とともに



第17図 SI-145 実測図

壁柱穴が多く認められるが、ピットが炉跡周辺に集中するばかりで、規則的な配置状況は窺えない。

**遺物と出土状況** 炉跡周辺でⅣ群土器が出土している。また、SI-142から出土したⅣ群土器も本壁穴に伴うものと判断した。

**SI-144 (第16図)**

**検出状況と壁穴構造** 5F95-12に位置する。SI-124及びSI-125に東西両側を壊されている。北側の壁が一部遺存しているにすぎないため、形態や規模は判断しがたい。炉跡は壁際で検出した。被熱による焼土の厚さは5cmほどである。ピットは多数検出したものの、不規則な配置で、本壁穴に伴うかは明確にできなかった。

**遺物と出土状況** 炉跡と壁との間からⅣ群土器が若干出土しているほか、Ⅲ群土器、磨石が出土している。本壁穴は炉跡の検出と遺物出土状況からⅣ群期と判断した。

## SI-145 (第17図)

検出状況と竪穴構造 5F95-13に位置する。東側で2号炉穴群と重複しているが、燃焼部の遺存状況から、本竪穴の方が古いと判断した。北側を除いて他の壁は消失しているが、その遺存状況から平面形態は楕円形と考えられる。ピットには支柱穴とするには貧弱なものが多い。P1からP4を軸線として、その他のピットが線対称に配置されている可能性もあるが、一般的とは言い難い。ただ、SI-137に類似した検出状況を示している。床面は傾斜しており、本来のそれは失われている可能性がある。炉跡は検出しなかった。

遺物と出土状況 調査途中まで竪穴住居跡として判断できなかったため、住居跡に伴う遺物は把握できなかった。竪穴の形態やピット配列がSI-137に類似すること、炉跡を検出できなかったこと、本竪穴の周辺で出土している土器を根拠にⅢA群期と判断した。

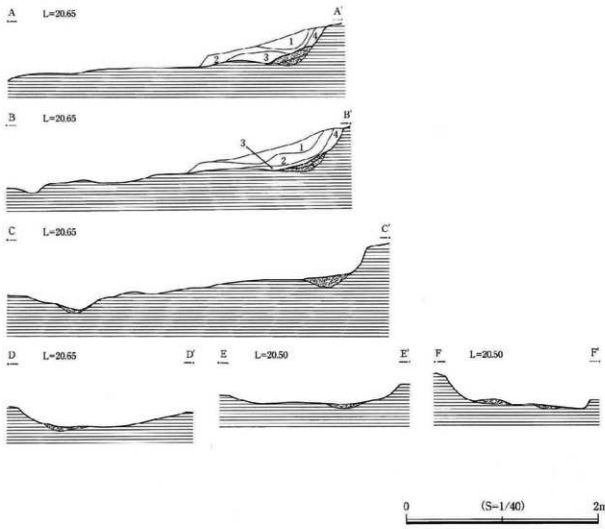
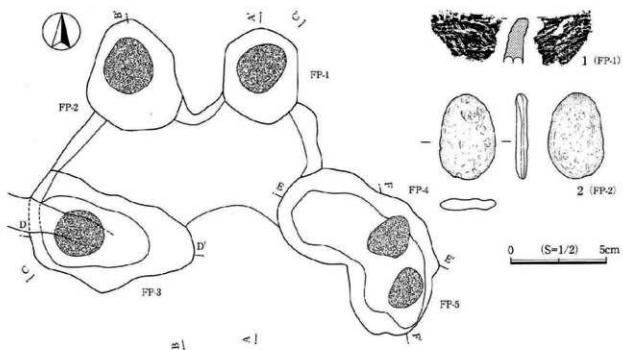
## 2. 炉穴

楕円形を呈し、床面の一端に被熱した焼土が認められる構造の土坑である。縄文時代早期に特徴的に見られるこれら炉穴がC2区でまとまって検出した。数基が重複するもの3基、単独のもの7基からなる。覆土は概ね上部に黒褐色土、下部に暗褐色土が堆積しており、早期の竪穴住居跡の覆土と類似した様相を示している。ⅢA群土器が主体的に出土している。2号炉穴群はSI-145と重複していることから、全て同時に存在したとはいえないものの、早期の竪穴住居跡とほぼ同時期と判断した。分布状況を見ると、炉穴はSI-137、SI-145に挟まれた部分では検出しなかった。後世の遺構により消失した可能性も否定できないが、これら住居跡の背後に大半が分布している点は特徴的で、規則的な配置状況が認められる。なお、土層説明は98頁を参照。

第2表 C1・C2区 縄文時代炉穴計測表

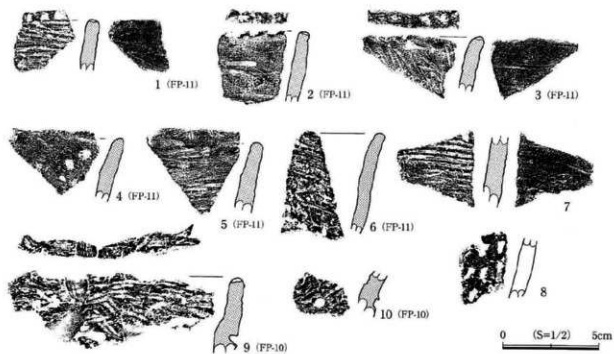
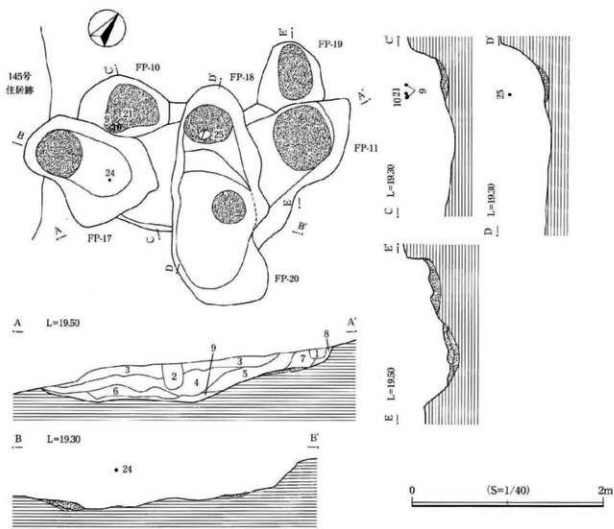
&lt; &gt;は遺存値

遺構番号	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
1号炉穴群	5F95-7	N-0°	1.0	0.8	0.4	ⅢA群期?	燃焼部全面に竪穴状の掘りこみあり
		N-11°-W	1.2	1.0	0.5		
		N-80°-W	1.8	1.0	0.2		
		N-112°-E	1.8	1.0	0.3		
		N-168°-E	1.5	1.0	0.3		
2号炉穴群	5F95-8	N-51°-W	<0.7>	0.9	0.4	ⅢA群期	北及び東西方向に拡張している SI-145と重複
		N-15°-E	<1.2>	0.9	0.5		
		N-109°-W	1.5	0.7	0.1		
		N-38°-W	<0.7>	0.7	0.5		
		N-40°-W	<0.7>	0.7	0.3		
		N-38°-W	1.6	1.0	0.3		
3号炉穴群	5F95-13	N-56°-W	<0.8>	0.8	0.6	ⅢA群期	北及び東西方向に拡張している
		N-97°-E	1.4	1.0	0.4		
		N-36°-E	<1.9>	<0.8>	0.8		
		N-4°-W	-	-	0.7		
		N-4°-W	<1.0>	0.7	0.7		
FP-6	5F95-16	N-23°-E	1.2	1.1	0.1	Ⅲ群期	出土遺物なし
FP-7	5F95-11	N-25°-E	2.1	1.5	0.4	ⅢA群期	
FP-8	5F95-8	N-16°-W	1.3	0.7	0.4	Ⅲ群期	出土遺物なし
FP-9	5F95-13	N-44°-W	1.8	1.1	0.5	ⅢA群期	
FP-12	5F95-17	N-0°	1.1	0.8	0.3	Ⅲ群期	出土遺物なし
FP-13	5F95-16	N-52°-E	2.3	0.9	0.5	ⅢA群期?	
FP-16	5F95-9	N-61°-E	1.3	0.7	0.1	Ⅲ群期	出土遺物なし

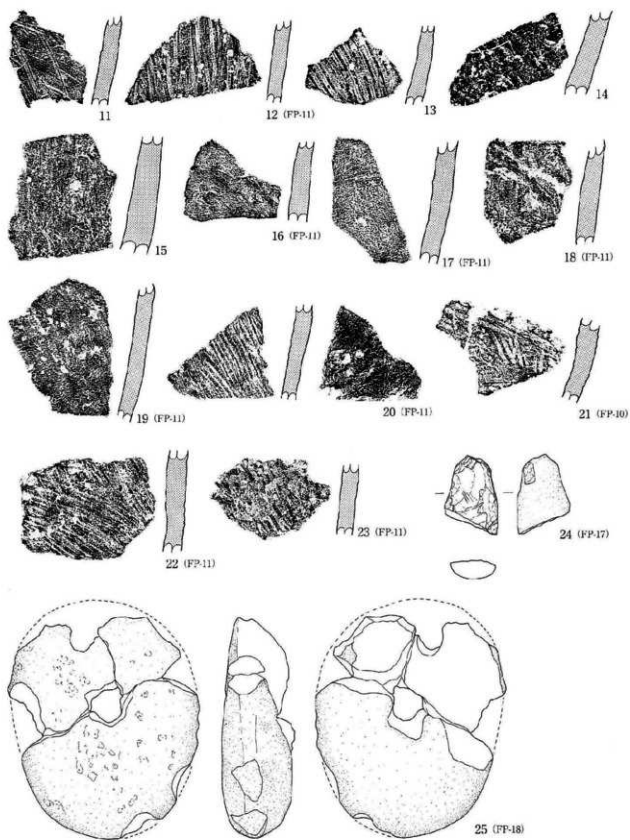


第18図 1号炉穴群 (FP-1~5) 実測図及び出土遺物

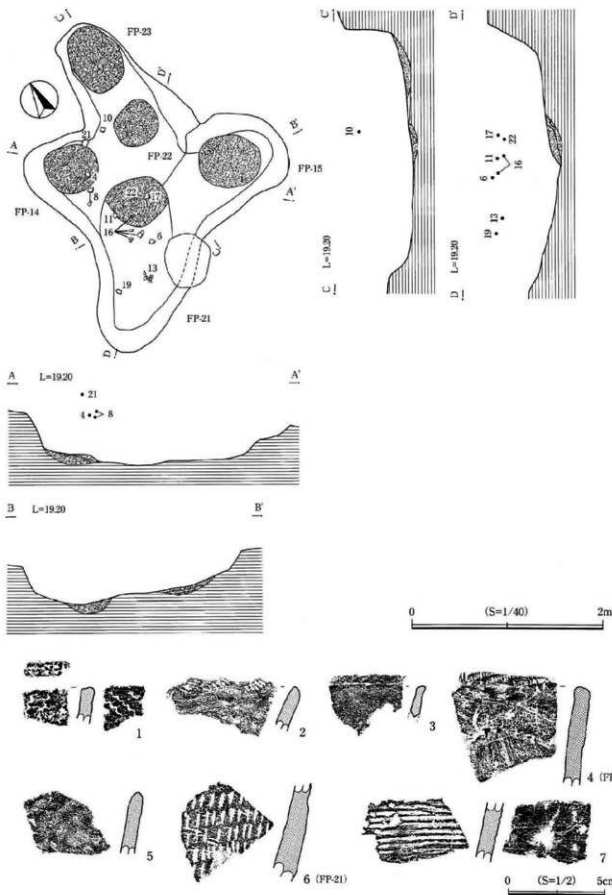




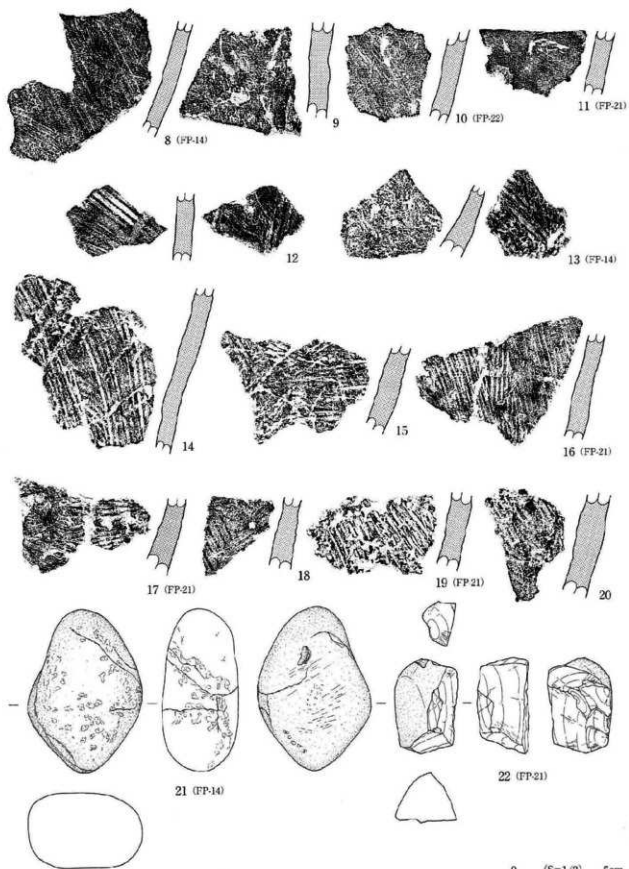
第19図 2号炉穴群 (FP-10, 11, 17~20) 実測図及び出土遺物 (1)



第20图 2号炉穴群出土遺物(2)



第21图 3号炉穴群 (FP-14, 15, 21~23) 実測図及び出土遺物 (1)



第22图 3号炉穴群出土遗物(2)

### 1号炉穴群 (FP-1~5) (第18図)

5F95-7に位置する。FP-1~5までの5基からなる。それぞれは重複しないが、堅穴状の掘りこみがあり、そこから燃焼部を外側として放射状に構築されている。堅穴状の掘り込みは深さ10~20cmほどで、比較的明瞭な壁面を有し、床面は平滑でやや傾斜する程度である。燃焼部の厚さは、5~10cmほどに及ぶが、ブロック状に硬化しておらず軟質である。覆土は褐色土と暗褐色土で占められる。出土遺物はFP-1からⅢA群土器が1点と加工痕のない円礫がFP-2から出土している。

### 2号炉穴群 (FP-10, 11, 17~20) (第19, 20図)

5F95-8に位置する。FP-10, 11, 17~20の6基からなる。FP-20, 18を中心に左右へ拡張するように構築されている。覆土は褐色土と暗褐色土で占められ、短期間に構築されたため土層断面から切り合いの新旧関係を確認できなかった。燃焼部の焼土の厚さは、5~10cmに及ぶ。FP-17はSI-145と重複しており、燃焼部の遺存状態から炉穴群の方が新しいと判断した。遺物はⅢA群土器が主体的に出土しており、このほか磨石や若干の加工痕を伴う石器が出土している。

### 3号炉穴群 (FP-14, 15, 21~23) (第21, 22図)

5F95-13に位置する。FP-14, 15, 21~23の5基からなる。いずれも掘り方は深く、北側へ延びるように構築されている。覆土は黒褐色土が大半を占めている。土層断面の観察では新旧関係を明確に把握できなかったことから、短期間に構築されたものと考えられる。覆土上部からはⅢA群土器が主体的に出土している。また、第79図-5もFP-14, 15で出土した剥片石器である。他の炉穴や早期住居跡では上層ないし最上層に堆積する黒褐色土が最下層から堆積している。

#### FP-6 (第23図)

5F95-16に位置する。やや不整な楕円形を呈し、燃焼部は中央に位置する。底面は平坦で浅い。出土遺物はないが早期の炉穴と考えられる。

#### FP-7 (第23図)

5F95-11に位置する。楕円形を呈し、燃焼部は中央からやや北側に寄っている。掘り方の規模に比べて燃焼部の範囲は狭く、被熱も5cm程度である。底面は平坦である。覆土は暗褐色土と黒褐色土が堆積している。ⅢA群土器が出土している。

#### FP-8 (第23図)

5F95-8に位置する。楕円形を呈する。平面規模が小さいわりに、掘り込みは深く、加えて燃焼部の範囲も広い。被熱も20cmに及ぶ。遺物は出土していない。

#### FP-9 (第23図)

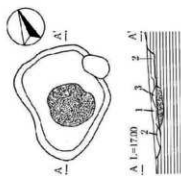
5F95-13に位置する。楕円形を呈する。掘り込みは深く、底面は燃焼部に向かって傾斜している。被熱の度合いは弱い。覆土は暗褐色土と黒褐色土が堆積している。ⅢA群土器が出土している。

#### FP-12 (第24図)

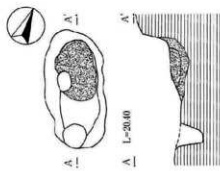
5F95-17に位置する。楕円形を呈し、規模が小さいものの掘り込みが深い。燃焼部の範囲が広く、被熱も15cmに及ぶ。覆土は暗褐色土の上に黒褐色土が堆積しており、間層に焼土粒子を多く含む層が見られた。遺物は出土していない。

#### FP-13 (第24図)

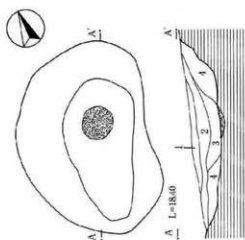
5F95-16に位置する。長楕円形を呈する。掘り込みは深く、底面は燃焼部に向かって傾斜している。覆



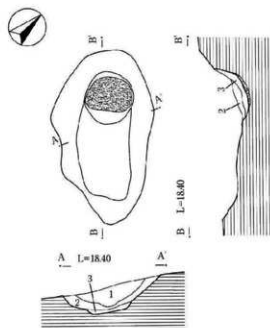
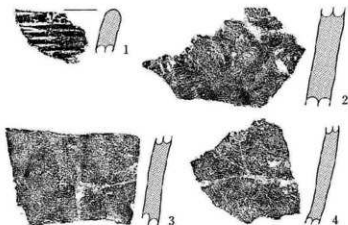
FP-6



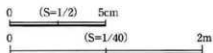
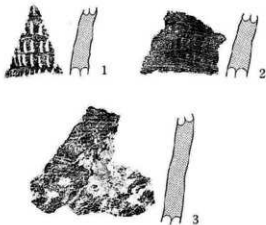
FP-8



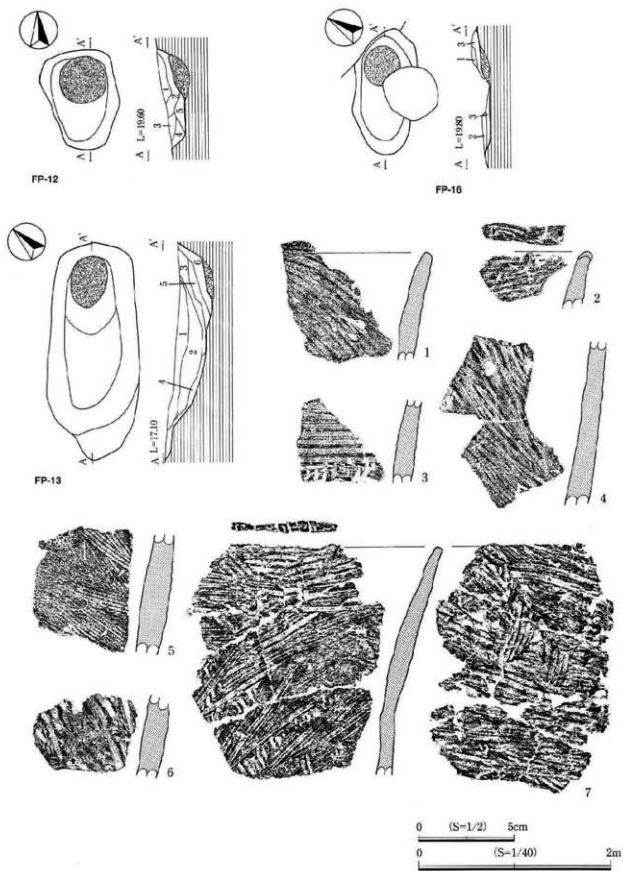
FP-7



FP-9



第23図 FP-6~9実測図及び出土遺物



第24図 FP-12, 13, 16実測図及び出土遺物



土には暗褐色土と黒褐色土が堆積している。出土遺物はⅢA群土器が主体である。6, 7を除いて胎土は堅く焼き締まっているが、粒径の大きな鉱物を含んでいる。

#### F P-16 (第24図)

5F95-9に位置する。楕円形を呈し、掘り込みは浅い。覆土は暗褐色土が堆積している。遺物は出土していない。

### 3. 落とし穴

落とし穴とは、山野に生息する獣を捕らえることを目的として掘られた土坑を指す。C1区、C2区では計5基の落とし穴を検出した。平面の形態は、長楕円形(1号, 2号), 長方形(4号), これらの中間(3号, 5号)のものからなる。中でも3号落とし穴は規模が大きく、際だった存在である。覆土は、概ね最下層に暗褐色土, 下位から中位にかけてはロームの含有が多い土, 最上位には黒褐色土が堆積しており、類似した傾向を示している。また、長軸の方向はいずれも等高線とほぼ平行している。なお、土層説明は98頁を参照。

第3表 C1・C2区 落とし穴計測表

遺構番号	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
1号落とし穴	5F95-7	N-5°-W	2.5	0.7	1.0	早期
2号落とし穴	5F94-20	N-10°-E	2.4	1.3	2.1	早期
3号落とし穴	5F95-18	N-18°-E	3.6	2.8	2.4	早期?
4号落とし穴	5F85-24	N-48°-W	2.0	0.9	0.7	早期
5号落とし穴	5F85-25	N-57°-W	2.4	1.5	1.3	早期

#### 1号落とし穴 (第25図)

5F95-7に位置する。長楕円形を呈し、底面は非常に狭い。覆土は全体的に暗褐色味が強いものの、中位付近はロームを比較的多く含み、粘性が強い。また、最上位には黒褐色土が堆積している。長軸長は2.5mを測る。

#### 2号落とし穴 (第25, 27図)

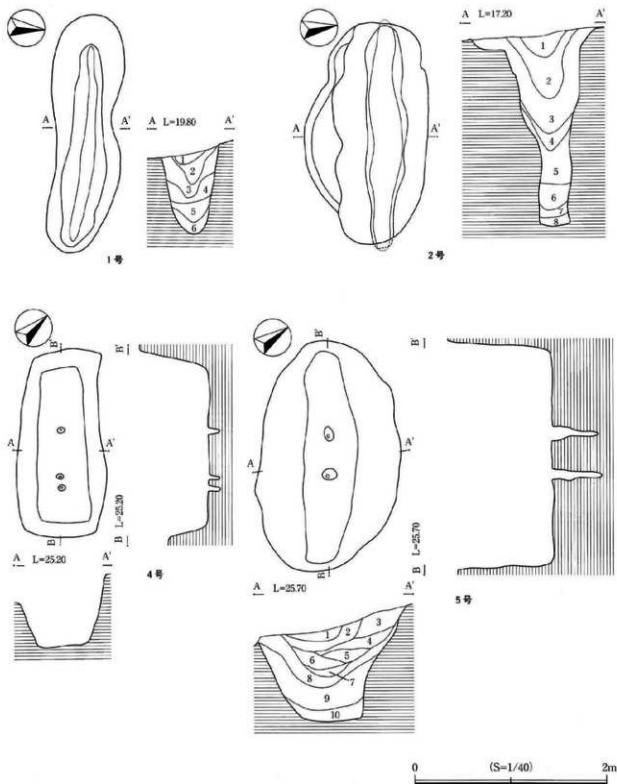
5F94-20に位置する。長楕円形を呈し、底面は狭いが平滑である。1号落とし穴と形態はほぼ同じだが、深さは2倍ほどある。最下層にはロームが混じる黒褐色土, 中位程まではロームを多く含む褐色土, そして最上位には黒褐色土が堆積する。I群土器が覆土中から出土している。

#### 3号落とし穴 (第26, 27図)

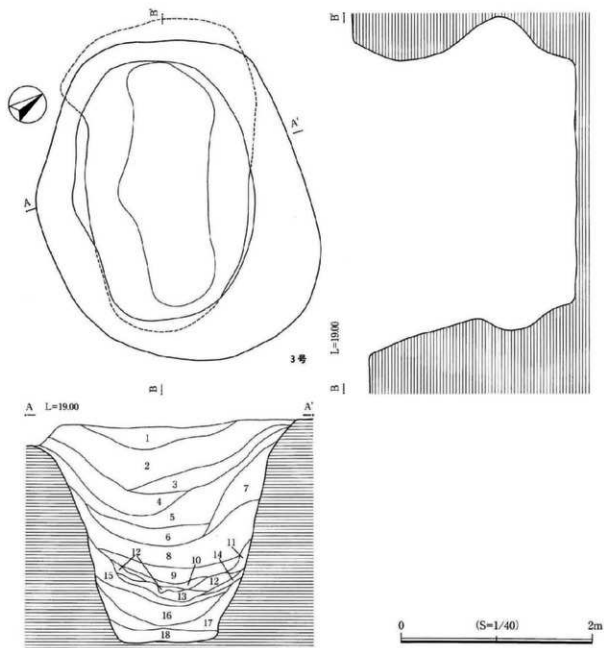
5F95-18に位置する。SI-139と重複する。平面形態はやや不整な楕円形である。最大の特徴はその規模で、他の落とし穴の3倍ほど、土量にして4~5倍ある。長軸の両端は中位から下位の深さにかけて抉れている。平面、断面形態は5号に類似している。覆土は最下層に暗褐色土, 中位程まではロームを多く含む褐色から暗黄褐色土, 上位には黒褐色土が堆積している。覆土上位で包含層からの混入と考えられる土器が多く出土しており、覆土下部から出土したI群土器は本落とし穴に伴うかもしれない。しかし、上層で複数の時期の遺物が包含されていることや、規模の大きさからすれば、中・近世以降の落とし穴の可能性もあり、I群土器の時期とするにはやや疑問が残る。

4号落とし穴 (第25図)

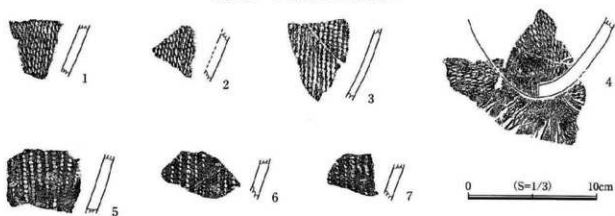
5F85-24に位置する。平面形態は上面、底面とも均整のとれた長方形を呈する。壁面の立ち上がりは垂直である。底面には径10cm以下のビットが3箇所あり、10~15cmの深さがある。覆土は全体的にロームの混入が多く黄色みが強い。特に底面のビット内は顕著である。出土遺物はなかった。



第25図 1号, 2号, 4号, 5号落とし穴実測図



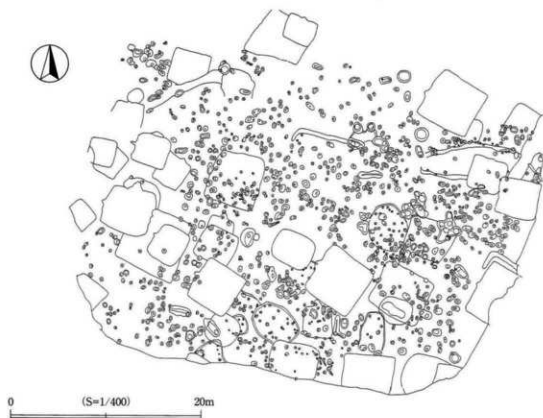
第26図 3号落とし穴実測図



第27図 落とし穴出土遺物 (2号: 1~4, 3号: 5~7)

#### 5号落とし穴（第25図）

5F85-25に位置する。平面形態は1号、2号と類似し、やや幅広である。ただし、底面の短軸幅が広く、長軸の両端もふくらみをもつことや底面に小ピットが検出されていることなどから、4号ともやや類似している。底面のピットは径15cm程で約50cmの深さがあった。覆土は最下層から中位まではほとんどローム質の土である。ピット内の覆土は、4号落とし穴のピットの覆土に比べて褐色味が強かった。



第28図 C2区ピット群

#### 4. ピット群（第28図）

C2区では多数のピットを検出した。弥生時代以降、何度も攪乱されてはいるものの、堆積層の消失にまでは至っていない。これらのうち、古代以降(弥生時代や古墳時代も含まれる可能性はある)の掘立柱建物跡のピットも含まれているが、覆土の観察所見によると、縄文時代の住居跡や炉穴などと類似するものも多い。ピット配列から当該時期の建物跡を確認するには至らなかったが、その存在の可能性は高いように思われる。

なお、C1区ではピットはほとんど検出しなかった。これは、C2区とは対照的に、中世に大規模な土地造成が行われたために、遺構の有無そのものを確認することができなくなったためである。

## 第2節 遺構外の出土遺物

C1区及びC2区から多くの縄文土器や土製品、石器などが出土した。そのほとんどがC2区から出土したもののだが、層位的に古代の遺物とともに出土していることや、平面分布においてもまとまりがないことから、包含状況は良好とは言いがたい。弥生時代以降何度も攪乱されている。

### 1. 縄文土器

出土した縄文土器は、早期から中期にわたり、特に堅穴住居跡などが伴う早期後半と前期前葉に比定できる土器が主体となっている。胎土や調整、文様によりI群からⅧ群に大別分類した。破片資料が多く、器形を復元できるようなものは少ないことから、文様要素により分類した。

#### I群土器 燃糸文系土器群 (第29, 30図)

出度量は少ないが、井草式から花輪台式にかけての土器が出土している。

1類 燃糸文を施文するもの。口縁部形態、燃糸施文の部位や間隔でa～dの4種に分けた。

- a種 口縁部が外反、肥厚して、燃糸文が口唇部より施文されるもの。(1, 2)
- b種 口縁部はわずかに肥厚し、燃糸文が口唇部直下から間隔を密にして施文されるもの。(3)
- c種 口縁部の厚さが胴部と同じかわずかに肥厚するもの。燃糸文は口唇部直下から施文されるが、その間隔は疎らなもの。口縁部付近は撫でられて、節がつぶれているものがある。(12-14)
- d種 口縁部の器壁の厚さが胴部とほぼ同じもの。燃糸施文の間隔は密だが、口縁部は丁寧に撫でられて無文帯を有する。(17)

2類 縄文を施文するもの。

- a種 口縁部はやや肥厚し、縄文が口唇部直下から間隔を密にして施文されるもの。(4-11)
- b種 口縁部はやや肥厚する。節が大きいために条の間隔は疎らとなる。口縁部が撫でられるものがある。(15, 16)
- c種 口縁部は器壁の厚さが胴部とほぼ同じ。口縁部は丁寧に撫でられて、無文帯を有する。(18)
- d種 口縁部に無文帯を有する。無文帯の下端には縄文が押圧される。(19, 20)

3類 当該土器群の胎土に類似するが、器面に文様が施されず、擦痕が目立つもの。(21)

その他、胴部、底部破片は燃糸施文(22-37)、縄文施文(38-46)に分けたが細別しなかった。

#### Ⅱ群土器 貝殻・沈線文系土器群 (第31図)

出土量は少ない。田戸下層式及び田戸上層式に相当するが、ほとんどが田戸下層式である。

1類 太沈線と細沈線を組み合わせて文様を施文するもの。(1-4)

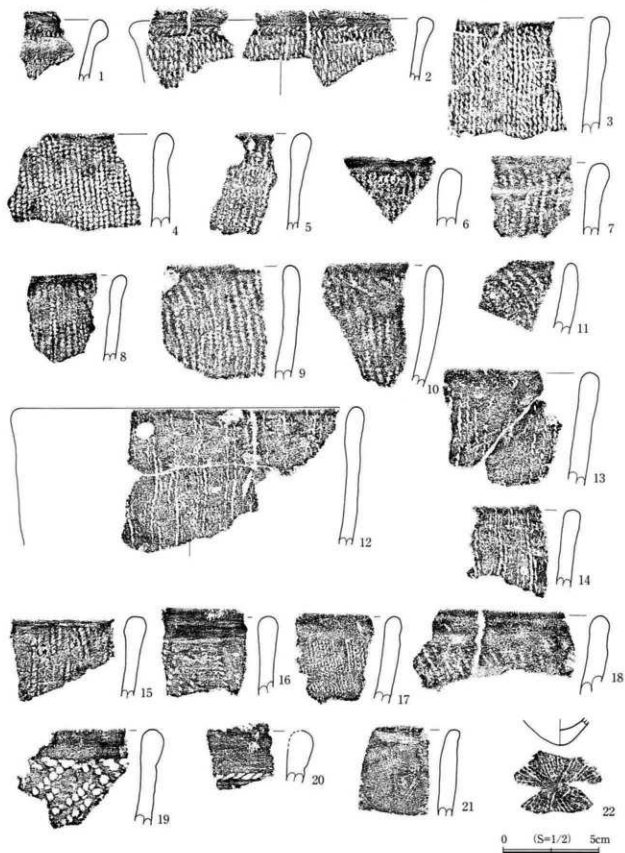
2類 細沈線と貝殻腹縁を組み合わせて施文するもの。文様構成により以下に細分する。

- a種 細沈線により幾何学的な区画をつくりだし、その中に貝殻腹縁を充填するもの。(6-12)
- b種 細沈線および貝殻腹縁がそれぞれ文様意匠をつくりだすもの。(15)

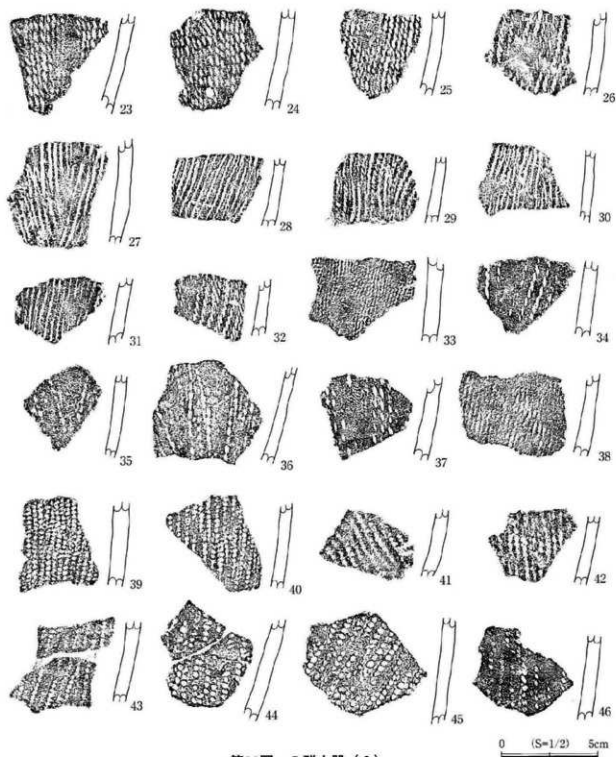
3類 当該土器群に器形、胎土、調整が類似するが、器面に文様を施さないもの。(13, 14)

#### Ⅲ群土器 条痕文系土器群

胎土に繊維を含み、貝殻条痕ないしは擦痕状の調整痕を器面に伴う土器群である。出土量が最も多い。以下に示すように、胎土や繊維の含有、口唇部形態からさらに二つに分類した。文様構成は単純なものが



第29圖 I群土器(1)



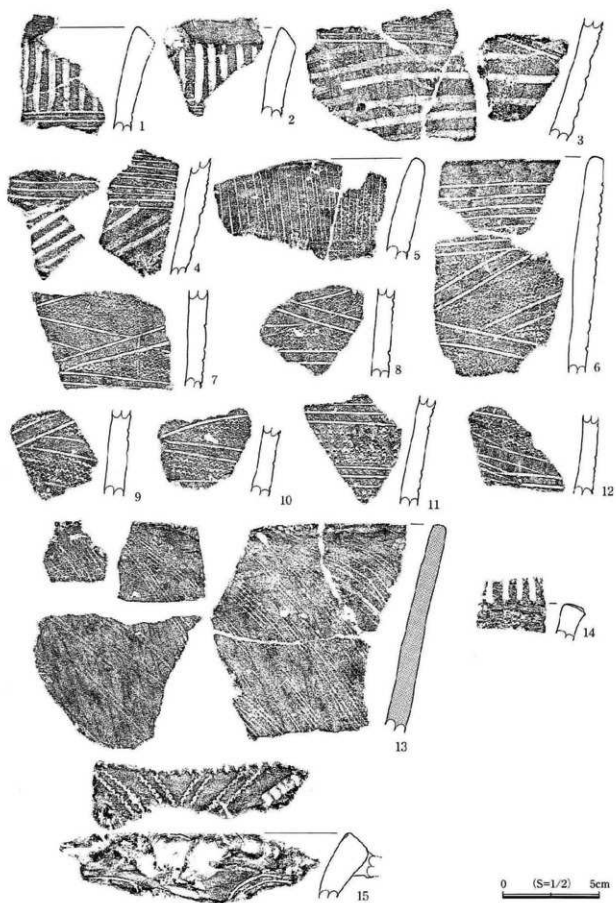
第30図 I 群土器 (2)

多く、口縁部及び口管部に集中するが、なかには内面にも施される。

ⅢA 群土器 条痕文系土器群の前半 (第32~41図)

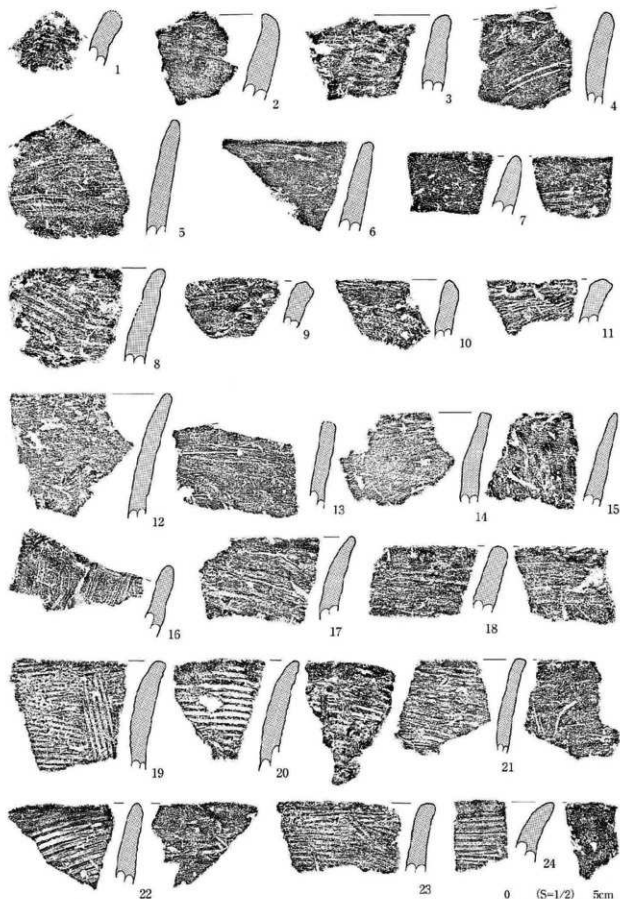
繊維痕が目立たず、胎土が固く焼き締まっているもの。擦痕を伴う土器が多い。文様は口縁部及び口管部に集中している。擦痕を伴う無文土器は、田戸上層式末葉になると顕著に見られるようになり、子母口



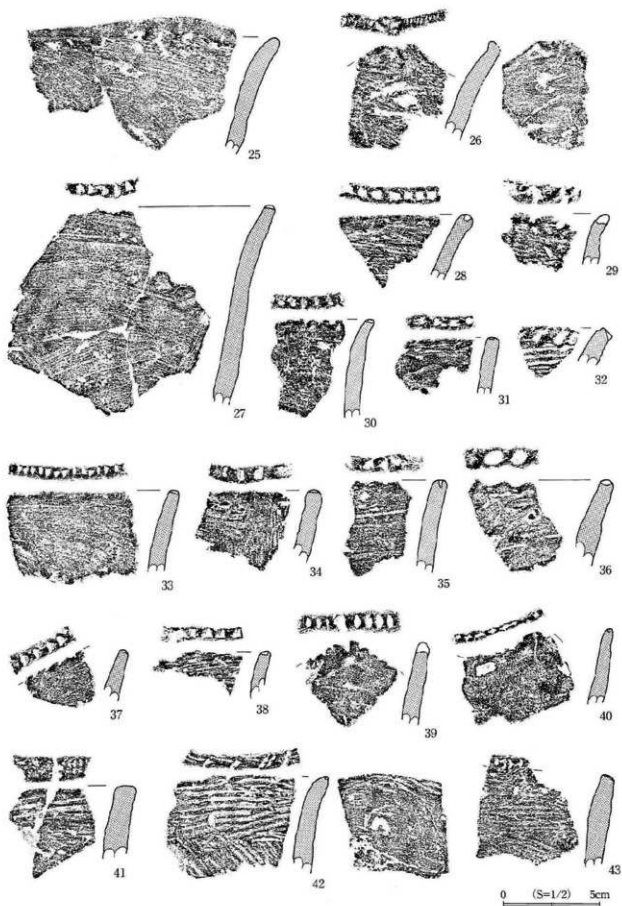


第31圖 II 群土器

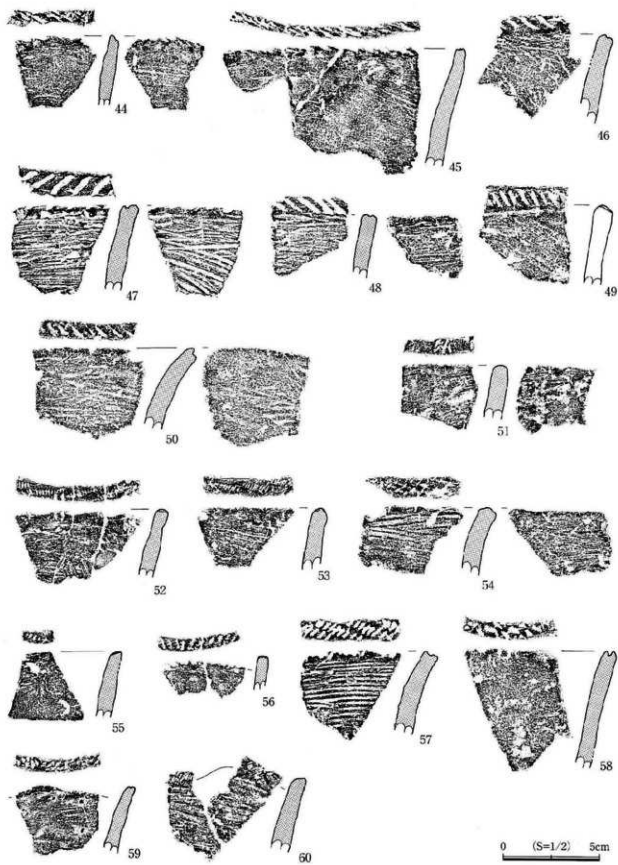
0 (S=1/2) 5cm



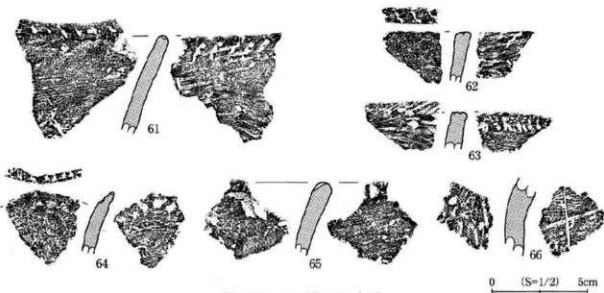
第32図 IIIA群土器(1)



第33图 III A群土器(2)



第34图 III A群土器 (3)



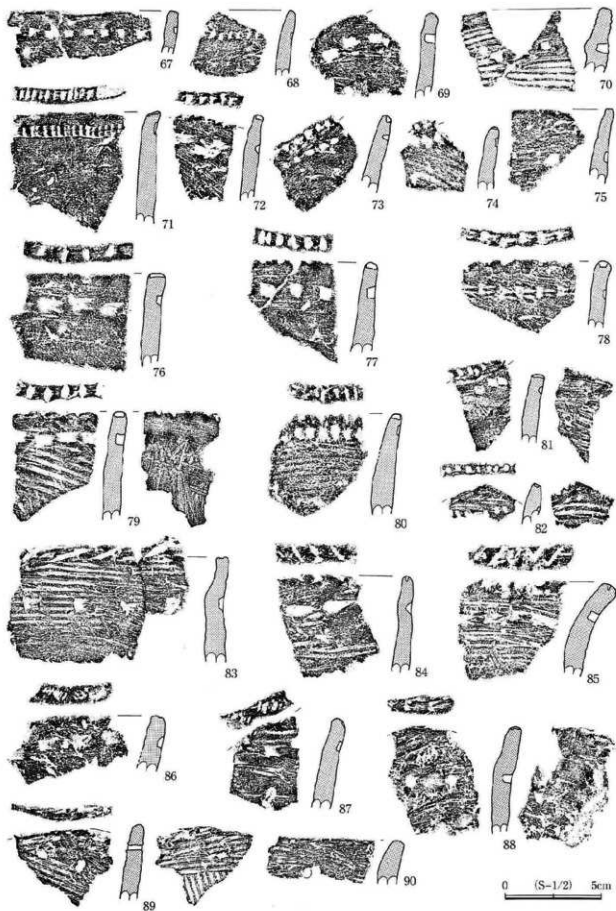
第35図 III A群土器 (4)

式にも多い。本遺跡から出土した無文土器の口唇部形態は、角頭状を呈するものが少なく、丸みのある例が多い。田戸上層式に相当するII群土器が少ないことや、反対に絡条体圧痕文を伴う土器が多いことから、田戸上層式というより子母口式に並行する段階の土器が主体となる可能性が高い。

- 1類 器面には擦痕、貝殻条痕が見られるだけで、文様が施されないもの。口縁部の成形、調整は特に丁寧に仕上げられる。(1~24)
- 2類 口唇部及び内面のみ文様が施され、外面は擦痕、貝殻条痕のみのもの。文様施文には、刺突、貝殻腹縁、絡条体圧痕、沈線によるものがある。(25~66)
- 3類 口縁に沿って文様が巡るもの。
  - a1種 刺突文様が1列巡るもの。口唇部に絡条体が押圧されるものは少ない。(67~90)
  - a2種 刺突文様が複数列巡るもの。間隔が密なものと同なものがある。a1種に比べて、施文域の幅が広がり、口縁部付近にとどまらなくなる。また、口唇部に絡条体が押圧されるものが多い。また、山形状に巡るものもある。(91~122)
  - b種 沈線、貝殻腹縁、絡条体による文様が巡るもの。(123~143)
- 4類 文様が縦方向に施文されるもの。横方向のものと組み合わせるものもある。(144~154)
- 5類 文様要素が複合するもの。
  - a種 横方向に施文されるもの。ある要素が器面を分割することとなり、その中を別の要素で充填する意匠をとる。(155~169)
  - b種 縦方向にも施文されるもの。施文域の幅が広がり、文様も幾何学的になる。(170~176)
- 6類 隆帯、あるいは隆起線が施されるもの。(177~185)

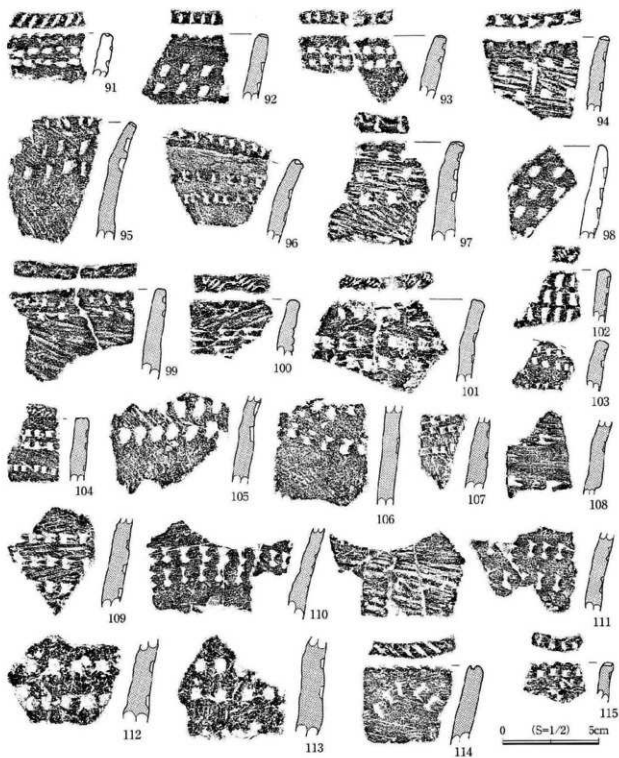
#### III B群土器 条痕文系土器群の後半 (第42~48図)

繊維痕が顕著で胎土が脆いもの。器面があまり乾燥していない段階で、貝殻条痕により調整されて文様施文されるものが多い。器面が粗く、口唇部の歪みが目立つ。一方、砂礫が多く含まれて繊維痕が目立たないものもある。これらはIII A群の可能性もあるが、調整や口唇部形態から本群に分類した。早期後葉の



第36图 III A群土器 (5)





第37図 III A群土器(6)

茅山式あるいは茅山上層式以降と思われる。

1類 器面には貝殻条痕、捺痕が見られるだけで、文様が施されないもの。胎土が堅緻であることから

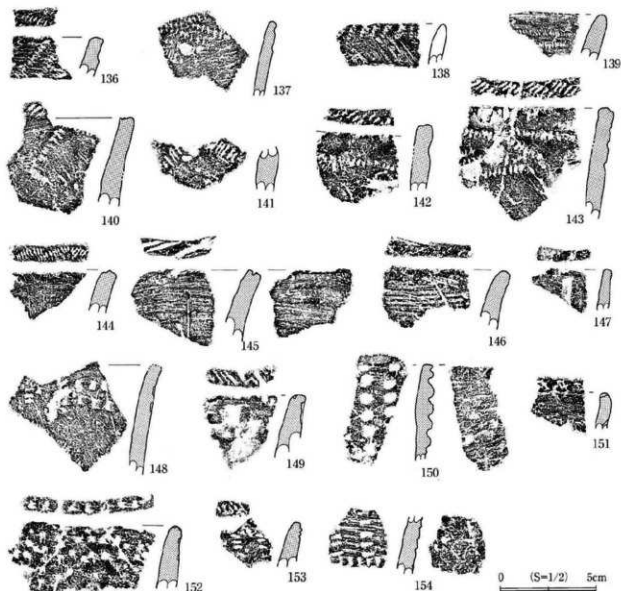
III A群土器と判別が困難であるが、砂礫の含有が顕著で、調整が粗い。(1~6)

2類 口唇部にのみ指頭圧、刺突、刻みなどが施文されるもの。口唇部を押しつぶすように施文される





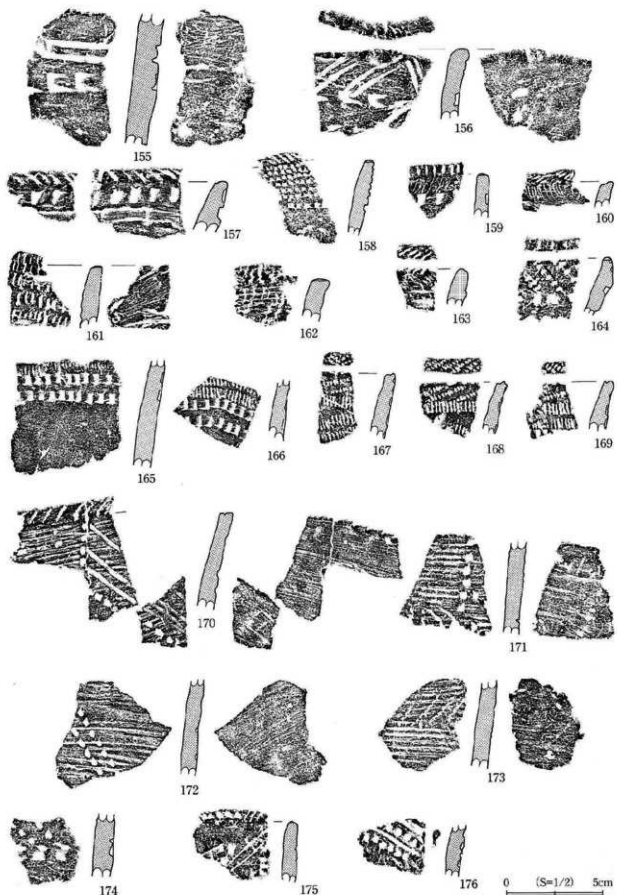
第38圖 III A群土器 (7)



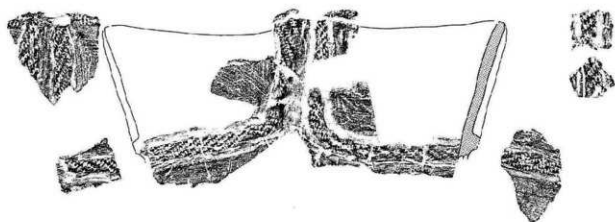
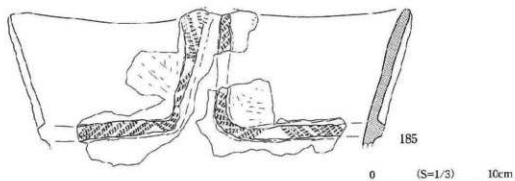
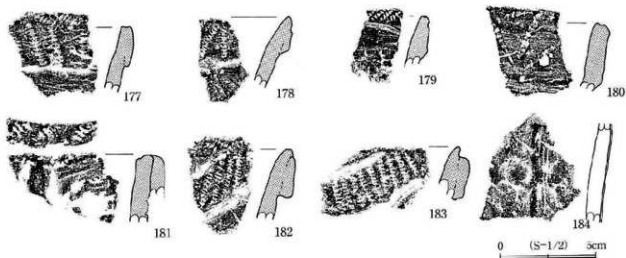
第39図 III A群土器(8)

ことから、端部が内外にはみ出す。(7~35)

- 3類 口縁に沿って刺突文様が巡るもの。口唇部への施文が器面の施文後に行われるため、口縁部は歪んでいる。(36~47)
- 4類 胴部に刺突、刻みが巡るもの。(48~52)
- 5類 器面の広い範囲に文様が施されるもの。
- a1種 広い範囲に沈線で格子目状の文様が施されるもの。(53~61)
- a2種 口縁部付近に沈線で幾何学状、波状や矢羽根状の文様が施されるもの。(62~69)
- b1種 貝殻腹縁が乱雑に施文されるもの。砂礫の含有が多い。(70~81)
- b2種 貝殻腹縁が口縁に沿って巡るもの。(82, 83)
- c種 給糸体圧痕により幾何学状の文様を施すもの。砂礫の含有が多く、堅く締まる。(84, 85)
- 6類 隆帯が巡るもの。(86~93)



第40图 IIIA群土器(9)



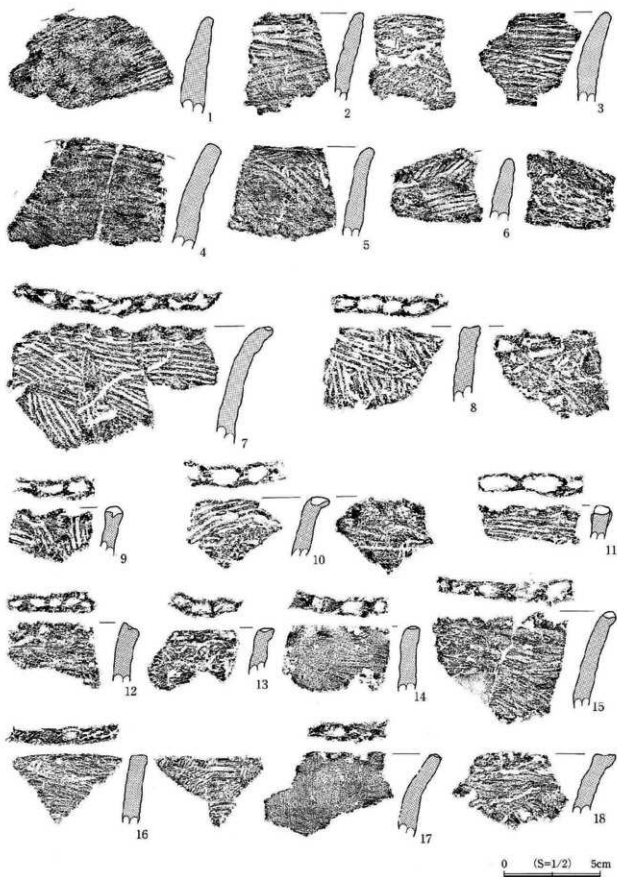
第41図 III A群土器 (10)

III群土器 底部 (第49図)

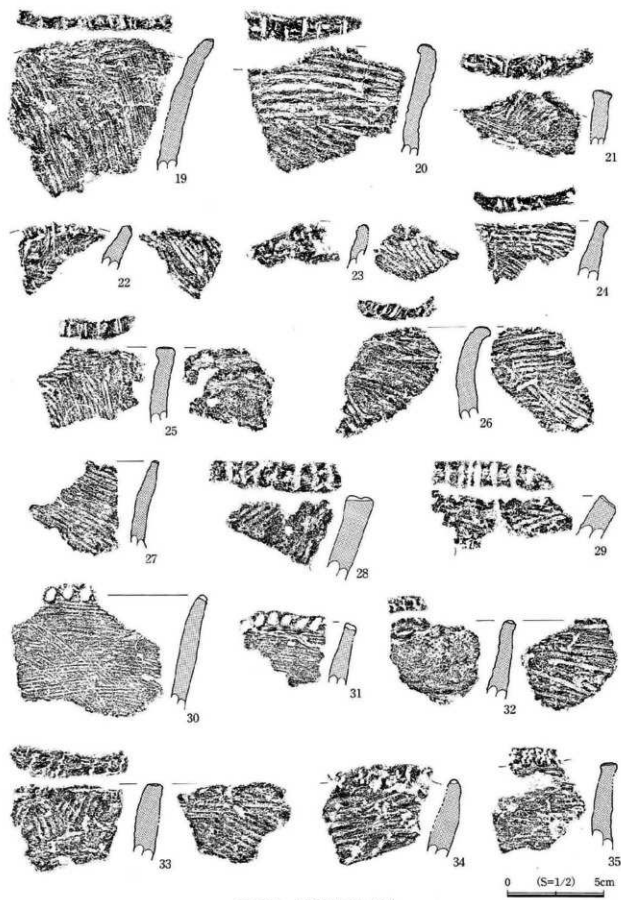
尖底と平底が出土している。94~102は丸みのあるものが多く、子母口式土器の底部がほとんどであろう。103~110は器面が粗く歪みが著しい。茅山式以降の底部と考えられる。

IV群土器 羽状縄文系土器群 (第50~59図)

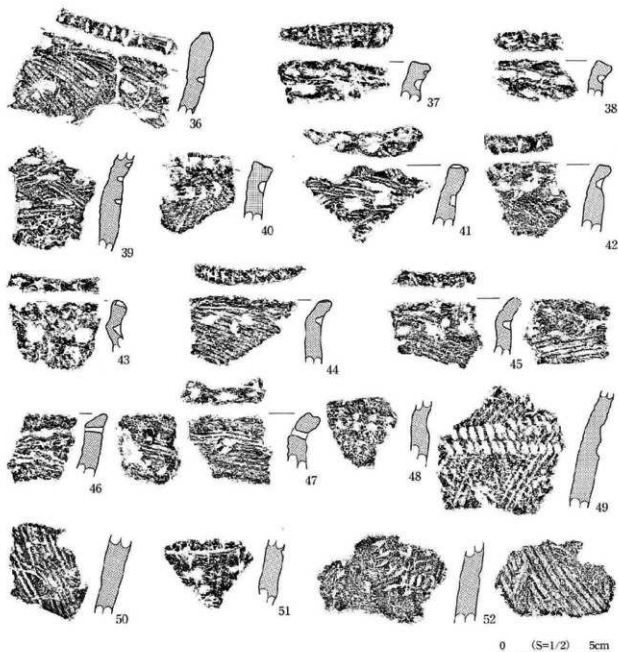
繊維の含有が多く、縄文を羽状、菱形状に施すものが多い土器群である。また、その端部は結節あるいは結束されている。内面は丁寧に器面調整されている。前前半の黒浜式土器が大半を占め、わずかに関



第42图 III B群土器 (1)



第43図 III B群土器 (2)



第44図 III B群土器 (3)

山式を含む。III群土器に次いで出土量が多かった。

1類 地文として、縄文のみが施文されるもの。

a種 縄文を回転施文するもの。無節、単節縄文のほか、付加条、組紐の縄文も見られる。(1~27)

b種 縄文を押圧するもの。あるいは縄の束を回転したものであろうか。(28~35)

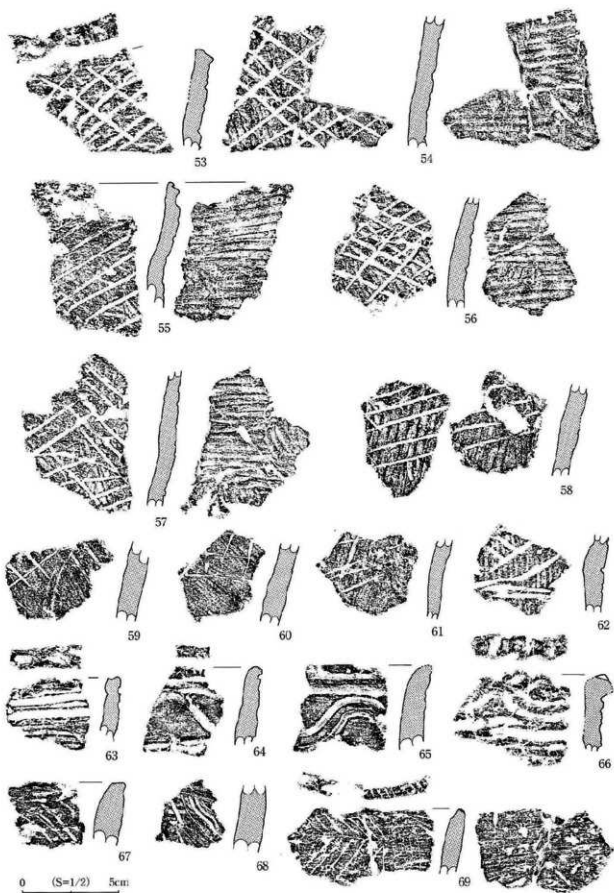
c種 格子目状に表れる附加状縄文。単軸の給条体のうち、網目状のものも含めた。(36~41)

2類 竹管、半(多)載竹管あるいは櫛歯状工具を用い、器面を水平方向に分割して文様を施文するもの。

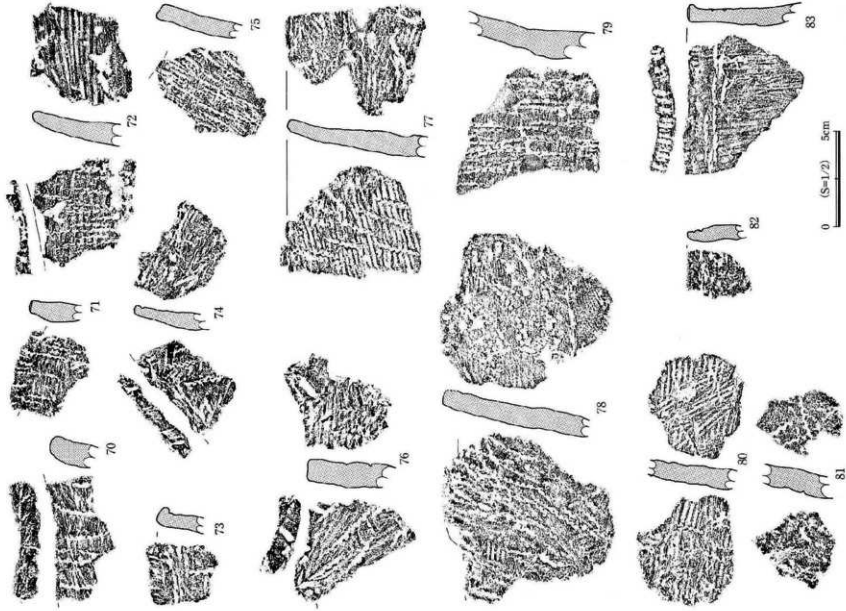
沈線状のもの、押し引き状のものがある。

a種 沈線により鋸歯状、菱形状の文様を施文するもの。これらは、区画した沈線間に施すものと器

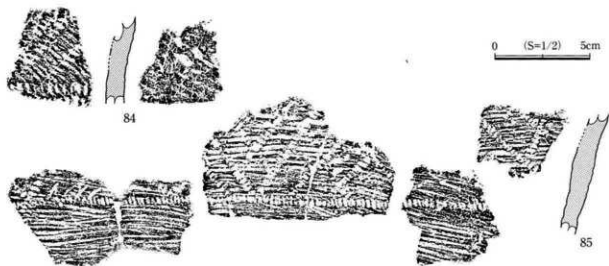




第45图 III B群土器(4)



第46図 III B群土器 (5)



第47図 III B群土器(6)

面全体に施すものがある。(42~82)

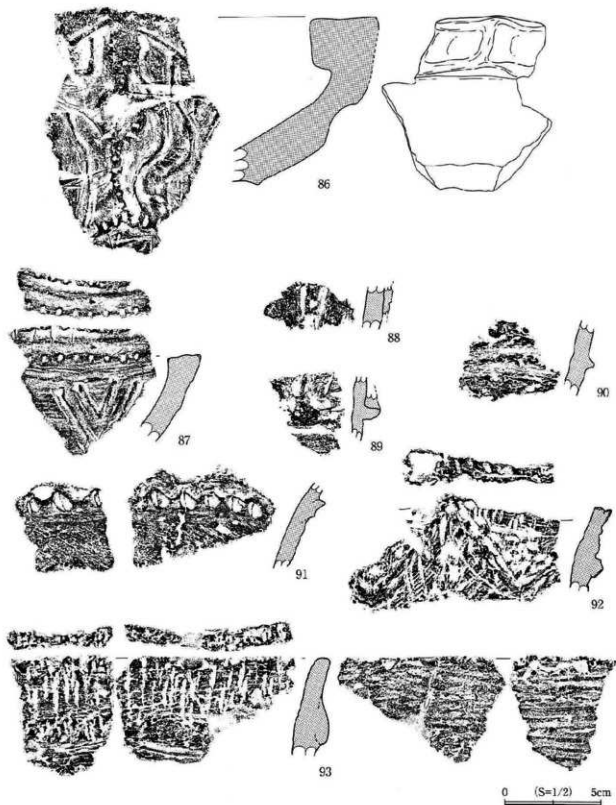
- b種 沈線で区画した中に波状の文様を施すもの。(83~88)
- c種 竹管, 半載竹管で押し引き状に文様を施文するもの。文様構成はa種に類似する。(89~118)
- 3類 竹管, 半載竹管, ヘラ状あるいは櫛歯状工具を用い, 器面を垂直方向に分割して文様を施文するもの。
  - a1種 器面を垂直に分割するもの。綾杉状に沈線を施文するものも含めた。(119~127)
  - a2種 多条の沈線を施文するもの。器面を分割するというより, 充填しているもの。(128~136)
  - b種 ヘラ状工具で格子目状に沈線を施文するもの。(137~141)
  - c種 押し引き状に施文するもの。(142, 145~150)
  - d種 竹管により円形の刺突を施すもの。(143, 144)
- 4類 その他, ヘラ状工具, 半載竹管, 櫛歯状工具により文様意匠を施文するもの。(151~158)
- 5類 同一の原体で多重, 多段に施文して, 沈線で器面全体を充填するもの。
  - a1種 (半載)竹管, 櫛歯状工具を水平方向に多条に施文するもの。沈線幅が太いものと細いものがある。(159~169)
  - a2種 半載竹管で短く刻むように, 連続して多条に施文するもの。押し引き状のものも含めた。(170~176)
  - b種 ヘラ状工具, 竹管で沈線を短く乱雑に施文するもの。(177~184)
  - c種 竹管を乱雑に施文するもの。(185)
  - d種 貝殻腹縁を乱雑に施文するもの。(186~189)

#### IV 群土器底部 (第59図)

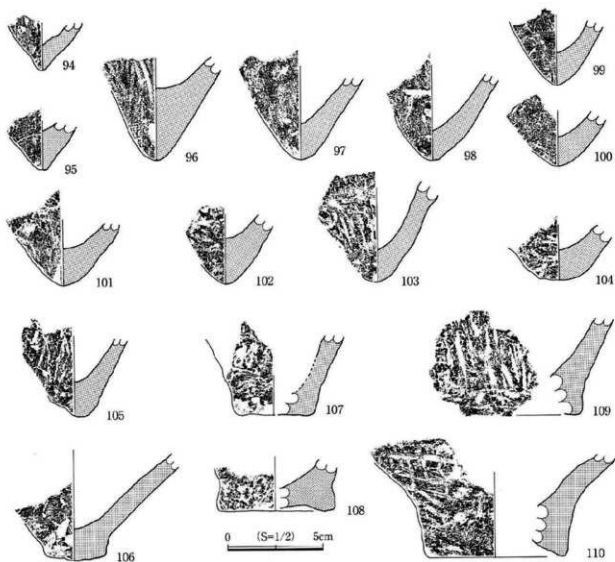
平底, 上げ底, 台付きの底がある。(190~198)

#### V 群土器 浮島・興津系土器群 (第60~68図)

半載竹管, 貝殻腹縁, 条線などで文様を施文するもの。繊維痕は見られない。文様構成は次のVI群土器



第48图 III B群土器 (7)



第49図 III 群土器底部

と類似するものもあるが、胎土に砂礫を含まないもの、地文に熱糸文を施しているものを目安とした。

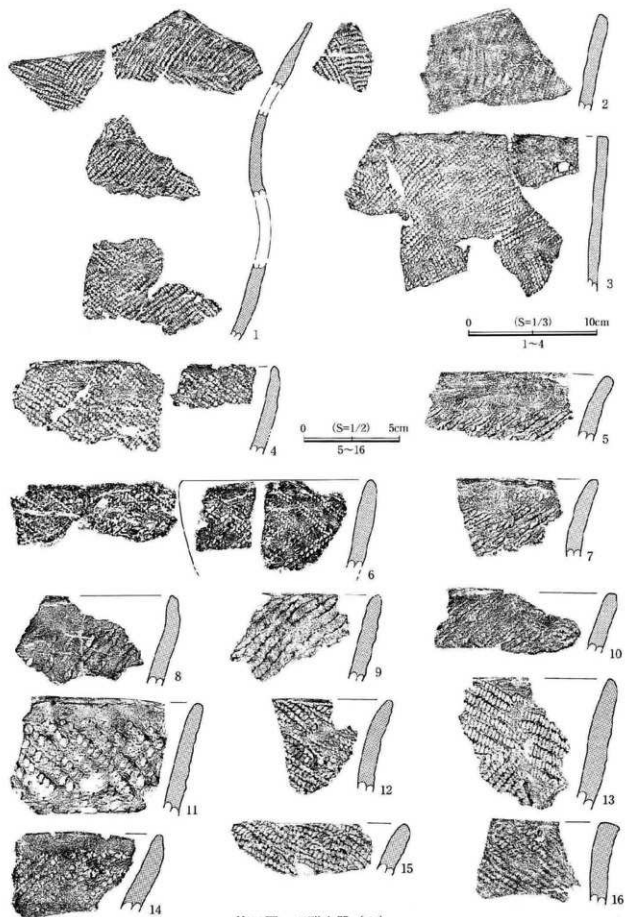
1類 半截竹管により文様を施文するもの。

- a種 口縁と平行に施文されるもの。(1~8)
- b種 山形状、菱形状に施文されるもの。(9~19)
- c種 弧状、木の葉状に施文されるもの。(20~25)
- d種 器面を垂直に分割し、綾杉状に施文されるもの。(26~30)
- e種 半截竹管を押し引き状に施文するもの。(31~52)

2類 貝殻のロッキング手法で器面を分割し、その中を半截竹管により斜状、菱形状、矢羽根状の文様が施文されるもの。(53~84)

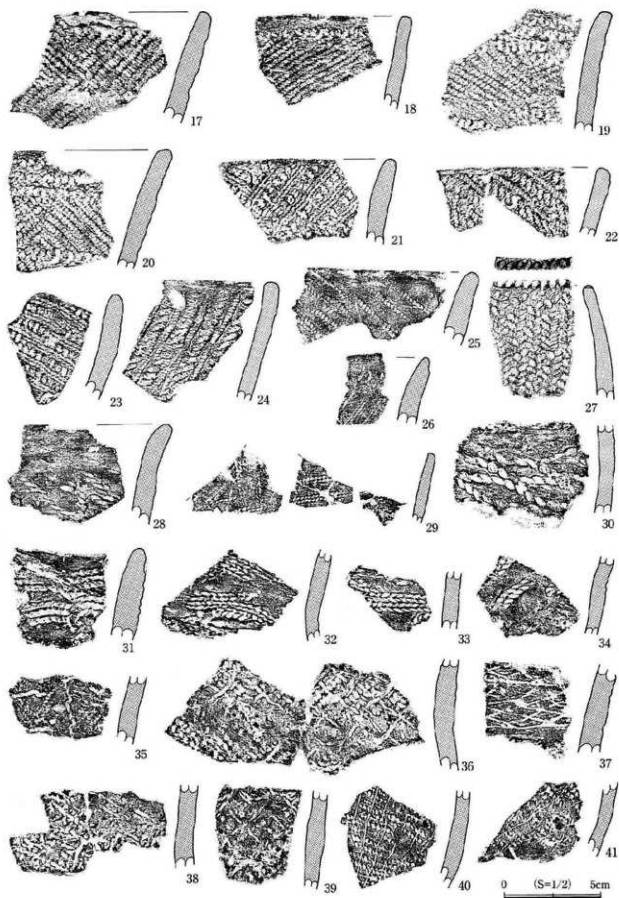
3類 貝殻のロッキング手法による文様が主体となるもの。

- a種 沈線により区画された中に貝殻腹縁のロッキングによる文様を施文するもの。(85~88)



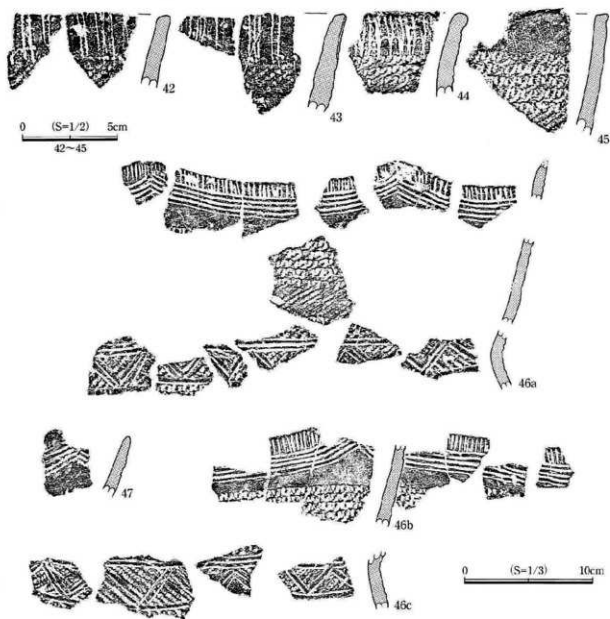
第50図 IV群土器(1)





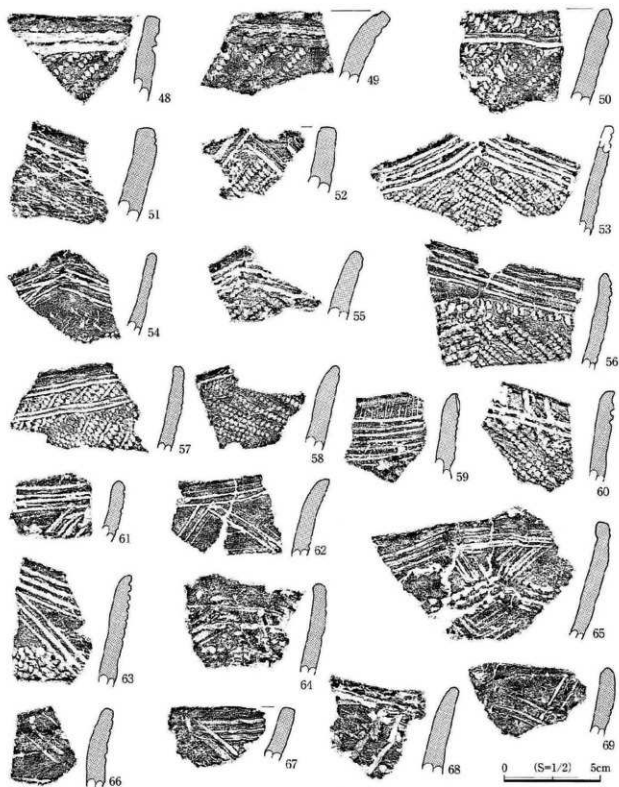
第51图 IV群土器(2)



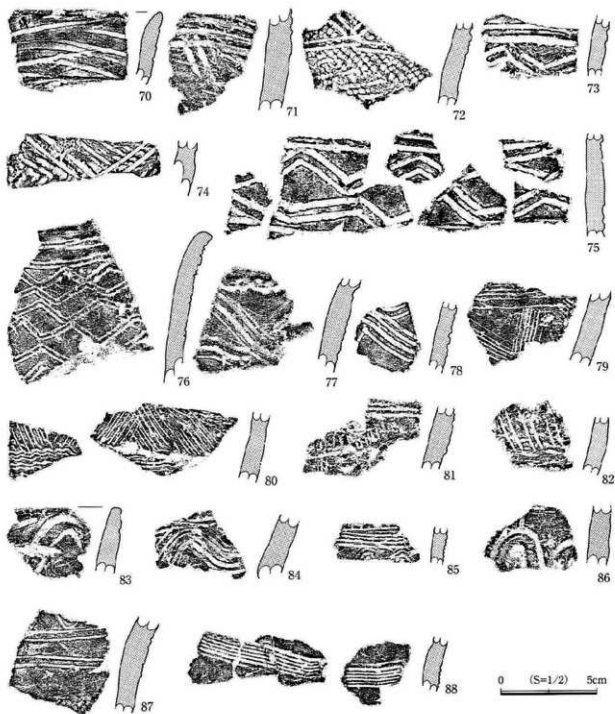


第52図 IV群土器(3)

- b種 貝殻腹縁のロッキングによる施文が主体となるもの。a種のように沈線で区画しているものもある可能性がある。(89~99)
- 4類 キザミのような連続施文が行われるもの。(100~103)
- 5類 ロッキング手法で端部が強調されるもの。(104~112)
- 6類 肋のある貝殻により狭い間隔でロッキングによる文様を施すもの。  
 a種 施文間隔が狭いために、多段の刺突列を施したように見えるもの。(113~133)  
 b種 a種の施文方法により、幾何学的な文様を施すもの。(134~140)
- 7類 貝殻のロッキング手法によるものだが、従来三角文と呼ばれていたものである。(141~163)
- 8類 条線、沈線により文様を施すもの。

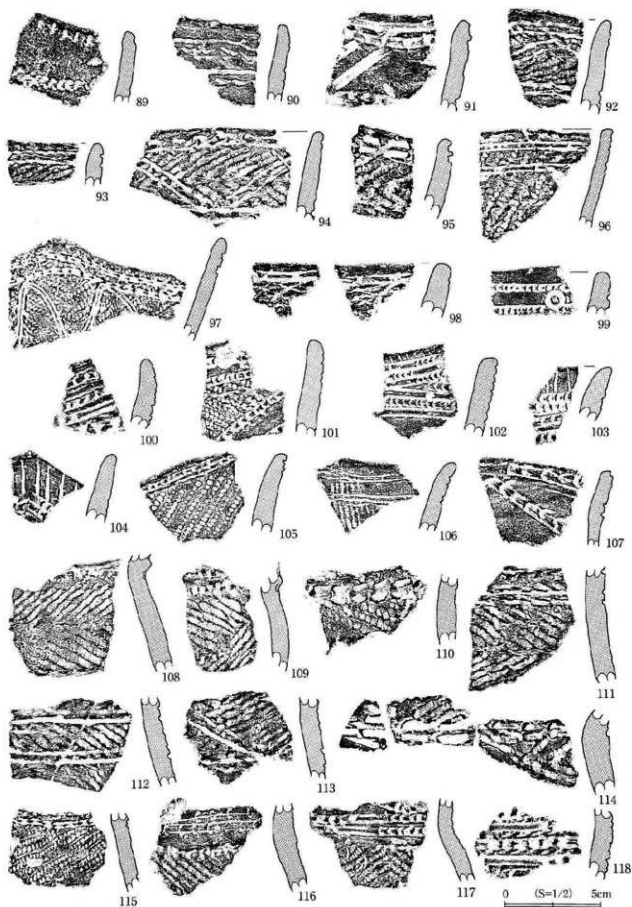


第53图 IV群土器(4)

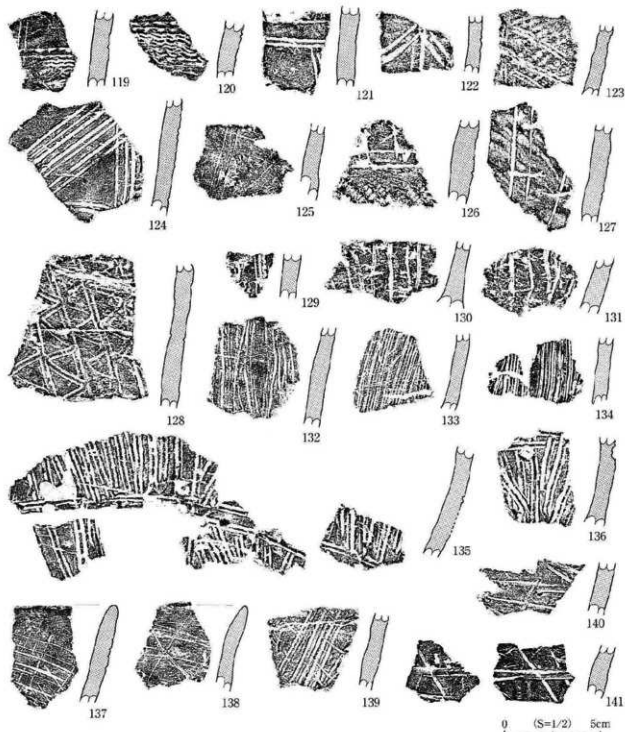


第54図 IV群土器(5)

- a種 半截竹管，櫛齒状工具により多条の文様を施すもの。(164~182)  
 b種 半截竹管，ヘラ状工具により，幾何学状の文様を施すもの。(183~199)  
 9類 指頭圧あるいは棒状工具により押圧の文様を施すもの。(200~209)  
 10類 輪積みの境にキザミを施すもの。(210~215)  
 11類 口唇部にキザミを施すもの。無文のものも含めた。(216~221)  
 12類 竹管の押し引きで弧状の文様を多重に施すもの。明らかに当該土器群と判断できなかったが，ここに含めた。接合しないものの，いずれも同一個体と思われる。(233~239)



第55圖 IV群土器(6)



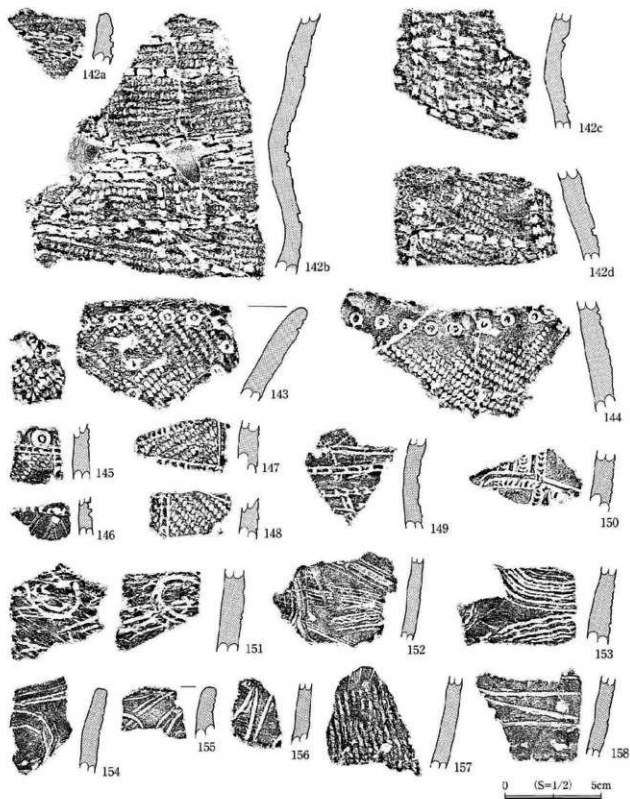
第56図 IV群土器(7)

V群土器底部 (第67図)

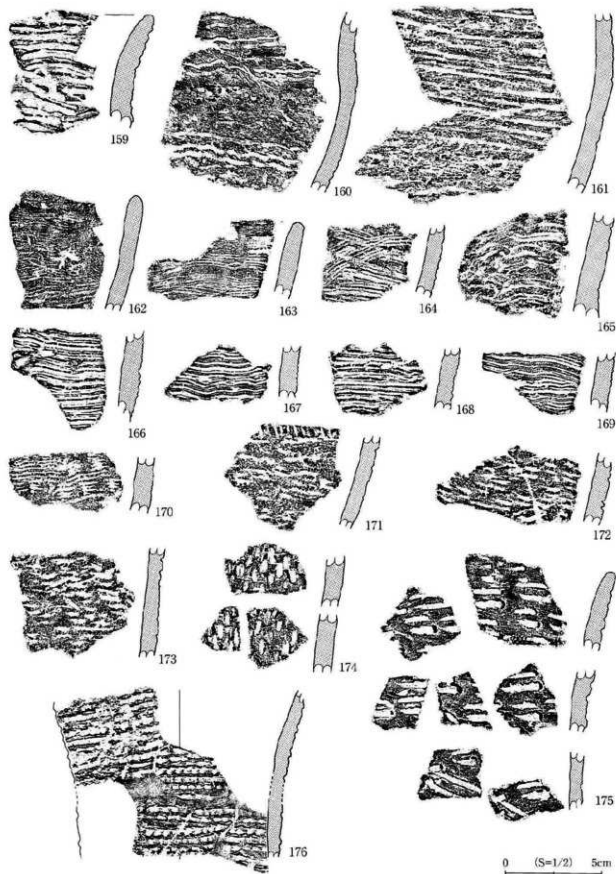
予想される器形は様々だが、いずれも底部直上でわずかに括れる。

VI群土器 龍磯系土器群 (第69図)

文様要素や文様構成はV群土器と類似するものもあるが、胎土に砂粒鉱物を多く含むもの。地文に縄文を施すものである。V群土器の50, 51, 99は地文に縄文が施されているが、胎土に砂粒を含まず、精製されていることから、この項には分類しなかった。

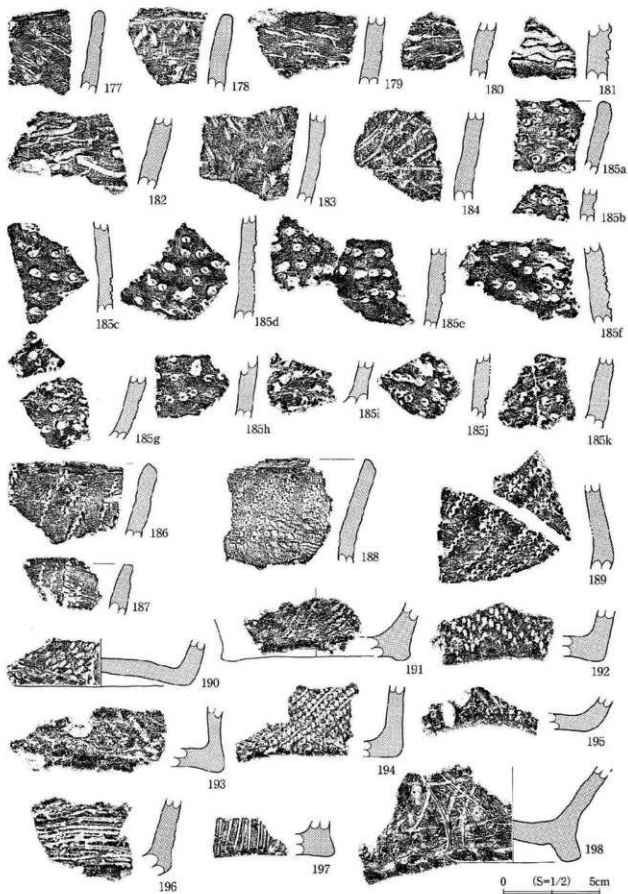


第57图 IV群土器(8)

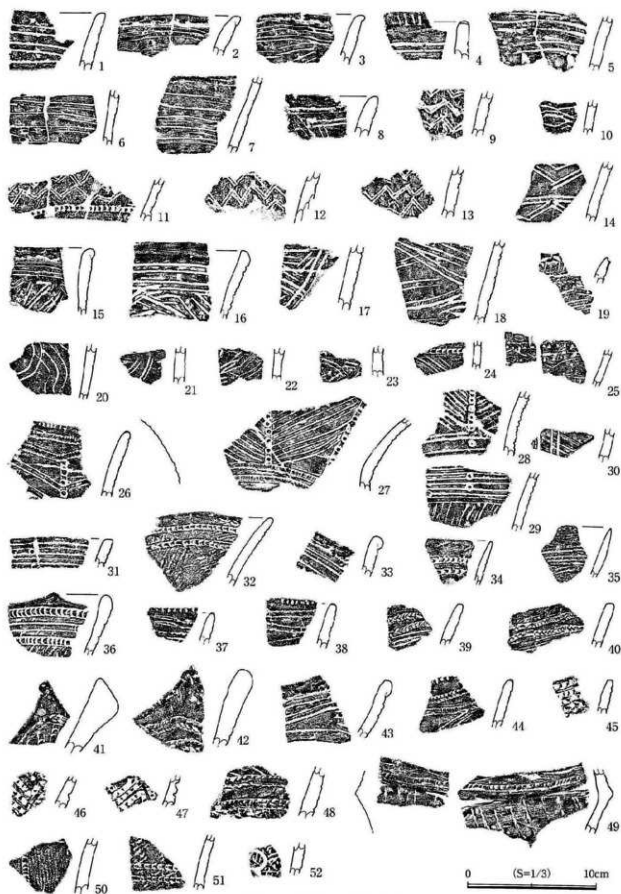


第58图 IV群土器(9)





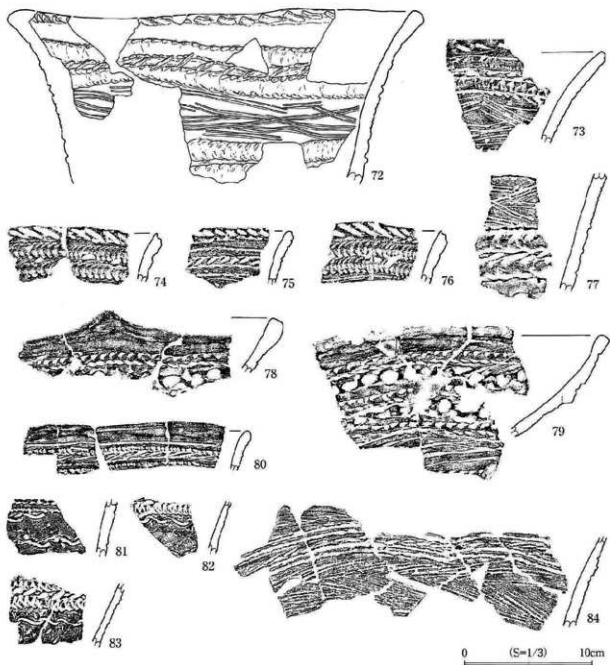
第59图 IV群土器 (10)



第60图 V群土器(1)



第61圖 V群土器(2)

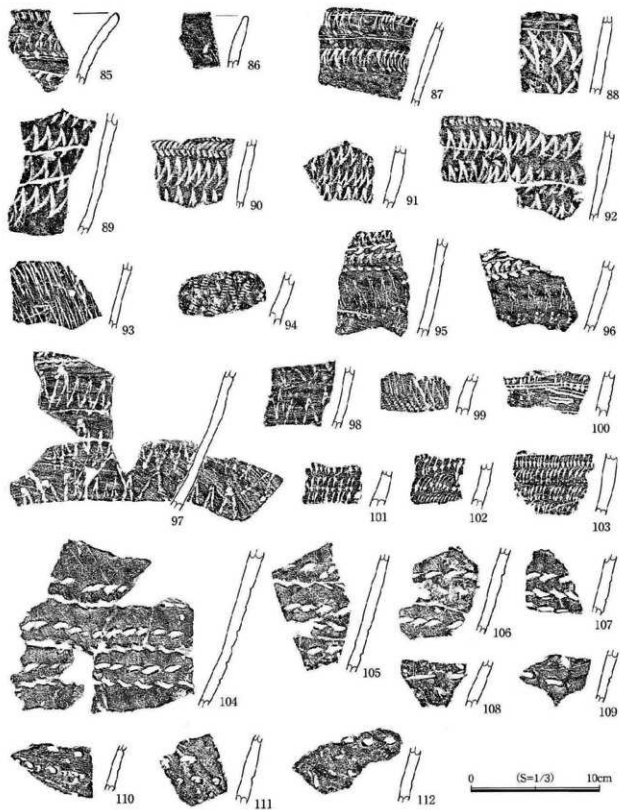


第62図 V群土器(3)

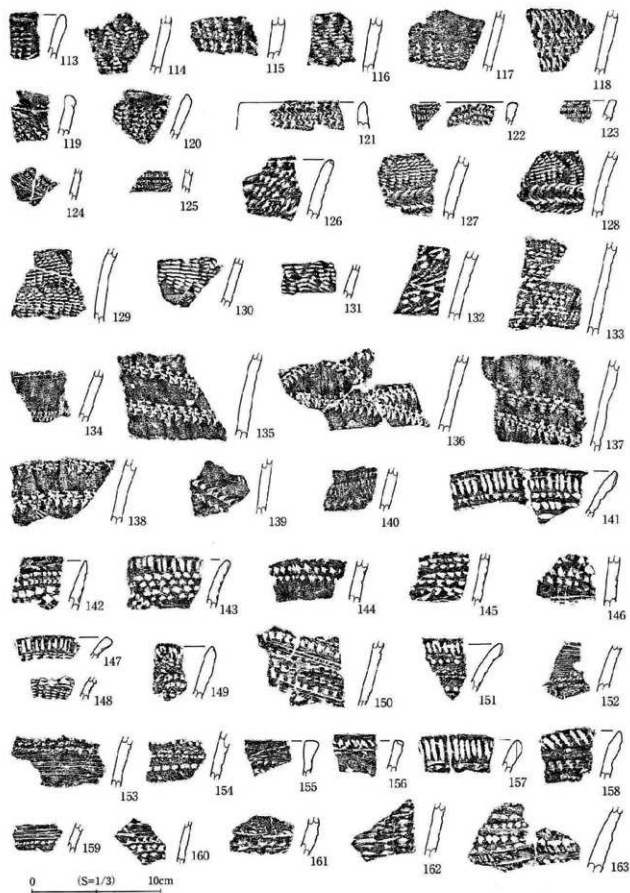
- 1類 地文に縄文を施し、半截竹管により文様を施すもの。(1~25)
- 2類 地文に縄文を施し、半截竹管による沈線間にキザミを施すもの。(26~32)
- 3類 隆帯を施すもの。(33)
- 4類 浅鉢を一括した。35~37は赤彩される。(34~37, 40, 41)
- 5類 縄文施文のみ。(38, 39)

Ⅵ群土器 前期末葉から中期初頭にかけての土器群(第70図)

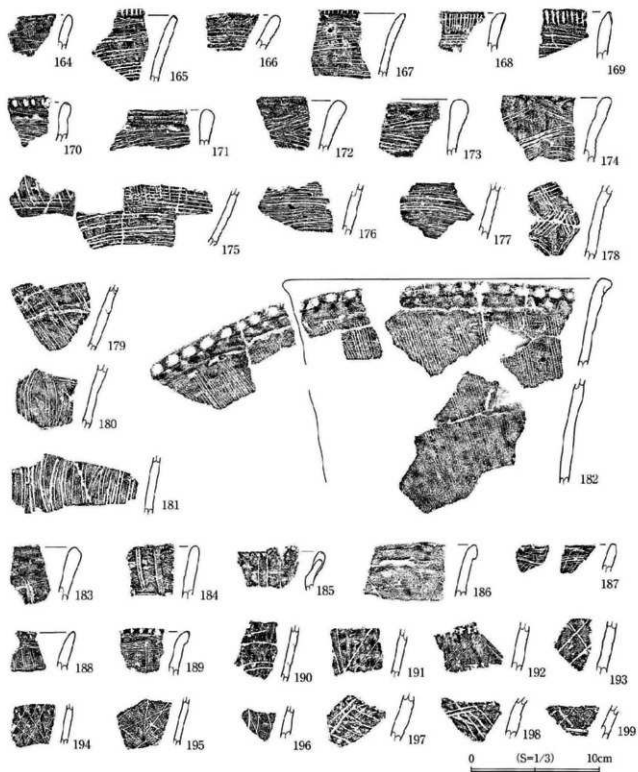
結節部分を強調した縄文を施文するもの。文様として口縁部を中心に縄文が押圧される。胎土は緻密で



第63图 V群土器(4)

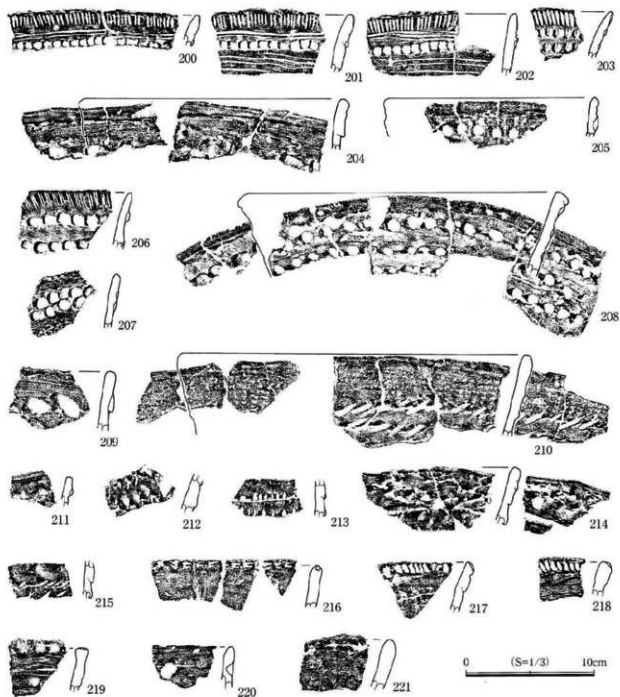


第64图 V群土器(5)



第65图 V群土器(6)





第66図 V群土器(7)

堅い。従来栗島台式と呼ばれているものを含む。

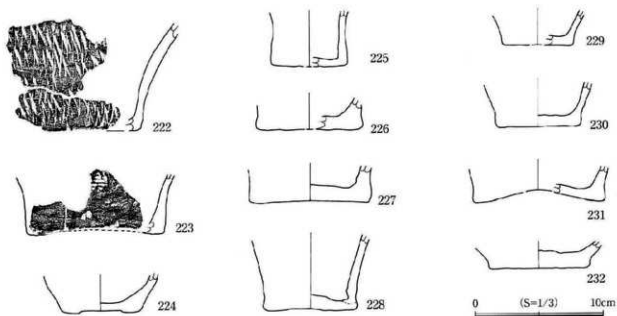
1a類 表面に回転縄文を施文するもの。(1~5, 27~43)

1b類 口唇部にキザミ, 回転あるいは押圧の縄文が施文されるもの。(6~11)

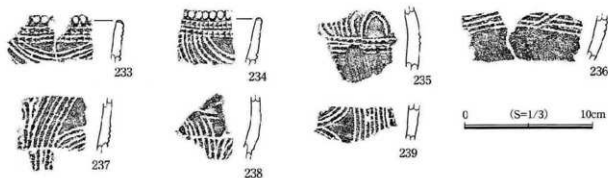
2類 口縁部と平行あるいは幾何学状に縄文が押圧されるもの。(12~26)

V群土器 中期の土器群(第71~73図)

五領ヶ台式, 阿玉台式, 勝坂式, 加曾利E式の土器群を一括した。



第67図 V群土器(8)



第68図 V群土器(9)

1類 五領ヶ台式に比定しうるもの。(5~9, 11~13)

2類 阿玉台式に比定しうるもの。

a1種 半載竹管で1列の杵状の押し引き文が施文され、内面にも文様を施すもの。(1, 2)

a2種 半載竹管で1列の杵状の押し引き文が施文されるもの。(3, 4, 10)

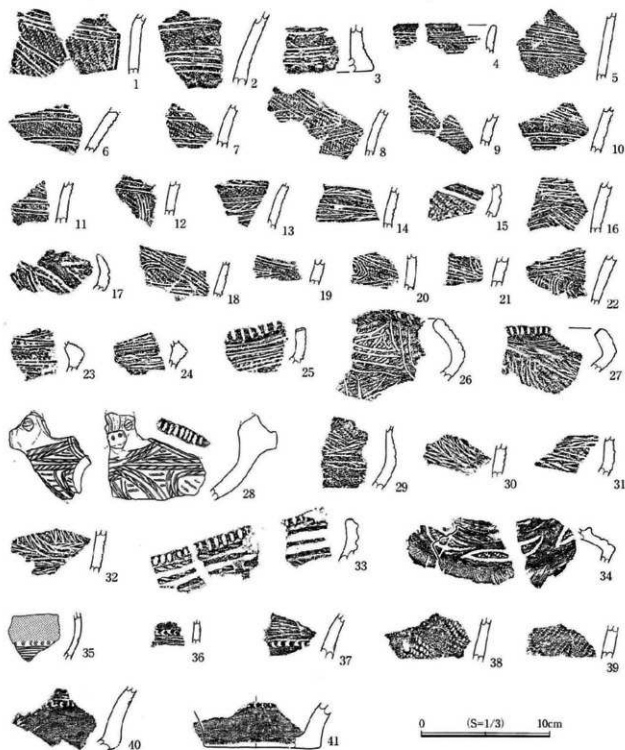
b種 隆帯に沿って2列の押し引き文が施文されるもの。把手の破片もこれに含めた。(14~32)

c種 隆帯に沿って沈線が施されるもの。(41)

3類 勝坂式に比定しうるもの。(33~40)

4類 加曾利E式に比定しうるもの。胴部に沈線と懸垂文が施文される。口縁部破片は出土していない。(42~45)

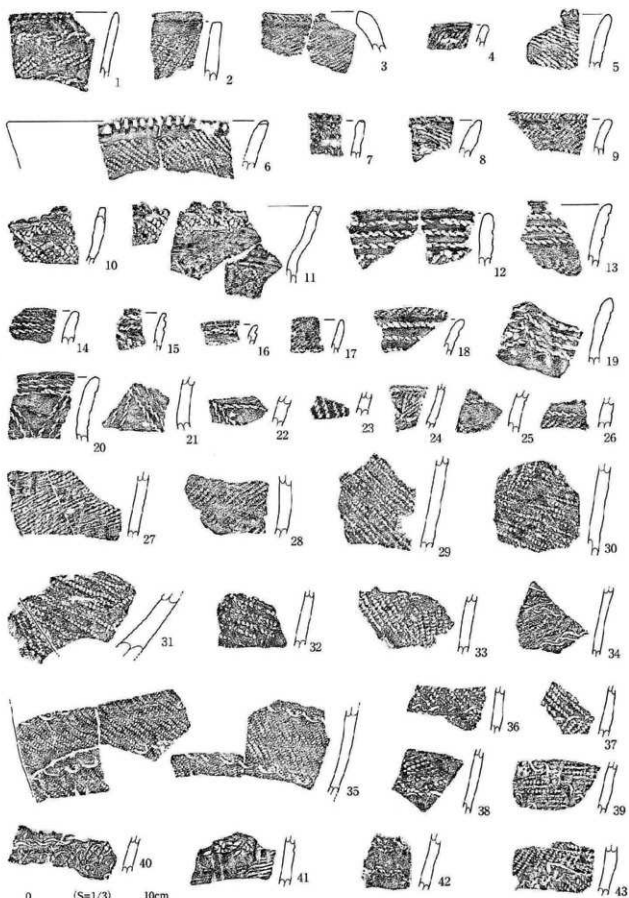
5類 その他、時期を特定する文様に乏しいが、中期に比定しうるもの。阿玉台式から加曾利E式にかけての土器群である。(46~50)



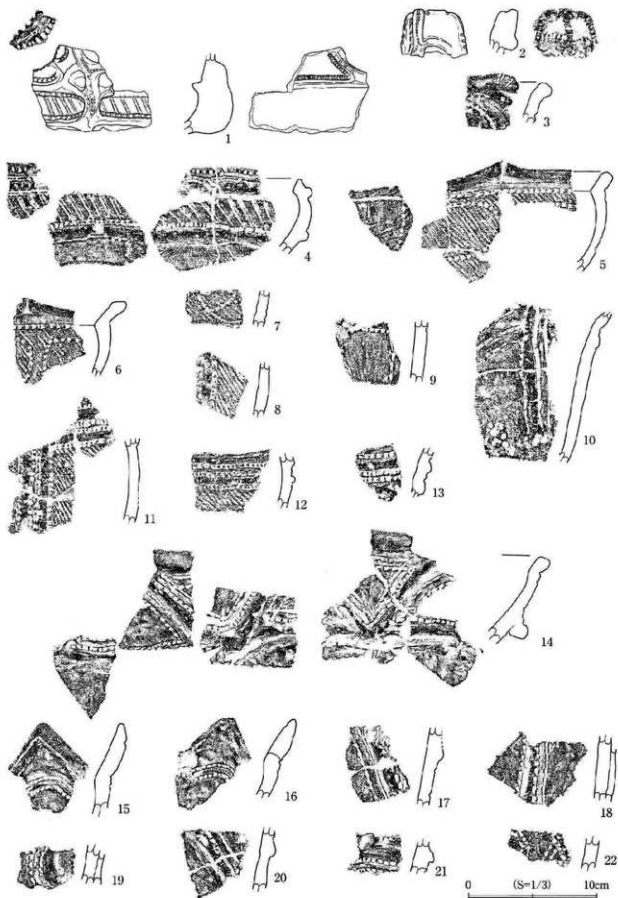
第69図 VI群土器

Ⅶ群土器底部 (第73図)

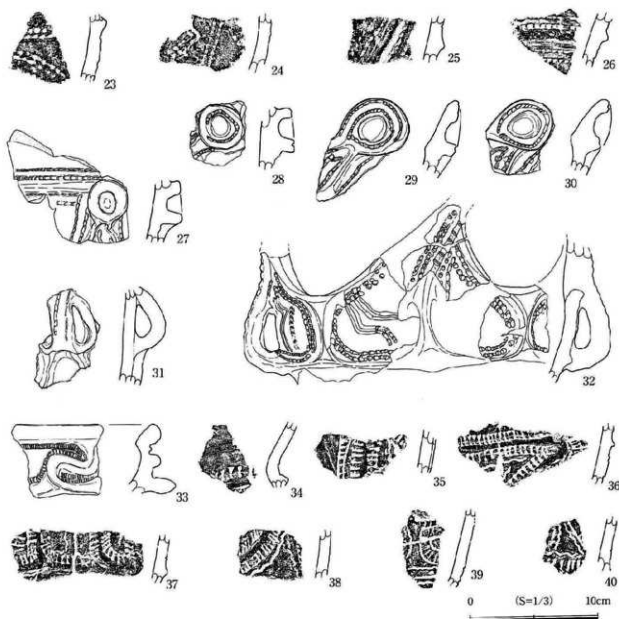
胎土に雲母を多量に含む。



第70图 VII群土器



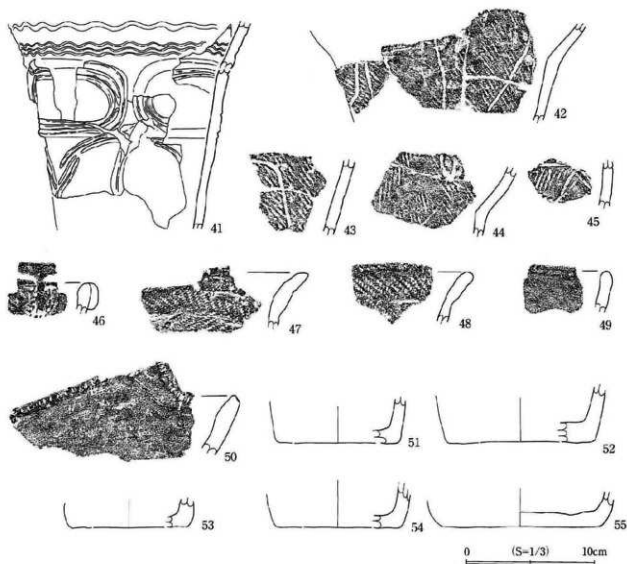
第71图 Ⅷ群土器(1)



第72図 VII群土器(2)

## 2. 土製品 (第74図)

1, 2は幅、径から同一個体の可能性がある。薄い板状を呈する。腕輪状土製品であろうか。3は外面が丁寧に磨かれており、底面が上げ底状にくぼんでいる。径の小さな円形の耳飾りであろうか。4は扶状耳飾りである。半分が欠損している。5～9は盤状の土製品である。5, 6は土器片を丁寧に丸く加工している。熱糸文系土器を素材とする。7, 8は条痕文系土器, 9は前期の土器を素材とする。7は方形を呈する。8, 9は土器片鏝の可能性もある。10～23は土器片鏝で、早期から中期にかけての土器片を素材としている。長軸方向の両端に切り込みを入れているものが多く、短軸方向に切り込みを入れているものは少ない。



第73図 Ⅱ群土器（3）

### 3. 石器

器種は平面および断面の形態的特徴や剥離の方法で分類した。定形性にかけるものが多いことから、便宜的に分類したものもある。ここに示したものは遺構に伴わなかったものが中心で、どの時期に属するかは判断できないものが多い。

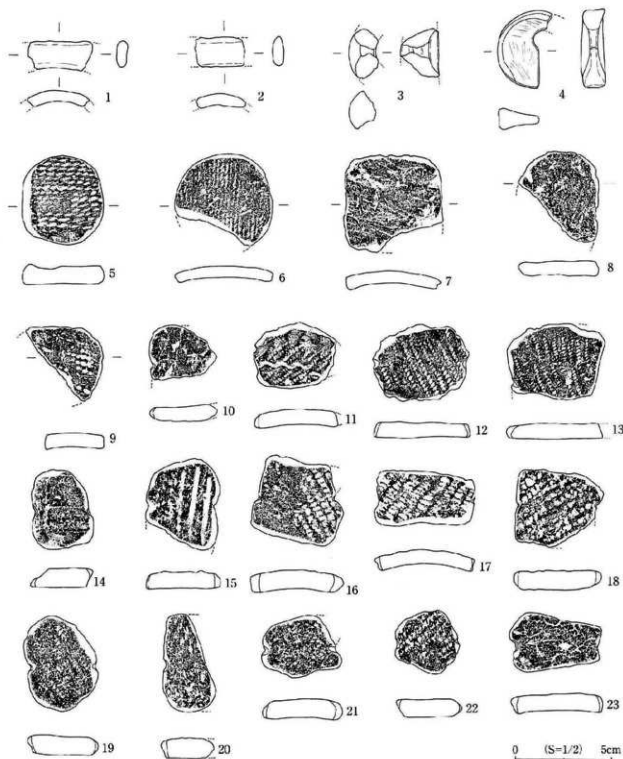
#### 旧石器時代の石器（第75図）

1, 2とも二次加工により先端部を作り出し、三角形、菱形状に成形している。他の石器群に比べて厚く、剥離は急角度である。

#### 石鏃・石鏃未製品（第76～78図）

1から30は製品として扱った。素材には黒曜石、チャートが多い。1～18は基部に挟りがないか度合い





第74図 土製品

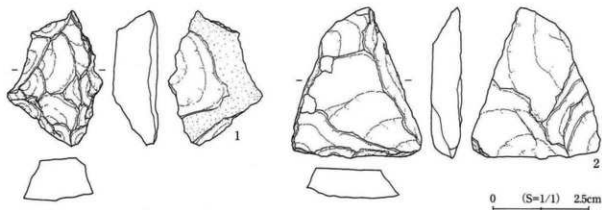
第4表 C1・C2区縄文時代土製品一覧

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

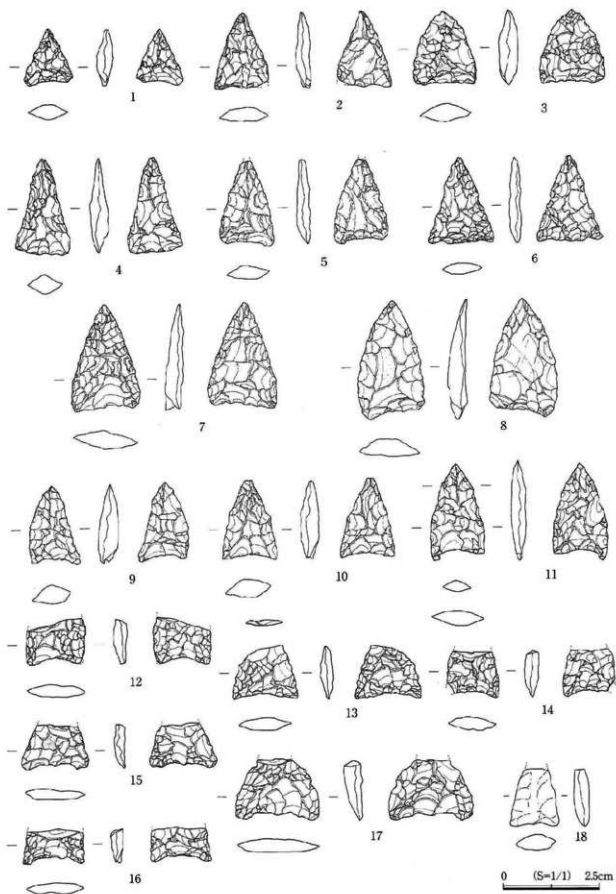
押図No.	種別	地区	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
第74図-1	胸輪状土製品	C2	表標	34	15	6	<3.6>	
第74図-2	胸輪状土製品	C2	SI-102	26	11	6	<3.1>	
第74図-3	耳飾	C2	5F94-20	<26>	<16>	20	<6.1>	
第74図-4	袂状耳飾	C2	5F95-16	42	(48)	12	11.4	
第74図-5	盤状土製品	C2	5F94-20	47	43	12	24.5	縹糸文系
第74図-6	盤状土製品	C2	5F94-20	49	51	9	<23.1>	縹糸文系
第74図-7	盤状土製品	C2	5F95-14	51	52	10	<27.5>	条痕文系
第74図-8	盤状土製品	C2	5F95-14	<48>	42	8	<14.6>	条痕文系
第74図-9	盤状土製品	C2	5F95-16	<40>	<41>	10	<12.1>	前期
第74図-10	土器片鏢	C2	SI-125	<30>	<36>	9	<8.2>	条痕文系
第74図-11	土器片鏢	C2	SI-110	35	<43>	10	<15.5>	前期末
第74図-12	土器片鏢	C2	5F95-8	41	51	9	21.4	前期末
第74図-13	土器片鏢	C2	5F95-1	40	51	9	<23.2>	前期末か
第74図-14	土器片鏢	C2	5F95-14	42	33	11	14.9	阿玉台式
第74図-15	土器片鏢	C2	5F95-14	<48>	40	10	<19.7>	阿玉台式
第74図-16	土器片鏢	C2	5F95-9	48	44	12	<27.5>	中期
第74図-17	土器片鏢	C2	5F95-18	30	53	11	16.1	中期
第74図-18	土器片鏢	C2	表標	41	47	11	<22.6>	中期
第74図-19	土器片鏢	C2	5F95-14	50	39	11	24.4	中期
第74図-20	土器片鏢	C2	5F95-14	52	28	11	<15.6>	中期
第74図-21	土器片鏢	C2	5F95-14	33	42	11	15.5	中期
第74図-22	土器片鏢	C2	SI-102	34	34	10	11.8	中期
第74図-23	土器片鏢	C2	5F95-14	31	48	10	16.6	中期

の小さいもので、19～28は袂りの度合いが大きいものである。主要剥離面を観察すると、横長の剥片を利用してのもの(2, 5, 8)と、縦長の剥片(19, 21)を利用してのものがある。19は形態が整えられておらず、未製品の可能性もあるが、先端部、基部が意図されていること、二次調整の剥離はいずれかの片面のみであるが、全ての側縁にわたって施されていることから完成品とした。21も一部片面にしか二次調整が施されていない。欠損した後に再調整を施しているものがある(9, 13, 27, 29)。

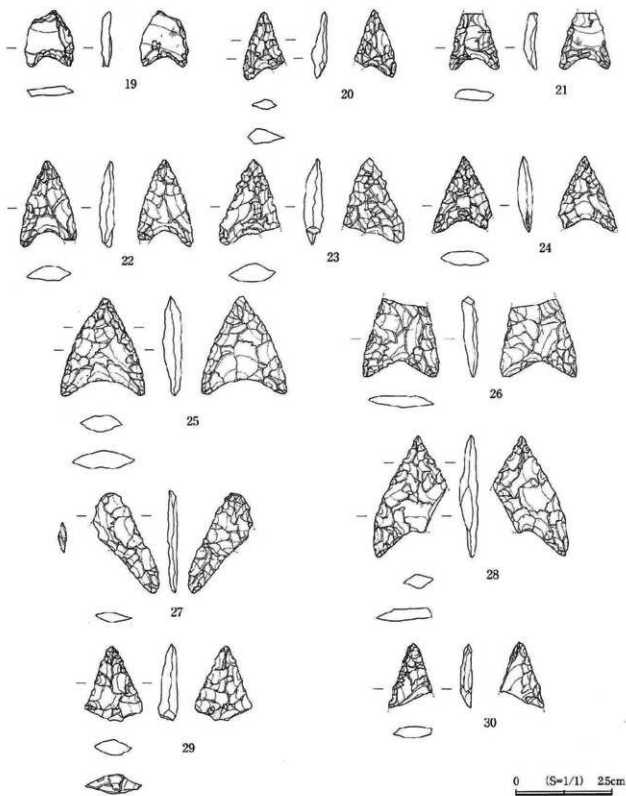
31～42は先端部が作り出されていること、二次調整を施して縁辺を尖らせていること、形態が三角形に近いことから未製品とした。しかし、37, 41などの厚い剥片については判断が難しい。



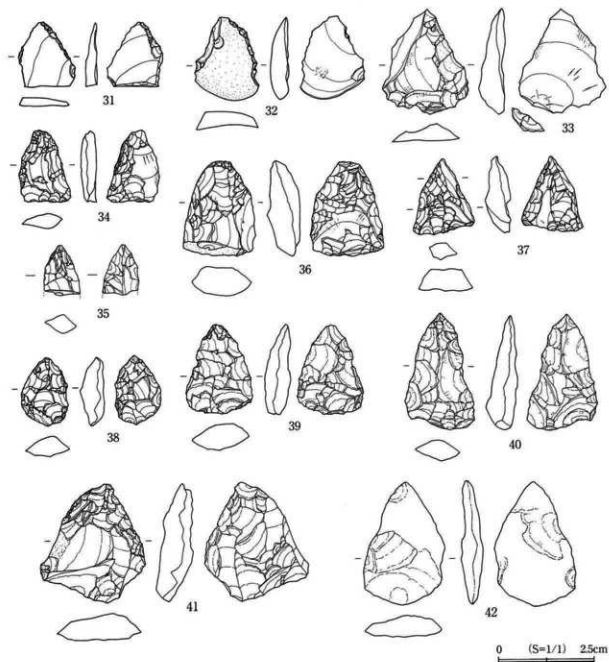
第75図 単独出土旧石器



第76図 石鏃 (1)



第77図 石鏃(2)

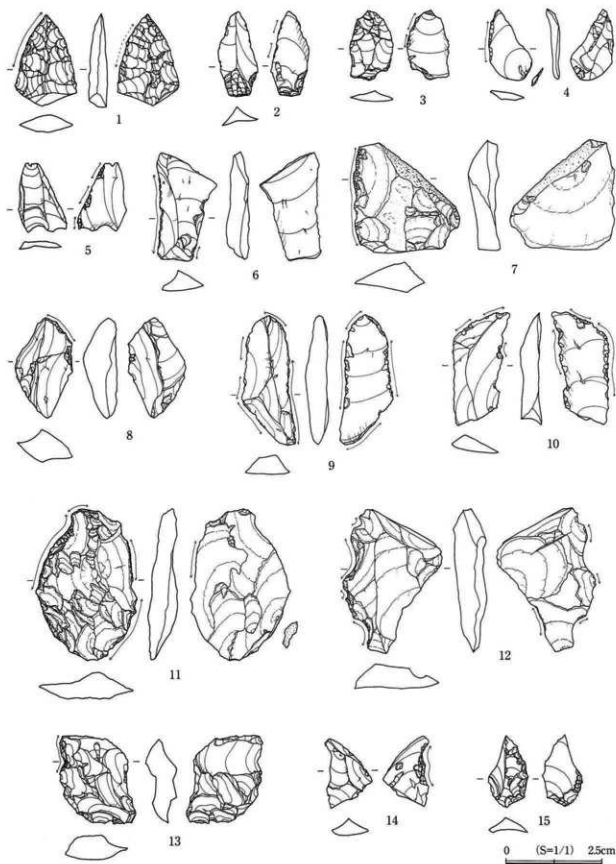


第78図 石鉄(3)未製品

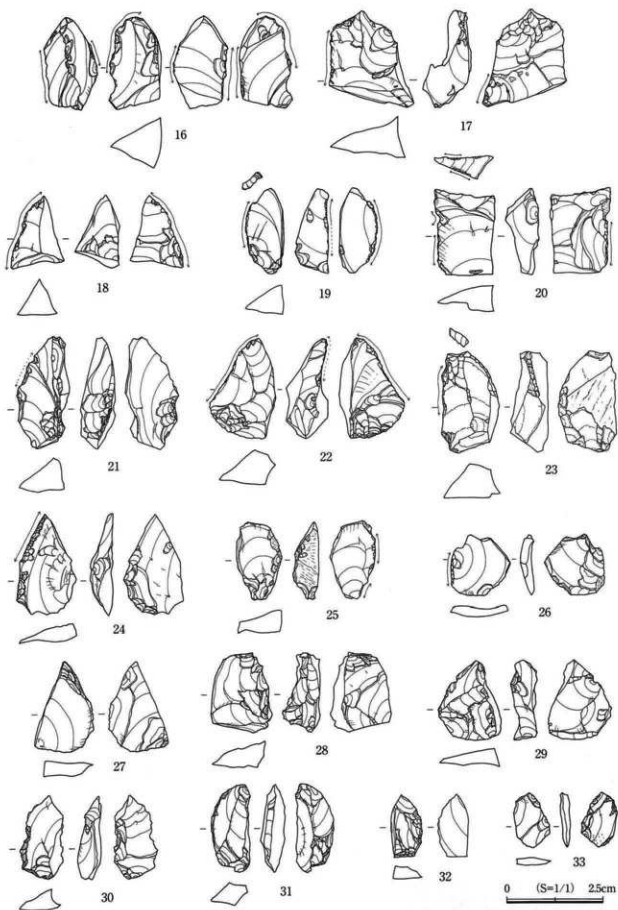
剥片石器 (第79~81図)

平面形態に規格性はないが、二次調整が施されているもの、あるいは微細剥離が観察できるものを扱った。二次調整は側縁全体に丁寧に施されているものは少なく、部分的あるいは局所的である。また、微細剥離との区別は難しいが、概ね剥離の幅が2mmを超え、整形の必要性によるものと判断できたものを二次調整とし、2mmを超えないものを微細剥離とした。微細剥離については、使用痕によるものかプランティングによるものか判断できなかったが、矢印で示した範囲は、石器の運動形態を反映していると思われる。

1~15, 34~37は左右両側縁が尖るもので、模式的に見ると、断面形態が菱形状ないしは鈍角三角形を呈したものである。微細剥離があるものは、その部分の反対面には確認できない場合が多い。つまり、あ

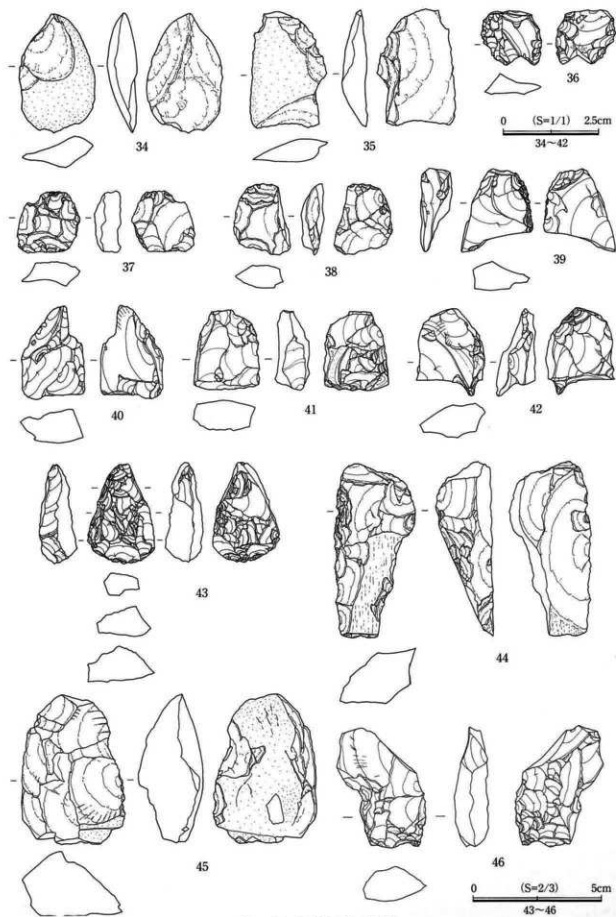


第79图 剥片石器 (1)

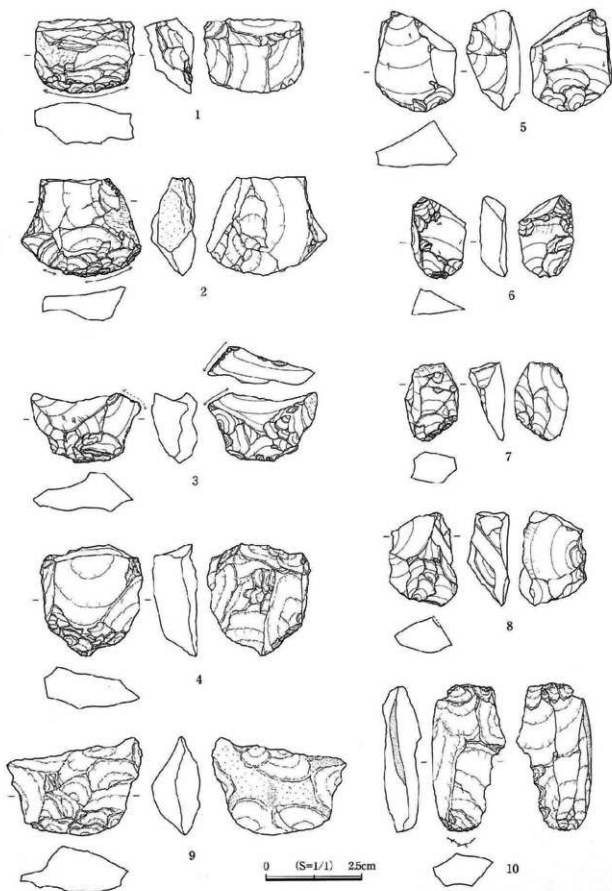


第80图 剥片石器 (2)

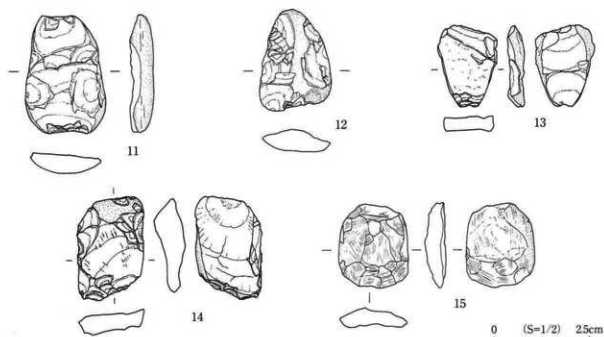




第81图 剥片石器 (3)



第82図 搔器・削器 (1)



第83図 掻器・削器(2)

る部分の片側面にのみ観察できる。1は本来尖頭器である。両面左側縁に微細剥離が観察できる。プランティングの可能性があるものの、再利用したものとして判断した。11~14は側縁に挟りが見られ、二次調整とともに微細剥離も観察でき、両者を厳密に区別しがたい。

16~33, 38~42は左右の側縁のうち、少なくとも片側は意図的に面を形成しているものである。断面形態は模式的にいうと鋭角三角形を呈するものである。微細剥離は両面とも同じ部分に見られるものが多い。27は二次調整の度合いは小さく、むしろ素材剥片としての性格が強であろうか。

43~46は細かい二次調整が施されているものである。

#### 掻器・削器(第82, 83図)

1~10は長方形ないしは台形で、側縁の一边に刃部状の二次調整が施されているものである。刃部の反対側縁には、9, 10を除いて面が形成される。機能的には剥片石器としたものもこれに属するが、形態的特徴から別に記載した。

平面形態から見ると、1~4, 9の幅が広いものと、5~8, 10の幅が狭いものとに分けられる。一方、刃部とその反対側縁との関係のみ断面形態からは、1~8と9, 10に分けられる。

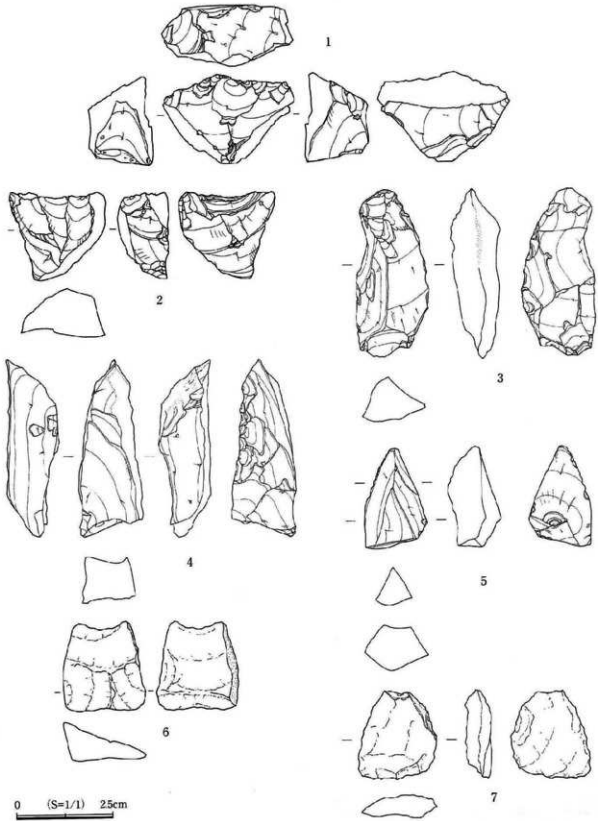
11~14は両極打法により得られた自然礫の剥片の一边に二次調整を施して刃部としたものである。

#### 石核・剥片(第84図)

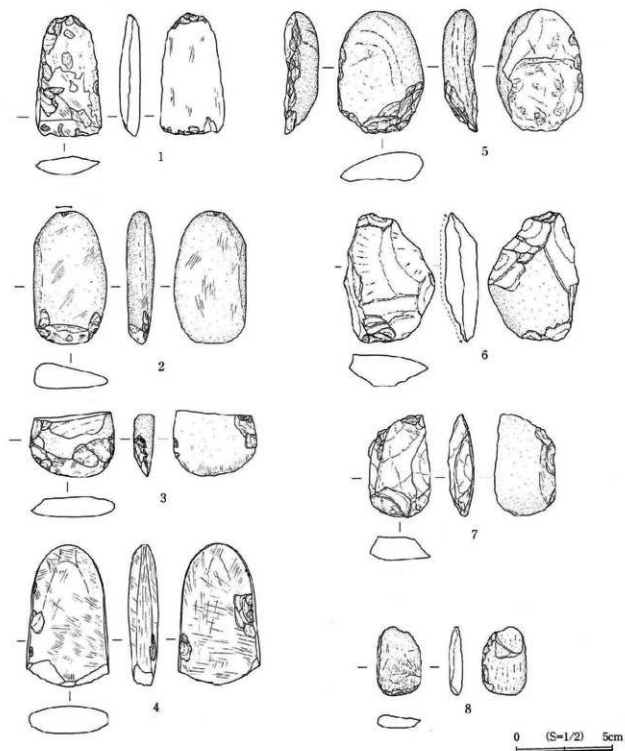
1, 2は石核, 3~7は石器素材となりそうな剥片である。

#### 磨製石斧(第85図)

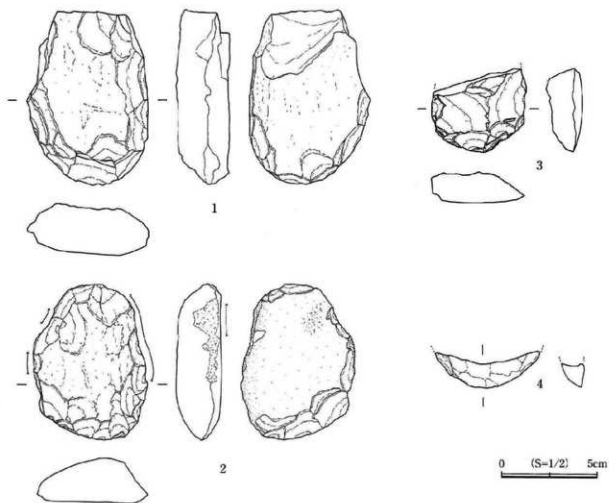
2, 3, 5~8は、早期に見られる礫石斧である。小型の円礫を選択し、刃部を粗い剥離によって作り出すものやさらに局所的な研磨を行って刃部としているものなどがある。4は定型的な磨製石斧で、前後半以降のものであろう。1は石材から判断して、石棒を研磨して刃部を作り出して再利用した可能性がある。中期であろうか。6, 7は剥離による整形後、わずかに摩滅している。未製品であろうか。



第84图 石核·剥片



第85圖 磨製石斧



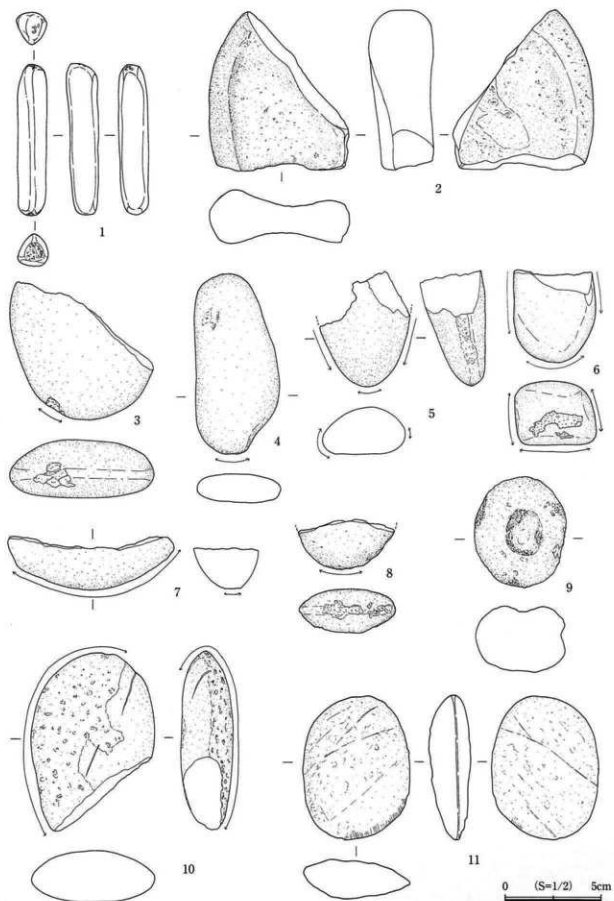
第86図 打製石斧

打製石斧 (第86図)

全体的に整形のための粗い剥離が施されている。2は割縁に敲打痕が見られる。4は剥離の後縁が摩擦している。

礫石器 (第87図)

1, 3~8は敲石である。長軸の両端に敲打痕を伴うもの、側縁にも敲打痕を伴うものなどがある。いずれも自然礫を加工することなくそのまま使用している。2は石皿である。9は凹石である。凹みや縁辺が燻けている。10は磨石である。11は扁平の凹礫の側縁に線状痕を伴う。礫石斧かもしれない。なお、1の素材は珪化木だが、この項に記載した。



第87图 礫石器



第5表 C1・C2区旧石器・縄文時代石器一覧

( )は推定値 &lt; &gt;は遺存値

種別No.	器種	地区	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	石材	備考
第75図-1	剥片	C2	5F95-16	36	25	12	10.0	玄武岩	二次加工あり
第75図-2	剥片	C2	SI-125	39	34	8	11.2	頁岩	二次加工あり。変成を受ける。
第76図-1	石鏃	C2	5F95-17	15	13	4	0.5	黒曜石	
第76図-2	石鏃	C2	5F95-13	20	14	4	1.0	チャート	ビント
第76図-3	石鏃	C2	表探	20	17	5	1.5	黒曜石	
第76図-4	石鏃	C2	SI-101	25	15	5	1.3	チャート	
第76図-5	石鏃	C2	5F95-17 (24)	14	4	1.1		玄武岩	
第76図-6	石鏃	C2	5F95-13	23	17	3	0.9	黒曜石	
第76図-7	石鏃	C2	5F95-7	28	18	5	1.9	チャート	
第76図-8	石鏃	C1	5F95-17	31	18	5	2.6	チャート	
第76図-9	石鏃	C2	5F95-17	21	14	5	1.2	黒曜石	左脚部欠損後再調整か
第76図-10	石鏃	C2	SI-140	21	14	5	1.4	玄武岩	
第76図-11	石鏃	C2	5F95-16	26	14	4	1.4	チャート	
第76図-12	石鏃	C2	5F95-12 <12>	15	3	<0.8>		黒曜石	
第76図-13	石鏃	C2	5F95-11 <14>	17	4	<0.7>		黒曜石	先端部欠損後再調整
第76図-14	石鏃	C2	5F95-12 <12>	14	4	<0.6>		黒曜石	
第76図-15	石鏃	C2	5F95-18 <12>	18	3	<0.8>		黒曜石	先端部欠損後再調整
第76図-16	石鏃	C2?	表探 <9>	16	3	<0.5>		黒曜石	
第76図-17	石鏃	C2	5F95-14 <16>	22	5	<1.5>		黒曜石	
第76図-18	石鏃	C2	表探 <15>	13	4	0.7		軟質砂岩	全体的に摩滅
第77図-19	石鏃	C2	5F95-19	15	13	3	0.6	黒曜石	
第77図-20	石鏃	C2	5F95-18	18 <11>	4	<0.5>		チャート	
第77図-21	石鏃	C2	5F95-17 <15>	13	4	<0.5>		黒曜石	
第77図-22	石鏃	C2	5F95-18	23	15	4	0.9	チャート	右脚部一部欠損
第77図-23	石鏃	C2	5F95-15	23 <16>	5	<1.3>		黒曜石	
第77図-24	石鏃	C2	表探	21 <15>	4	<0.8>		黒曜石	長さは推定
第77図-25	石鏃	C2	5F95-9	26	22	5	2.0	チャート	
第77図-26	石鏃	C2	5F94-15 <21>	20	5	<1.5>		チャート	
第77図-27	石鏃	C1	5F85-25	27 <17>	3	<0.9>		チャート	脚部欠損後再調整か
第77図-28	石鏃	C2	5F95-16	32 <20>	5	<2.0>		チャート	
第77図-29	石鏃	C2	5F95-17 <19>	<15>	5	<1.0>		黒曜石	欠損後再調整
第77図-30	石鏃	C2	5F95-8 <17>	<12>	3	<0.4>		黒曜石	欠損後再調整
第78図-31	石鏃未製品	C2	5F95-13	17	14	3	0.7	チャート	
第78図-32	石鏃未製品	C2	SI-137	22	17	5	1.6	チャート	
第78図-33	石鏃未製品	C2	5F95-18	28	23	7	2.9	チャート	
第78図-34	石鏃未製品	C2	SI-105	19	14	4	1.0	黒曜石	
第78図-35	石鏃未製品	C2	5F95-8 <13>	<10>	<6>	<0.7>		黒曜石	製作途中で失敗
第78図-36	石鏃未製品	C2	SI-136	25	19	9	4.2	黒曜石	
第78図-37	石鏃未製品	C2	5F95-12	20	16	7	1.4	黒曜石	
第78図-38	石鏃未製品	C2	5F95-17	18	12	6	1.3	黒曜石	
第78図-39	石鏃未製品	C2	SI-126	24	18	7	2.3	チャート	
第78図-40	石鏃未製品	C2	5F94-20	30	18	8	3.4	玄武岩	
第78図-41	石鏃未製品	C2	5F95-13	32	28	10	6.3	チャート	
第78図-42	石鏃未製品	C2	5F95-12	32	21	6	3.7	ホルンフェルス	
第79図-1	剥片石器	C2	5F95-16	25	16	5	<1.6>	黒曜石	微細剥離。石鏃基部欠損後再利用
第79図-2	剥片石器	C2	5F95-14	23	10	5	0.7	黒曜石	微細剥離。凸レンズ型片側
第79図-3	剥片石器	C2	SI-105	19	12	3	0.6	黒曜石	凸レンズ型片側
第79図-4	剥片石器	C2	SI-126	14	12	4	0.3	黒曜石	微細剥離。凸レンズ型片側剥離
第79図-5	剥片石器	C2	FP-14, 15	18	13	2	0.6	黒曜石	凸レンズ型片側
第79図-6	剥片石器	C2	5F95-11	28	16	6	1.6	黒曜石	凸レンズ型片側剥離
第79図-7	剥片石器	C2	5F95-11	30	28	8	5.5	チャート	凸レンズ型片側剥離
第79図-8	剥片石器	C2	5F95-12	27	15	9	2.3	黒曜石	凸レンズ型片側剥離
第79図-9	剥片石器	C2	5F95-13	34	14	6	2.2	黒曜石	凸レンズ型片側剥離
第79図-10	剥片石器	C2	SI-126	30	15	6	1.6	黒曜石	凸レンズ型片側+両側剥離
第79図-11	剥片石器	C2	SI-125	60	40	12	22.1	チャート	微細剥離。凸レンズ型片側+両側剥離

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

採回No.	器種	地区	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	石材	備考
第79図-12	剥片石器	C2	5F95-13	38	26	9	5.8	チャート	微細割離, 凸レンズ型片側・両側割離
第79図-13	剥片石器	C1	SI-154	22	20	7	3.4	黒曜石	微細割離, 凸レンズ型片側
第79図-14	剥片石器	C2	5F95-9	19	12	5	0.6	黒曜石	微細割離, 凸レンズ型片側割離
第79図-15	剥片石器	C2	5F95-12	19	10	4	0.5	黒曜石	側縁に二次調整
第80図-16	剥片石器	C2	5F95-8	25	14	14	3.8	黒曜石	微細割離, 三角型両側割離
第80図-17	剥片石器	C2	5F95-16	26	22	13	4.2	黒曜石	微細割離, 三角型片側割離
第80図-18	剥片石器	C2	SI-140	19	14	12	1.6	黒曜石	微細割離, 三角型両側割離
第80図-19	剥片石器	C2	SI-126	23	10	9	1.6	黒曜石	微細割離, 三角型両側割離
第80図-20	剥片石器	C2	5F95-17	23	15	9	2.5	黒曜石	微細割離, 三角型両側割離
第80図-21	剥片石器	C2	5F95-14	30	14	9	2.5	黒曜石	左側面の左右に刃つがし様二次調整
第80図-22	剥片石器	C2	SI-126	27	17	11	3.3	黒曜石	微細割離, 三角型両側割離
第80図-23	剥片石器	C2	5F94-20	27	15	10	3.9	チャート	三角型片側割離
第80図-24	剥片石器	C2	5F95-16	27	16	6	1.3	黒曜石	やや大きめの微細割離
第80図-25	剥片石器	C2	5F95-13	20	12	7	1.5	黒曜石	三角型片側割離
第80図-26	剥片石器	C2	5F95-18	16	16	4	0.7	黒曜石	三角型片側割離
第80図-27	剥片石器	C2	5F95-11	24	16	4	1.2	黒曜石	
第80図-28	剥片石器	C2	5F95-17	21	16	10	2.8	黒曜石	右側縁から二次調整
第80図-29	剥片石器	C2	5F95-18	21	17	7	2.0	黒曜石	右側面が最後の割離
第80図-30	剥片石器	C2	5F95-16	22	12	6	1.0	黒曜石	左側縁に二次調整
第80図-31	剥片石器	C2	5F95-14	23	10	7	1.2	黒曜石	右側面が最後の割離
第80図-32	剥片石器	C2	5F95-13	17	8	3	0.5	黒曜石	側縁に二次調整, 左側面が最後の割離
第80図-33	剥片石器	C2	5F95-18	15	9	3	0.3	黒曜石	
第81図-34	剥片石器	C2	5F95-12	32	20	8	4.2	玄武岩	
第81図-35	剥片石器	C2	5F95-16	30	20	7	3.8	玄武岩	
第81図-36	剥片石器	C2	5F95-11	14	11	6	1.3	黒曜石	微細割離
第81図-37	剥片石器	C2	5F95-19	16	17	7	1.7	チャート	
第81図-38	剥片石器	C2	SI-140	19	15	6	1.5	チャート	
第81図-39	剥片石器	C2	SI-143	22	14	8	2.6	黒曜石	左側面が最後の割離
第81図-40	剥片石器	C2	SI-126	25	17	9	3.4	黒曜石	左側縁に二次調整
第81図-41	剥片石器	C2	5F95-12	21	18	9	3.6	黒曜石	
第81図-42	剥片石器	C2	5F95-13	23	18	11	3.2	黒曜石	右側縁から二次調整
第81図-43	剥片石器	C2	5F95-12	40	22	15	12.9	黒曜石	形態が二等辺三角形
第81図-44	剥片石器	C2	5F95-13	69	32	22	39.3	チャート	
第81図-45	剥片石器	C2	5F94-20	59	41	25	42.8	泥岩	
第81図-46	剥片石器	C2	5F95-11	32	23	9	5.6	黒曜石	
第82図-1	撻器・削器	C2	5F95-13	20	26	14	7.6	チャート	刃部片側に微細割離
第82図-2	撻器・削器	C2	SI-129	26	32	12	10.2	チャート	刃部片側に微細割離
第82図-3	撻器・削器	C2	SI-126	18	29	12	4.6	黒曜石	上端に微細割離, 両側割離
第82図-4	撻器・削器	C2	5F94-15	30	23	12	9.4	玄武岩	下端に二次調整, 縁の可能性
第82図-5	撻器・削器	C2	5F95-14	27	23	14	6.8	黒曜石	上端は割離後, 未調整
第82図-6	撻器・削器	C2	5F94-20	22	15	7	2.1	黒曜石	上端, 下端に二次調整
第82図-7	撻器・削器	C2	SI-105	21	14	10	2.4	黒曜石	下端に二次調整
第82図-8	撻器・削器	C2	5F95-16	25	18	11	4.6	黒曜石	下端に二次調整
第82図-9	撻器・削器	C2	5F95-16	26	35	13	8.7	安山岩	下端に二次調整
第82図-10	撻器・削器	C2	5F95-16	38	19	10	6.4	玄武岩	下端に二次調整
第83図-11	撻器・削器	C2	5F95-12	63	43	13	43.1	ホルンフェルス	下端に二次調整
第83図-12	撻器・削器	C2	5F95-13	54	36	13	28.6	安山岩	
第83図-13	撻器・削器	C2	SI-126	43	31	9	13.7	珪質泥岩	下端に二次調整
第83図-14	撻器・削器	C2	5F95-17	55	35	16	34.5	玄武岩	下端に二次調整
第83図-15	撻器・削器	C2	5F95-11	45	37	11	19.6	泥岩	下端に二次調整
第84図-1	石核	C2	5F95-12	24	35	17	11.6	黒曜石	
第84図-2	石核	C2	5F95-12	24	25	14	6.3	黒曜石	
第84図-3	素材剥片	C2	SI-125	45	19	13	8.5	黒曜石	
第84図-4	素材剥片	C2	5F95-16	47	17	14	9.5	黒曜石	
第84図-5	素材剥片	C2	5F95-14	26	16	14	4.2	黒曜石	

( )は推定値 &lt; &gt;は遺存値

博洞No.	器種	地区	出土地点	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量(g)	石材	備 考
第84図-6	素材剥片	C2	SI-102	23	22	10	4.2	ホルンフェルス	両極打法
第84図-7	素材剥片	C2	5F95-13	23	21	7	3.4	ホルンフェルス	
第85図-1	磨製石斧	C2	5F94-20	64	34	11	32.3	緑泥片岩	石棒を再加工しているか
第85図-2	磨斧	C2	5F95-12	70	38	16	51.4	砂岩	早期
第85図-3	磨斧	C2	5F95-17	<33>	44	11	<24.3>	チャート	早期
第85図-4	磨製石斧	C2	5F95-16	<74>	43	16	<93.1>	砂岩	
第85図-5	磨斧	C2	5F95-11	65	45	18	66.3	頁岩	早期
第85図-6	磨製石斧	C2	5F95-17	68	48	17	55.0	砂岩	未製品か
第85図-7	磨製石斧	C2	5F95-18	<54>	32	14	29	頁岩	未製品か
第85図-8	磨製石斧	C2	5F95-3	36	23	7	8	玄武岩	
第86図-1	打製石斧	C2	5F95-12	92	64	28	223.3	緑泥片岩	
第86図-2	打製石斧	C2	5F95-16	82	60	24	163.2	花崗岩	
第86図-3	打製石斧	C2	5F95-17	45	50	19	45.6	玄武岩	
第86図-4	打製石斧	C2	5F95-12	<19>	<55>	<12>	9.5	玄武岩	
第87図-1	敲石	C2	5F95-13	80	16	17	28.4	珪化木	ハンマーか
第87図-2	石皿	C2	5F95-11	<84>	<74>	34	<159.8>	安山岩	
第87図-3	敲石	C2	5F95-13	<73>	<76>	31	185.5	花崗岩	
第87図-4	敲石	C2	5F95-16	96	44	16	102.2	安山岩	
第87図-5	敲石	C1	5F85-24	<61>	<48>	<33>	84.2	珪質砂岩	
第87図-6	敲石	C2	SI-112	<49>	43	34	97.6	砂岩	
第87図-7	敲石	C2	5F94-20	<29>	<87>	<34>	76	輝石安山岩	
第87図-8	敲石	C2	表探	<27>	<51>	<23>	32	輝石安山岩	
第87図-9	凹石	C2	5F95-17	53	48	35	71.9	安山岩	中央部窪む、付着
第87図-10	磨石	C2	5F95-13	<94>	64	27	200.4	ホルンフェルス	
第87図-11	磨石?	C2	5F95-16	76	56	22	121.7	玄武岩か	ほとんど加工しない磨斧の可能性あり

## 土層説明

## 1号伊穴群

1. 暗褐色土。緩よく締まる。
2. 褐色土。ロームを含み、焼土粒子が少し混じる。よく締まる。
3. 褐色土。焼土粒子、ロームを含む。よく締まる。
4. 暗黄褐色土。ロームが多く混じる。よく締まる。

## 2号伊穴群

1. 2. 後者の縦立柱建物の直上。
3. 褐色土。ロームが少し混じる。
- 4-6. 褐色土。ロームが多く混じる。
- 7-9. 暗黄褐色土。ロームが多く混じる。

## FP-6

1. 暗褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
2. 暗褐色土。ロームが混じり、締まる。
3. 暗赤褐色土。やや軟質。焼土が混じる。

## FP-7

1. 2. 黒褐色土。ローム。焼土が混じる。
3. 暗褐色土。ローム。焼土が混じり、締まる。
4. 暗褐色土。ロームが混じり、締まる。

## FP-9

1. 黒褐色土。ローム。焼土が混じり、締まる。
2. 暗褐色土。ローム。焼土が混じり、締まる。
3. 暗赤褐色土。焼土が混じり、締まる。

## FP-12

1. 黒褐色土。焼土が混じり、やや締まる。
2. 暗赤褐色土。焼土が多く混じり、やや締まる。
3. 黒褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
4. 暗褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
5. 暗褐色土。焼土が少し混じり、締まる。

## FP-16

1. 黒褐色土。焼土が混じり、締まる。
2. 暗褐色土。ロームが少し混じり、締まる。
3. 暗褐色土。焼土が混じり、締まる。

## FP-13

1. 黒褐色土。少し混じる。
2. 暗褐色土。ロームが少し混じり、やや締まる。
3. 暗褐色土。焼土が少し混じり、やや締まる。
4. 暗褐色土。ロームが混じり、締まる。
5. 暗赤褐色土。焼土が混じり、やや締まる。
6. 暗褐色土。焼土が混じる。

## 1号塚とし穴

1. 黒褐色土。ロームを少量含み、少し軟らかい。
2. 暗褐色土。ロームを少量含み、少し締まる。
3. 暗褐色土。ロームを含み、締まる。
4. 暗褐色土。ロームを多量含み、締まる。
5. 暗褐色土。粘質土を含み、硬く締まる。
6. 暗褐色土。ローム小粒を少量含み、締まる。

## 2号塚とし穴

1. 黒褐色土。ローム、粘土粒を僅かに含み、少し締まる。
2. 黒褐色土。混入物がなく、締まる。
3. 暗褐色土。ロームを含み、締まる。
4. 暗褐色土。ロームを少量含み、少し締まる。
5. 褐色土。ロームを多量含み、少し軟らかい。
6. 暗褐色土。ロームを多量含み、軟らかい。
7. 暗褐色土。ロームを多量含み、軟らかい。
8. 黒色土。ロームを少量含み、軟らかい。

## 3号塚とし穴

1. 黒褐色土。ロームと粘土粒を少し含み、締まる。

2. 暗褐色土。ロームを僅かに含み、締まる。
3. 暗褐色土。ロームを僅かに含み、締まる。
4. 暗褐色土。ロームを少量含み、締まる。
5. 暗褐色土。ロームを少量含み、締まる。
6. 暗褐色土。ロームを多量含み、締まる。
7. 褐色土。ロームを多量含み、締まる。
8. 黄褐色土。ロームブロックを多量含み、締まる。
9. 褐色土。ロームブロックを多量に含み、硬く締まる。
10. 暗褐色土。ロームブロックを含み、締まる。
11. 褐色土。ロームを含み、粘質である。
12. 黄褐色土。ロームブロックを多量含み、締まる。
13. 暗褐色土。ロームを含み、締まる。
14. 褐色土。ロームを多く含み、締まる。
15. 暗褐色土。ロームを多く含み、粘質で締まる。
16. 暗褐色土。ロームを少量含み、硬く締まる。
17. 褐色土。ロームを含み、粘質で締まる。
18. 暗褐色土。ロームを少し含み、粘質で締まる。

## 5号塚とし穴

1. 黒色土。ロームを少量含み、少し締まる。
2. 黒褐色土。ロームを多量含み、少し締まる。
3. 褐色土。ロームを含み、締まる。
4. 暗褐色土。ロームを含み、少し締まる。
5. 褐色土。ロームを含み、少し締まる。
6. 黄褐色土。ロームを含み、締まる。
7. 暗褐色土。ロームを含み、締まる。
8. 褐色土。ほとんどローム土で、締まる。
9. 黄褐色土。ほとんどローム土で、粘質で締まる。
10. 褐色土。ほとんどローム土で、粘質で締まる。

### 第3章 C3区の調査

C3区は台地の西側斜面に位置し、標高が20m～21mの平坦面である(第88図)。この平坦面は中世および近世に斜面を大規模に掘削して造成した整地面であることが、調査の結果判明した。南北に長い整地面は、大きく2つの区画からなっている。遺構の分布状況から、北側の第1区画は中世の段階で、また南側の第2区画が近世の段階に造成されたこととみえ、本来の地形は、西側に向かって緩やかな傾斜面であったと考えられる。検出された古代の竪穴住居跡は、造成が少なかった調査区の斜面側縁辺でのみ部分的に検出した。遺構の特徴は、第1区画が中世の建物跡と土坑群、第2区画が近世の水利施設群としてまとめられる。その他、両区画間の標高が高い部分を第3区画とした。

#### 第1節 縄文時代

遺構は落とし穴1基を検出したにすぎない。中世以降に台地整形が行われているためだけでなく、本来的に縄文時代の生活の痕跡が希薄であったことによると考えられる。

##### 1. 遺構

###### SK-241 (第89図)

5F74-17、調査区の西側縁辺で検出した。平面形態は径が約2.0mの円形で、深さが2.4mの落とし穴である。谷側の壁面はやや勾配が緩やかである。遺物は縄文土器が2点出土した。1は口縁が外反する器形で、口唇部に棒状工具で刻みが施される。器面には節のない縄文が施文される。胎土には粒径の大きな砂礫が多く、金雲母も含まれる。前期末葉に相当する。2は列点が施された胴部片で、砂礫が含まれる。前期後半であろう。

##### 2. 遺物 (第90図)

遺物量は少なく、縄文土器がわずかに出土した。1、2は燃糸文系土器である。1は口唇部があまり肥厚せず、燃糸の間隔も疎らである。稲荷台式であろう。2は摩擦が著しい。3は無文で、口唇部のきざみは太い棒状工具によっている。田戸上層式ないしは子母口式であろう。4～7は条痕文系であろう。8～10は羽状縄文系である。11、12は前期後半であろう。14は中期加曾利E式であろう。13は縄文の節が小さく、弥生土器の可能性もある。

#### 第2節 古墳時代から平安時代

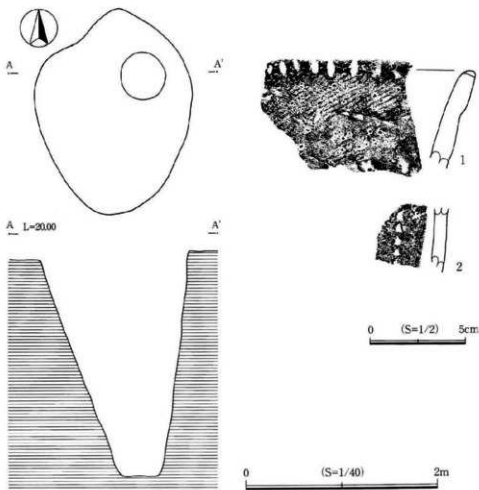
竪穴住居跡と土坑が調査区の西側縁辺で検出されている。竪穴住居跡は4軒検出したが、台地整形によって床面近くまで削平されているものもあり、遺存状況は良好でない。土坑は1基検出した。

第6表 C3区 竪穴住居跡計測表

遺構番号	時期	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SI-200	9～10世紀	5F74-22	N-43°-W	<4.5>	<3.2>	0.1
SI-201	9～10世紀	5F74-17	N-44°-W	3.7	3.3	0.4
SI-202	8世紀後半	5F73-15	N-91°-W	6.0	5.1	0.1
SI-203	9世紀後半	5F64-13	N-0°	2.6	2.9	0.8

<>は遺存値





第89図 落とし穴 (SK241) 実測図及び出土遺物

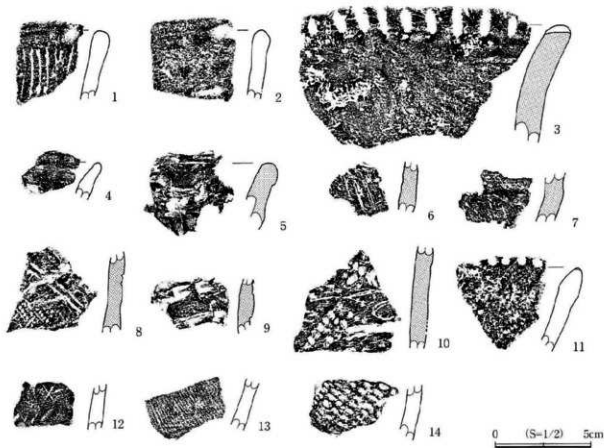
### 1. 竪穴住居跡

#### SI-200 (第91図)

5F74-22に位置する。壁、床はほとんど消失しており、周溝と床面の一部、4基の支柱穴のみが遺存している。明らかな被熱痕跡は検出できなかったが、北東床面に若干の焼土が分布していたことから、北東壁に竈が設置されていたと思われる。柱穴は台形状に配列され、西側の2つのビットの方が東側のビットに比べて20cmほど深く掘り込まれている。覆土中に炭化物が比較的多く混じていたことから、焼失した可能性もあろう。図化できる遺物は出土していない。

#### SI-201 (第91図)

5F74-17に位置する。南西側の壁は消失している。支柱穴が4基、入口施設に相当するビットを1基検出した。柱材の抜き取りにより、柱穴は中位で段差を有している。竪穴中央部で硬化面を確認することができたが、周溝は検出することができなかった。北東側の床面に分布していた焼土や構築材の存在から、北東壁に竈が付設されていた可能性があるが、煙道部は竪穴壁から外側に張り出していない。覆土中に焼土や炭化物が顕著に分布していたことから、焼失した可能性が高い。遺物は少なく、土器は小破片のため時期の判断ができない。礫石が1点出土している。



第90図 C3区出土縄文土器

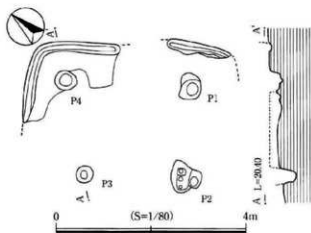
SI-202 (第92図)

5F73-15に位置する。南北の両壁及び床面の一部が消失しており、東西側も周溝は確認することができたが、壁の立ち上がりは検出することができなかった。4基の柱穴で、柱の接地痕跡を確認することができた。柱はP4が直接掘り方底面に、その他は埋土中に接地している。また、P2とP4で二つの掘り方が認められたことから、建て替えの可能性がある。竈は右袖のみ遺存しており、左袖はその基底部の痕跡が確認できたにすぎない。遺物は少なく、土師器坏と甕を図示した。

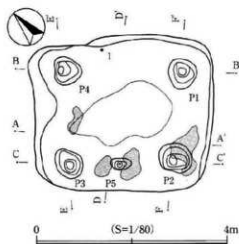
SI-203 (第93図)

5F64-13に位置する。北側の第1区画の、台地整形による平場よりも少し標高の下がった地点で検出した。他の竪穴住居跡とは離れている。東側の約半分が遺存している。南東側の壁は不明瞭で、あるいはもう少し延びる可能性がある。周溝や柱穴は検出できなかった。竈は竪穴外への張り出しが強く、底面は竪穴床面より高い位置にある。竈材は遺存しておらず、両脇の竪穴壁が内側にすぼまっている。内壁はよく焼けている。南東側では炭化物が分布していた。遺物は、竈内で坏、甕がまとも出土した。甕の破片が竈の壁面に貼りつくように出土した点特徴である。

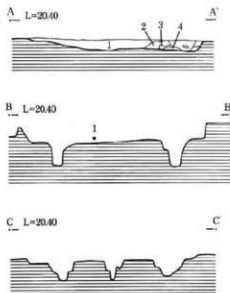




SI-200

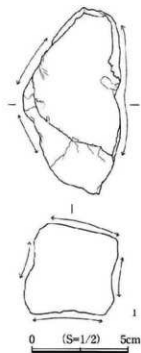


SI-201

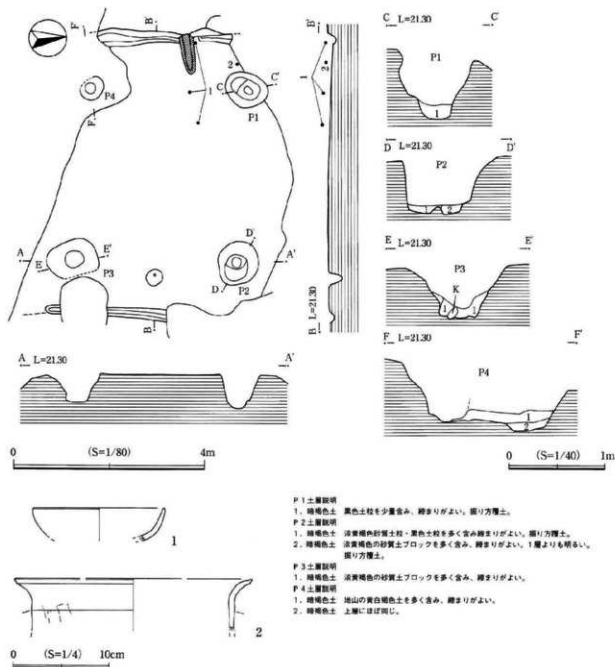


SI-201 土層説明

1. 暗褐色土 黄白色砂質土を少量、焼土粒を僅かに含む。
2. 暗褐色土 黄白色砂質土を多量に含む。僅かに焼土ブロック(小)を含む。
3. 暗赤褐色土 焼土・焼土ブロックを多く含む。
4. 暗褐色土 黄白色砂質土を同様に少量含む。やや粘性がある。多量腐土。
5. 暗褐色土 焼土ブロック(黄褐色砂質土)を多く含む。
6. 暗褐色土 焼土ブロックを僅かに含む。
7. 黄白色土 黄白砂を同様に多量に含む。
8. 暗褐色土 1層よりも灰色味あり。また粘性もあり。
9. 暗褐色土 焼土ブロック(30mm-40mm)を少量含む。黄が混じったような黄白色土を同様に含む。表面腐土の層。



第91図 SI-200, 201実測図及び出土遺物

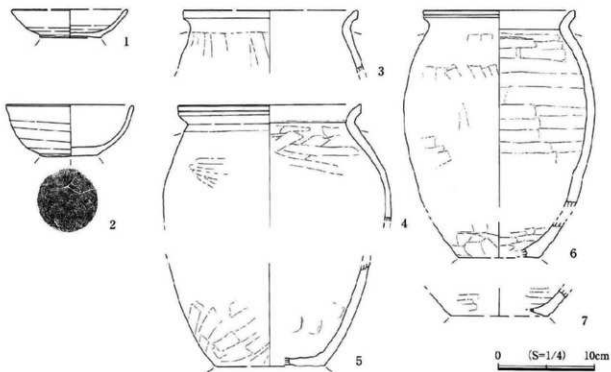
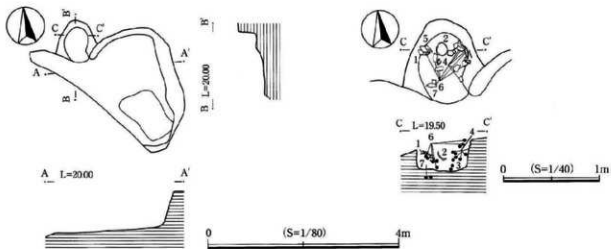


第92図 SI-202実測図及び出土遺物

## 2. 土坑

### SK-234 (第94図)

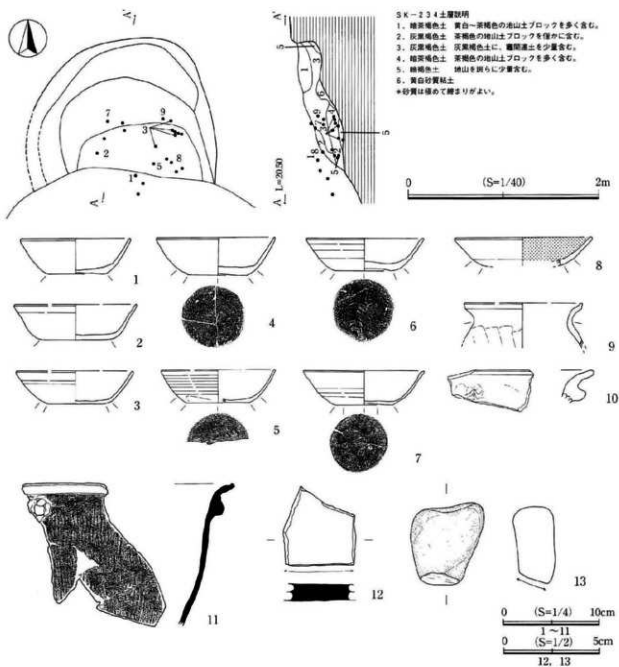
5F74-16に位置する。径が約2mの円形ないしは楕円形の土坑である。南側は消失している。深さは最大0.5m, 最小0.1mを測り、底面は平らでなく段差を有する。土坑中央で遺物が集中して出土しているが、その高さに違いがある。土師器の坏が主体的に、その他甕や甎の破片、砥石が出土している。



第93図 SI-203実測図及び出土遺物

### 3. 遺構外の出土遺物 (第95図)

1は古墳前期の甕であろう。底面に木葉痕を伴う。2は線刻を伴う土師器の坏底部である。3は須恵器の甕の口縁部で櫛描文を伴う。4は須恵器の甕で体部はタタキ、底面近くはヘラケズリである。5は須恵器破片を再利用した砥石である。6は土玉。7は管状の土製品である。8は紡錘車の未製品であろうか。中心部には未穿孔の穴があり、反対面には溝状の窪みがある。縁辺は丁寧に研磨されている。

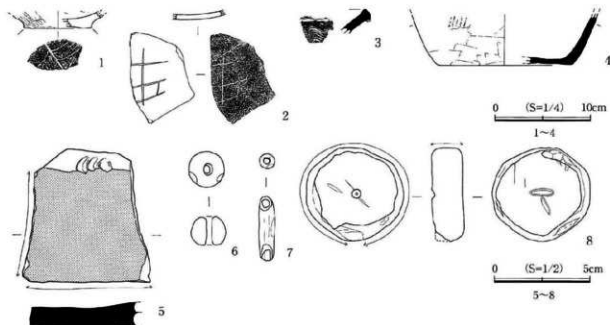


第94図 土坑 (SK-234) 実測図及び出土遺物

### 第3節 中世

C3区は、南北方向に長い調査区である。ちょうど三日月形の平坦部が南北に連なったような形態で、大きく北側の第1区画、南側の第2区画に分けた。そして両区画の接点で、標高の幾分高い平坦面を第3区画と呼称する。中世の遺構は、第1区画を中心に分布するが、この区画の中央部分には溝 (SD-214) が構築され、南北にさらに分断されている。このSD-214の北側部分を1A区、南側部分を1B区と呼称する。遺構には掘立柱建物跡10棟、地下式坑10基、土坑10基、溝6条を検出した。特に1A区での検出数が多い。

土坑 (SK, SX) のうち、性格が判断できたものには地下式坑、水利土坑がある。地下式坑は1A区で



第95図 遺構外出土遺物

局所的に検出した。また、地下式坑として報告するが、平面形態は類似するものの、竪坑と主室が構造上や異なる土坑 (SK-238) が第3区画でも見つっている。水利土坑 (SK-248・253) としたものは、溝と接続していることから何らかの水利に関連した施設と判断した。この他、性格は不明だが、台地斜面に横穴を掘削した土坑を検出した。いわゆる横穴墓とは規模や構造が異なっている。次第で述べる横井戸のように湧水もない。やぐらあるいはSX-204Aのように祠のように使われていたものだろうか。

溝 (SD) は台地側の斜面際で等高線に平行して、あるいは直交するように検出した。排水あるいは用水・集水に関わるものと思われる。

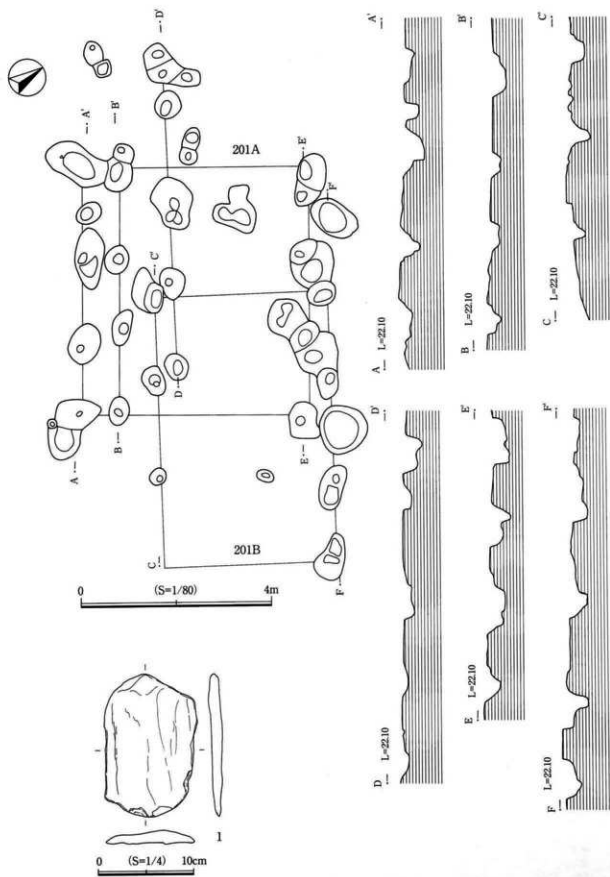
### 1. 掘立柱建物跡

1A区で2棟、1B区で2棟、第3区画で6棟検出した。柱穴に相当するピットの平面は、隅がやや丸い長方形を呈し、底面はほとんど平坦部を持たず、断面が尖ったような形態を基調としている。建物の棟方向は柱穴の長軸方向に一致する。いずれも梁ゆきが1間のもので占められる。建物跡の柱穴として判断できなかったものもあるが、複雑な間取りは有していなかったものと思われる。柱穴から遺物は出土していないが、掘り方の形態や周辺で出土した遺物から当該時期の建物跡として判断した。

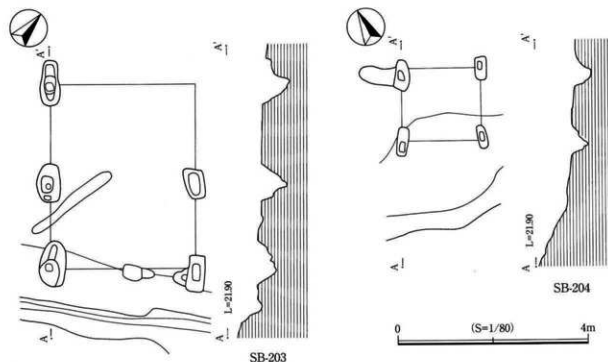
第7表 C3区 掘立柱建物跡計測表(1)

遺構番号	位置	主軸方位	短軸(m)	長軸(m)	梁×桁(間)	柱間距離(m)	柱穴深度(m)
SB201A	5F74-6	N-55°-W	4.0	5.1	1×3	4.0(1.7)	0.5
SB201B	5F74-6	N-56°-W	3.6	5.7	1×3	3.6(1.9)	0.6
SB203	5F74-3	N-40°-W	3.1	3.9	1×2	3.1(2.0)	0.4
SB204	5F74-7	N-70°-W	1.5	1.7	1×1	1.7(1.5)	0.4
SB205	5F64-19	N-0°	2.6	6.7	1×4	2.6(1.6)	0.8
SB206	5F64-14	N-18°-W	3.5	4.9	1×2	3.5(2.5)	0.7
SB207	5F64-13	N-83°-E	2.7	8.6	1×4	2.7(2.2)	0.5
SB208	5F64-19	N-0°	2.7	5.5	1×3	2.6(1.9)	0.4
SB211	5F64-13	N-76°-E	3.2	5.7	1×3	3.2(1.9)	0.3
SB212	5F64-14	N-89°-E	3.6	4.9	1×3	3.6(1.6)	0.3

柱間距離:梁行(桁行)



第96図 SB-201実測図及び出土遺物



第97図 SB-203, 204実測図

**SB-201A, 201B (第96図)**

第3区画の5F74-6に位置する。いずれも建物の規模が1間×3間で、主軸方向もほぼ同じであることから、新旧関係は判然としないが、やや位置をずらして建て替えたものと考えられる。SB-201Bの柱間距離はSB-201Aに比べて0.2mほど長い。また、SB-201Aは南西側の梁ゆきを拡張している。柱穴の断面は尖るものの、平面は楕円形である。柱穴から遺物は出土しなかった。

**SB-203 (第97図)**

1 B区の5F74-3に位置する。棟方向は台地斜面に対して直交する。北東隅の柱穴は検出できなかったが、建物の規模は1間×2間と考えられる。柱穴の形態は平面は長方形で、断面は尖っている。柱穴から遺物は出土しなかった。

**SB-204 (第97図)**

1 B区の5F74-7に位置する。建物の規模は1間×1間で、SB-203と同様、棟方向は台地斜面に対して直交する。柱穴の規模も、SB-203に比べて小さいが、平面及び断面形態は類似している。柱穴から遺物は出土しなかった。

**SB-205 (第98図)**

1 A区の5F64-19に位置し、SB-208と重複する。棟方向は谷斜面に対して平行する。建物は1間×4間の規模だが、西側に1間×2間、東側に1間×1間の付帯施設を有する。西側施設の柱間距離は長く、不均等である。また、柱穴の主軸方向は棟とは直交する。建物はクランク状の構造を呈する。柱穴の平面は楕円形で、断面は尖った形態である。柱穴から遺物は出土しなかった。

**SB-208 (第98図)**

1 A区の5F64-19に位置し、SB-205と重複する。棟方向は谷斜面に対して平行する。建物の規模は1間×3間と判断したが、相当する柱穴をすべて検出できなかったため、やや確実性に欠ける。柱間距離は



SB-205と比べると、桁ゆきはやや長いものの、梁ゆきはほぼ同じである。さらに、柱穴の規模や形態、深さ、そして建物の主軸方向も類似することから、やや位置をずらして建て替えた可能性がある。柱穴から遺物は出土しなかった。

#### SB-206 (第98図)

1 A区の5F64-14に位置し、SB-212と一部重複する。柱穴は平面が長方形で、断面は尖った形態である。建物の規模は1間×2間だが、柱間は長い。柱穴から遺物は出土しなかった。

#### SB-207 (第98図)

1 A区の5F64-13に位置する。建物の規模は1間×4間と判断したが、確認できなかった柱穴があることから、確実性に欠ける。柱穴は平面が長方形で、断面はなだらかに窪む。柱穴から遺物は出土しなかった。

#### SB-211 (第98図)

1 A区の5F64-13に位置し、SB-205やSB-212と重複する。調査時には確認できず、整理過程で判断した建物跡である。建物の規模は1間×3間であろうか。柱穴の平面形態はやや楕円形である。

#### SB-212 (第98図)

1 A区の5F64-14に位置し、SB-206やSB-212と重複する。SB-211と同様、整理過程で判断した建物跡である。建物の規模は1間×3間である。梁ゆきの柱間距離は長く、SB-206に類似する。柱穴はやや楕円形で、底面に平坦部をもつ。

## 2. 横穴状土坑

第1区画で3基、第2区画で1基検出している。台地側斜面途中に平場を有しており、天井部は崩落しているものの、構造上横穴と理解できるものである。遺構の時期は中世と判断したが、SX-206は古墳時代の横穴墓となる可能性もある。

第8表 C3区 土坑計測表(1)

( ) は推定値 < > は遺存値

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SX-211	横穴状土坑	5F64-3	N-81° -E	1.3	1.2	0.5	中世	
SK-254	横穴状土坑	5F64-14	N-57° -E	1.2	0.8	0.4	中世	
SK-255	横穴状土坑	5F64-14	N-72° -E	1.4	1.4	0.3	中世	
SX-206	横穴状土坑	5F74-13	N-29° -E	3.6	2.0	0.4	中世?	

#### SX-211 (第99図)

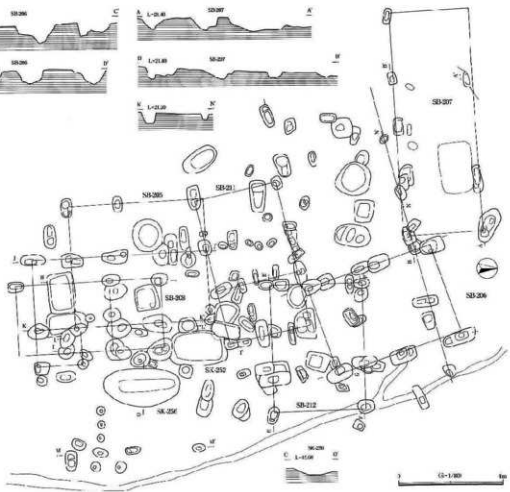
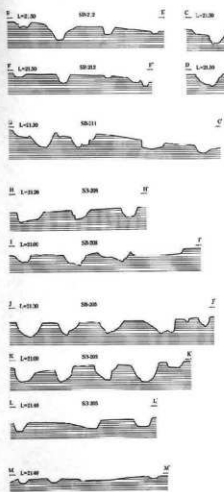
5F64-3に位置する。第1区画の端部付近の斜面に構築されており、その前面では地下式坑を除いて遺構が少ない。約2m四方の方形を呈し、壁際には周溝が巡る。底面は平滑で壁は垂直に立ち上がる。開口部ないしは入り口部は消失しており、その形態や構造は不明である。奥壁際で土師質土器が出土している。

#### SK-254 (第99図)

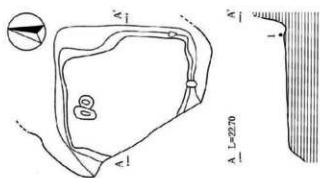
5F64-14に位置する。開口部ないしは入り口部は消失しているが、方形ないしは長方形を呈している。時期を判断できる遺物は出土していないが、前面には掘立柱建物跡が集中している。

#### SK-255 (第99図)

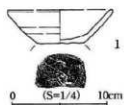
5F64-14に位置する。平面形態は隅がやや丸いものの、方形を呈していた可能性がある。開口部ないしは入り口部は消失しており、壁の遺存状況も良好でない。浅いピットを検出した。遺物は出土しなかった。



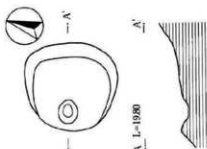
第90图 SD-205-206, 211, 212, SK 252, 266平面图



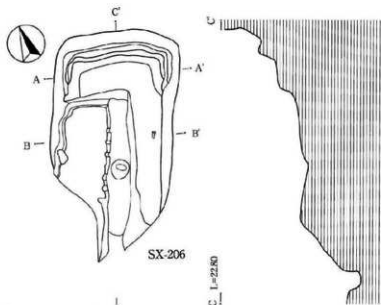
SX-211



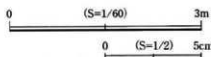
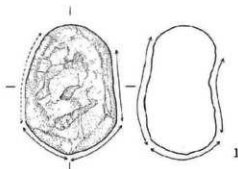
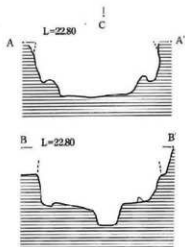
SK-254



SK-255



SX-206



第99図 横穴状土坑 (SK-254, 255, SX-206, 211) 実測図及び出土遺物

**SX-206** (第99図)

第2区画の5F74-13に位置する。他の横穴状土坑とは地点が離れている。長方形を呈し、中央部を溝がはしる。この溝を境に左側の平地は、右側及び奥側に比べてやや低い。部分的に周溝が巡る。これらの平地をコの字形の「棺台」として見ることもできることから、古墳時代の横穴墓の可能性もあろう。あるいは横穴墓が中世以降に再利用されている可能性もある。時期を判別できる遺物はない。研磨面を伴う礫が出土している。

**3. 地下式坑**

第1区画で7基、第3区画で3基検出した。特に1A区で局所的に集中しており、第3区画では2箇所分布している。堅坑部と主室部からなる土坑だが、斜面途中に構築されたSD-216Aや重複しているSK-242などは形態が明瞭でない。SK-245やSK-246の前面に位置する長方形の土坑は、一連の施設である可能性がある。またSK-238は、平面形態は地下式坑に類似しているものの、断面形態は堅坑部分の方が主室部分よりも深く、一般的とは言い難い。積極的に地下式坑とは言い難いが、この項に含めた。

第9表 C3区 土坑計測表(2)

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	( )は推定値 < >は遺存値	
							時期	備考
SK-238	地下式坑	5F74-7	N-77°-E	2.8	3.1	1.4	中世	堅坑の方が深い。SD-212より古い
SK-239	地下式坑	5F74-8	N-23°-W	3.0	2.5	1.1	中世	堅坑だらしない
SD-216A	地下式坑	5F64-12	N-33°-E	<2.2>	(1.5)	3.7	中世	
SD-216B	地下式坑	5F64-17	N-91°-E	(3.1)	(2.5)	3.2	中世	
SK-242	地下式坑	5F73-10	① N-19°-E	2.8	1.7	2.1	中世	拡張か
			② N-64°-W	3.2	3.2	2.3		
SK-245	地下式坑	5F64-8	N-14°-E	2.3	2.1	1.3	中世	堅坑全面に土坑
SK-246	地下式坑	5F64-7	N-89°-E	2.5	(3.2)	1.9	中世	堅坑全面に土坑
SK-247	地下式坑	5F64-13	N-21°-W	(2.0)	(2.0)	1.7	中世	
SK-251	地下式坑	5F64-12	N-35°-E	3.0	2.6	1.5	中世	底面南西隅にピット
SK-250	地下式坑	5F64-12	N-56°-E	(3.7)	(2.6)	1.9	中世	

**SK-238** (第100図)

第3区画の5F74-7に位置する。遺存している深さは堅坑部が約1.3mに対して、主室部は1mを測る。平面形態は地下式坑に類似するが、堅坑部の方が深いことから、いわゆる地下式坑とは断面形態が異なる。主室部分は壁際に周溝が巡り、中央部もわずかに窪む溝が走る。遺物は出土しなかった。

**SK-239** (第100図)

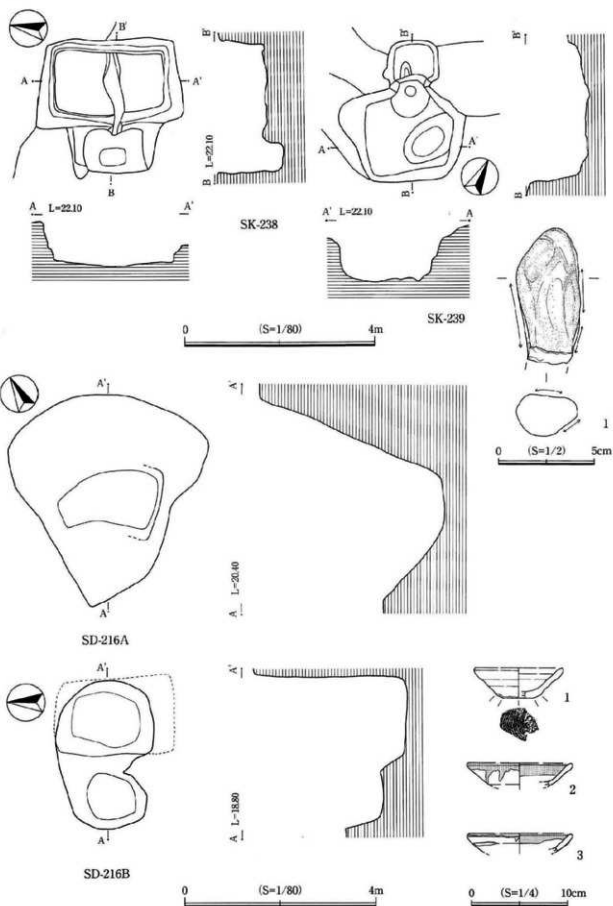
第3区画の5F74-8に位置する。SK-238とは至近距離に分布している。堅坑部と主室部との境には明瞭な段差はないが、その境には浅いくぼみを有する。遺物は研磨面を伴う礫が出土している。

**SD-216A** (第100図)

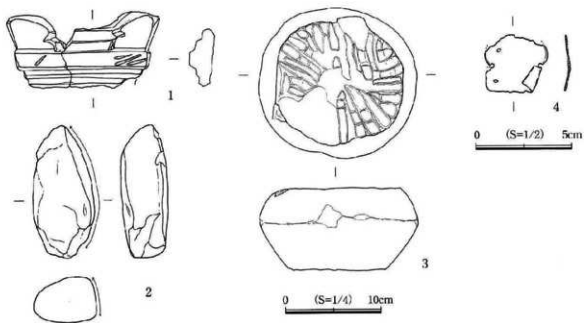
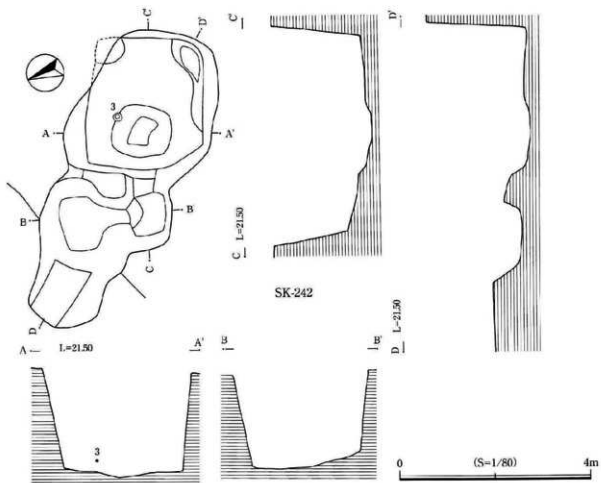
5F64-12に位置する。第1区画にあるものの、標高の低い斜面部分で検出したことから、厳密には第1区画で検出した地下式坑とは分布域が異なる。全体の規模が長軸、短軸とも約4mで、主室底面の規模が1.4m×2.0mと判明したにとどまる。堅坑部及び主室部壁面の崩落が著しく、本来の形態はとどめていないが、堅坑部から主室部までは約3mを測ることができ、次のSD-216Bと類似している。遺物は出土しなかった。

**SD-216B** (第100図)

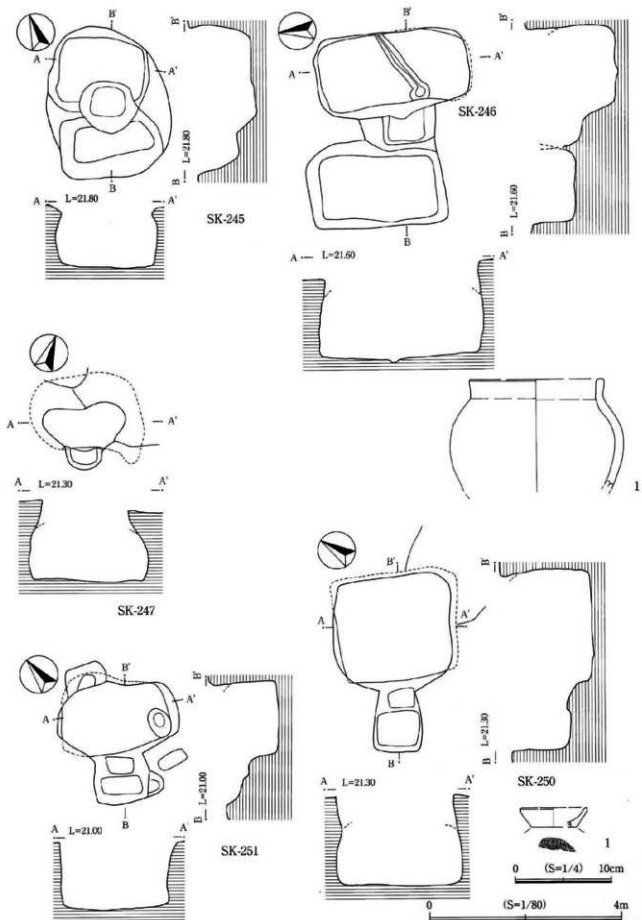
5F64-17に位置し、SD-216Aと並んで検出した。堅坑部は約1m四方、主室部は1.2m×1.4mを測り、堅



第100図 地下式坑 (SK-238, 239, SD-216A, 216B) 実測図及び出土遺物



第101図 地下式坑 (SK-242) 実測図及び出土遺物



第102図 地下式坑 (SK-245~247, 250, 251) 実測図及び出土遺物

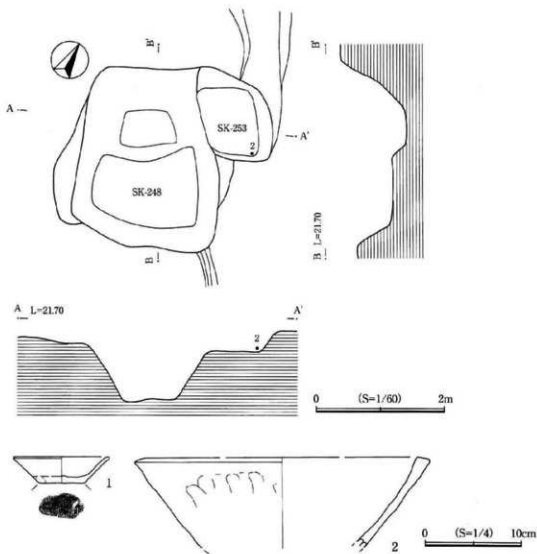
坑部から主室部までは約3mである点は、SD-216Aと類似した規模である。堅坑部と主室部とは0.4mの比高差がある。かわらけ1点、緑軸小皿2点が出土した。

**SK-242** (第101図)

第3区画の5F73-10に位置し、他の地下式坑とは離れて分布する。東側主室部に対応する堅坑部は西側の主室部とも共有されている。覆土の観察はできていないが、遺存状況から西側主室部を利用した後に東側を拡張したか、あるいは方向をかえて主室部を構築し直した可能性がある。主室部は西側が1.1m×0.8mの規模であるのに対して、東側は2.1m×2.8mを測り、面積にして7倍の差がある。宝篋印塔の破片、五輪塔の水輪、砥石や飾り金具が出土している。

**SK-245** (第102図)

1A区の5F64-8に位置する。堅坑部は主室部と重複するように構築され、やや深く掘削されている。堅坑前面には2.1m×1.3m、深さ0.8mの長方形の土坑が分布している。覆土の観察には至っていないが、主軸がそろろうこと、近接するSK-246でも同様の状況を観察することができることから、地下式坑とこの前面の土坑は一連の施設であった可能性がある。遺物は出土しなかった。



第103図 水利土坑 (SK-248・253) 実測図及び出土遺物



#### SK-246 (第102図)

1 A区の5F64-7に位置し、SK-245とは主軸方向が直交する。前面には2.8m×1.8m、深さ1.1mの長方形の土坑が分布する。一連の施設である可能性がある。竪坑部は浅く、主室部に対して0.7mの比高差があるが、前面の土坑とは比高差はほとんどない。この点はSK-245とは相違し、竪坑部の形態とともに対照的である。主室部には浅い溝が斜めに縦断する。茶釜が出土している。

#### SK-247 (第102図)

1 A区の5F64-13に位置する。比較的小規模で、竪坑部は0.6m×0.4m、深さは0.1mで、主室部は2.3m×1.5m、深さは1.7mを測り、竪坑部が非常に浅い。また、主室部底面の平面形態は矩形を呈さず、やや楕円形である。遺物は出土しなかった。

#### SK-251 (第102図)

1 A区の5F64-12に位置する。竪坑部から主室部に至るまでは階段状を呈しており、その比高差は0.9mを測る。主室部の南東隅では深さ0.4mのビットが穿たれている。遺物は出土しなかった。

#### SK-250 (第102図)

1 A区の5F64-12に位置する。竪坑部の壁は垂直で、主室部に至る。主室部は正方形を呈する。かわらけ1点が出土している。

### 4. 水利土坑

#### SK-248・253 (第103図)

1 A区の5F64-9に位置する。SK-253、SK-248からはそれぞれSD-215が派生する。平面規模は3.1m×2.9m、深さは最も深いところで1mを測る。掘り方は階段状の構造を呈している。台地斜面に沿ってはいし溝(SD-215)の中間に位置し、溝と接続する部分に対してさらに深い穴が掘削されていることから、集水の機能を果たしていた可能性がある。かわらけ、内耳土器が出土している。

### 5. 土坑

これまで、遺構の形態、分布状況や出土遺物などから機能、用途を推定してきたが、その判別が困難なものを一括した。強いて、地下式坑群の分布域に位置するSK-244、SK-249と掘立柱建物跡群の分布域に位置するSK-252、SK-256とはその用途が異なるのかもしれない。

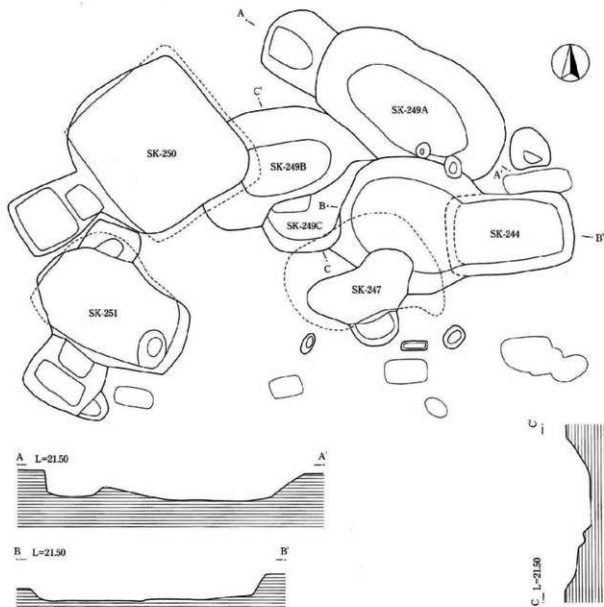
第10表 C3区 土坑計測表(3)

( ) は推定値 < > は遺存値

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SK-244	土坑	5F64-13	N-5°-W	(2.0)	1.2	0.4	中世	
SK-249A	土坑	5F64-13	N-55°-W	3.2	1.9	0.6	中世	
SK-249B	土坑	5F64-13	-	2.6	1.6	0.5	中世	
SK-249C	土坑	5F64-13	-	1.7	0.9	0.3	中世	
SK-252	土坑	5F64-19	N-2°-W	2.2	1.3	0.2	中世	
SK-256	土坑	5F64-19	N-2°-W	2.9	1.5	0.2	中世	

#### SK-244, 249A, B, C (第104図)

1 A区の5F64-13に位置する。地下式坑群の分布域に属し、楕円形ないし長方形を呈し、それぞれ重複する。いずれも浅く、0.3~0.5mの深さである。遺物が出土しておらず、機能を推定することが困難である。



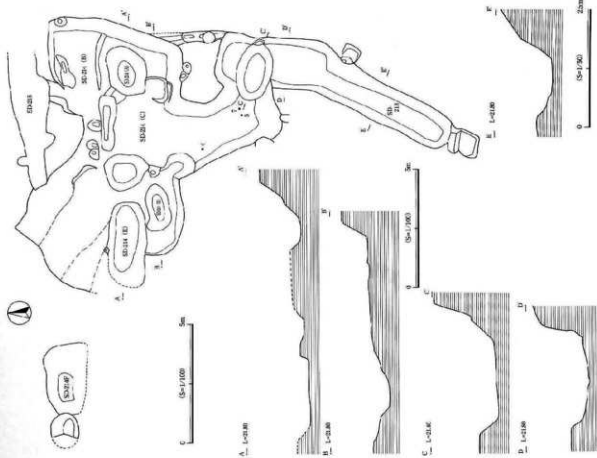
第104図 土坑 (SK-244, 249A, B, C) 実測図

SK-252, 256 (第98図)

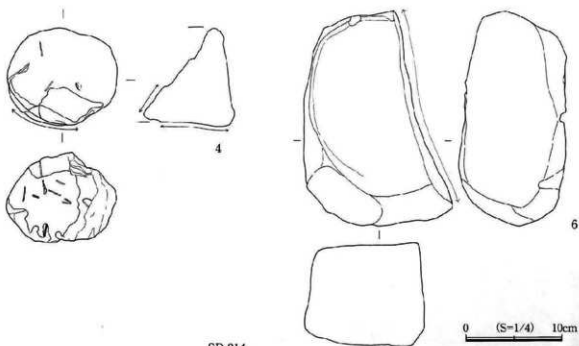
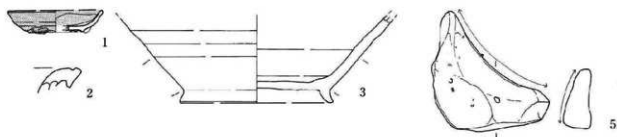
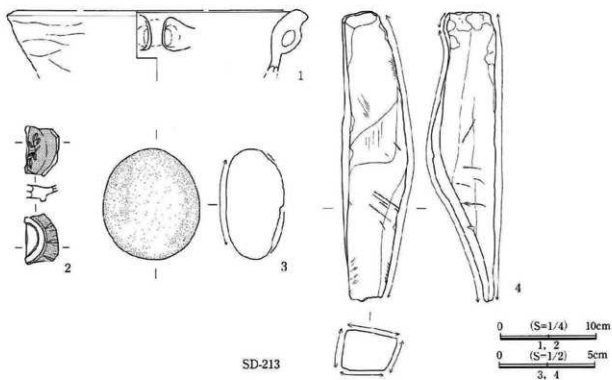
1 A区の5F64-19に位置する。掘立柱建物跡群の分布域に属する。SK-252は長方形を、SK-256は楕円形を呈し、深さはそれぞれ0.1~0.2mと浅い。遺物は出土しておらず、機能を推定することは困難である。

6. 溝

中世に属する溝は台地整形によって形成された区画の縁、つまり台地側斜面に沿って検出した。しかし、一条の溝が途切れずに巡っているわけではない。SD-213やSD-215は、第1区画の中央付近、5F64-24あたりで方向を変え斜面の下に向かう。また、SD-215は途中で土坑が介在している。以上の点から、これらの溝は排水とともに土坑への集水の機能を果たしていたと考えられる。そのほか、第2区画でSX-203が分布している。堀状を呈している。



第1058 溝 (SC-213・214A~F) 発掘区



第106図 溝 (SD-213・214) 出土遺物

第11表 C3区 溝計測表(1)

遺構番号	連結する遺構	長さ(m)	最小幅(m)	最大幅(m)	最小深さ(m)	最大深さ(m)	時期	備考
SD-213	SD-212, SD-214	10.0	1.5	2.2	0.2	0.9	中世	溝内に土坑有り
SD-214	SD-213	18.1	2.8	5.6	0.4	0.6	中世	溝内に土坑有り
SD-215	SK-248・253	50.8	0.1	0.6	-	0.2	中世	導水溝
SD-220		17.5	0.4	0.6	0.2	0.3	中世	
SD-212	SD-213	16.0	0.5	2.0	0.1	0.5	中世	台地整形の斜面際
SX-203		8	-	1.9	-	0.6	中世?	堀状

**SD-213・214 (第105, 106図)**

5F74-4から5F64-23にかけて1B区に分布する。SD-213, SD-214は一連のもので、台地斜面際を巡り(SD-213)、5F64-24で斜面下方向に向きを変える(SD-214)。SD-214は形態が複雑で、一般的な細長い形態ではない。これは底面に、短軸が1~1.5m、長軸が1.5~3mの土坑が多数伴っていることによる。集水及び排水の機能を果たしていた可能性がある。出土遺物には青磁破片、緑釉小皿、内耳土器や片口鉢、磁石などが出土している。

**SD-215 (第107, 108図)**

5F64-2から5F64-24にかけて1A区に分布する。台地斜面際を巡り、5F64-24で斜面下方向に向きを変える。また、向きを変えてからは、幅が広くなり、階段状を呈する。溝の中間あたりでは土坑(SK-248・253)が介在する。先にも触れたが、集水及び排水の機能を果たしていた可能性がある。

**SD-220 (第107図)**

5F64-7から5F64-3にかけて1A区に分布する。等高線に対して直交し、わずかな傾斜で斜面下に向かつてはしる。台地側では遺存状態が確認できなかったため、SD-215との連結の有無は判然としない。斜面下への排水のほか、この溝を境に北側では遺構が確認できなかったことから、土地を区画する機能も果たしていた可能性がある。

**SD-212 (第109図)**

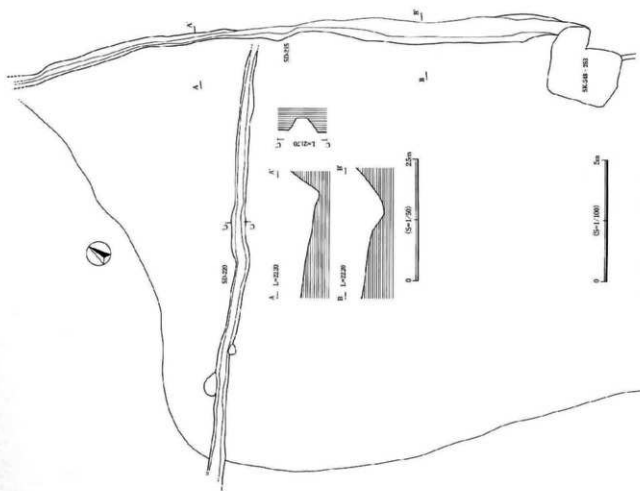
5F74-2から5F74-8にかけて1B区の台地整形された斜面際に巡る。SD-213の延長に位置するが、断絶しており、平面及び断面形態が異なる。SB-203, SB-204と重複するが、新旧関係は確認できていない。

**SX-203 (第110図)**

5F74-17に位置する。第2区画にあり、主要な中世遺構群からは離れて分布する。断面がV字で堀状を呈している。かわらけや香炉が出土している。

**7. 遺構外の出土遺物 (第139, 141図)**

かわらけ、陶器の他、石塔類が出土している。



新107号 漢 (SD-215, 220) 断面図

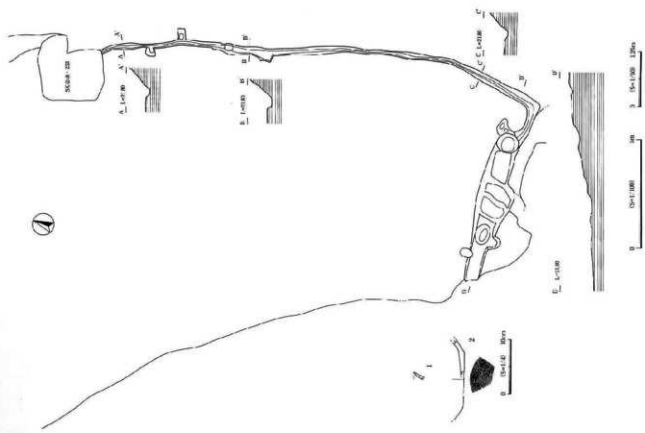
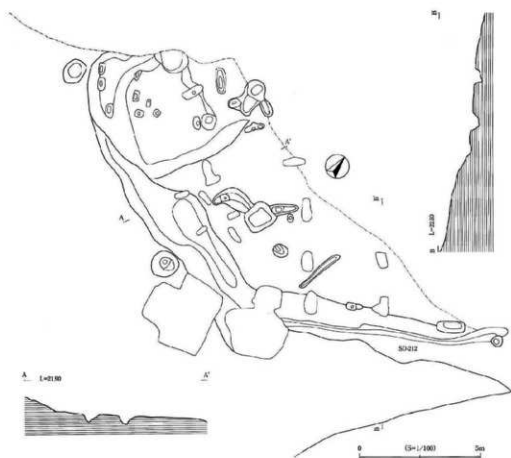
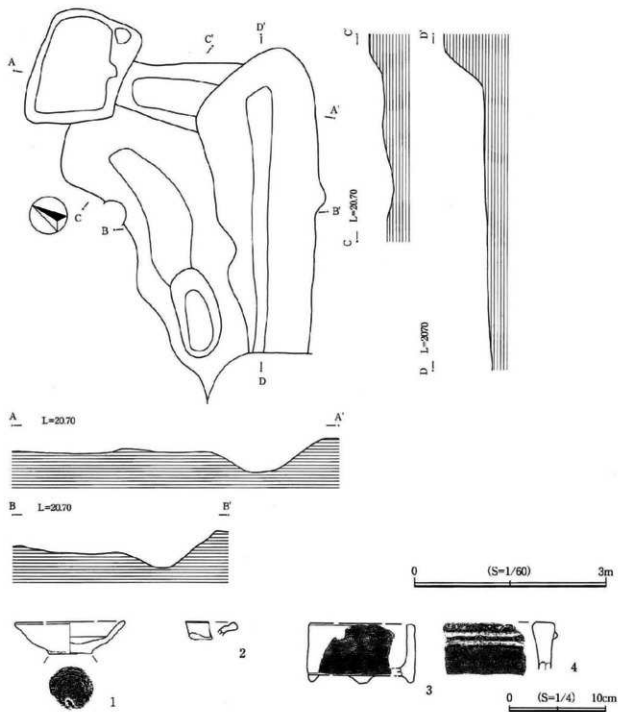


圖104 漢 (SDO-015) 東漢區及出土器物



第109号 溝 (SD-212) 実測図





第110図 溝 (SX-203) 実測図及び出土遺物

## 第4節 近世

近世の遺構は第2区画で主体的に分布しており、一部1B区や第3区画でも検出している。第2区画の遺構確認面は砂が基盤層になっており、台地整形あるいは遺構掘削に伴う工具痕が明瞭である。特に5F84-9より南側では遺構とは判断しがたいが、工具の痕跡が多数、ビット状、溝状に遺存している。遺構としては、掘立柱建物跡4棟、土坑墓1基、門柱跡1基、円形連結土坑2基、利水に関わる土坑32基、炭窯3基、その他の土坑9基、溝13条を検出した。特に水利に関わる施設が第2区画で多く、湧水場と土坑が溝で連結している様相が特徴的である。土坑には桶が埋設されているものもあり、水を溜めていた可能性が非常に高い。

### 1. 掘立柱建物跡

すべて第2区画に分布する。ビットそのものの検出数が少ないことから、建物の数はもともと少なかったと推測できる。柱穴の形態には大きく2種類ある。ひとつは平面が楕円形で、断面がすり鉢状を呈し、もう一つは平面、断面とも矩形を呈するものである。

第12表 C3区 掘立柱建物跡計測表(2)

遺構番号	位置	主軸方位	短軸(m)	長軸(m)	梁×桁(間)	柱間距離(m)	柱穴深度(m)
SB200	5F84-3	N-20°-W	7.2	11.2	2×5	3.6(1.9)	0.6
SB202	5F74-12	N-70°-E	4.6	0.9	1×1	4.6(0.9)	0.6
SB209	5F84-15	N-58°-E	0.7	0.9	1×1	0.9(0.7)	0.4
SB210	5F74-13	N-17°-W	0.8	4.3	1×1	4.3(0.8)	0.4

柱間距離:梁行(桁行)

#### SB-200 (第111図)

5F84-3に位置する。建物の規模は2間×5間と判断したが、P11からP13の検出状況を考慮すると、1間×5間の建物が片側の桁の位置を踏襲しつつ建て替えた可能性もある。梁方向の柱間距離は南側は北側よりも1mほど長い。柱穴の形態は平面が楕円形、断面はすり鉢状を呈している。出土した遺物には、土製品、鉄製品が出土している。

#### SB-202 (第112図)

5F74-12に位置する。柱穴は平面が約15cm四方の方形を、断面も角張った形態をしている。この柱穴は同じ幅の溝で連結しており、対の柱構造を呈している。そして、南北に平行して検出しており、桁方向に4基、少し離れて1基検出した。柱筋は南側が一直線に通るものの、北側は通らない。また、202Dと202Eの間は間隔が広い。SB-210の検出状況も考慮すると、単独のものが基本構造であろうか。遺物は出土しなかった。

#### SB-209 (第113図)

5F84-15に位置する。建物の規模は1間×1間で、中央部にもビットを1基検出した。東柱に要したものであろうか。柱穴は平面が約20cm四方の方形で、断面も角張っている。柱穴の掘り方はSB-202と類似するが、やや規模が大きく、桁方向に溝で連結していない。遺物は出土しなかった。

#### SB-210 (第113図)

5F74-13に位置する。規模は1間×1間で、約15cmの方形の柱穴が桁方向に、溝で連結している。掘り方の形態や柱間距離は、SB-202と類似する。また、主軸方向もほぼ同じで、互に関連しあったことは間違いないであろう。遺物は出土しなかった。

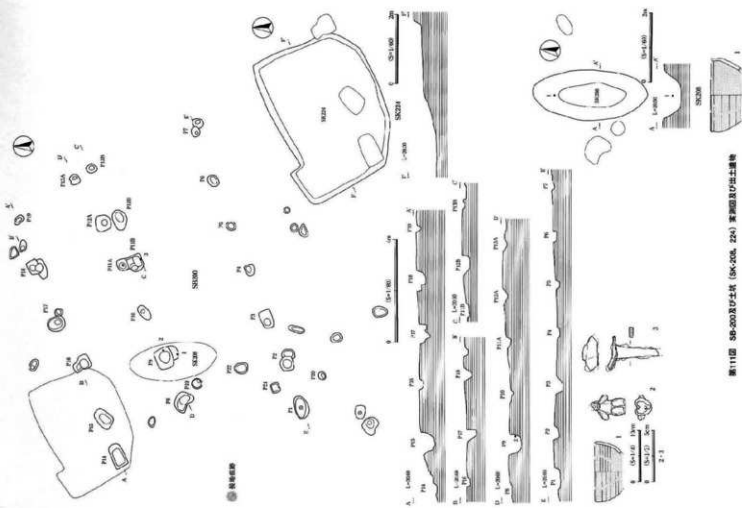
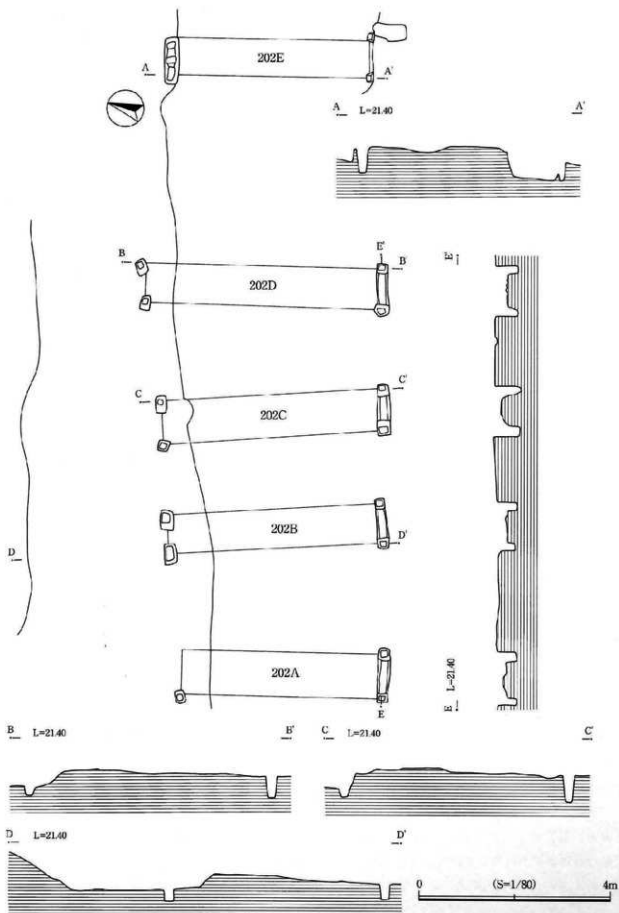
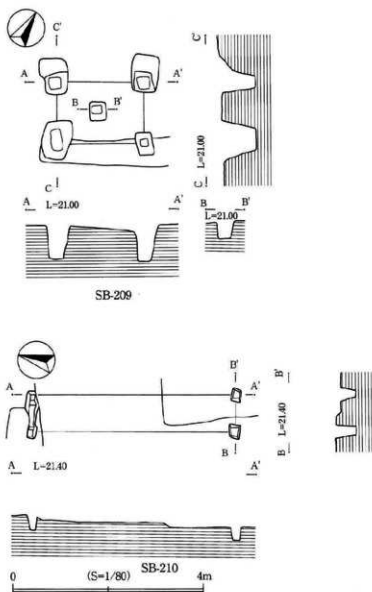


圖111 395-200及224坑 (SK-206, 224) 平面圖及剖面圖



第112図 SB-202実測図

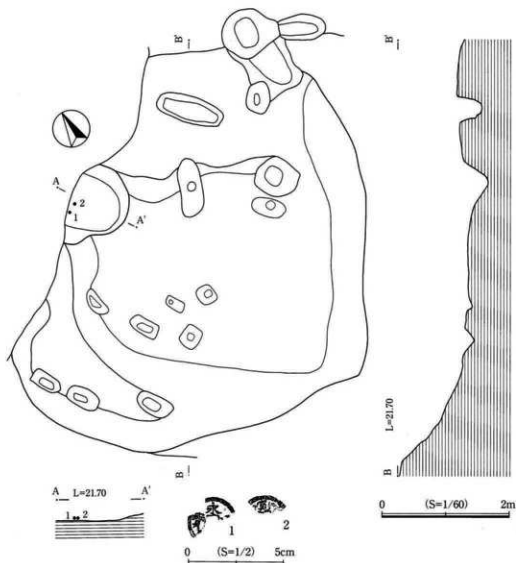


第113図 SB-209, 210実測図

## 2. 土坑墓

### SK-243 (第114図)

1 B区の5F74-2に位置する。中世の台地整形区画に分布するが、永楽通宝の他に寛永通宝が出土したことから、近世の土坑墓と判断した。永楽銭も近世の模鑄銭である。銭貨が出土した土坑は短軸が1.4m、長軸は谷斜面側が消失しているものの、およそ2mの規模を有していたと思われる。この土坑墓はその周囲に約4m×3mの長方形の平場を有する。また、全体の遺存している規模は5.6m×6.4mを測る。



第114図 土坑墓 (SK-243) 実測図及び出土遺物

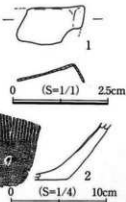
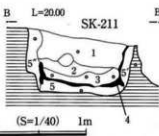
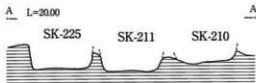
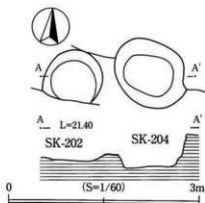
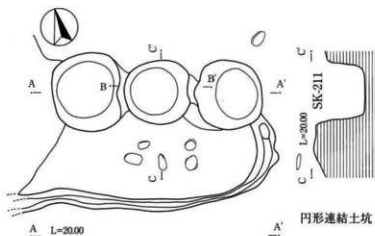
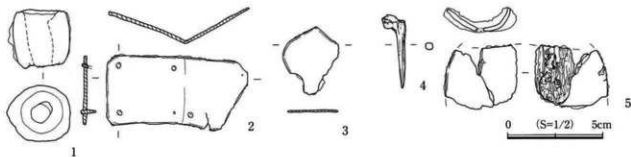
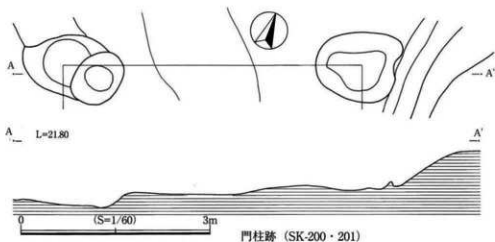
### 3. 門柱跡

#### SK-200・201 (第115図)

第2区画の南端、5F84-15に位置する。C2区と接続する部分で、台地の斜面がせり出して、平場がすはまる地点に相当する。このことから門に相当する遺構として判断した。ただし、遺存状況は深さが10cm~20cmと浅い。SK-200とSK-201はそれぞれ径が約1mで、その間の距離は4.7mを測る。これら以外のビットないし土坑は検出することができなかった。遺物は出土しなかった。

### 4. 円形連結土坑

ここでいう「円形連結土坑」とは、形態が径1m、深さ0.5mの円筒状で、2基ないし3基連なって検出した土坑である。覆土の観察はSK-211のみであるが、桶の埋設状況、粘質土の堆積を観察することができた。トイレ遺構の可能性を考慮して、土壌分析を実施したが、その用途を特定する便虫は全く検出でき



SK-211土層説明

1. 褐色砂質土 鉄分を含む。自然堆積に近い。最上石レベの1層に類似。
2. 淡褐色砂質土 淡灰色砂ブロック(φ20~10cm)を多く含む。締まりがよい。
3. 暗褐色粘質砂質土 暗灰色味を部分的に帯びる。炭化物を含む。他の層より砂質味が少ない。
4. 濃褐色土 腐食味を帯び、タカ状遺跡が残る。樹根と腐植。
5. 灰色粘質土 白質で、締まりがよい。
- 5'. = 5層と類似した土質だが、やや締まりが落ちる。
- 5''. = 5より、より均質土に欠け、砂がブロック状。地山は淡灰色の粘質砂。

第115図 門柱跡 (SK-200・201), 円形連結土坑 (SK-202・204, 210・211・225) 実測図及び出土遺物

第13表 C3区 土坑計測表(4)

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SK-202	円形連結土坑	5F84-13	N-8° -W	1.0	0.9	0.8	近世	SK-204と対
SK-204				1.1	1.0	0.5	近世	SK-202と対
SK-210	円形連結土坑	5F84-13	N-13° -E	1.1	1.0	0.2	近世	SK-211, SK-225と一連
SK-211				(1.1)	1.0	0.2	近世	SK-210, SK-225と一連
SK-225				(1.3)	1.1	0.4	近世	SK-210, SK-211と一連

第14表 C3区 土坑計測表(5)

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SX-208	横井戸	5F74-19	N-65° -E	3.4	3.3	0.4	近世	
SK-227	横井戸	5F74-13	N-70° -E	1.3	1.0	1.2	近世	土手への掘り込み。湧水有り
SK-228	横井戸	5F74-13	N-55° -E	2.0	1.8	0.5	近世	
SK-229	横井戸	5F74-13	N-45° -E	2.4	2.2	0.5	近世	
SX-209A	横井戸	5F74-19	N-39° -E	3.3	2.1		近世	丸太、板材、杭出土
SX-209B			N-54° -E	(3.0)	2.3	0.4	近世	丸太、板材、杭出土
SX-210A	横井戸	5F74-19	N-42° -E	1.4	1.3	0.7	近世	
SX-210B			N-60° -E	1.9	1.8	0.8	近世	漆喰出土
SX-205	横井戸	5F84-5	N-14° -W	4.6	1.7	0.9	近世	
SK-207	横井戸	5F74-25	N-66° -E	4.6	3.3	0.5	近世	南西コーナーに壁か
SX-204A	横井戸	5F84-10	N-8° -W	(1.2)	(0.9)	—	近世	水神を祀るための祠か
SX-204B			N-8° -W	3.4	1.8	0.9	近世	
SX-204C			N-8° -W	2.6	2.0	1.1	近世	
SX-204D			N-8° -W	(2.4)	<1.1>	0.4	近世	水溜?
SK-232	水利土坑	5F74-18	N-29° -W	8.9	5.0	0.5	近世	SK-223, SK-231に廻り方順 同250-206並生
SK-223	水利土坑	5F74-13	N-77° -E	2.6	1.7	0.7	近世	あるいはSK-220の付帯施設?
SK-231	水利土坑	5F74-13	N-22° -W	3.0	1.7	0.7	近世	廻り方はSK-223に類似
SK-209	水利土坑	5F74-23	N-22° -W	2.7	2.7	0.4	近世	覆土は砂
SK-212	水利土坑	5F74-23	N-22° -W	4.7	2.2	0.9	近世	SK-213, SD-204に切られる
SK-213	水利土坑	5F74-23	N-20° -W	2.4	1.8	0.4	近世	SD-204に切られる
SE-200	水利土坑	5F74-19	N-55° -E	1.2	1.1	0.6	近世	木枠。井戸ではない
SK-233	水利土坑	5F74-19	N-55° -E	1.3	0.8	0.6	近世	長方形木枠。SD211へ連結
SK-221	水利土坑	5F74-19	N-53° -E	0.9	0.6	0.3	近世	隅。夏水通宝出土。底面に 砂。覆土に板材。ウリの種
SK-222	水利土坑	5F74-19	N-58° -E	1.2	1.1	0.5	近世	方形の廻り方に円形曲げ物
SK-215A	水利土坑	5F74-19	N-60° -E	1.2	1.1	0.6	近世	曲げ物
SK-215B	水利土坑	5F74-19	N-60° -E	1.3	1.2	0.6	近世	曲げ物
SK-216	水利土坑	5F74-19	N-57° -E	3.2	2.9	0.4	近世	確認面より灯明皿
SK-237	水利土坑	5F74-24	N-55° -E	3.3	1.4	0.5	近世	SK-215と連結, SK-232と連 結 SD-204と連結
SK-230	水利土坑	5F84-10	N-68° -E	3.6	2.6	0.7	近世	洗い場?埋設後に構造物
SK-235	水利土坑	5F74-24	N-54° -E	3.9	1.1	0.4	近世	SE-201と連結, SD-204へ連 結 始端部生
SK-217	水利土坑	5F74-18	N-33° -W	2.1	1.6	0.2	近世	周縁部に鉄分凝集
SK-218	水利土坑	5F74-18	N-26° -W	3.7	2.4	0.1	近世	周縁部に鉄分凝集
SK-219	土坑	5F74-13	N-14° -W	1.4	1.3	0.7	近世	壁面に工具痕跡
SE-201	井戸	5F74-24	—	1.0	1.0	0.6	近世	SK-235に連結
SE-203	井戸	5F74-8	—	1.3	1.2	2.2	近世?	下部側壁に工具痕
SE-204	井戸	5F74-13	—	—	—	—	近世	
SX-201	水利関連?土坑	5F74-13	—	—	—	—	近世	洗い掘り込み。SK-228と連 結(水路ではない。)



なかった。結局、遺構の性格は特定できなかったが、他の土坑とは覆土や分布域、群としての形態が異なることから、別に記載した。分析結果については、附章で詳述している。

#### SK-210・211・225 (第115図)

5F84-13, 第2区画の南西側縁辺に位置する。径1m, 深さ0.5mの円筒状の土坑が3基連なって検出した。SK-211の覆土の観察により、腐食味のある濃褐色土(4層)の堆積状況が、側板、底板、タガの痕跡と判断できたことから、桶が埋設されていたと考えられる。その直上(3層)には、粘性を帯びた暗褐色から暗灰色の土が堆積していた。トイレ跡の可能性を考慮して、覆土の一部を土壌分析にかけたが、便虫は全く検出できなかった。

SK-210から幅10cm~25cmの溝が派生しており、谷斜面に向かって伸びている。SK-211の南側には飯岡石がまとまって分布していた。

#### SK-202・204 (第115図)

5F84-13, 第2区画の南側縁辺付近に位置する。径1m, 深さ0.5mの円筒状の土坑が2基連なっている。用途を特定するには至っていないが、SK-210・211・225と同様の機能を果たしていたと思われる。

### 5. 水利施設

第2区画の台地斜面際で多数検出した。ここでいう水利施設とは、斜面から湧き出る水を確保し、そこから溝を介して水を利用する施設のことである。溝については別に記載したので、ここではa)横井戸とb)水利土坑についてふれる。

「横井戸」とは台地の斜面に横穴を掘削して、さらに半地下状にした土坑で、湧水をしほり出し、溜めておく施設である。調査中も潤沢に水が湧き出る状況を確認した。遺跡周辺でも類似した施設が現在でも確認できる。これらは台地側壁面全体で検出した。

「水利土坑」とは、横井戸から溝を介して引いた水を溜めておく施設である。規模には大小あり、形態も長方形、円形、楕円形のものがあるが、いずれも壁面、底面とも青灰色に還元している。中には桶や長櫃の類(蓋の存在は明らかでない)が遺存していた。

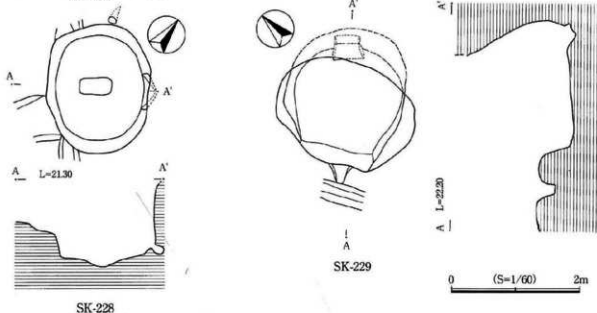
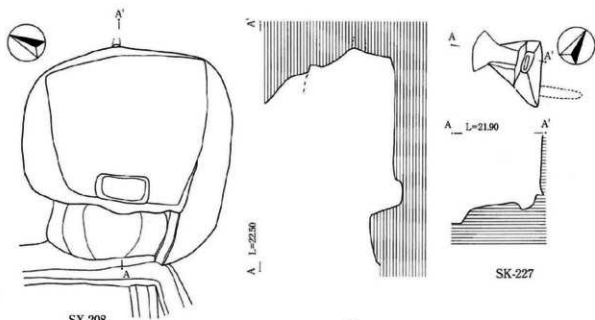
#### a) 横井戸

##### SX-208 (第116図)

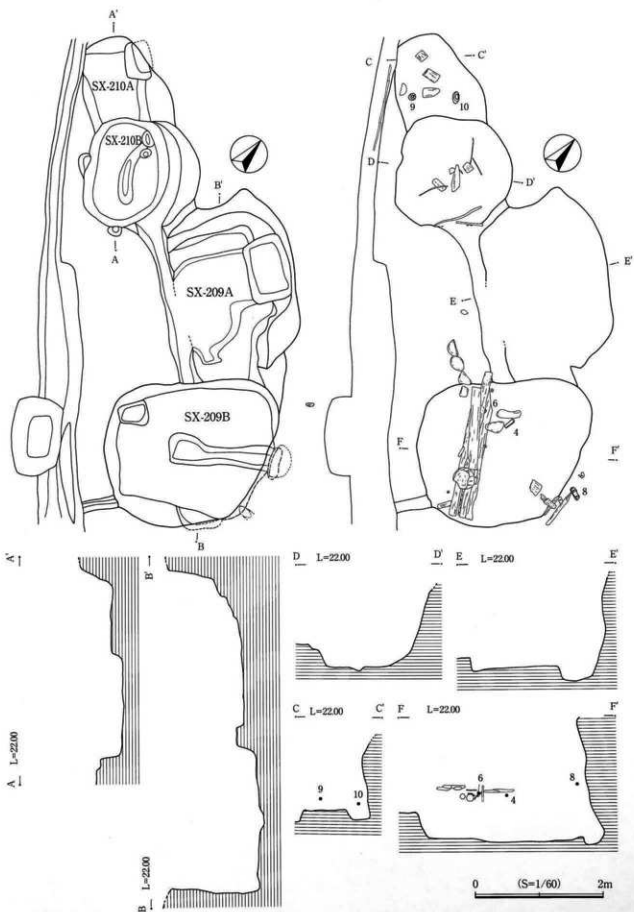
5F74-19に位置する。台地斜面に半地下状に横穴を掘削した土坑で、平面形態は台形を呈する。底面には0.8×0.4m, 深さ0.1mの方形の穴が掘り窪められる。奥壁(東側)中央、底面から0.6mの高さには水がしぼれる孔がある。土坑の前には浅い平場状の窪みがあり、その脇にはSD-211と接続する幅15cm, 深さ10cmの溝がある。土坑底面からは高い位置にあるものの、かけ流しにするためであろうか。

##### SK-227 (第116図)

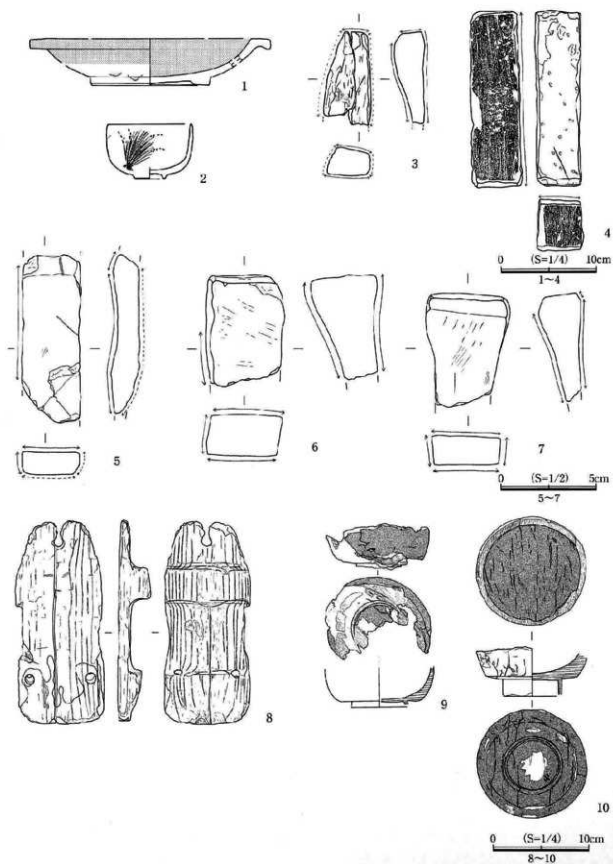
5F74-13に位置する。扇形を呈する。しほりてた水を受けるだけの溝状の土坑で、SD-207ないしはSD-211にかけ流している。溜めておく機能はないことから横井戸とは言いがたいが、この項に含めた。後述するSD-209の南端の湧水をかけ流す孔と類似する。湧水を受ける部分は10cmほど掘り窪められる。前面(西側)のSD-207と接続する。



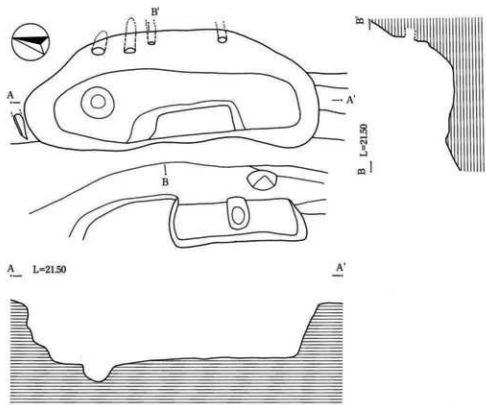
第116図 水利施設 (SX-208, 227~229) 実測図及び出土遺物



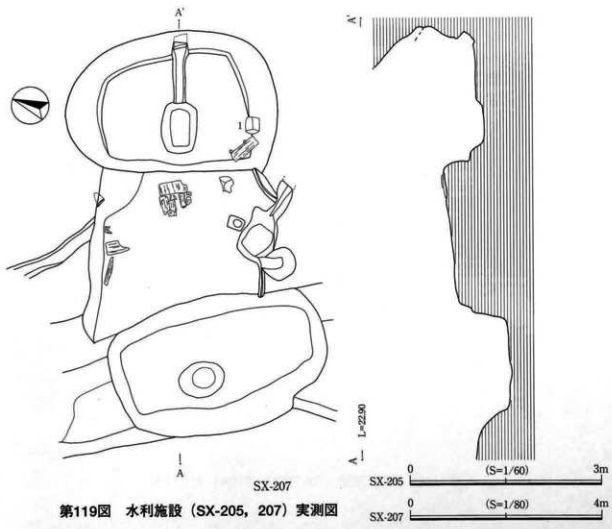
第117図 水利施設 (SX-209A・B, 210A・B) 実測図及び遺物出土状況



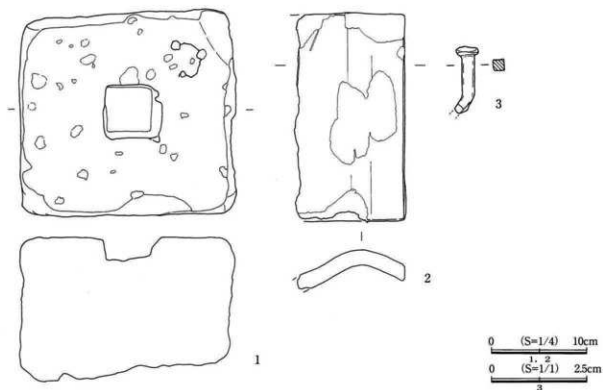
第118図 水利施設 (SX-209B, 210A) 出土遺物



SX-205



第119図 水利施設 (SX-205, 207) 実測図



第120図 水利施設 (SX-207) 出土遺物

SK-228 (第116図)

5F74-13に位置する。横長の楕円形を呈する。奥壁(東)側の底面はさらに三角形に掘りこまれる。底面の中央部にも0.5m×0.3m、深さ0.1mの方形の穴が掘り窪められる。北側の壁面、床から0.7mの高さには水がしぼれる孔がある。前面(西側)には溝が延びる。当該土坑はSD-211を利用した後に構築されたものだが、この溝を利用していた可能性は否定できない。碗、すり鉢、砥石などが出土している。

SK-229 (第116図)

5F74-13に位置する。楕円形を呈する。奥壁(東)側の底面はさらに0.1mほど方形に掘り込まれる。前面(西側)には浅い溝が延び、SD-211と接続する。

SX-209, 210 (第117, 118図)

5F74-19に位置する。209Aと209B, 210Aと210Bが重複している。いずれも楕円形を呈するが、細部の底面形態はそれぞれ異なる。SD-211と溝を介して接続する土坑がSX-209Bだけであることから、それぞれ関連しあっていた可能性が高い。

SX-209Aは平面形態が横長の長方形で、底面は段差の低い階段状を呈する。奥壁(東)側の底面に1.0m×0.7m、深さ0.2mの方形の穴が掘り込まれる。西側にはSX-210BとSX-209Bが連結する溝が走っているが、当該土坑も関連していた可能性がある。

SX-209Bは縦長の長方形を呈する。底面は平滑で、中央から奥壁(東側)にかけて幅0.3m、深さ0.07mの溝が掘られ、奥壁の端部はさらに楕円形の穴が0.1mほど掘り込まれる。奥壁には水がしぼれる孔がある。北側にはSX-209Aに沿うように、SX-210Bと溝が接続している。幅0.2m、深さ0.1mを測る。さらに土坑の前

面からも幅0.1m、深さ0.1mの溝が派生しており、SD-211と接続する。丸太材や飯岡石が並ぶように出土したほか、椀、皿や砥石、下駄なども出土した。遺存状況から、SX-209Aより新しい段階で構築されている。

SX-210Aは小規模な横長の長方形を呈する。奥壁（東）側の底面に、0.5m×0.3m、深さ0.2mの長方形の穴が掘り込まれている。西側では当該土坑が切られるようにSD-211と重複する。覆土中からは丸太材や飯岡石のほか、漆器椀が2点出土している。このうち10は口縁部が欠損しているが、その部分を丁寧に研いで面取りを施している。

SX-210Bは横長の楕円形を呈する。床面中央に浅い溝が掘られる。南側からは溝が派生しSX-209Bと接続している。木材片が出土している。

#### SX-205（第119図）

5F74-5に位置する。平面形態は横長の楕円形を呈する。手前（西側）底面には、低い階段状の平場がある。また、底面の北側には径0.5m、深さ0.3mの穴が掘られている。床から0.3m～0.7mの壁面には計4基の孔がある。これらはすべて、水がしほり得る孔である。また、土坑内ではないが、北側でも同様の孔がある。土坑の前面（西側）はSD-209と重複するように直接接している。SD-209の反対側には長方形の土坑が構築されている。覆土中からは杭や根株などが出土した。

#### SX-207（第119, 120図）

5F74-25に位置する。やや丸みを帯びた長方形を呈する。底面中央部には0.8m×0.5m、深さ0.2mの方形の穴が掘られ、そこから幅0.2mの溝が奥壁（東側）に向かってはしり、その端部もやや深く掘り込まれる。壁面には湧水がしほれる孔は確認できなかった。前面（西側）にはSX-208のように幅2.5mの平場状の窪みがある。この南側の縁には幅0.1mのV字状の溝が巡っている。その途中には1.0m×0.7m、深さ0.2mの方形の穴が掘り込まれ、その壁面からは湧水がしほり得ている。この溝はSD-209に接続していることから、かけ流しのためであろうか。平場状の窪みの北側でもSD-211に接続する溝が巡っている。土坑からは大谷石の五輪塔（地輪）、瓦や釘が出土している。また、土坑前面（西側）には杭が2本打ち込まれ、丸太材が架けられていた。用途は明らかにはできないが、取水作業に関わる施設であろうか。平場状の窪みにも板材が分布していた。

#### SX-204（第121図）

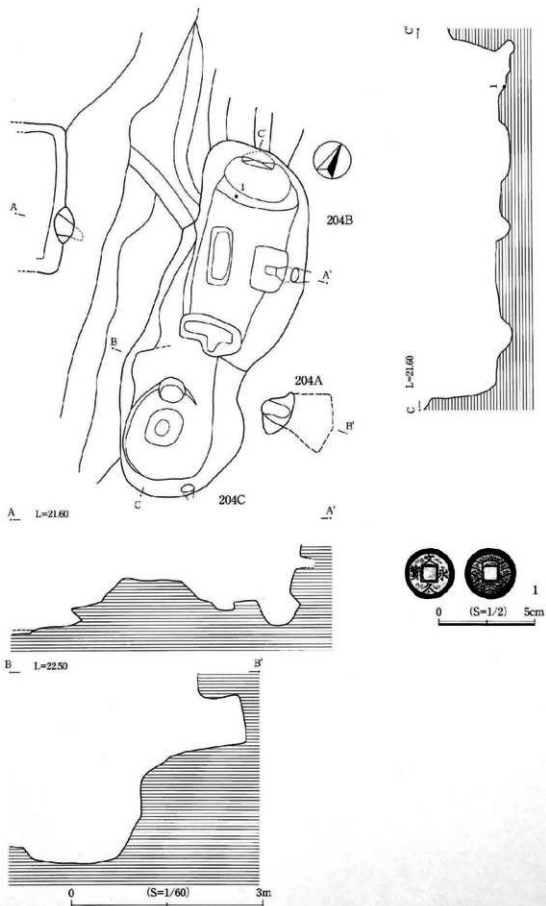
5F84-10に位置する。横長の楕円形を呈するが、SX-204BはSX-204Cに比べて、5cmほど底面が低く、拡張を經ていると考えられる。SX-204Bからは溝が派生し、SD-209に接続する。溝の反対側には長方形の土坑が構築されており、SX-205と類似した様相を示している。

SX-204Bは底面の中央及び南北両端には方形、楕円形の穴が掘り窪められる。いずれも0.1mの深さである。さらに、奥壁（東側）際にも0.7m×0.5m、深さ0.4mの方形の穴が掘り込まれる。その0.5mほど直上には湧水がしほり得る孔がある。文久永宝の銭貨が出土している。SX-204Cにも底面中央に径0.5mの円形の穴が掘られている。床面から0.5mの南側の壁面には湧水がしほり得る孔がある。SX-204AはSX-204Cの壁面直上にある横穴である。底面の平面形態は扇状を呈する。祠であろうか。

#### b) 水利土坑

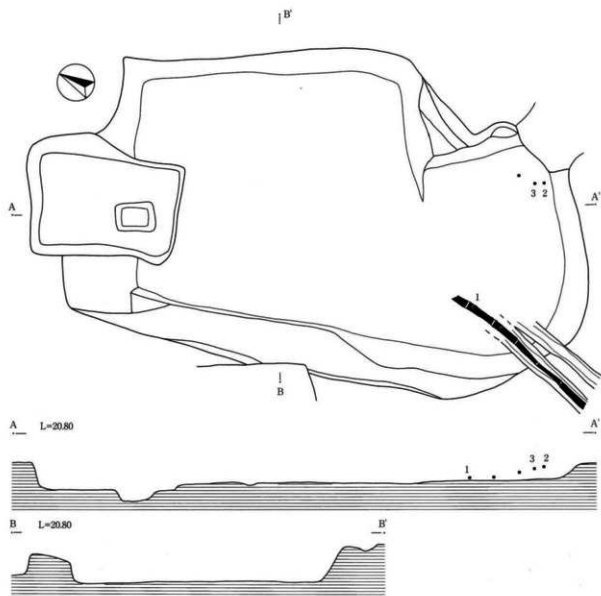
#### SX-232（第122, 123図）

5F74-18に位置する。4.8m×5.0m及び2.5m×4.0mの方形の土坑がくみ合わさった形態である。平面規模

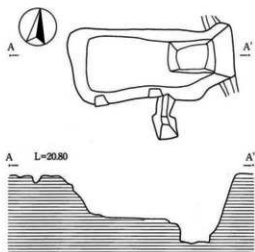


第121図 水利施設 (SX-204A・B・C) 実測図及び出土遺物

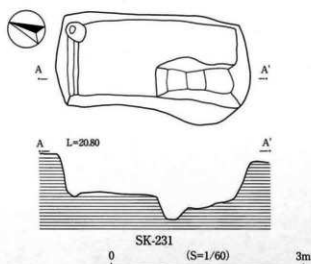




SK-232

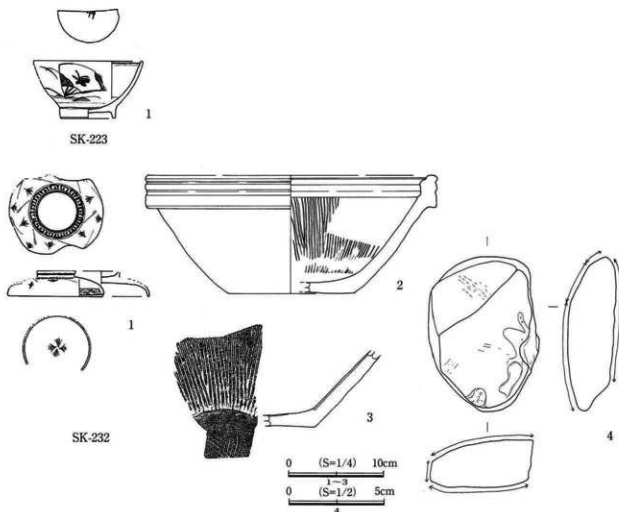


SK-223



SK-231

第122図 水利施設 (SK-232, 223, 231) 実測図



第123図 水利施設 (SK-223, 232) 出土遺物

が大きい割に、深さは0.2mと浅い。床面は平坦である。北側にはさらに2.4m×2.0m、深さ0.7mの長方形の土坑が掘り込まれる。SD-206が接続しているが、覆土中に一部構築されていることから、北側に掘り直されたためにやや複雑な形態となった可能性がある。肥前の染付桶蓋や埴の播鉢、砥石が出土している。

**SK-223** (第122, 123図)

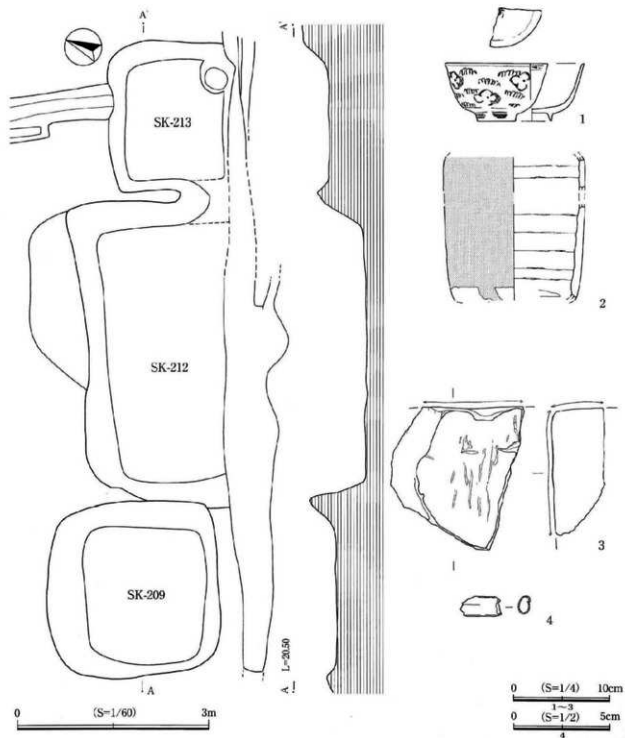
5F74-13に位置する。底面の東側にはさらに0.7m×0.5m、深さ0.4mの長方形の穴が掘り込まれる。SK-228前面の溝から、北へ枝分かれする溝の途中に介在する。この溝はさらにSD-207に接続する。肥前の染付広東椀が出土している。

**SK-231** (第122図)

5F74-13に位置する。底面の南東側にはさらに1.2m×0.6m、深さ0.4mの階段状を呈した長方形の穴が掘り込まれる。北側の壁には周溝が巡る。SK-228前面の溝から枝分かれする溝と接続する。

**SK-209, 212, 213** (第124図)

いずれも5F74-23に位置する。SK-209は方形を、SK-212は長方形を、SK-213は方形を呈する。いずれも



第124図 水利施設 (SK-209, 212, 213) 実測図及び出土遺物

底面や壁面は青灰色に還元しており、覆土の最下層には粘性のある砂が堆積していた。SK-213にはSD-206が接続しており、その先はSK-232が位置している。一方、SK-212、SK-213の南壁に沿ってSD-204が重複している。覆土の観察から、SD-204が新しい。遺物には瀬戸・美濃の染付碗、灰軸徳利や砥石、煙管のほか、唐津の皿や肥前の染付碗が出土している。

#### SE-200, SK-233 (第125, 126図)

5F74-19に位置する。いずれもSD-211から派生した溝が接続しており、底面や壁面は青灰色に還元している。SE-200は最初、井戸の可能性を考慮したものだが、桶を埋設した円形の土坑であることが判明した。肥前や瀬戸・美濃の碗のほか、箸や種子が出土している。SK-233には長櫃の類が埋設されていた。

#### SK-221, 222 (第125, 126図)

5F74-19に位置する。SK-221はSK-232と重複しているが、人為的な埋土中に掘り込まれている。底面に栓のある楕円形の桶が埋設されており、内部からは板材が多数出土した。SD-211から派生する溝と接続している。さらに南側にも溝が派生していたが、その接続先は確認できなかった。瀬戸・美濃の灰軸小杯や肥前の土瓶などが出土している。

SK-222でも土坑の底面から高い位置で桶材が出土したが、原型をとどめていない。この周囲には炭化物が多く分布していた。SK-237と溝を介してつながっている。堺の播鉢が出土している。

#### SK-215A・215B (第125図)

5F74-19に位置する。ともに平面形態は円形を呈する。桶は遺存していなかったが、土坑底面にその痕跡を確認することができた。南側には溝が派生し、SK-237と接続している。北側でも溝がつながっている。

#### SK-216 (第125, 126図)

5F74-19に位置する。方形を呈する。深さは0.2mだが、東側ではさらに0.2mほど深く掘り込まれる。また、南側でも外に張り出すように0.3mほど掘り込まれる。単独で構築されているため、水利土坑としては積極的に扱えないものの、他の水利土坑に囲まれた中で検出できた点を考慮しておく。瀬戸・美濃の灰軸鉢や灯明皿、肥前の染付皿が出土している。

#### SK-237 (第125図)

5F74-24に位置する。長方形を呈する。SK-221やSK-215と溝を介してつながっている。SD-209よりも古いが、西側に派生する溝は、排水溝として同方向にはしていた可能性がある。なお土坑埋没後、SK-214が構築されていた。灰、炭化物が多量に出土した。

#### SK-230 (第127図)

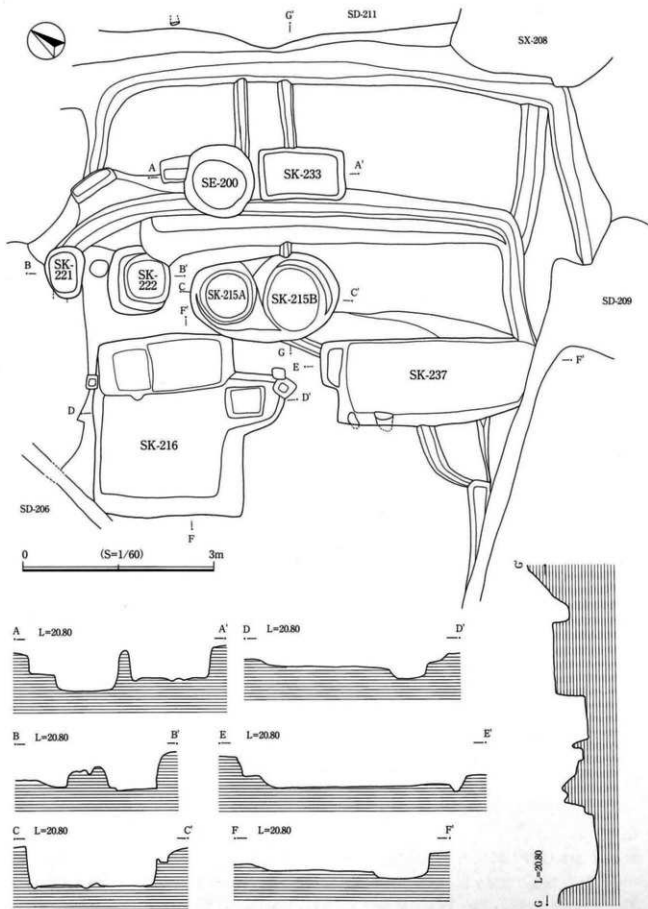
5F84-10に位置する。長方形を呈し、覆土には青灰色に還元した砂が堆積していた。単独で検出したが、覆土の様相から水利土坑とする。土坑埋没後に桶が埋設される。銅板は抜き取られたようで、底板とタガのみ遺存していた。砥石や釘、刃物類が出土している。

#### SK-235 (第127図)

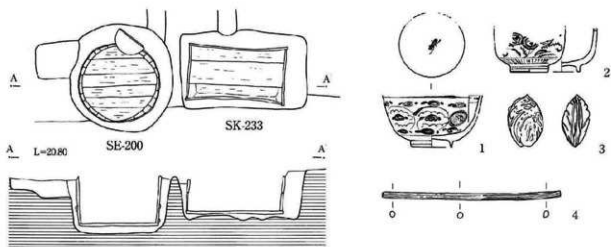
5F74-24に位置する。長方形を呈し、複数の溝が派生している。SE-201、SD-204と接続する。砥石が出土している。

#### SK-217, 218, 219 (第128図)

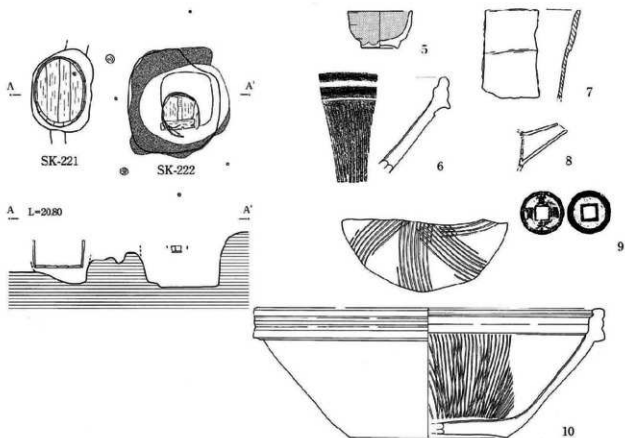
いずれも5F74-18に位置する。SK-217、SK-218は長方形を呈し、主軸方向が同じで、東側の壁が揃う。平面規模は異なるものの、深さはほぼ同じである。単独で検出したが、壁の周縁部は鉄分が凝集している



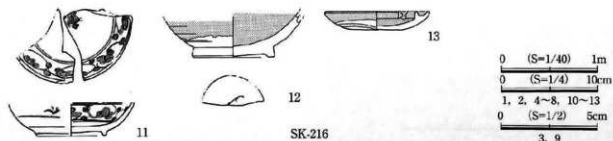
第125図 水利施設 (SE-200, SK-233, 221, 222, 215A・B, 216, 237) 実測図



SE-200, SK-233

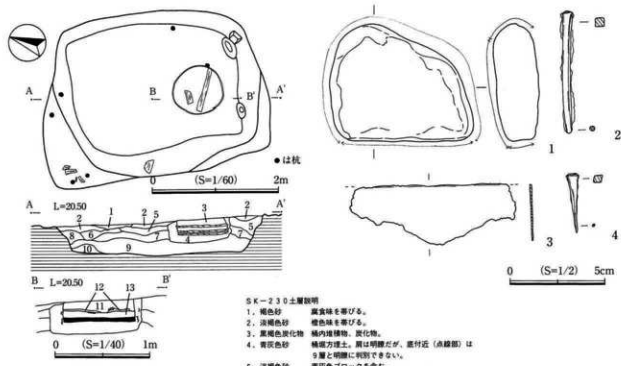


SK-221, SK-222



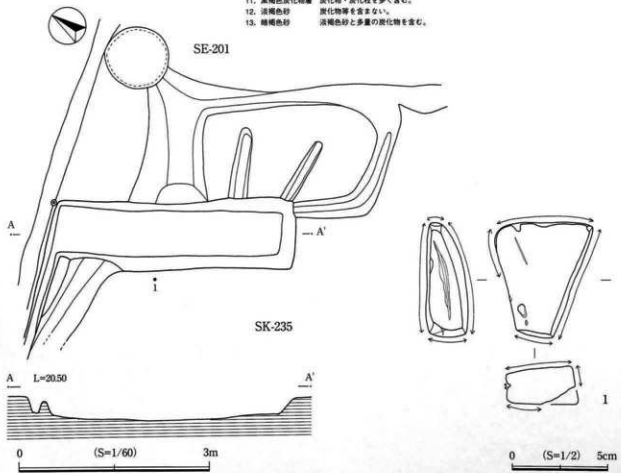
0	(S=1/40)	1m
0	(S=1/4)	10cm
0	(S=1/2)	5cm
3, 9		

第126図 水利施設 (SE-200, SK-233, 221, 222, 216) 実測図及び出土遺物



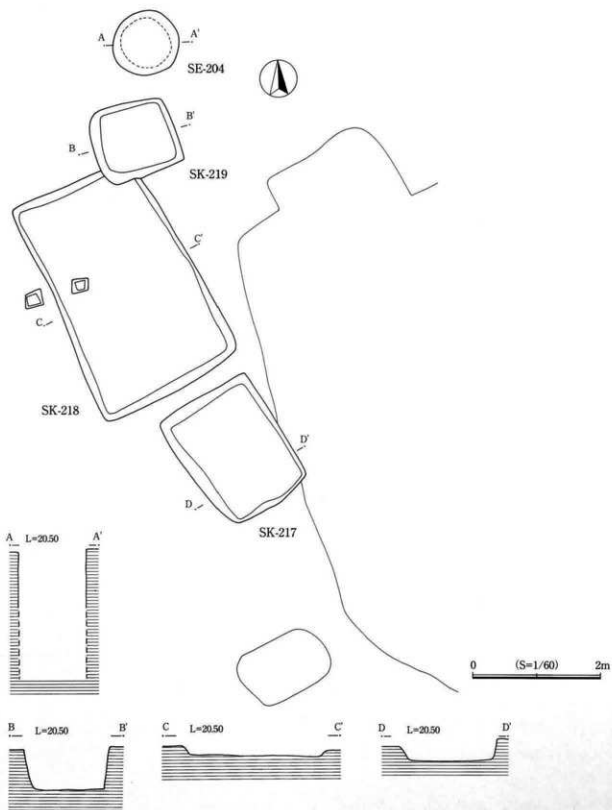
SK-230

- SK-230 土層説明
1. 褐色砂 腐食味を帯びる。
  2. 淡褐色砂 褐色味を帯びる。
  3. 黒褐色炭化物 橋内接植物、炭化物。
  4. 青灰色砂 橋内方理土。質は明確だが、意村近(点線部)は9層と明確に判別できない。
  5. 深褐色砂 黒灰色ブロックを含む。
  6. 濃青灰色砂 有機質に富み、粘性が高い。
  7. 緑青灰色砂 黒灰色砂ブロック。
  8. 暗褐色砂 濃青灰色砂ブロックを多く含む。粘性がある。
  9. 黄灰色砂 ブロックを多く含む。
  10. 暗青灰色粘質砂 炭化物・炭化粒を多く含む。
  11. 黒褐色炭化物層 炭化物・炭化粒を多く含む。
  12. 淡褐色砂 炭化物等を含まない。
  13. 暗褐色砂 淡褐色砂と多量の炭化物を含む。



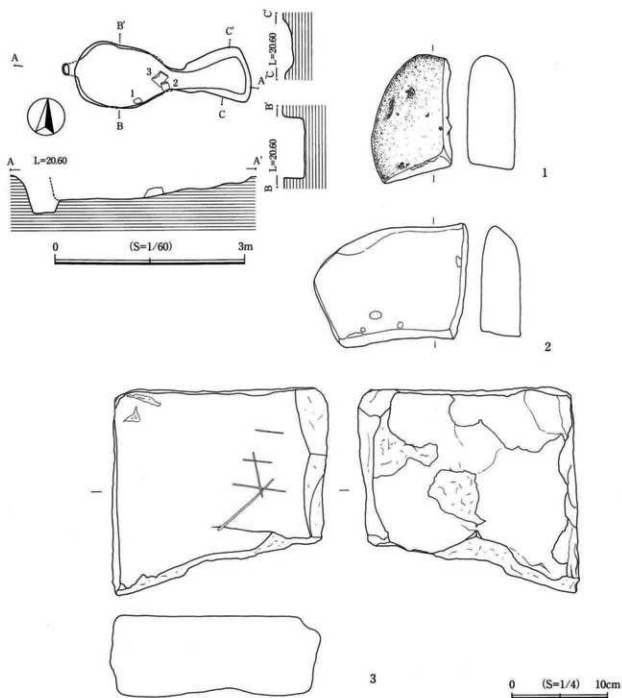
SK-235

第127図 井戸 (SE-201), 水利施設 (SK-230, 235) 実測図及び出土遺物



第128図 水利施設 (SK-217~219), 井戸 (SE-204) 実測図



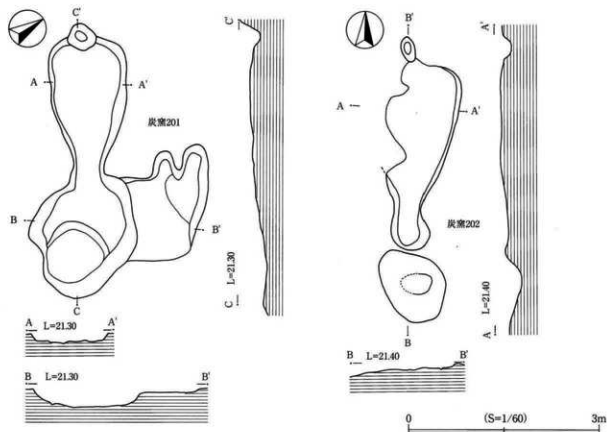


第129図 炭窯200実測図及び出土遺物

ことから、関連しあった水利土坑であろう。一方、SK-218と重複するSK-219は方形で、やや深く掘削されている。積極的には水利土坑とは言い難い。

#### 6. 井戸 (第127, 128, 138図)

3基検出した。いずれも径1mの素ぼりの井戸である。底面までの深さは確認することができなかった。単独で検出したSE-203の他、溝を介して土坑と接続するSE-201, SE-204がある。



第130図 炭窯201, 炭窯202実測図

## 7. 炭窯

燃焼空間と作業空間が組み合わさった土坑である。燃焼空間の壁面には被熱痕跡が明瞭で、煙道部を有する。作業空間との境は括れ、焚き口に相当すると考えられる。

第15表 C3区 土坑計測表(6)

( )は推定値 < >は遺存値

遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
炭窯200	炭窯	5F73-15	N-94°-W	3.0	1.0	0.3	近世	
炭窯201	炭窯	5F74-11	N-57°-W	4.4	1.7	0.5	近世	
炭窯202	炭窯	5F64-19	N-2°-W	3.4	1.1	0.1	近世	

### 炭窯200 (第129図)

第3区画の5F73-15に位置する。燃焼部は楕円形で、その壁面は垂直で被熱が顕著であった。作業空間は扇形である。作業空間から燃焼空間にかけてはゆるやかに下降している。出土遺物には礫片や五輪塔(地輪)を再利用した砥石(白石)がある。

### 炭窯201 (第130図)

第3区画の5F74-11に位置する。平面形態は炭窯200と異なり、燃焼空間はやや幅の狭い扇形で、作業空間は楕円形である。作業空間の北側にも浅い平場状の窪みがある。遺物は出土しなかった。

## 炭窯202 (第130図)

1 A区の5F64-19に位置する。平面形態は焼成空間が扇形で、炭窯201に類似するが、作業空間は広い平場を有しておらず、括れた焚き口の前面がやや窪む程度である。さらにその前面には、円形ですり鉢状の穴があるが、当該遺構に伴うか明らかでない。遺物は出土しなかった。

## 8. 竈

### SK-220 (第131図)

5F74-13に位置する。0.5m×0.4mの楕円形の土坑が3基並列して、1.3m×1.2mの規模を呈する。焼成部での深さは0.4mである。いずれも壁面は被熱により赤化しており、底面には炭化物が密集していたことから、竈として利用されていたと考えられる。前面も掘り窪められて、作業場的な平場が設けられている。この西側にも単独で竈が構築されている。

## 9. 室

### SK-206 (第132図)

第2区画の5F84-9に位置する。形態は地下式坑に類似し、竪坑部と主室部から成る。およそ2.3m×1.5m、深さ1.3mの規模を有する。

## 10. その他の土坑

ここでは性格が明らかでないものをまとめた。

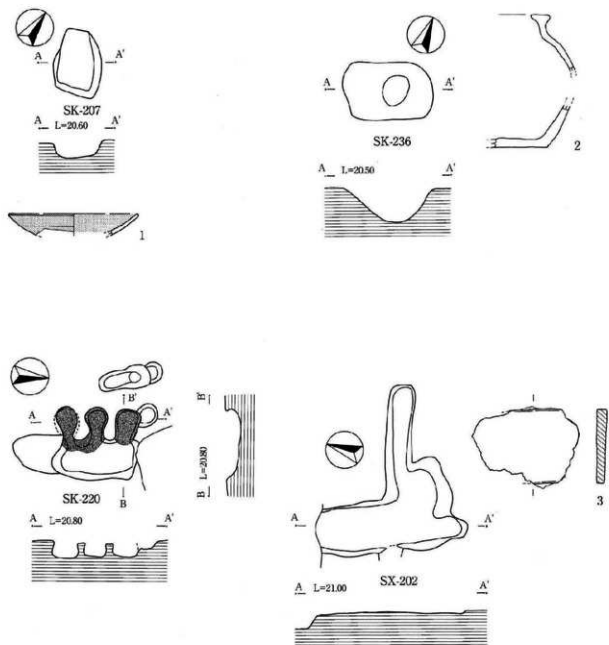
第16表 C3区 土坑計測表(7)

( ) は推定値 < > は遺存値

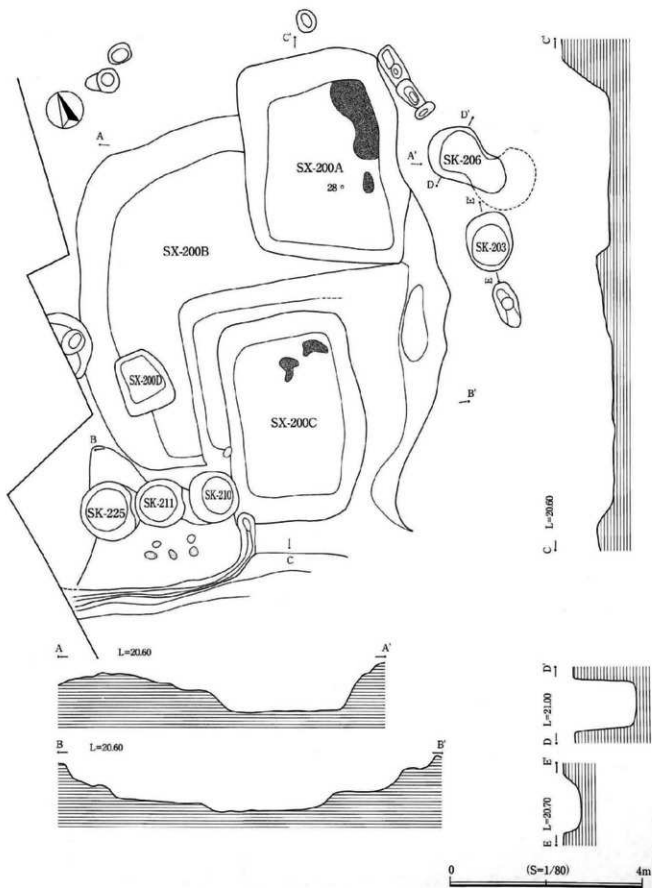
遺構番号	遺構種別	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期	備考
SX-200A	土坑	5F84-8	N-17° -E	4.7	3.3	1.0	近世	
SX-200B			-	5.4	7.6	0.8	近世	
SX-200C			N-18° -E	4.4	2.8	1.1	近世	
SX-200D			N-3° -W	1.5	1.1	0.4	中世?	
SX-200E			-	1.5	0.7	0.3	近世	
SK-207	土坑	5F84-4	N-32° -W	1.0	0.8	0.2	近世	
SK-236	土坑	5F74-18	N-63° -E	1.4	0.9	0.5	近世	覆土に多量の砂ブロック
SK-202	土坑	5F74-13	-	2.7	2.1	0.1	近世	SK-220, SK-223と一連?
SK-208	土坑	5F84-3	N-6° -W	3.3	1.4	0.5	近世	SB-200に切られる
SK-224	土坑	5F84-3	N-25° -W	4.7	3.1	0.2	近世	SB-200に切られ、底面凹凸
SK-203	土坑	5F84-9	-	1.3	1.3	0.3		構埋設か
SK-205	土坑	5F84-8	-	-	-	-	近世	SX-200内、消滅
SK-214	土坑	5F74-24	N-59° -W	1.3	1.1	-	近世	灰、炭多量、SK-237埋没後

### SX-200A・B・C・D・E (第132, 133図)

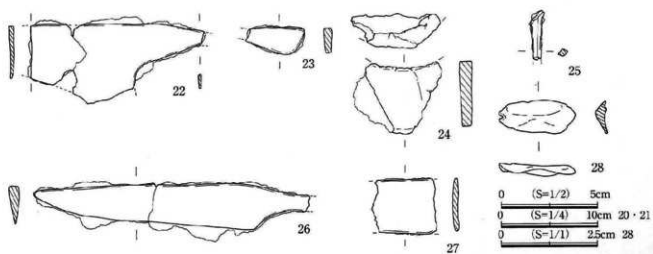
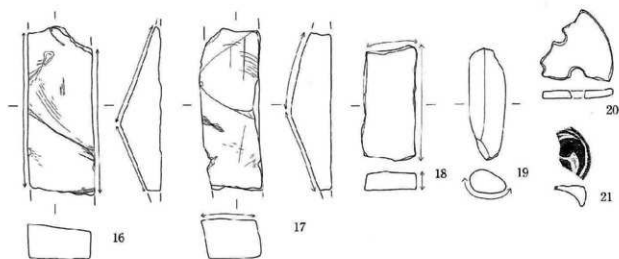
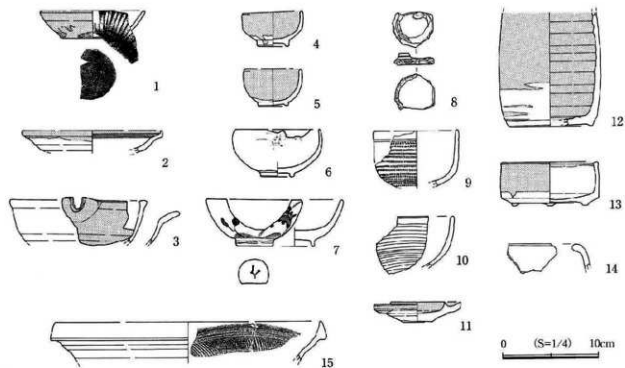
5F84-8から5F84-13にかけて位置する。SX-200Aは長方形を呈し、4.8m×3.4m、深さ1.0mを測る。北東隅の床面で炭化物が集中していた。SX-200Bは楕円形を呈し、8.0m×7.4m、深さ0.8mを測る。SX-200Cは長方形を呈し、4.4m×2.8m、深さ1.1mを測る。底面には炭化物が分布していた。SX-200Dは2.3m×1.0mを測る。覆土の観察から200C, 200B, 200Aの順に堆積していた。総体的にみると、下位には自然に堆積した砂層が堆積しているが、上位には貼床と、その直下には意図的に埋め戻されていた状況も確認することができた。つまり、埋没過程で使用面が認められる。覆土には還元した砂層堆積が観察できたが、水利に関わる遺構群からは離れており、遺構の性格については判断しがたい。比較的多くの遺物が出土した。



第131图 土坑 (SK-207, 236, 220, SX-202) 实测图及 $\uparrow$ 出土遗物



第132图 土坑 (SX-200A·B·C·D, SK-203, 206) 实测图



第133图 土坑 (SX-200) 出土遗物

SK-207, 236, SX-202 (第131図)

SK-207は5F84-4に、SK-236は5F74-18に位置する。いずれも単独で検出したもので、土坑というよりもピット状を呈する。SX-202は5F74-13に位置する。形態は不整形である。

SK-208, SK-224 (第111図)

いずれも5F84-3に位置する。SK-208は楕円形、SK-224は不整な長方形を呈する。SB-200はこれら土坑が埋没した後に構築される。

SK-203 (第132図)

5F84-9に位置する。ピット状の土坑である。

11. 溝

SD-200, 201, 202, 203 (第134図)

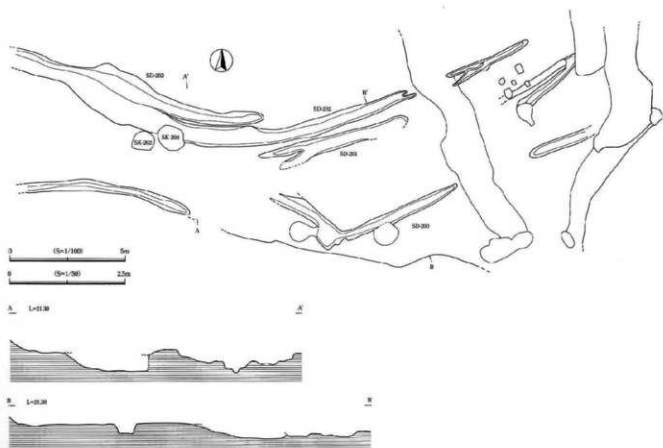
第2区画の南端、いずれも5F84-13から5F84-15にかけて分布し、幅0.5m、深さ0.2mほどを測る。それぞれ断面形態は類似し、平行している。門柱跡に比定したSK-200とSK-201で挟まれた部分から北に向かって掘削痕が顕著でわずかに窪む。この部分を境に溝もとぎれている。走向から、排水の目的は果たしていたと考えられるもの、先に記した水利施設とは関係が弱いように思われる。

SD-204・209, 205 (第135, 136図)

5F84-15から5F74-23にかけてSD-209, SD-204が巡っている。これらは一連の溝である。SD-209の始まる南端には、その壁面に湧水がしみでる孔がある。その直下はやや掘り窪めて湧水の受け口を設けている。しかし、横井戸のように貯水しておく土坑は構築しておらず、そのまま溝へかけ流しにしており、SK-227に類似している。ここから途中横井戸を介しながら斜面際を北流する。幅広で深く、断面形態が台形を呈する点は、SD-207を除いて、他の水利に関わる溝とは形態が異なる。また、他の土坑と連結していない。SX-207前面の溝底が深く掘り窪められたり、5F84-5で溝の幅を広げて4×3mの長方形の土坑状に

第17表 C3区 溝計測表(2)

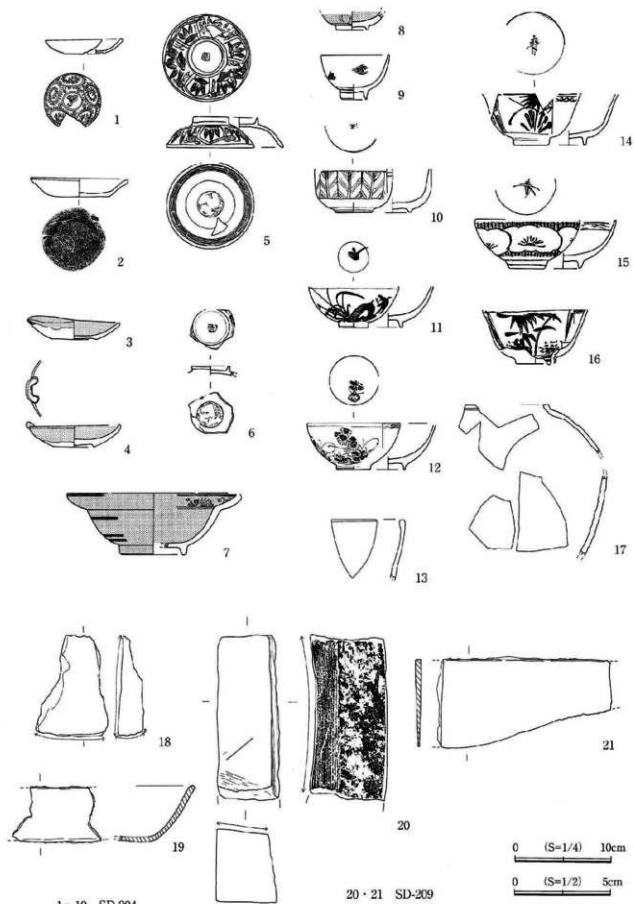
遺構番号	連結する遺構	長さ(m)	最小幅(m)	最大幅(m)	最小深さ(m)	最大深さ(m)	時期	備考
SD-200		9.4	0.2	1.3	-	0.2	近世	SD-201, 202, 203と並行
SD-201		9.8	0.3	0.8	0.1	0.2	近世	SD-200, 202, 203と並行
SD-202		15.0	0.2	0.9	-	0.2	近世	SD-200, 201, 203と並行
SD-203		11.2	0.3	2.2	0.1	0.7	近世	SD-200, 201, 202と並行
SD-204	SK-237, 235, SD-209, 208	15.2	0.2	1.0	-	0.4	近世	排水溝?
SD-205		9.0	1.2	1.5	-	0.1	近世	浅い溝
SD-209	SX-204, 205, 207	34.3	0.6	3.5	0.1	1.4	近世	工具痕顕著。植物遺存体多量。
SD-206	SK-232, SK-213	6.7	0.3	0.7	0.1	0.2	近世	排水溝。竹の管埋設。途中に水溜。
SD-211	SX-208, 209, 210, SK-229, 228, 233, 237, SE-200, SD-209	23.6	0.2	0.9	-	0.3	近世	
SD-221	SX-201	9.7	0.2	0.7	-	0.3	近世	
SK-226		2.9	-	0.6	0.1	0.4	近世	溝状で細長い。南側の断面方形の溝と関連?
SD-207	SK-228	24.0	1.7	4.8	0.2	0.7	近世	幅広で、断面箱形。
SD-210	SD-207	5.1	1.4	1.8	0.4	0.6	近世	



第134图 溝 (SD-200~203) 実測図







第136图 溝 (SD-204, 209) 出土遺物

している点から、溝自体が貯水の機能も果たしていたと考えられる。遺物は少なく、砥石や刃物の他、瀬戸・美濃の灰釉皿、塀の摺鉢が出土している。

SD-204はSD-209が5F74-24で斜面下に向かって方向を変えたものである。幅狭で浅い。斜面下に向かって他の土坑からの溝が合流する点から、排水を目的としたものである。何度か掘り直されている。遺物はSD-209と違い、瀬戸・美濃の椀や肥前の椀や紅皿、志戸呂の灯明皿など、多く出土している。

SD-205は5F84-4で部分的に検出した。幅は広いものの、浅く、他の水利施設を含めた遺構群とは関連性がうかがえない。遺物は出土しなかった。

#### SD-206,211,221,SK-226 (第137図)

5F74-13から5F74-24にかけて分布する。SD-211は横井戸を介しながら斜面際に巡っているが、南側がSX-208前面で屈曲してSD-209と、北側ではSD-207と合流していることから、走向は一方ではなかったようである。そこから派生する溝が多く水利土坑と連結している。しかも、重複していたり、掘り直したりしていることから、同時に機能していたわけではない。SD-209とは形態や深さが異なっている点も考慮すると、用水路としての機能を果たしていたであろう。遺物は出土していない。

SD-206は5F74-18から5F74-23にかけて分布している。SK-232とSK-213とを連結している。一部平行して2条検出できた。また、SK-232との接続部分は土坑埋没後に掘削されていることから、当該土坑は北側に掘り直したのであろう。途中で水を溜めておく穴が掘削されている。この穴からSK-232にかけて、竹の節をくり抜いた管を埋設している。遺物は出土していない。

SD-221は5F74-17,18に分布している。斜面下に向かって階段状に走る。他の水利施設からは離れているが、これらの遺構に囲まれるように浅く方形に段差が巡っていることから、水利との関係を否定することはできない。遺物は出土していない。

SK-226は壁の立ち上がりが確認できるものの、ほかに類似した土坑がなく、SD-221と平行することから、この項に含めた。遺物は出土していない。

#### SD-207,210 (第138図)

SD-207は5F74-11から5F74-13にかけて分布している。SB-202と重複する。SD-211が5F74-13で走向を変えたもので、第2区画の縁辺を巡る。幅広で、断面が台形状を呈し、途中深く掘り窪められた部分がある。形態と走向から、排水の機能とともに貯水の機能も果たしていたと考えられる。瀬戸・美濃の椀や鉢、肥前の椀や合子蓋、土瓶、刃物の類が出土している。

SD-210は5F74-8に分布する。第3区画から第2区画にかけて位置し、SD-207に合流する。底面には側溝が巡る。瀬戸・美濃の椀や肥前の椀、皿、蓋などが出土している。

#### 12. 遺構外の出土遺物 (第139～141図)

陶磁器類のほか砥石や瓦、刃物類などが出土している。個々の内容については表を参照されたい。

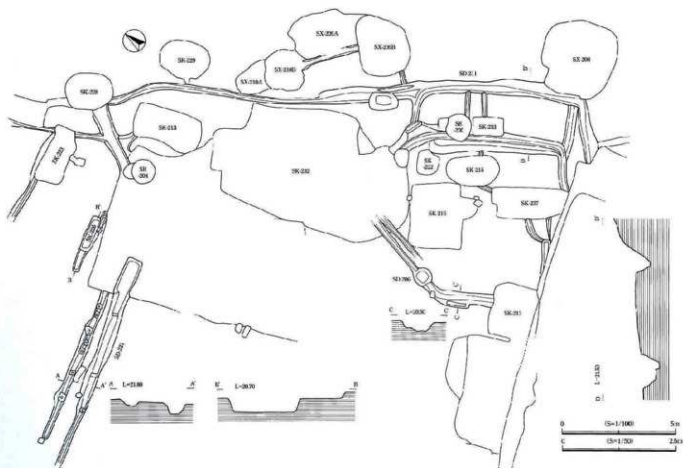


图137 埼玉 (SD-206, 211, 221, SK-226) 发掘图

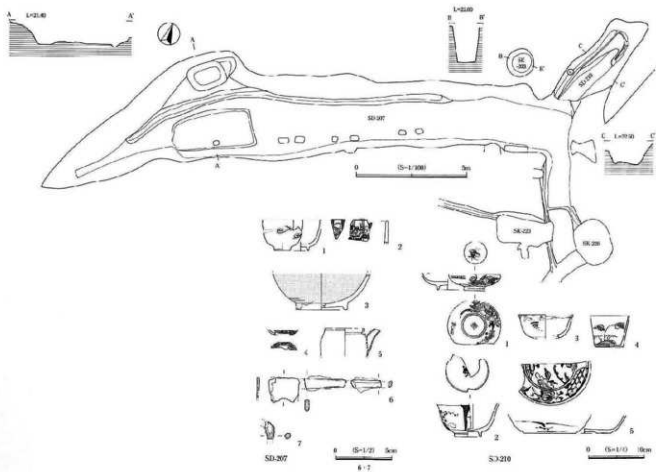
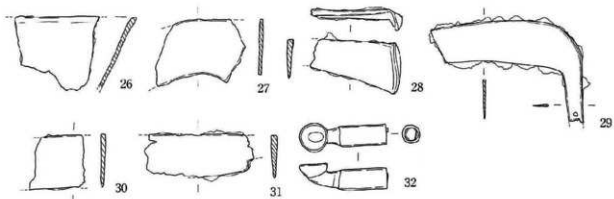
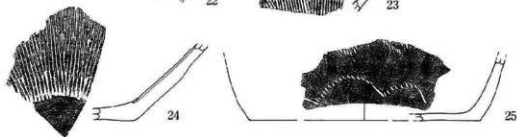
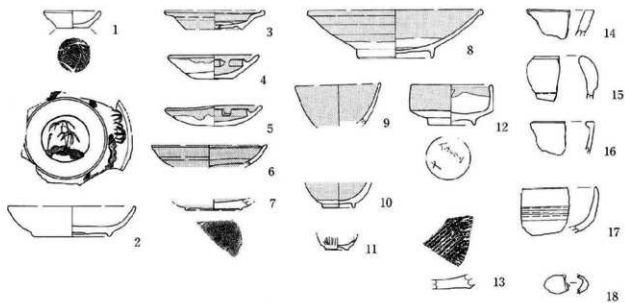
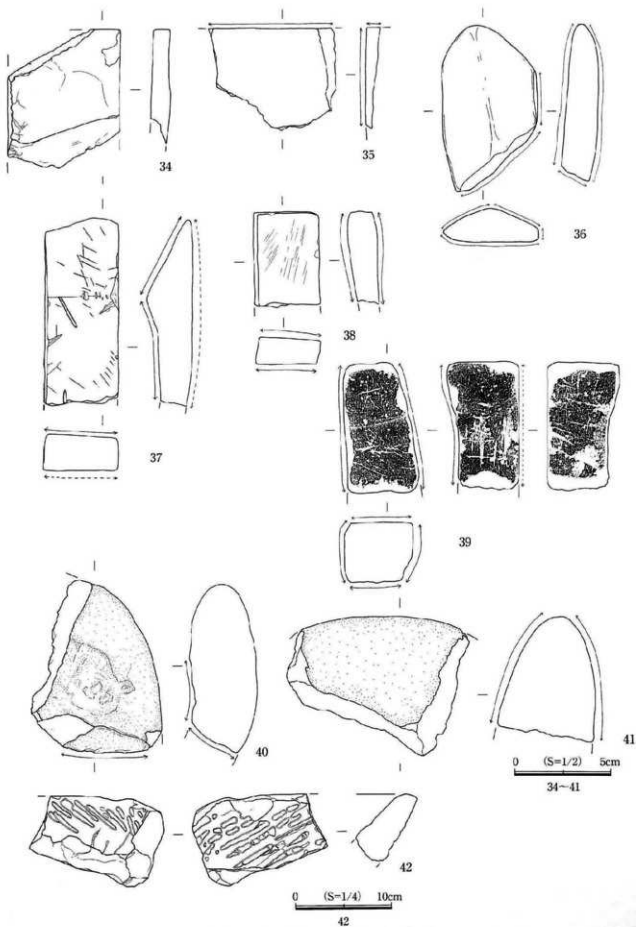


图1383 溝 (SD-207, 210), 井戸 (SE-203) 実測図及び出土遺物

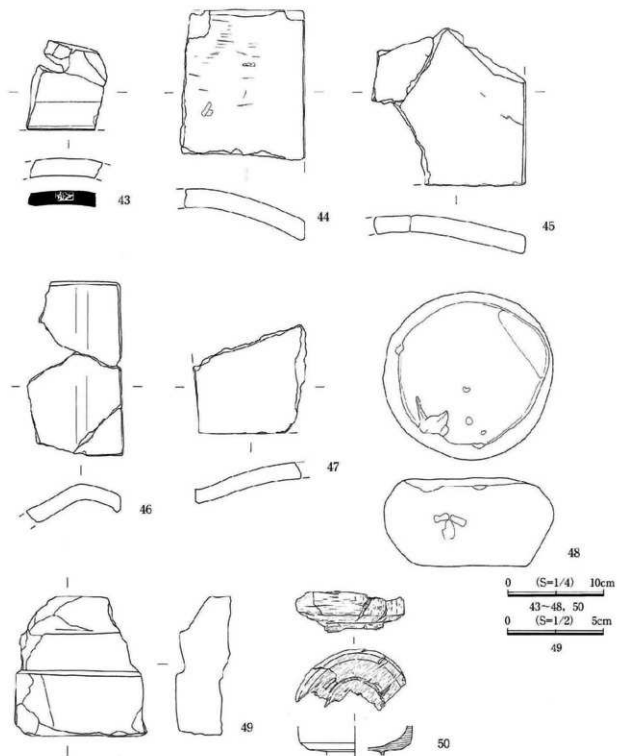


0 (S=1/4) 10cm 1~25, 29  
0 (S=1/2) 5cm 26~33

第139図 遺構外出土遺物 (1)



第140図 遺構外出土遺物(2)



第141図 遺構外出土遺物(3)



第18表 C3区古代出土遺物一覧

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	種別 種別 器種	計測値と形態の特徴			備考
		計測値(mm)	形状・形態の特徴	色調など	
SI-201	第91図-1	磁石	長さ99mm, 幅31, 厚さ51mm,		No.1
SI-202	第92図-1	土師器 杯	口径:139 器高:(35)	底部から口縁部にかけて内湾する。底部は丸底か、内外面両面により調整は不明。	橙褐色 No.1, 6, 9
	第92図-2	土師器 壺	口径:(248) 器高:(55)	頸部から口縁部にかけて外反し、口唇部はわずかにつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナズ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	橙褐色 No.4
SI-203	第93図-1	土師器 小皿	口径:(122) 器高:30 底径:64	ロクロ製形。底部から体部下端にかけては括れる。体部は下端で屈曲して口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整。	明褐色 No.2
	第93図-2	土師器 椀	口径:136 器高:54 底径:60	ロクロ製形。底部は体部との間でわずかに括れつつきで、体部は内湾し、口縁部にかけては直線的に立ち上がる。底部は回転糸切り後未調整。	明褐色 No.9
	第93図-3	土師器 甕	口径:(183) 器高:(67)	口縁部は頸部から短く外反し、口唇部は直立する。器壁は厚く、口唇部は三角形状を呈する。外面は頸部から口縁部にかけてナズ。胴部は縦方向のヘラケズリを呈す。	明褐色 No.27
	第93図-4	土師器 甕	口径:191 器高:(128)	口縁部は頸部から短く外反し、口唇部は直立する。器壁は厚く、口唇部は三角形状を呈する。外面は頸部から口縁部にかけてナズ。胴部は厚縁が著しいが、部分的に横なめしのケズリ。内面は横方向のナズ。	橙褐色 No.11, 12, 16-21, 25
	第93図-5	土師器 甕	器高:(109) 底径:(114)	器壁は厚い。外面は斜め方向のヘラケズリ。内面は横方向のヘラケズリ。	橙褐色 No.3, 5
	第93図-6	土師器 甕	口径:160 器高:(206) 胴部径:200	口縁部は頸部から短く外反し、口唇部は直立する。器壁は厚く、口唇部は三角形状を呈する。外面は頸部から口縁部にかけてナズ。胴部は上半は縦方向に、下半は横方向のヘラケズリ。内面は横方向のナズ。	橙褐色 No.4, 6, 8, 11, 15, 24
	第93図-7	土師器 甕	器高:(29) 底径:(102)	内外面とも風化している。	橙褐色 No.25
SK-234	第94図-1	土師器 杯	口径:(116) 器高:38 底径:65	ロクロ製形。底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる。厚縁しており、底部の調整は縦縁できない。	淡褐色 No.7
	第94図-2	土師器 杯	口径:(129) 器高:38 底径:73	ロクロ製形。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は手持ちヘラケズリ。	淡褐色 No.10
	第94図-3	土師器 杯	口径:123 器高:35 底径:60	ロクロ製形。底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。底部は厚縁しているが、直縁部にヘラケズリの痕跡あり。体部下端はヘラケズリか。	淡褐色 No.3, 14, 17, 19
	第94図-4	土師器 杯	口径:126 器高:41 底径:63	ロクロ製形。体部はややふくらみをもつ。底部は回転糸切り後周縁部をヘラケズリ。体部下端はヘラケズリで、底部との間で明確な縁線がたつ。	淡褐色 一括23
	第94図-5	土師器 杯	口径:(120) 器高:35 底径:(66)	ロクロ製形。体部はややふくらみをもつ。口唇部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色 No.13
	第94図-6	土師器 杯	口径:(124) 器高:35 底径:60	ロクロ製形。体部下端はややふくらみをもつ。口唇部はわずかに外反する。底部は回転糸切り。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色 一括22
	第94図-7	土師器 杯	口径:127 器高:37 底径:60	ロクロ製形。体部はややふくらみをもつ。口唇部はわずかに外反する。底部は回転糸切り後周縁部を手持ちヘラケズリ。体部下端はヘラケズリか。	淡褐色 No.12
	第94図-8	土師器 杯	口径:(144) 器高:(30)	ロクロ製形。器壁は厚く、口径に比して器高が低い。体部下端はヘラケズリ。	淡褐色 No.16 内面は黒色処理
	第94図-9	土師器 甕	口径:(124) 器高:(48)	口唇部はつまみ出される。外面は頸部から口縁部にかけてナズ。胴部は縦方向のヘラケズリ。	暗褐色 No.4
	第94図-10	土師器 板	口縁部片		褐色 一括24
	第94図-11	須恵器 板	口縁部片		暗赤褐色 一括25
	第94図-12	転用磁石	38mm×42mm, 須恵器破片を転用。		一括26
	第94図-13	磁石	長さ43mm, 幅39, 厚さ22mm, 下端部分が磨滅する。		一括7
遺構外	第95図-1	土師器 壺か	口径:(18) 底径:(71)	外面は刷毛目。内面はヘラケズリ。底部には木重痕。	SP94-3 一括5

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	押図No.	種別 器種	計測値と形態の特徴			備考	
			計測値(mm)	整形・形態の特徴	色調など		
遺構外	第95図-2	土師器 底器片		丸底か	灰褐色 底部に緑彩	5F64-22	
		須恵器 長頸瓶	口縁部片	頸部にハケ目の装文。	灰色	SK-251	
	第95図-4	須恵器 甕	器高: <54> 底径: (140)	胴部外面は上方がタタキ目、下部はヘラズリ装ナデ。		暗褐色	SX-2098
		転用底石	須恵器破片を転用、内面及び断面が磨滅している。上縁縁辺には意図的な斜溝。				5F64-3
	第95図-6	土玉	径19mm				
	第95図-7	土製管玉	長さ330mm、径8mm			5F64-19	
	第95図-8	紡錘車	木製品、径50mm、厚さ17mm、中心は未穿孔。			5F74-2	

第19表 C3区中世出土遺物一覧

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	押図No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SB-201	第96図-1	片岩	150×97×15, 277g	
SX-211	第99図-1	かわらけ	口径(112)、器高34、底径44	
SX-206	第99図-1	磨石	68×48×37	
SK-239	第100図-1	磨石	<72>×33×32	
SD-216	第100図-1	かわらけ	口径(93)、器高32、底径(33)	
	第100図-2	緑釉小皿	口径(110)、器高<25>	志戸呂産。16世紀
	第100図-3	緑釉小皿	口径(110)、器高<20>	志戸呂産。16世紀
SK-242	第101図-1	石塔破片	<81>×160×<126>	宝篋印塔
	第101図-2	磨石	140×64×48	
	第101図-3	石塔	88×165×88	五輪塔水輪
	第101図-4	飾り金具	30×33×1	
SK-246	第102図-1	茶釜	口径(142)、器高<117>	
SK-250	第102図-1	かわらけ	口径(70)、器高21、底径(48)	
SK-248, 253	第103図-1	かわらけ	口径(100)、器高28、底径(48)	
	第103図-2	鉢	口径(308)、器高<94>	
SD-213	第106図-1	内耳土器	口径(316)、器高<77>	
	第106図-2	甕	底部破片	常滑産(13世紀)
	第106図-3	磨石	59×51×30	
	第106図-4	砥石	154×35×33	
SD-214	第106図-1	小皿	口径(100)、器高23、底径(57)	瀬戸産。大塚期(16世紀)
	第106図-2	甕	口縁部破片	常滑産
	第106図-3	片口鉢	器高<93>、底径(142)	常滑(知多)産
	第106図-4	磨石	102×114×94	
	第106図-5	磨石	長さ<125>、幅<115>、厚さ28	
	第106図-6	磨石	223×110×105	
SD-215	第108図-1	磁器	口縁部破片	白磁。13世紀後半。
	第108図-2	鉢	底部破片	志戸呂産
SX-203	第110図-1	かわらけ	口径(114)、器高34、底径44	
	第110図-2	三魚皿	口縁部破片	
	第110図-3	香炉	口径(110)、器高61、底径(110)	
	第110図-4	香炉	口縁部破片	

第20表 C3区近世出土遺物一覧

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	押図No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SB-200	第111図-1	丸碗	口径(116)、器高<53>	瀬戸産
	第111図-2	陶製品	長さ34、幅25、厚さ16	関小猿
	第111図-3	鉄製品	51×35×17	
SK-208	第111図-1	天目茶碗	口径(142)、器高<60>	瀬戸産。近世初期。
SK-243	第114図-1	銭貨		永楽通宝
	第114図-2	銭貨		寛永通宝
SK-200, 201	第115図-1	鉄製品	31×30×30	
	第115図-2	鉄製品	39×69×2	
	第115図-3	鉄製品	36×29×1	

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	採区No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特 徴
SK-200, 201	第115図-4	竹釘	37×4×4	
	第115図-5	鉄製品	34×39×9	
SK-210, 211, 225	第115図-1	鉄製品	11×18×1	
	第115図-2	槽鉢	底部破片	堺産, SK-211P
SK-228	第116図-1	磁茶碗	器高<34>, 底径(40)	瀬戸・美濃産
	第116図-2	鉄輪鉢	口縁部破片	瀬戸・美濃産
	第116図-3	槽鉢	口縁部破片	堺産
	第116図-4	槽鉢	胴部破片	堺産
	第116図-5	砥石	<112>×<47>×39	
第116図-6	砥石	80×71×35		
SK-209	第118図-1	鉄線丸須大皿	口径(264), 器高50, 底径(126)	瀬戸・美濃産
	第118図-2	染付碗	口径87, 器高58, 底径32	肥前産, 209B
	第118図-3	砥石	100×60×32	209B
	第118図-4	砥石	195×48×53	209B
	第118図-5	砥石	<99>×30×14	209B
	第118図-6	砥石	56×41×35	209B
	第118図-7	砥石	51×45×22	209B
	第118図-8	下駄	213×69×34	209B
SK-210	第118図-9	漆器碗	器高<48>	210A
	第118図-10	漆器碗	器高<61>, 底径62	210A
SK-207	第120図-1	石塔	237×215×152	
	第120図-2	瓦	221×<115>×17	
	第120図-3	釘	18×4×3	
SK-204B	第121図-1	鏡貨		文久永宝
SK-223	第123図-1	染付広夏碗	口径118, 器高61, 底径	肥前産
SK-232	第123図-1	付飯碗形碗	つまみ径, 器高77, 口径101	肥前産
	第123図-2	槽鉢	口径308, 器高125, 底径134	堺産
	第123図-3	槽鉢	底部破片	堺産
	第123図-4	磨石	82×58×25	
SK-212, 213	第124図-1	染付端灰碗	口径107, 器高62, 底径41	瀬戸・美濃産, 19世紀前半
	第124図-2	灰輪徳利	器高153	瀬戸・美濃産
	第124図-3	磨石	<75>×<70>×<28>	
	第124図-4	煙管	径10, 長さ21	
SS-200	第126図-1	染付端灰碗	口径105, 器高55, 底径43	瀬戸・美濃産, 19世紀前半
	第126図-2	染付碗	器高<46>, 底径39	肥前産
	第126図-3	種子	26×18×14	
	第126図-4	箸	188×6, 7	
SK-221, 222	第126図-5	丸形小鉢	口径66, 器高39, 底径41	瀬戸・美濃産, 17世紀, 221
	第126図-6	槽鉢	口縁部破片	堺産, SK-222
	第126図-7	鉄輪	口縁部破片	SK-222
	第126図-8	急須	注口部破片	SK-222
	第126図-9	鏡貨		寛永通宝, SK-221
	第126図-10	槽鉢	口径37, 器高140, 底径170	堺産, 橋下, SK-222
SK-216	第126図-11	染付皿	口径(128), 器高40, 底径70	肥前産
	第126図-12	灰輪鉢	器高47, 底径46	瀬戸・美濃産
	第126図-13	灯明皿	口径110, 器高20, 底径51	瀬戸・美濃産
SK-230	第127図-1	片岩	63×76×24, 166g	
	第127図-2	釘	65×6×5	
	第127図-3	刃物	32×68×1	
	第127図-4	釘	31×5×4	
SK-235	第127図-1	砥石	61×51×22	
	第129図-1	石	<130>×<80>×50	
	第129図-2	石	<116>×<158>×41	
	第129図-3	砥石	<220>×<231>×86	
SK-207	第131図-1	白磁皿	口径(14), 器高<23>	肥前産
SK-236	第131図-2	鉄輪鉢	口縁部, 底部破片	常滑産
SK-202	第131図-3	刃物カ	39×55×5	
SK-200	第133図-1	丸皿	口径(110), 器高28, 底径84	瀬戸産, 16世紀, SK-200B

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	標本No.	種別・器種	計測値(mm, g)	特徴
SX-200	第133図-2	皿	口径(146), 器高<23>	SX-200A
	第133図-3	片口鉢	口径(144), 器高<45>	瀬戸産。18世紀。SX-200A, B
	第133図-4	灰輪丸形小杯	口径62, 器高38, 底径34	瀬戸・美濃産。18世紀。200A
	第133図-5	灰輪丸形小杯	口径(62), 器高39, 底径32	瀬戸・美濃産。19世紀。200B
	第133図-6	赤絵灰輪丸形小杯	口径88, 器高50, 底径36	SX-200B
	第133図-7	染付丸碗	口径101, 器高49, 底径38	肥前(波佐見)産。SX-200B
	第133図-8	染付蓋利用	32×41×13	肥前産。刑器に再利用。
	第133図-9	燈茶碗	口径(87), 器高<61>	瀬戸・美濃産。SX-200B
	第133図-10	燈茶碗	口縁部破片	瀬戸・美濃産。SX-200B
	第133図-11	灯明皿	口径91, 器高21, 底径29	関東。SX-200B
	第133図-12	灰輪五合徳利	器高<12>, 底径(88)	SX-200B
	第133図-13	藍軸香炉	口径102, 器高46, 底径82	瀬戸・美濃産。SX-200B
	第133図-14	鉄軸鉢	口縁部破片	瀬戸・美濃産。SX-200B
	第133図-15	摺鉢	口径(278), 器高<43>	瀬戸産。大塚期。SX-200D
	第133図-16	紙石	88×34×22	SX-200D
	第133図-17	紙石	85×32×22	SX-200D
	第133図-18	紙石	61×28×10	SX-200D
	第133図-19	紙石	59×19×12	SX-200D
	第133図-20	瓶	破片	SX-200B
	第133図-21	土製品	破片	SX-200B
	第133図-22	刃物	42×90×2	SX-200D
	第133図-23	鉄製品	15×32×5	SX-200D
	第133図-24	鉄製品	34×46×7	SX-200D
	第133図-25	鉄釘	26×8×6	SX-200D
	第133図-26	小刀	24×144×5	SX-200D
	第133図-27	鉄製品	29×33×3	SX-200D
	第133図-28	銅製飾り金	9×20×3	SX-200D
	SD-204	第136図-1	白磁紅皿	口径60, 器高16, 底径20
第136図-2		かわらけ	口径102, 器高18, 底径58	
第136図-3		灯明皿	口径97, 器高21, 底径45	志戸呂産
第136図-4		灯明皿	口径96, 器高23, 底径42	瀬戸・美濃産
第136図-5		染付燗反碗	口径93, 器高32, つまみ径48	肥前産
第136図-6		染付碗蓋	つまみ径39	肥前産
第136図-7		鉄給皿	口径(90), 器高(32), 底径(35)	瀬戸・美濃産
第136図-8		若松碗	器高19, 底径35	京・信楽産
第136図-9		染付丸碗	口径71, 器高48, 底径28	瀬戸・美濃産
第136図-10		染付碗	口径82, 器高47, 底径38	肥前産
第136図-11		染付碗	口径95, 器高45, 底径31	肥前産
第136図-12		染付丸碗	口径98, 器高49, 底径36	肥前産
第136図-13		白磁香炉	口縁部破片	肥前産
第136図-14		染付燗反碗	口径103, 器高56, 底径38	瀬戸・美濃産
第136図-15		染付燗反碗	口径(110), 器高52, 底径38	
第136図-16		染付燗反碗	口径109, 器高58, 底径42	瀬戸・美濃産。19世紀前半
第136図-17		鉄軸壺	破片	常滑産
第136図-18		片岩	107×75×28, 237g	
第136図-19		鉄製容器	口縁部破片	
SD-209	第136図-20	紙石	87×33×39	
	第136図-21	刃物	46×87×3	
SD-207	第138図-1	染付丸碗	口径73, 器高56, 底径29	瀬戸・美濃産
	第138図-2	色絵筒茶碗	口縁部破片	肥前産
	第138図-3	灰輪鉢	器高65, 底径92	瀬戸・美濃産
	第138図-4	合子蓋	口径56, 器高11	肥前産
	第138図-5	土瓶	口径70, 器高<50>	常滑産
	第138図-6	刃物	破片	
	第138図-7	鉄製品	17×9×6	
SD-210	第138図-1	染付碗蓋	口径94, 器高30, つまみ径38	肥前産
	第138図-2	染付燗反碗	口径11, 器高62, 底径47	瀬戸・美濃産
	第138図-3	色絵燗反碗	口径100, 器高<44>	肥前産

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

出土地点	標図№	種別・器種	計測値(mm. g)	特 徴
SD-210	第138図-4	猪口	口径(70), 器高58, 底径51	
	第138図-5	染付皿	口径150, 器高35, 底径92	肥前産
5F-74-17P	第139図-1	かわらけ	口径60, 器高19, 底径35	
5F-84-25	第139図-2	染付皿	口径(134), 器高32, 底径80	肥前産
表探	第139図-3	折縁皿	口径(106), 器高20, 底径(60)	瀬戸産, 大塚期。
5F-84-25	第139図-4	灯明皿	口径98, 器高25, 底径40	瀬戸・美濃産
表探	第139図-5	灯明皿	口径103, 器高22, 底径43	瀬戸・美濃産
5F-84-3	第139図-6	皿	口径(122), 器高(22)	志野(?)産。近世初期。
5F-84-7	第139図-7	大皿	底部破片	志野産。登り窯期。
SX-201	第139図-8	大皿	口径(182), 器高52, 底径76	
5F-84-13	第139図-9	灰軸端反碗	口径(90), 器高(43)	京産
表探	第139図-10	灰軸端反碗	口径(90), 器高53, 底径37	信濃産
表探	第139図-11	白磁小皿	器高90, 底径24	肥前産
表探	第139図-12	灰軸香炉	口径85, 器高42, 底径50	瀬戸・美濃産
5F-74-22	第139図-13	摺鉢	底部破片	備前産
5F-84-8	第139図-14	不明	口縁部破片	瀬戸・美濃産
表探	第139図-15	灰軸鉢	口縁部破片	瀬戸・美濃産
5F-84-8	第139図-16	香炉	口縁部破片	唐津産
5F-74-17	第139図-17	摺縁軸茶碗	口縁部破片	瀬戸・美濃産
SD-207	第139図-18	人形か?	破片	肥前産
表探	第139図-19	摺鉢	口縁部破片	堺産
5F-84-10	第139図-20	摺鉢	口縁部破片	堺産
5F-84-9	第139図-21	不明	口縁部破片	
5F-84-2	第139図-22	摺鉢	口縁部破片	丹波産, 17世紀。
表探	第139図-23	摺鉢	口縁部破片	瀬戸・美濃産
5F-84-25	第139図-24	摺鉢	底部破片	堺産
5F-84-7	第139図-25	火舎	底径(240), 器高<77>	瀬戸・美濃産
5F-74-19, 24	第139図-26	鉄製桶	38×44×2	
表探	第139図-27	鎌か	29×44×2	
5F-74-15	第139図-28	鎌	27×48×3	
5F-84-9	第139図-29	鎌	106×161×3	
5F-74-17	第139図-30	刃物	29×29×2	
5F-84-14	第139図-31	刀子	23×57×3	
5F-84-24	第139図-32	煙管	47×14×10	
5F-74-6	第140図-33	銭貨		寛永通宝
表探	第140図-34	砥石	<74>×60×<11>	
5F-74-17	第140図-35	硯	<54>×<67>×<7>	
表探	第140図-36	砥石	<89>×50×18	
5F-84-10	第140図-37	砥石	100×38×24	
5F-84-10	第140図-38	砥石	51×34×16	
5F-74-19	第140図-39	砥石	69×39×38	
5F-84-10	第140図-40	磨石	91×<68>×36	
5F-84-10	第140図-41	磨石	<73>×<95>×51	
5F-63-2	第140図-42	石鉢	口縁部破片	
5F-84-2	第141図-43	瓦	<94>×<83>×18	
5F-84-9	第141図-44	瓦	<158>×<131>×19	
5F-84-2	第141図-45	瓦	<165>×<160>×20	
5F-84-2	第141図-46	瓦	183×<100>×17	
表探	第141図-47	瓦	<115>×<118>×18	
5F-63-20	第141図-48	五輪塔	水輪 177×176×93	
5F-64-22	第141図-49	宝篋印塔	破片 73×69×35	
5F-74-19	第141図-50	漆器碗	器高<43>, 底径(60)	

## 第4章 C4区の調査

C4区は、神山谷遺跡と城山遺跡の間に挟まれた谷部の東側斜面に位置する(第142,143図)。谷の東西両斜面の遺構群は関連性が強いと考えられ、本来はすでに報告済みの城山遺跡と遺跡名を分けるのは難しい。遺構確認面は雑壇上に大きく四面あって、それぞれの平坦面について、谷中央に近い北側の低位面を第1区画、その東側上段を第2区画、第1区画の南側でやや標高の高い部分を第3区画、第2区画の南側を第4区画と呼称する。第1区画で検出した遺構は、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡群を主体とする。竪穴どおしの重複は著しく、壁の遺存状況は良好とは言いが、中世以降の台地整形などの造成をあまり受けていないようである。調査前の地形もなだらかな斜面であり、後世の影響が少なく集落跡の様相をよく残していると考えられる。第2区画では中世の遺構を主体的に検出している。台地斜面の掘削による整形が行われているものの、平坦面の谷斜面側で辛うじて古代の竪穴住居跡を検出した。このことから谷側の整形は少なく、台地側の高い部分を掘削し、平坦面を作り出したものと考えられる。第3区画は第1区画よりも若干標高が高い。平坦面は狭く、遺構密度は小さい。縄文時代の落とし穴や古代の竪穴住居跡が見つかったことから、大規模な造成は行われていないようである。第4区画は第3区画の東、台地側の上段に位置し、溝によって区分されている。遺構はほとんど検出しなかった。遺構密度の点から見ると、第2区画の南側も空白地帯が広がっており、分断している溝を除くと連続した造成面ともいえる。

### 第1節 縄文時代

縄文時代の遺構、遺物はいたって少ない。遺構では落とし穴を2基検出した。調査区内から出土した遺物は、台地斜面の後世の整形によって土砂が移動し、二次的な堆積による可能性が高い。谷部の西側(城山遺跡)では燃糸文土器が多量に出土しており、出土量としては対照的なあり方である。

#### 1. 遺構

##### SK-307 (第144図)

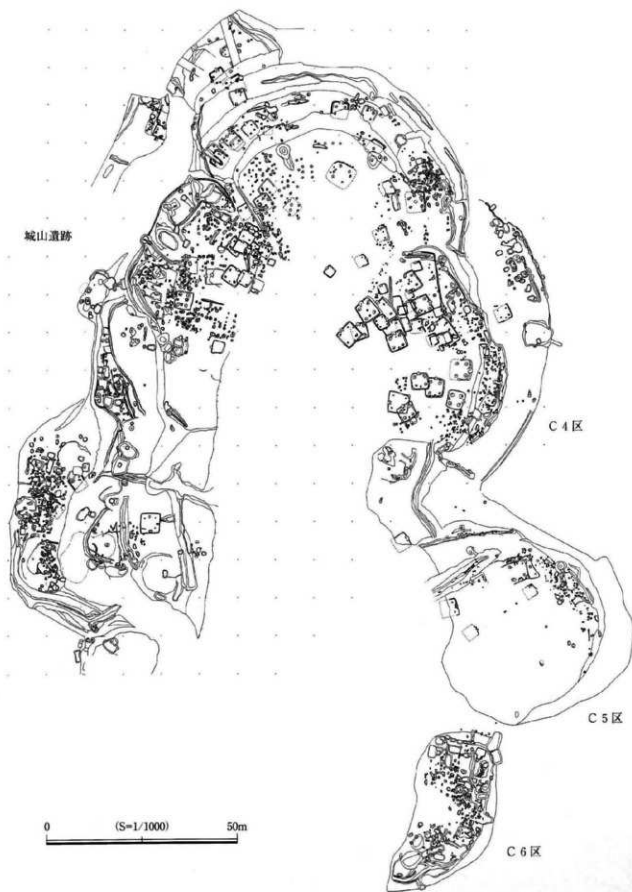
5F34-4で検出した。形態はいわゆる長楕円形を呈するが、長軸はやや短く、一般的にみられるものと比べれば小規模である。覆土は下位にローム主体の黄色の土が、上位に暗褐色の土が堆積している。遺物は出土していない。

##### SK-319 (第144図)

5F14-25で検出した。長軸に対して短軸の幅がやや大きく、形態は楕円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がっており、西側壁はややオーバーハングしている。遺物は出土していない。

第21表 C4区 落とし穴計測表

遺構番号	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK-307	5F34-4	N-20°-E	1.6	0.5	1.2	-
SK-319	5F14-25	N-9°-E	1.5	(0.7)	1.0	-

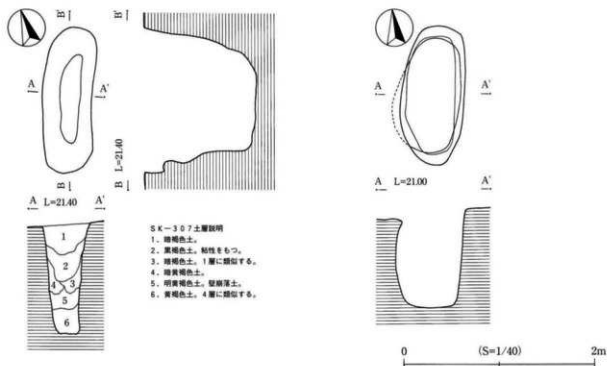


第142図 谷奥（城山，神山谷C4～C6区）遺構配置図









第144図 SK-307, 319実測図

## 2. 遺物 (第145図)

出土した遺物は、縄文土器に限られる。1は早期の撚糸文系土器である。3は沈線文系土器である。内湾する口縁部で口唇部内面にきざみを伴い、外面にも同一のきざみを施文している。2, 4~7は条痕文系土器である。8~12は中期加曾利E式である。

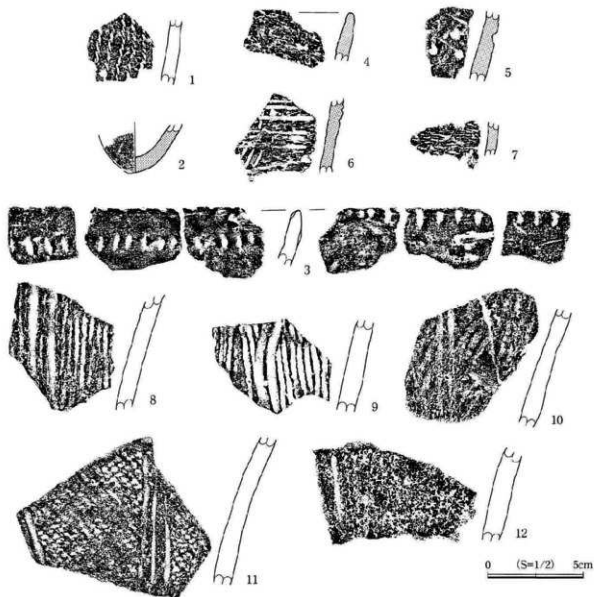
その他、SI-302,303,313,319,321,328の石器は縄文時代に属するものであろうか。また、遺構外からもその可能性がある石器が出土している。

## 第2節 古墳時代から平安時代

第1区画を主体として竪穴住居跡を多数検出した。総体的にみると古墳時代から平安時代の後半まで、断続的ながらも谷底が利用されており、集落の立地としては安定していた様相が窺える。ただし、城山遺跡で台地上と台地下の住居跡の性格が異なる可能性が示唆されていることから、ここで検出した住居跡群も城山遺跡及び神山谷遺跡B区といかなる関係を有していたかは改めて検討する必要がある。

掘立柱建物跡は6棟確認することができたが、第1区画の台地側縁辺には多数のピットが見つかっており、その他にも存在していた可能性はある。このうち、第1区画と第2区画の間には小さい面積の平場が造成されており、建物1棟を検出した。住居跡群よりも高い段にあり、独立した立地状況であることから、他に比べて特別な建物であったろうか。土坑は住居跡群の周辺に分布するものが多い。墓として判断した土坑は、居住域に重複するように分布する。

他の区画での古代の遺構は少ない。中世以降に造成されたために消失した可能性はあるが、SI-301, 307などを除くと、谷側縁辺でも痕跡すら確認することができなかった点を考慮すると、本来的には第1区画の標高より高い地点には立地しなかったのであろう。



第145図 C4区出土縄文土器

### 1. 竪穴住居跡

上地の利用空間はもともと狭いものの、分布域は古墳時代から平安時代にいたるまでほとんど変わらず、重複が著しい。そのため、竪穴の時期とは異なる遺物が覆土内に混入しているものがある。また調査区は東から西に傾斜していることから、西側の壁が検出できなかった例が多い。さらに、SX-303は土坑に含めたが、その立地や燃焼施設の構造を考慮すると竪穴住居跡の可能性もある。

### SI-301 (第146図)

検出状況 5F34-10に位置する。東側の約3分の2が遺存している。平面形態は隅が角張る。周溝や柱穴は精査したものの検出しなかった。意前面で焼土ブロックや灰が散在しており、右袖がわずかに遺存していた。

遺物と出土状況 遺物量は少ないが、竈周辺で坏類、小型甕がまとまって出土している。このうち1と

第22表 C4区 竪穴住居跡計測表

( ) は推定値 &lt; &gt; は遺存値

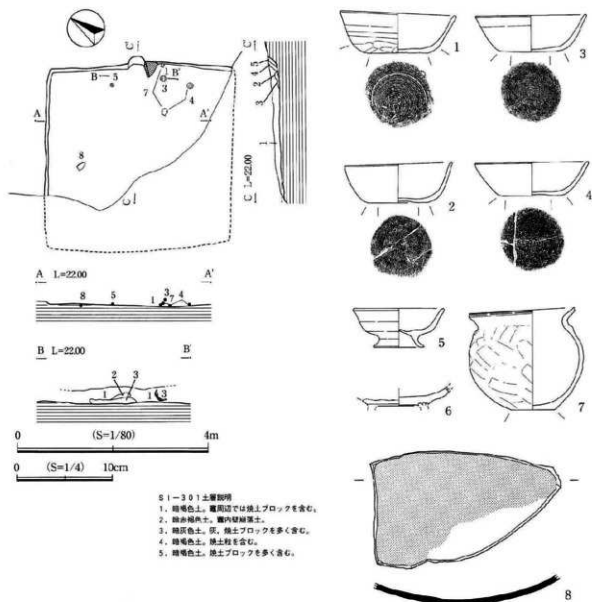
遺構番号	時期	位置	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)
SI-301	9世紀前半	5F34-10	N-58°-E	(4.1)	(3.9)	0.2
SI-302	8世紀後半	5F25-11	N-105°-E	4.6	5.0	0.7
SI-303	8世紀前半	5F24-15	N-36°-W	4.4	4.7	0.3
SI-304	8世紀前半	5F25-11	N-5°-E	5.5	4.8	0.9
SI-305	9世紀前半	5F24-15	N-10°-W	4.6	5.0	0.7
SI-306	9世紀後半	5F25-7	N-0°	2.8	(2.0)	0.2
SI-307	9～10世紀	5F25-2	N-27°-W	<4.6>	—	0.1
SI-308	10世紀前半	5F25-1	N-67°-E	2.5	2.5	0.2
SI-309	9世紀前半	5F25-6	N-94°-E	<4.6>	(5.5)	0.6
SI-310	9～10世紀	5F14-24	N-65°-E	(3.2)	3.1	0.1
SI-311	10世紀前半	5F14-25	N-20°-W	2.5	(2.5)	0.1
SI-312	9世紀後半	5F25-6	N-69°-E	(3.2)	3.1	0.1
SI-313	9世紀後半	5F25-6	N-21°-W	3.5	3.6	0.1
SI-314	6世紀前半	5F25-1	N-35.5°-W	7.7	(6.8)	0.6
SI-315	8世紀前半	5F24-5	N-26.5°-W	3.0	(2.9)	0.2
SI-316	10～11世紀	5F14-25	N-21°-W	2.1	(2.1)	0.1
SI-317	9世紀前半	5F14-24	N-20°-W	2.5	2.5	0.2
SI-318	9世紀	5F24-5	N-13°-W	2.5	2.6	0.3
SI-319	9世紀前半	5F14-25	N-31°-W	5.5	(5.8)	0.3
SI-320	11世紀以降	5F24-5	N-68°-E	<3.8>	3.9	0.3
SI-321	9世紀前半	5F24-5	N-65°-E	5.3	4.8	0.6
SI-322A	9世紀	5F24-5	N-78°-E	<3.1>	<2.5>	0.2
SI-322B	不明	5F24-5	N-25°-W	<1.8>	<1.9>	0.1
SI-323	6～7世紀	5F24-15	N-85°-W	5.4	5.5	0.6
SI-324	9世紀前半	5F24-10	N-22°-W	5.1	5.1	0.6
SI-325	8世紀後半	5F24-4	N-63°-E	4.1	3.9	0.5
SI-326	5世紀後半	5F24-4	N-46°-W	6.6	<3.1>	0.8
SI-327	11世紀	5F24-5	N-17°-W	<6.0>	<2.6>	0.4
SI-328	8世紀後半	5F24-4	N-35°-W	5.9	5.4	0.9
SI-329	7世紀後半	5F24-3	N-48°-W	5.3	5.5	0.4
SI-330	8世紀後半	5F24-4	N-15°-W	4.6	<2.3>	0.5
SI-331	8世紀後半	5F24-3	N-48°-W	2.8	2.7	0.2
SI-332	9世紀前半	5F24-5	N-26°-W	2.9	<2.8>	0.3
SI-334	8世紀前半	5F24-4	N-24°-W	5.4	5.2	1.0
SI-335	8世紀	5F25-6	N-24°-W	4.3	3.8	0.2
SI-336	5世紀前半	5F24-9	N-16°-W	4.5	5.0	0.5
SI-337	5世紀前半	5F24-14	—	—	—	—

3は重なって出土している。環は底部を回転糸切り後に周縁部を手持ちによるへら削りを施したものが主体を占める。図化した他に、支脚の破片が出土している。

#### SI-302 (第147, 148図)

**検出状況** 5F25-11に位置する。周溝は明瞭に識別することはできなかった。柱穴はP2を除いて、壁が立ち上がる途中、特に竪穴の中央部側で屈曲するか段差をもつ。P2では他の覆土で確認できなかった粘性を帯びた砂質土が堆積していた。竈は両袖とも遺存しているが、その前面でも構築材が散在していた。内部でも灰、焼土、構築材の山砂が堆積していた。

**遺物と出土状況** 遺物量は多く、特に甕の破片が多く出土している。赤彩された非口ロ整形の環や須恵器の破片も目立っている。竈の左袖付近、床からやや高いところで環、甕がまとまって出土した。5, 6, 9の底部には「×」の線刻がみられる。他に須恵器を転用した硯が出土している。23は両極打法による石核か。打面転移している。



第146図 SI-301実測図及び出土遺物

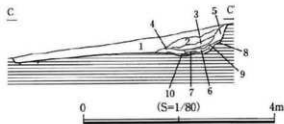
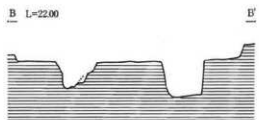
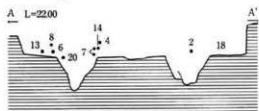
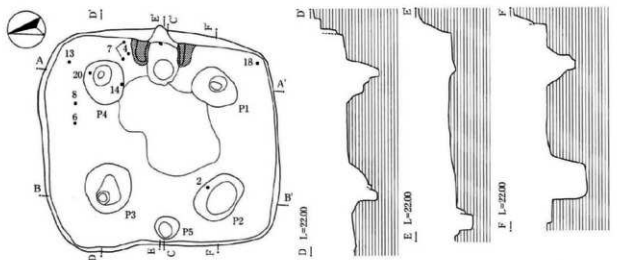
SI-303 (第149図)

検出状況 5F24-15に位置する。SI-323の南側隅と一部重複しており、明らかに本遺構の方が新しい。周溝は南側よりで部分的に検出した。柱穴は途中で屈曲するが段差をもつ。竈は両袖とも遺存しており、火床も明瞭に残っている。

遺物と出土状況 出土した遺物は少ない。坏はロクロ整形のものは見られない。須恵器を転用した硯、砥石や磨石が出土している。

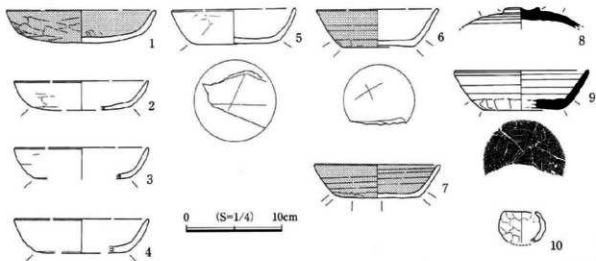
SI-304 (第150, 151図)

検出状況 5F25-11に位置する。北西部でSI-305と重複している。掘り方は深く、覆土が良好に堆積していた。埋没過程は大きく3段階に分けることができる。まず、間層を挟みながら17~4層が堆積する。これらは暗褐色から黒褐色を呈し、均質な土層である。10層の竈構築材は床面に接することなく、ある程

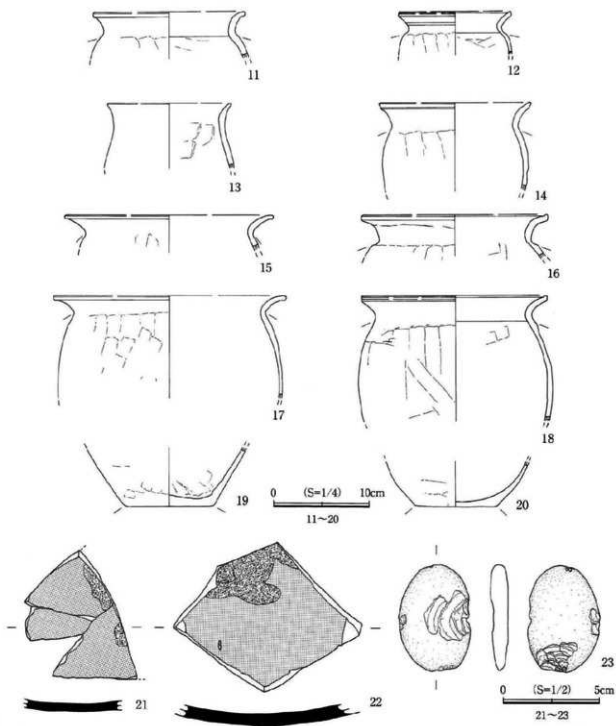


S1-302土層説明

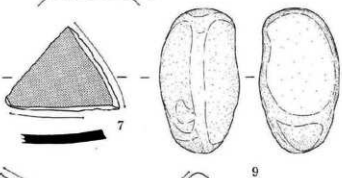
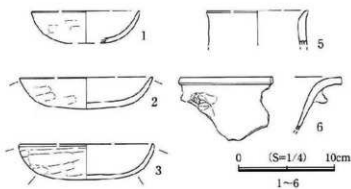
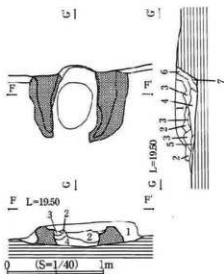
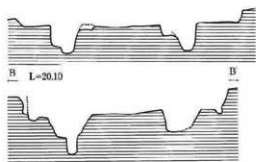
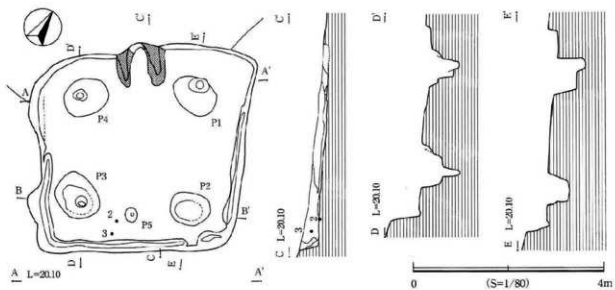
1. 暗褐色土。
2. 暗褐色土、黄色砂ブロックを含む。竈構跡材か。
3. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材か。
4. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
5. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
6. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
7. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
8. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
9. 暗褐色土、粘性をもつ。竈構跡材。
10. 暗褐色土。



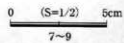
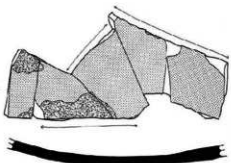
第147図 SI-302実測図及び出土遺物(1)



第148図 SI-302実測図及び出土遺物(2)



- 0-303 遺土層説明
1. 暗褐色土。
  2. 暗褐色土。砂、灰土を多く含む、  
両側部厚土。
  3. 暗赤褐色土。内層厚土。
  4. 暗褐色土。灰を多く含む。
  5. 暗褐色土。
  6. 暗褐色土。
  7. 暗赤褐色土。内層厚土。



第149図 SI-303実測図及び出土遺物

度埋没が進んでから堆積したものであることから、他の住居からの投棄であろう。また、4層も投棄土である。その後、自然に埋没が進行する(3層)。そして凹地状になった段階で焼土の投棄が行われる。この焼土層は炭化物、黒色土を含み、暗褐色土を間層(1, 2層)に挟んで複数みられる。特に1層中の焼土は薄層状で互層に堆積している。

他の住居跡と同様、柱穴は壁の立ち上がり途中で屈曲するか段差を有する。周溝は竈の右袖から南壁にかけて巡り、南側の周溝内にはピットが3基穿たれる。P6~P8は、入口施設に関連したピットであろうか。竈は両袖とも遺存しているが、その前面にも構築材が散在していた。

**遺物と出土状況** 北東隅と南壁付近でまとまって出土している。坏は非ロクロ整形のもので占められ、底部も丸底ないしは体部との境が明瞭でないものばかりである。甕が多く、なかには常総型の破片も出土している。他に紡錘車や碓石、桃の種子が出土している。

#### SI-305 (第152, 153図)

**検出状況** 5F24-15に位置する。SI-304と一部重複している。周溝は北側と西側の一部で検出できなかった。西側はピットが掘削痕として点在する。柱穴はP1で掘り込みの重複を確認できた。竈は両袖が良好に遺存している。

**遺物と出土状況** 竈内で土師器の甕が天地逆の状態出土している。坏は技法の異なるものが混在している。土器類の他、支脚の破片、刀子、紡錘車、碓石、磨石などが出土している。

#### SI-306 (第154図)

**検出状況** 5F25-7に位置する。西側の約三分の一が消失している。平面規模は小さく、周溝や柱穴は検出できなかった。竈は北壁のやや東よりに構築され、竪穴の外側に大きく張り出している。袖に相当する部分は構築されておらず、張り出した掘り込みの壁面に山砂を張り付けている。壁面はよく被熱している。

**遺物と出土状況** 竈内でまとまって出土しているものの、全体的に出土量は少ない。坏は底部を回転糸切り後に調整を施さず、やや上げ底気味になるものが占めている。また、鉄鉢を模倣した坏が出土している。

#### SI-307 (第155図)

**検出状況** 5F25-2に位置する。明確な竪穴の掘り込みは確認できなかったものの、柱穴および周溝を検出することができた。P5が入口施設のピットとすれば北側に竈が存在した可能性が高い。P6は本住居跡に関連したピットであるかどうか明確ではない。竪穴に伴う遺物は出土しなかった。

#### SI-308 (第156図)

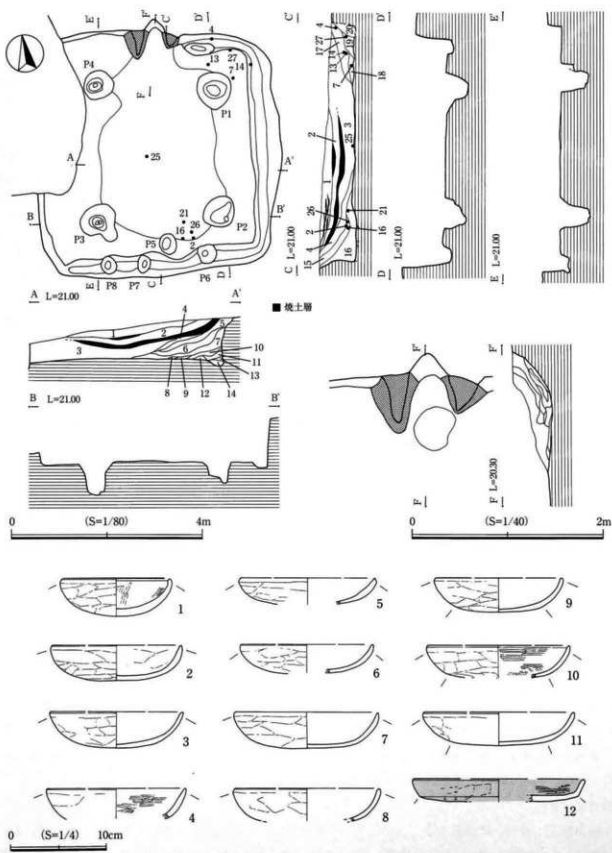
**検出状況** 5F25-1に位置する。SI-321の南東隅と一部重複している。またSD-305によって東側壁部分が消失している。竈構築材と考えられる山砂や焼土が東側壁でまとまって分布していた。周溝や柱穴、竈の袖や火床は検出できなかった。

**遺物と出土状況** 坏や甕が出土している。ロクロ整形で、口縁が外反する器形のもので占められる。4のかわらけや6~8の内面を黒色処理したものが特徴的である。

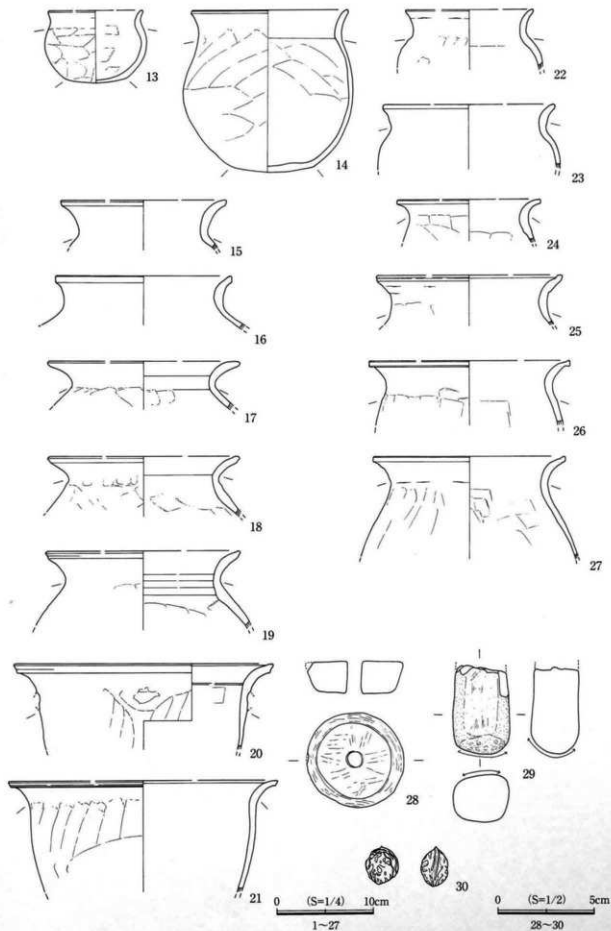
#### SI-309 (第157, 158図)

**検出状況** 5F25-6に位置する。西側約半分の壁は消失している。柱穴はP4を除いて、それぞれ新旧2つの掘り方を検出しており、建て替えが行われたと考えられる。東側及び南側の竈もこの建て替えに関連したものであろうか。竈の新旧関係あるいは同時性については明確にできなかった。南側に設置された竈

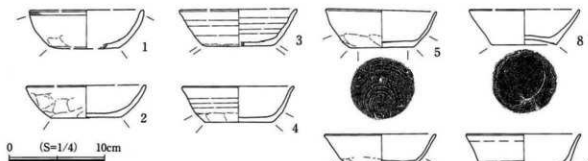
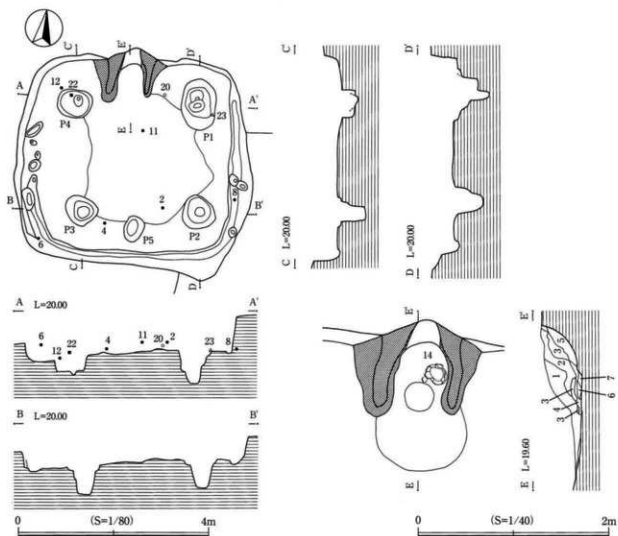




第150図 SI-304実測図及び出土遺物(1)



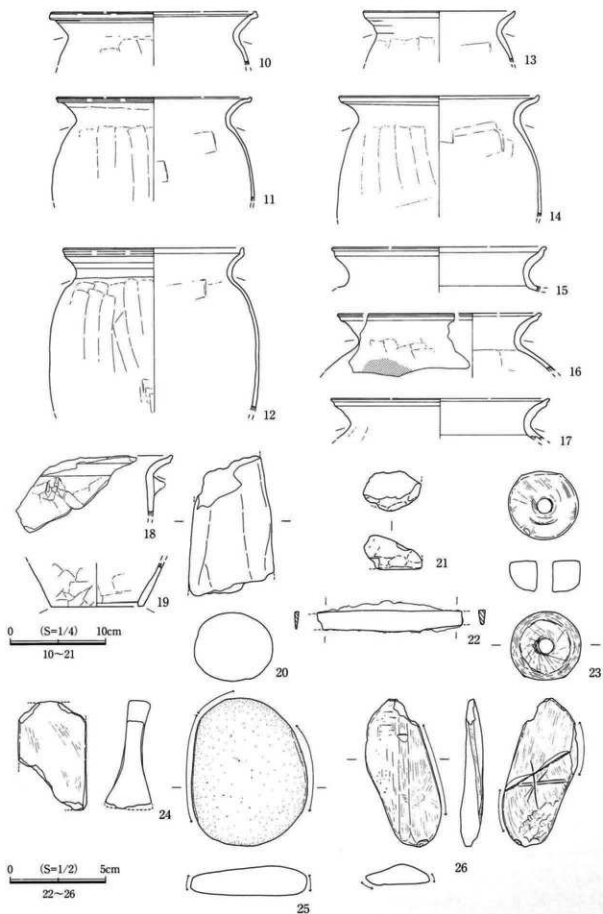
第151图 SI-304出土遺物(2)



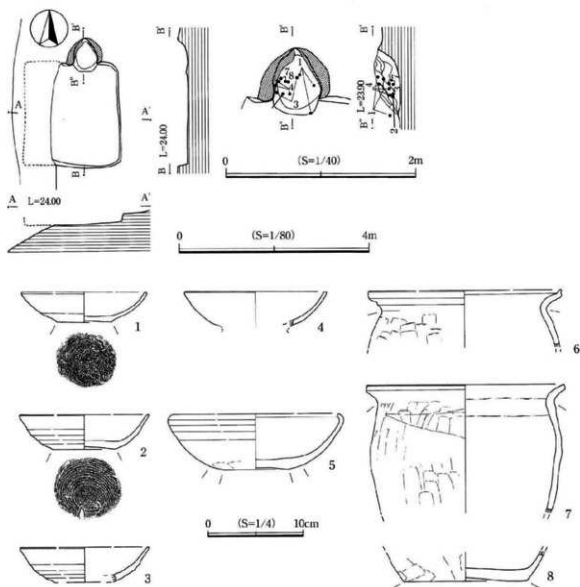
S1-305 竪土層説明

1. 暗褐色砂質土。竊埴原料を含む。
2. 黄褐色砂質土。天井部竊埴土。焼土ブロックを含む。
3. 暗褐色砂質土。内壁部竊埴土。焼土ブロックを多く含む。
4. 灰色土。反壁に焼土ブロックを含む。
5. 暗黄褐色土。竊埴原料。灰。焼土粒を含む。
6. 暗赤褐色土。灰床。
7. 暗褐色土。裏り方層土。

第152図 SI-305実測図及び出土遺物(1)



第153図 SI-305出土遺物(2)



第154図 SI-306実測図及び出土遺物

の例は希有である。

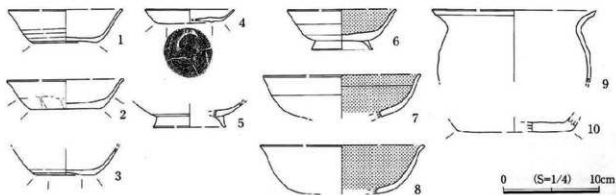
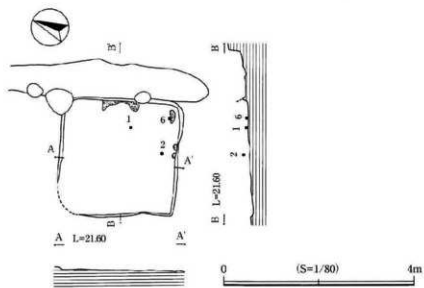
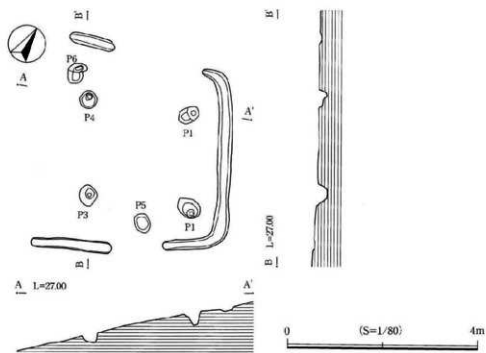
**遺物と出土状況** 土師器坏、甕が床面や2基の竈内から出土している。坏の底部には「×」や「\*」の線刻が施されている。他に、支脚や須恵器を転用した碗、紡錘車、鎌、刀子などが出土している。

**SI-310 (第159図)**

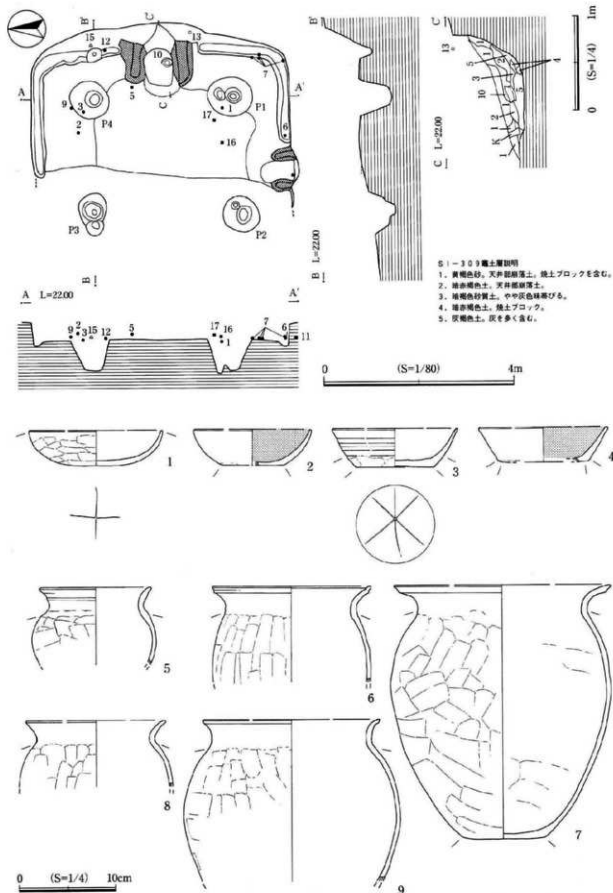
**検出状況** 5F14-24に位置する。西側の約3分の1が消失している。ピットを1基検出したが、本遺構に伴うものか判然としない。周溝は全周していたと考えられる。竈は小規模で両袖が辛うじて残存している。遺物は出土していない。

**SI-311 (第160図)**

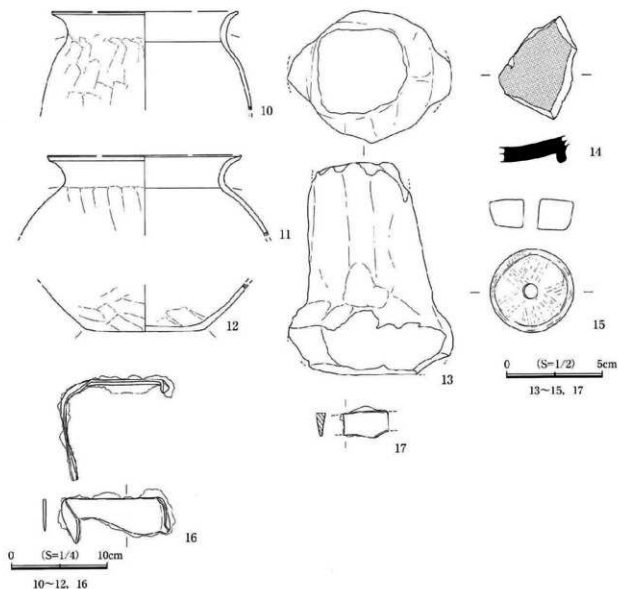
**検出状況** 5F14-25に位置する。SI-319と一部重複しているほか、西側隅は斜面側で消失している。竈の袖はわずかに遺存している程度で、煙道部も確認できない。柱穴は検出していない。周溝は東側と西側に巡っている。出土した遺物は少なかった。坏、甕、瓶などが出土している。



第156図 SI-308実測図及び出土遺物



第157図 SI-309実測図及び出土遺物(1)



第158図 SI-309出土遺物(2)

SI-312 (第161図)

検出状況 5F25-6に位置する。SI-313, SI-314やSI-335と重複している。西側は約半分は後世の造成により失われている。壁はほとんど遺存しておらず、東側の竈と周溝により平面形態と規模を推測できるにすぎない。柱穴は検出しなかった。遺物はほとんど出土していない。

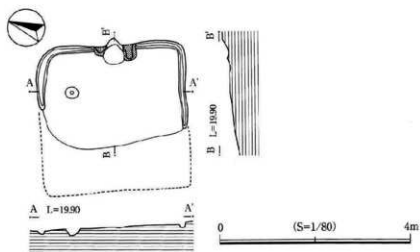
SI-313 (第162図)

検出状況 5F25-6に位置する。SI-314やSI-335などと重複している。壁はほとんど遺存しておらず、竈と周溝により平面形態と規模が推測できる。竈の形態はSI-312に類似している。柱穴は検出しなかった。出土遺物は少ない。床中央部で敲打痕を伴う凹石が出土している。

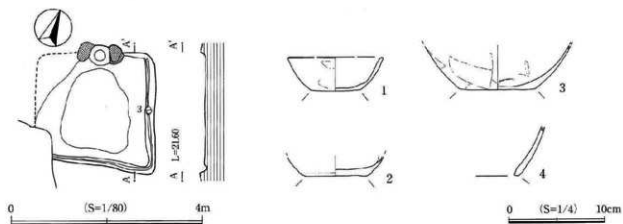
SI-314 (第163～165図)

検出状況 5F25-1に位置する。SI-335, SI-313, SI-312と重複している。東側及び南側で検出した周溝により竪穴の形態と規模を確認することができた。一辺約7.5mの規模の大きな竪穴である。主柱穴を4本検出したが、いずれも径は小さい。竈の左側では貯蔵穴の可能性もあるピットを検出した。

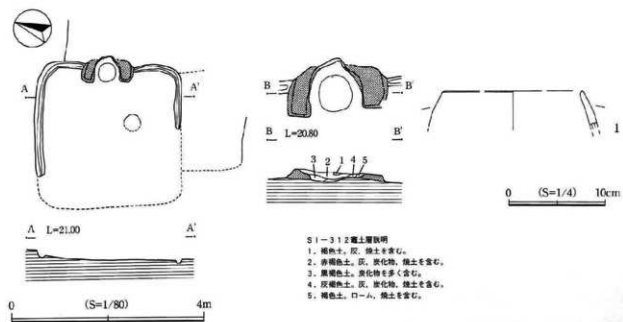




第159図 SI-310実測図

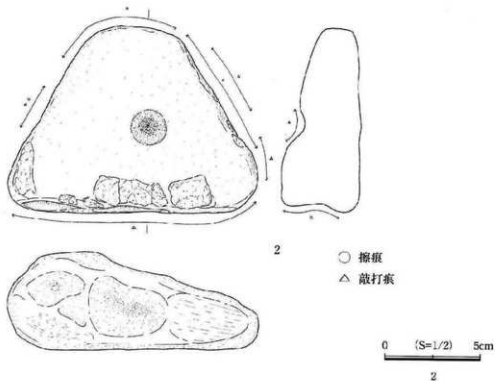
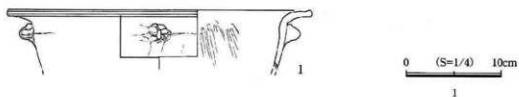
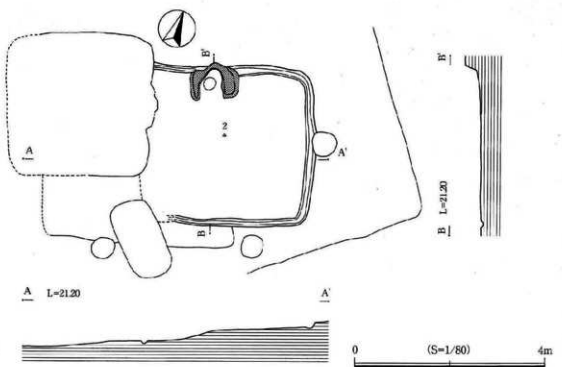


第160図 SI-311実測図及び出土遺物

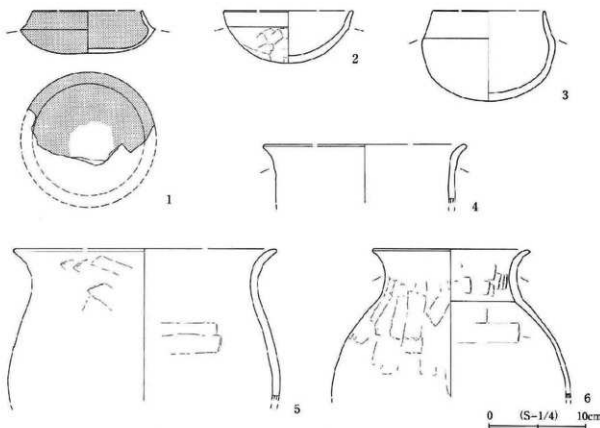
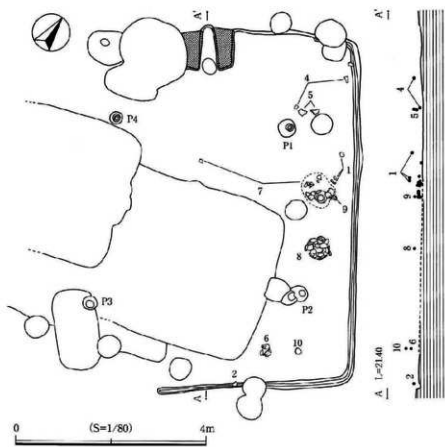


- SI-312 竈土層説明
1. 褐色土、灰、燻土を含む。
  2. 赤褐色土、灰、炭化物、燻土を含む。
  3. 黒褐色土、炭化物を多く含む。
  4. 灰褐色土、灰、炭化物、燻土を含む。
  5. 褐色土、口-A、燻土を含む。

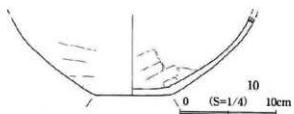
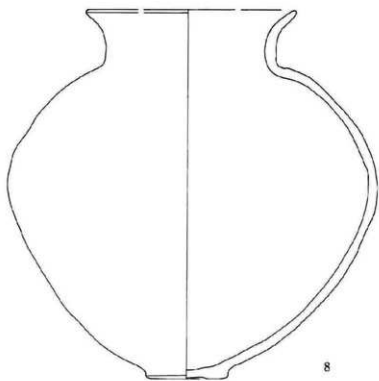
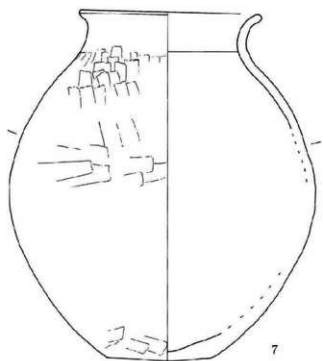
第161図 SI-312実測図及び出土遺物



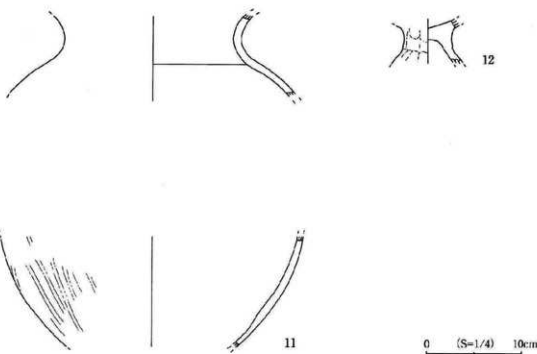
第162図 SI-313実測図及び出土遺物



第163図 SI-314実測図及び出土遺物(1)



第164図 SI-314出土遺物(2)



第165図 SI-314出土遺物（3）

**遺物と出土状況** 竪穴の壁はほとんど遺存していないにもかかわらず、床面上で土師器の壺、甕が多く出土している。

**SI-315**（第166図）

**検出状況** 5F24-5に位置する。SI-332、SI-318、SI-321と重複しており、遺存状況は良好でない。竈は燃焼部の掘り込みと右袖の痕跡を検出した。柱穴は検出しなかった。

**遺物と出土状況** ロクロ整形でない坏が2点出土しているが、これらはSI-321に帰属する可能性がある。

**SI-316**（第166図）

**検出状況** 5F14-25に位置する。SI-319と重複している。わずかに周溝を検出したにとどまる。小規模な竪穴である。竈の痕跡や柱穴などは確認できなかった。遺物は出土していない。

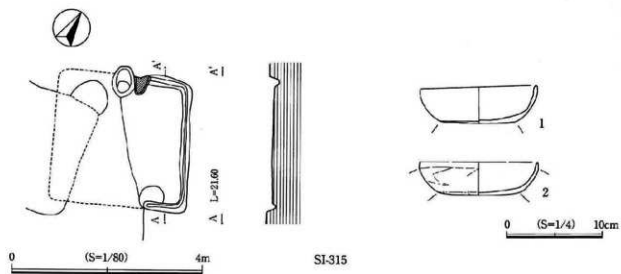
**SI-317**（第166図）

**検出状況** 5F14-24に位置する。東倒壁の遺存はよいが西倒壁は遺存しておらず、周溝のみ検出した。小規模な竪穴である。柱穴は検出しなかった。竈の痕跡は火床部のみで、袖は遺存していない。ここから坏と甕が共に出土している。

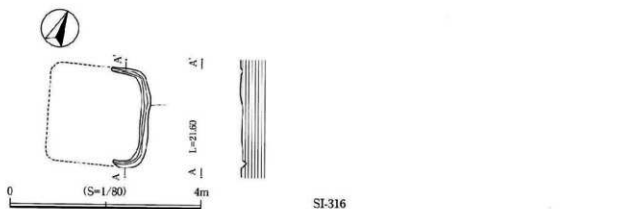
**SI-318**（第168図）

**検出状況** 5F24-5に位置する。SI-315と重複している。小規模な竪穴で、北西隅に竈が構築されている。周溝は西側を除いて巡る。柱穴は検出しなかった。

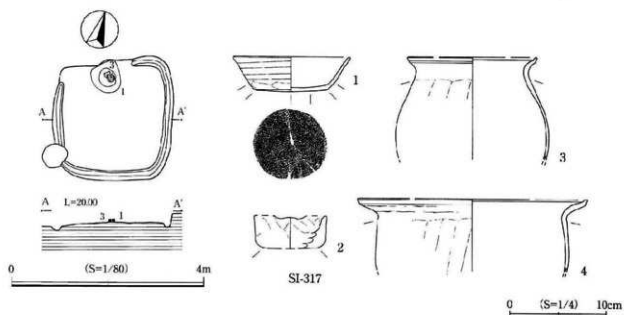
**遺物と出土状況** 覆土中からわずかに遺物が出土している。高台付き坏と甕、穿孔を伴う磁石が出土している。



SI-315

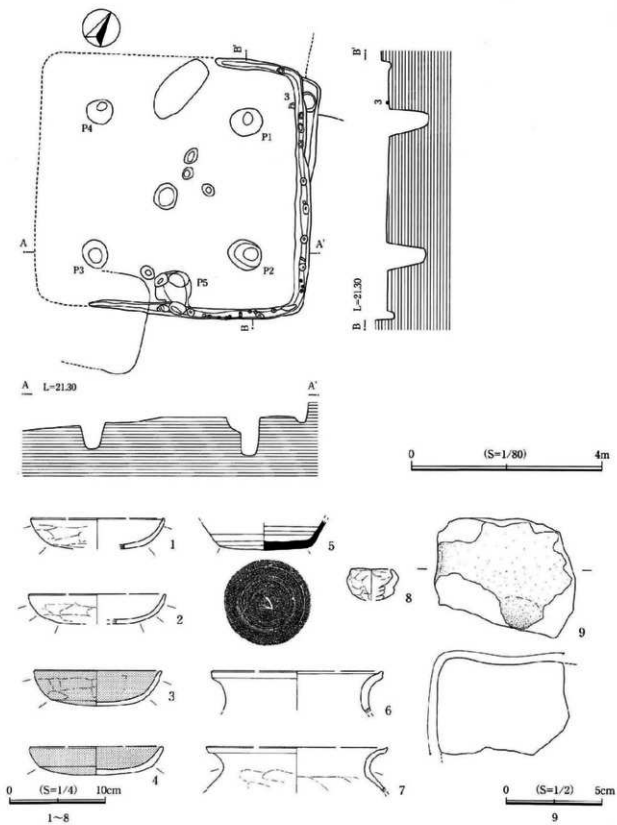


SI-316

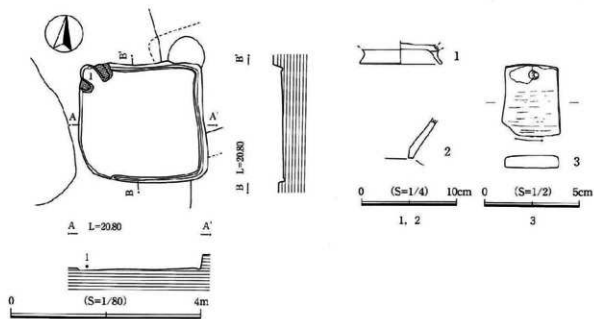


SI-317

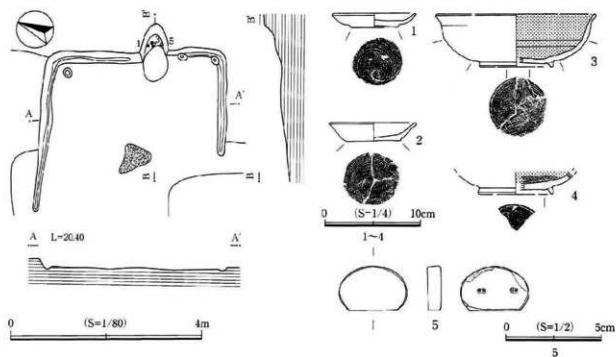
第166図 SI-315~317実測図及び出土遺物



第167図 SI-319実測図及び出土遺物

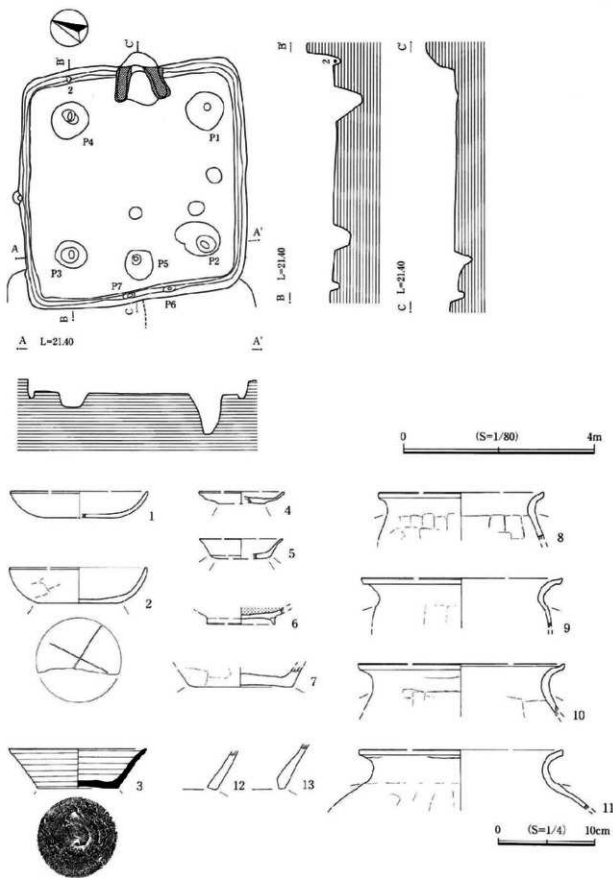


第168図 SI-318実測図及び出土遺物

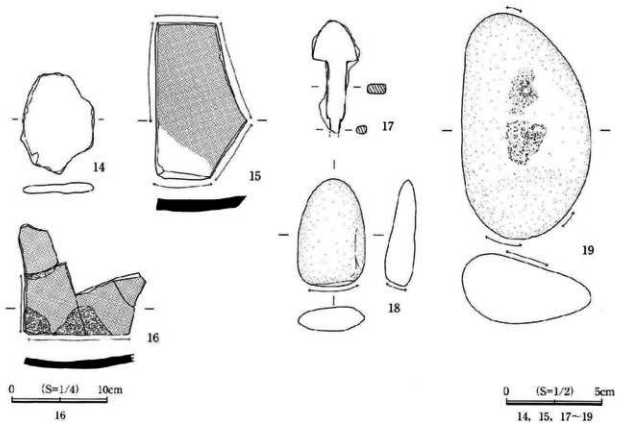


第169図 SI-320実測図及び出土遺物

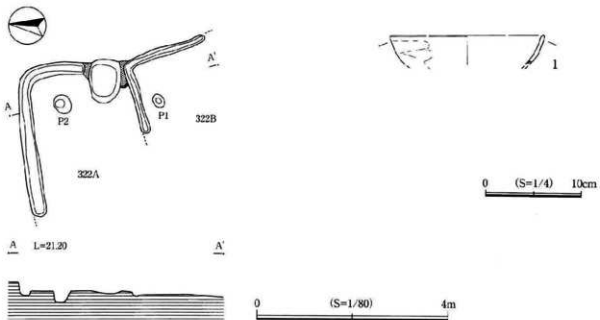




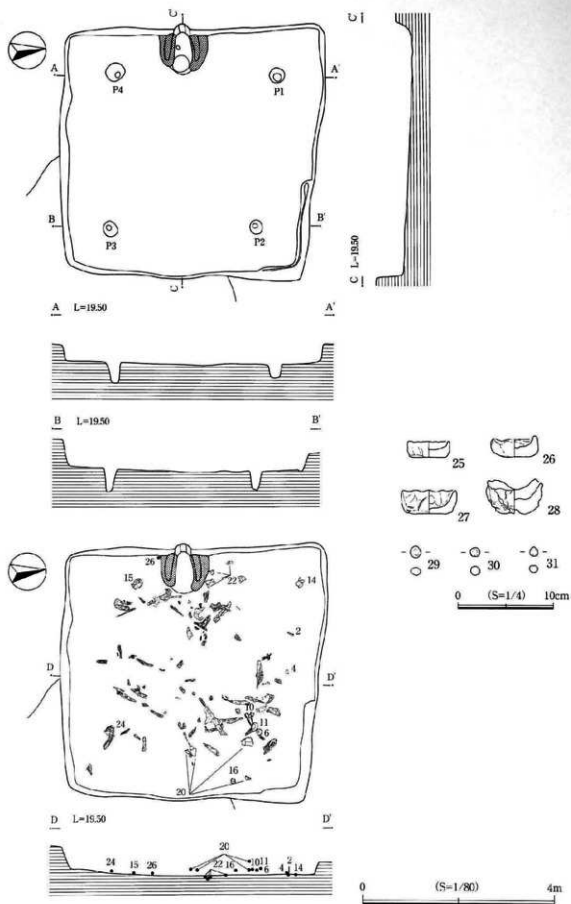
第170図 SI-321実測図及び出土遺物(1)



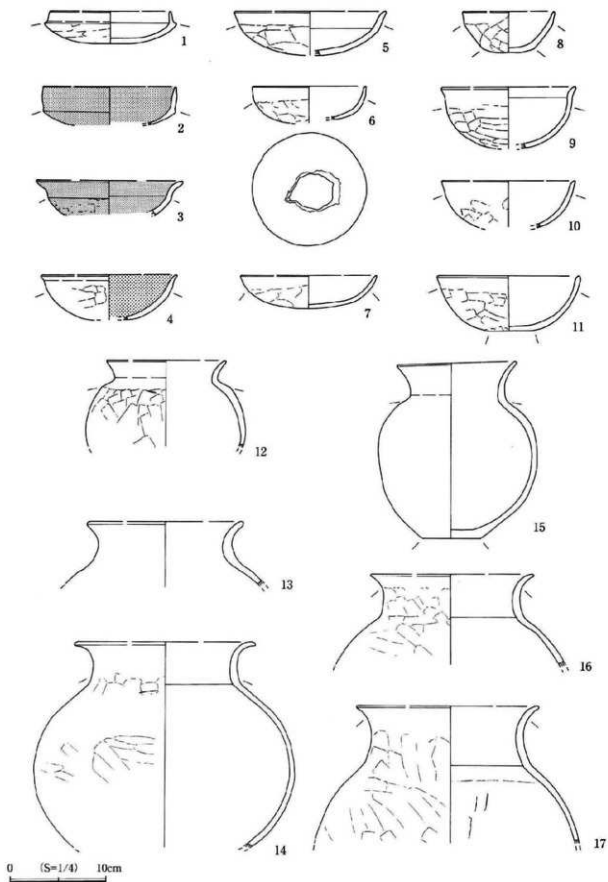
第171図 SI-321出土遺物 (2)



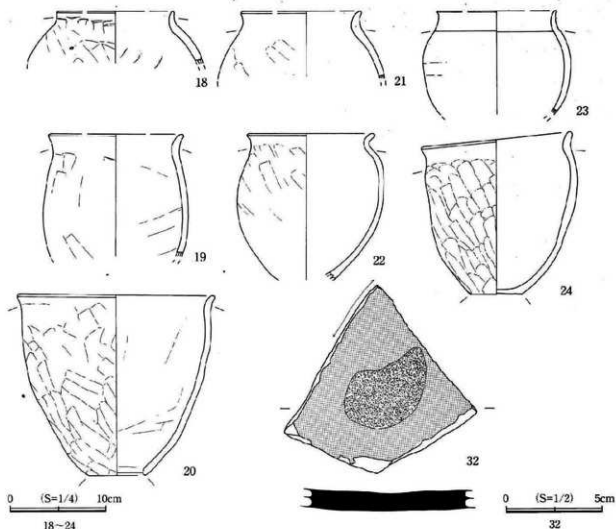
第172図 SI-322実測図及び出土遺物



第173図 SI-323実測図及び出土遺物(1)



第174図 SI-323出土遺物(2)



第175図 SI-323出土遺物(3)

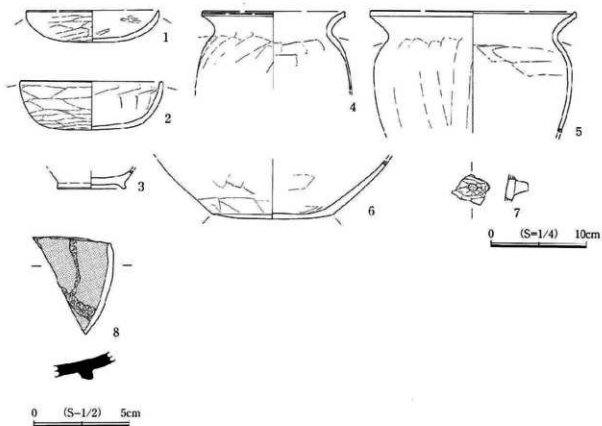
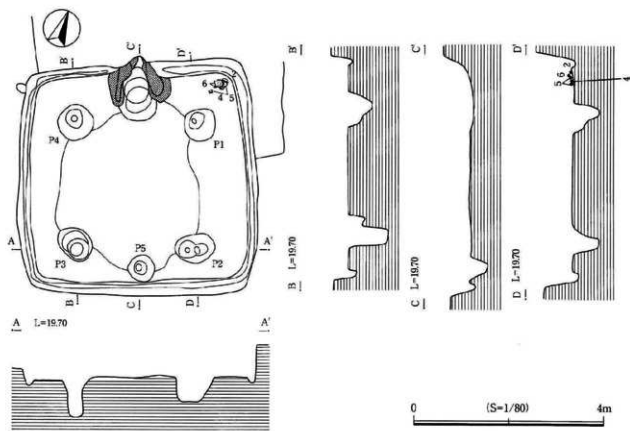
SI-319 (第167図)

検出状況 5F14-25に位置する。SI-311、SI-316と重複している。また、斜面のため西側は柱穴を除いて床面まで消失している。P1~P4が支柱穴で、P5は入口施設のビットであろう。竈の痕跡は確認できなかったが、P5の存在から北側に構築されていた可能性が高い。周溝は壁が遺存している部分で回り、径10cm前後のビットが多数伴っている。

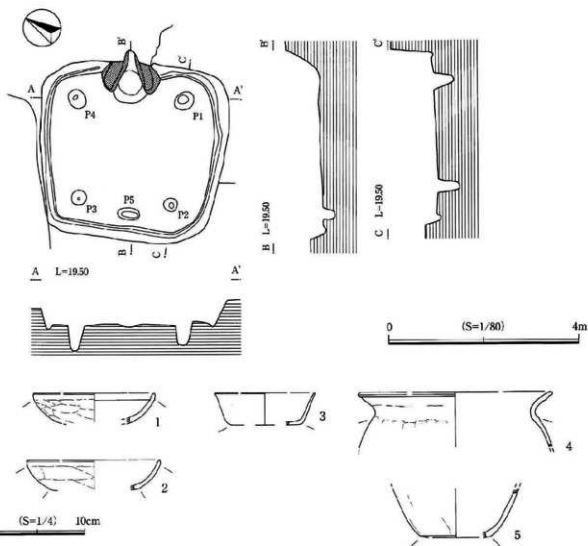
遺物と出土状況 土師器の坏、甕などが出土している。坏はロクロ整形でないもので占められ、赤彩も目立つ。他に手捏土器、磨石が出土している。

SI-320 (第169図)

検出状況 5F24-5に位置する。SI-322と重複している。壁は東側以外ほとんど消失している。周溝も西側では確認できなかった。柱穴と考えられるビットは検出しなかった。東壁際で深さ10cmほどの小ビットを3基検出しが、本堅穴に伴うものか明確でない。竈は東側に設置され、張り出しが大きい。一方、袖に相当する部分は検出しなかった。壁面はよく焼けている。また、堅穴中央で床面が火熱を受けて硬化している痕跡が確認できた。



第176図 SI-324実測図及び出土遺物



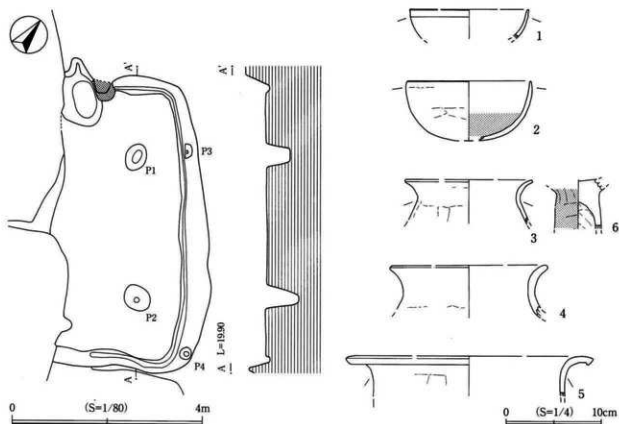
第177図 SI-325実測図及び出土遺物

遺物と出土状況 出土遺物は少ないが、竈内より石帯と共に土師器がまとめて出土している。土器はかわらけと内面が黒色処理された碗である。

SI-321 (第170, 171図)

検出状況 5F24-5に位置する。SI-315やSI-308, SI-332と重複している。他の住居跡に比べて、竈穴壁が良好に遺存しており、直下には周溝が巡っている。P1からP4の柱穴はそれぞれ深さが異なる。P6とP7はP5と合わせ、入口施設に関連したピットであろうか。SI-304と類似している。

遺物と出土状況 土師器坏、甕、甌、須恵器坏などが出土している。4～7の小皿や坏は混入であろう。一方、SI-315の遺物として掲載した坏2点は、時期的に竈穴の平面規模から考えられる時期としては不相応で、本竈穴に伴う可能性が高い。須恵器を転用した碗は、縁辺が研磨され、砥石としても利用されている。他に鐵身が三角形を呈する鉄鏃1点と砥石2点が出土している。



第178図 SI-326実測図及び出土遺物

SI-322 (第172図)

検出状況 5F24-5に位置する。2軒の堅穴が重複しており、竈を伴う方を322A、周溝のみの方を322Bとする。SI-332、SI-320と重複している。322Aの竈は袖の痕跡と燃焼部の掘り込みが遺存している。ピットがそれぞれの堅穴の床面から検出されているが、P1は322Aに伴うものかもしれない。床面からの深さは異なるが、底面の標高はほぼ同じである。主柱穴とするには浅い。322Bは周溝の一部のみを検出しただけで規模ははっきりしない。322Aの竈を一部壊していることから322Bの方が新しい。図示した坏は出土地点が明らかでないため、どちらの堅穴に伴うのかは不明である。

SI-323 (第173～175図)

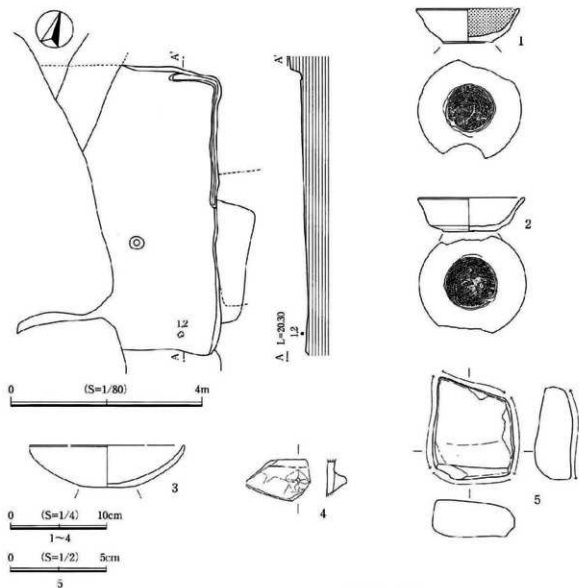
検出状況 5F24-15に位置する。SI-303と重複している。壁は四隅が角張り、床から垂直に立ち上がっている。周溝は北東側でのみ検出した。P1～P4は主柱穴だが、径は小さい。堅穴の中央部で炭化材や焼土が多量に検出したことから、焼失家屋であると考えられる。

遺物と出土状況 床面付近で炭化材や焼土と共に土師器の坏、壺、甕、手握土器の他、土製の小玉など、他の住居跡に比べると出土量は多い。坏は北側に偏り、壺や甕類は堅穴の四隅付近で、また竈脇から手握土器が、竈内から小玉が出土している点特徴的である。坏類は口縁が屈曲して立ち上がり、体部との境に稜がたつものが主体を占めている。6の坏底部は内側から穿孔されている。

SI-324 (第176図)

検出状況 5F24-10に位置する。SI-334と重複している。遺存状況は良好である。P1～P4が主柱穴で、





第179図 SI-327実測図及び出土遺物

P2は重複していることから、建て替えの可能性がある。P5は入口施設のビットであろう。中央の広い範囲で床面が硬化していた。

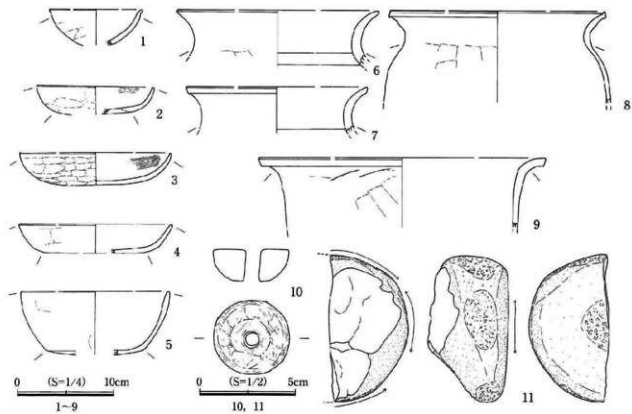
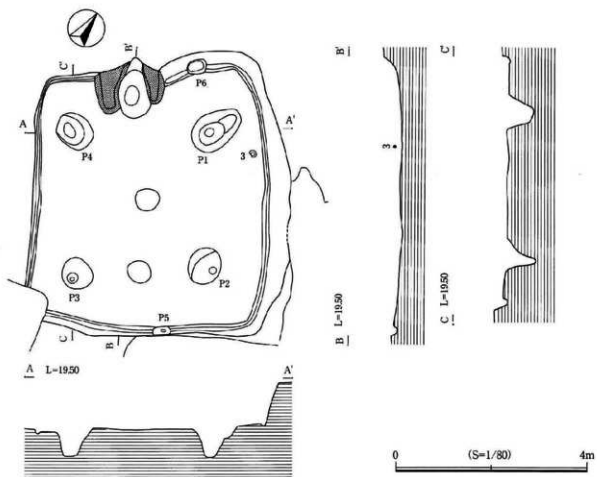
遺物と出土状況 北東隅で土師器の坏、甕、瓶などの土器類が集積していた。他には須恵器を転用した碗が出土している。

SI-325 (第177図)

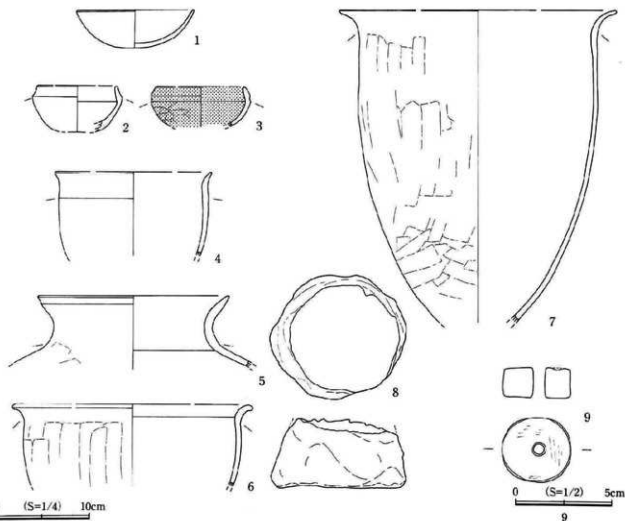
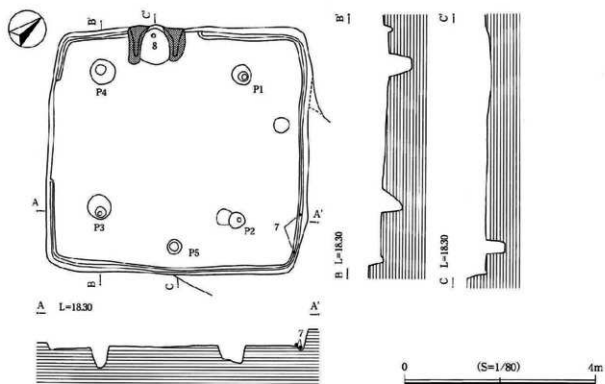
検出状況 5F24-4に位置する。SI-326及びSI-334と重複している。西側を除いて壁はよく遺存している。壁の各辺はやや弧をえがき、隅も丸みをもつ。出土遺物は少なく、小破片ばかりである。土師器の坏、甕が出土している。図示していないが、手捏土器も破片で出土している。

SI-326 (第178図)

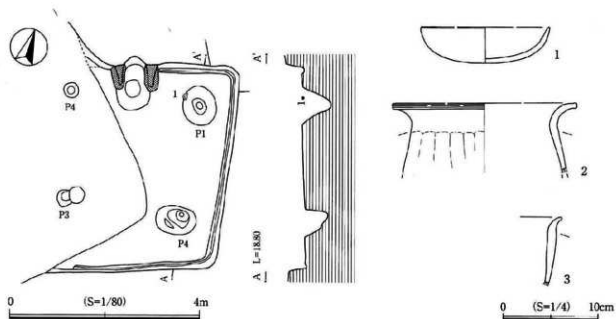
検出状況 5F24-4に位置する。SI-326及びSI-328と重複している。主柱穴は2基検出したにとどまる。周溝は全周せず南側で途切れている。壁中で小ビットを2箇所検出した。



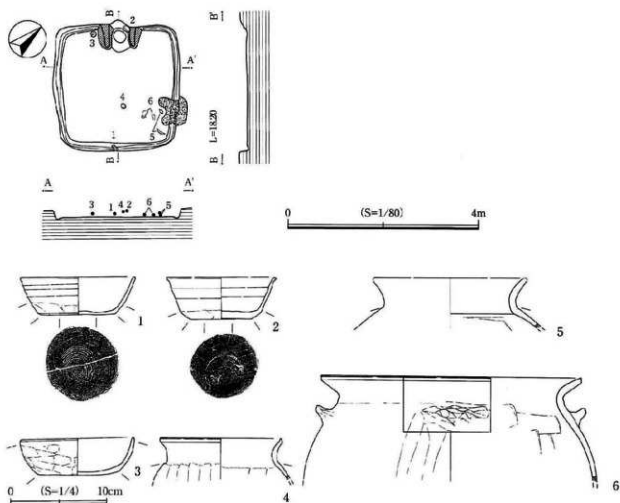
第180図 SI-328実測図及び出土遺物



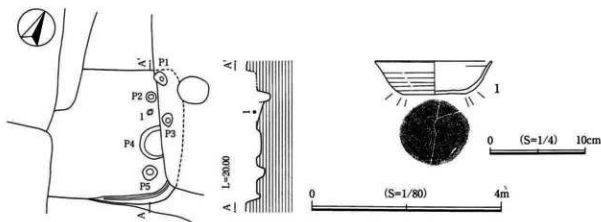
第181图 SI-329实测图及び出土遺物



第182図 SI-330実測図及び出土遺物



第183図 SI-331実測図及び出土遺物



第184図 SI-332実測図及び出土遺物

**遺物と出土状況** 東側の竪穴壁は良好に遺存しているが、出土遺物は少ない。土師器の坏、甕、高坏等が出土している。

SI-327 (第179図)

**検出状況** 5F24-5に位置する。SI-318, SI-326, SI-334と重複する。壁は直線的で、四隅が角張る平面形態である。竈や炉、主柱穴などは検出できなかった。周溝も北東隅で一部確認できたにとどまる。

**遺物と出土状況** 土師器の坏が出土している。南側の床面よりやや高いところで土師器坏が重なって出土しているが、竪穴の規模から本竪穴に伴うのは3の坏だけで、1, 2についてはSI-318に伴う遺物であろう。この他に砥石が出土している。

SI-328 (第180図)

**検出状況** 5F24-4に位置する。SI-326と重複している。東側の壁はやや弧をえがき、北側は外側に突き出ている。西側の壁は東側に比べて、斜面のためほとんど遺存していない。P1~P4は主柱穴である。一般的に見られる位置 (P2とP3の間) では、入口施設に相当するピットは検出できなかった。竈は中心軸からやや西側に寄っている。

**遺物と出土状況** 土師器の坏、甕、紡錘車などが出土している。他に砥石が出土している。

SI-329 (第181図)

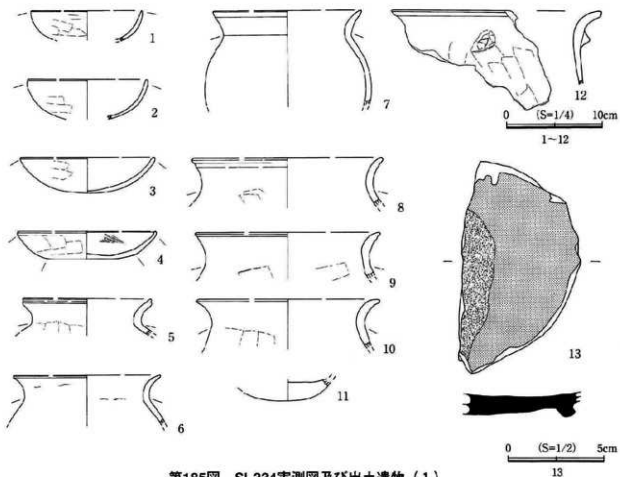
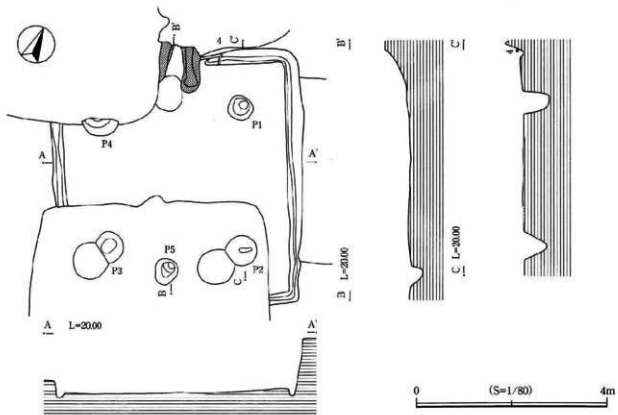
**検出状況** 5F24-3に位置する。SI-330と切り合っており、新旧関係が十分つかめなかったためSI-330と遺物が混在してしまっている。平面形態は四隅がやや角張る方形である。柱穴配列は竪穴に対して全体的にやや西寄り、北側に拡張しているかもしれない。竈は西側に寄っている。柱穴はいずれも径が小さい。周溝は西側で一部途切れている。

**遺物と出土状況** SI-330と遺物が混在している。土師器の坏、甕、甌、支脚などが出土している。支脚は竈内で出土している。紡錘車は断面形態が台形でなく、長方形を呈している。

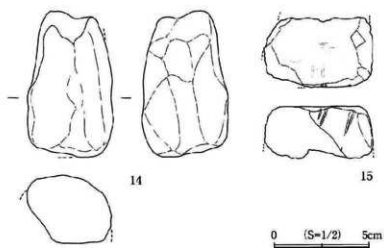
SI-330 (第182図)

**検出状況** 5F24-4に位置する。SI-329と遺物が混在している。やや菱形気味に歪みのある方形の竪穴である。柱穴配列も平面形に合わせた配置である。

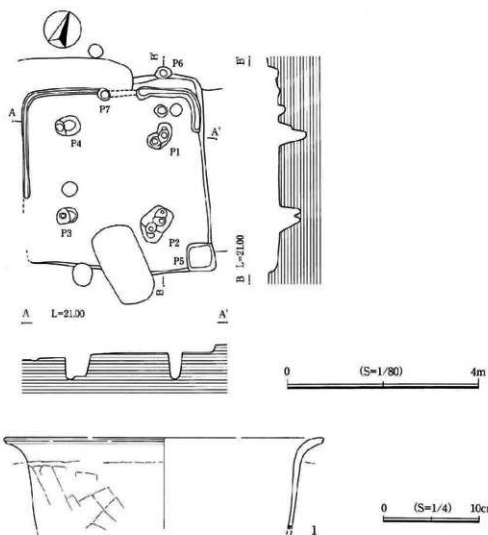
**遺物と出土状況** 出土遺物は少なかった。土師器の坏、甕が出土している。



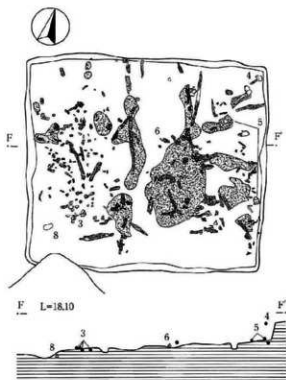
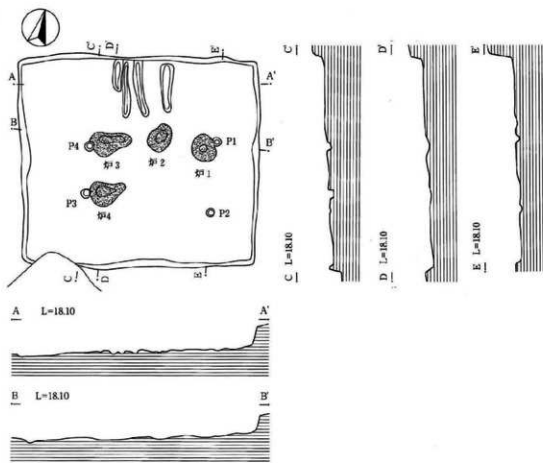
第185図 SI-334実測図及び出土遺物(1)



第186図 SI-334出土遺物(2)

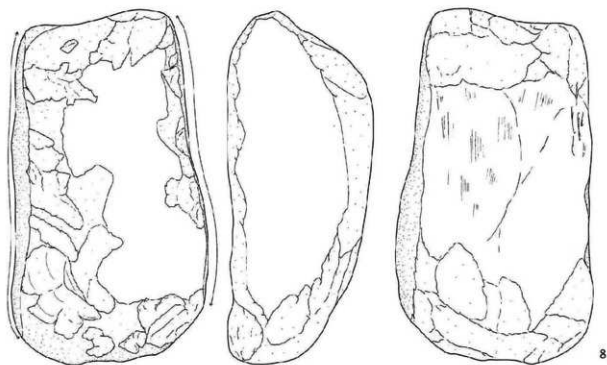
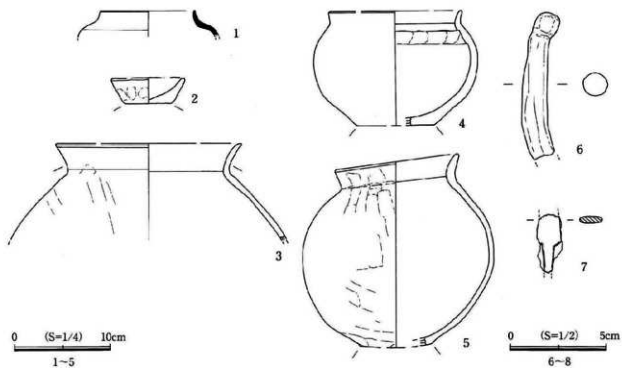


第187図 SI-335実測図及び出土遺物

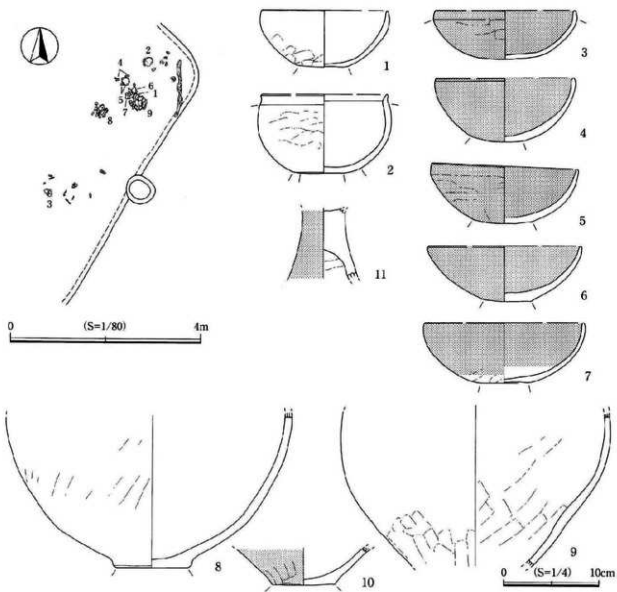


第188图 SI-336实测图





第189圖 SI-336出土遺物



第190図 SI-337実測図及び出土遺物

SI-331 (第183図)

検出状況 5F24-3に位置する。一辺約2.6mの小規模な竪穴である。他の遺構と重複することなく良好に遺存している。焼土を床面上で検出したが、これは竪穴外にも広がっていることから、投棄されたものである。柱穴は検出しなかった。

遺物と出土状況 竪内とその脇では土師器の坏が、東側の焼土周辺では瓦類が出土している。

SI-332 (第184図)

検出状況 5F24-5に位置する。多数の竪穴と著しく重複しており、十分な検出ができなかった。壁は南側の一部で検出しただけである。柱穴も明確なものは確認できていない。P2, P5が本竪穴に関連する可能性はあるが、西側では検出できなかった。竪は焼土や構築材などの痕跡を確認していない。

SI-334 (第185, 186図)

検出状況 5F24-4に位置する。SI-324, SI-325と重複する。隅が角張り方形を呈する。竈は燃焼部から煙道部にかけて緩やかに立ち上がる。また被熱による赤化が顕著である。火床面は確認された袖よりも手前に位置する。

遺物と出土状況 土師器の坏, 甕が出土している。ほかに須恵器を転用した硯, 支脚, 砥石が出土している。

SI-335 (第187図)

検出状況 5F25-6に位置する。SI-314, SI-313, SI-312と重複している。南東隅には深さ約10cmの方形の掘り込みがある。痕跡は明瞭でないものの, 北壁の中央で周溝が検出できなかったことから, 竈は北壁に設けられていたと考えられる。柱穴はそれぞれ2~4基の掘り方を検出した。深さが30cm未満のものと40cm以上のものとに分けられる。建て替えの痕跡と考えられる。その他にもピットを検出しているが, 当住居跡に伴うかどうか明確ではない。

SI-336 (第188, 189図)

検出状況 5F24-9に位置する。平面形態は東西にやや長く, 四隅が角張る。床面中央部で炉跡を4基検出した。これらは東西, 南北方向に直線的に並んでいる。被熱の痕跡は明瞭である。炉跡と北壁の間には, 深さ数cmの溝が近接して南北方向に4本走る。ピットは4基検出した。規則的な配列であるものの, いずれも浅く, P1, P3, P4は炉跡を切って穿たれており, 本住居跡に伴うものか明確でない。床全体に焼土, 炭化材が多量に分布していた。炭化材は, 西側では粉々に砕けたものが集中し, 中央および東側では遺存のよいものが焼土と共に分布している。焼土は概ね炭化材の下に堆積していた。

遺物と出土状況 土師器の甕が主体的に出土している。6は粘土紐状だが, 先端付近でややくびれを有している。7は鉄鏝と考えられる。砥石に利用した台石が南西隅で出土している。

SI-337 (第190図)

検出状況 5F24-14に位置する。遺物がまとまって出土したことから, 周辺を精査した。その結果, 辛うじて東側の遺構の範囲を確認した。柱穴は確認することができなかった。坏のほか甕なども伴っていることから堅穴住居跡である可能性がある。東側隅で炭化材を検出している。

遺物と出土状況 出土遺物がまとまって出土している。土師器の坏や高坏, 甕が出土しており, 赤彩された坏が5点含まれている。

## 2. 掘立柱建物跡

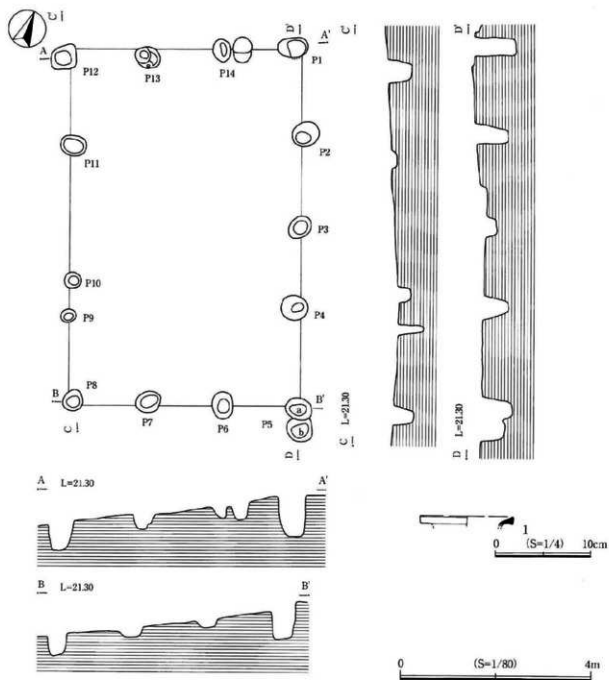
第1区画の東側縁辺を中心に多数のピットを検出した。しかし, 柱穴列の配置関係を調査中に確認する事が難しく, 多くは整理段階で検討したものである。結果的に6棟を抽出した。このうち第1区画と第2

第23表 C4区 掘立柱建物跡計測表

( )は推定値

遺構番号	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	梁×桁	柱間距離(m)	柱穴深度(m)
SB-301	5F24-5	N-24°-W	7.6	4.9	3×4	1.6(1.9)	0.9
SB-302	5F25-2	N-19°-W	2.8	2.4	1×2	2.4(1.4)	0.8
SB-303	5F24-15	N-18°-W	1.9	1.7	1×2	1.7(0.9)	0.8
SB-304	5F24-14	N-18°-W	(2.3)	(2.0)	1×1	2.0(2.3)	0.2
SB-305	5F25-12	N-14°-E	4.9	3.2	2×3	1.6(1.6)	0.7
SB-306	5F24-20	N-34°-W	1.9	1.9	1×1	1.9(1.9)	0.3

柱間距離:梁桁(桁行)

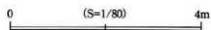
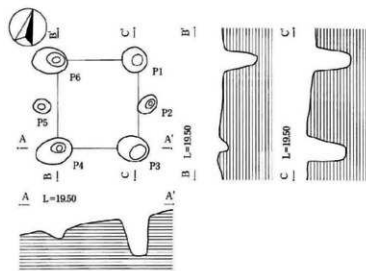
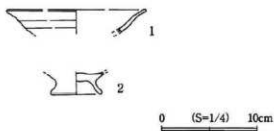
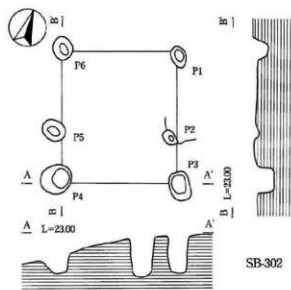
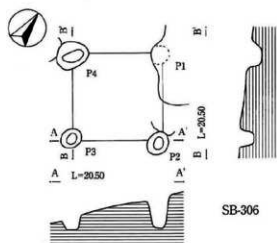
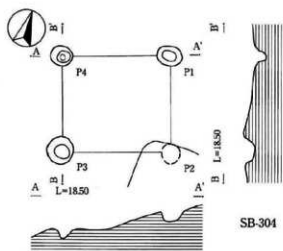


第191図 SB-301 実測図及び出土遺物

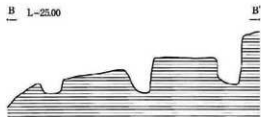
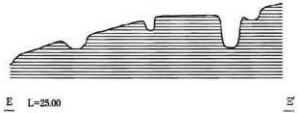
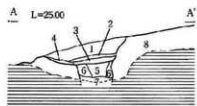
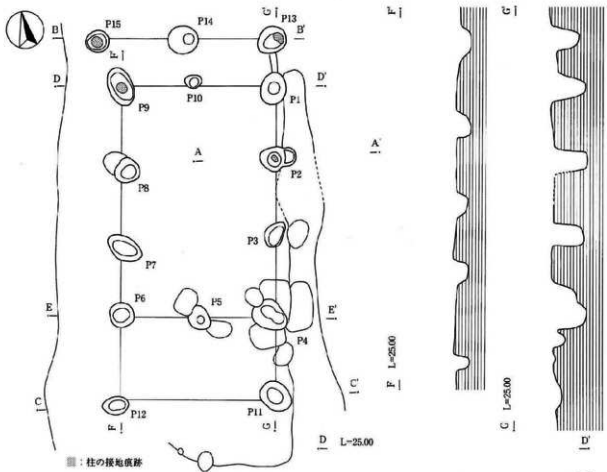
区画の間にはさらに幅7m、長さ25mの平場が形成されている。幅がSB-305の規模とかわからないことから、この建物を構築するために部分的に斜面を整形していると推測できる。これらの建物跡は柱穴が円形を基調としており、竪穴住居跡群の分布域に属することから、古代の建物跡と考えられる。

#### SB-301 (第191図)

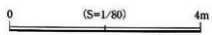
柱間3間×4間の建物跡で、南北方向に棟が長い。桁行きは1間が約1.9m、梁行きは1間が約1.6mである。西側の桁行きは、P9が他のピットと径、深さが異なることから、3間になるだろうか。四隅の柱穴は、径は他と変わらないが、掘り方が深い。



第192図 SB-302~304, 306 実測図及び出土遺物



SB-305 P.2土層説明  
 1~4. 濠埋土。  
 5. 明褐色砂質土。  
 6. 暗褐色砂質土。  
 7. 暗灰色粘質土。  
 8. 自然堆積土。



第193図 SB-305 実測図

SB-304 (第192図)

柱間1間×1間の東西方向にやや長い建物跡である。桁行きは1間が2.3m、梁行きは1間が2.0mである。北西方向に傾斜する斜面上で、それぞれ深さ20cmほど掘り込められるものの、底面の標高は異なる。P2に相当するピットはSI-323と重複しており、検出できなかった。

SB-306 (第192図)

柱間1間×1間で、ほぼ正方形を呈し、梁行き、桁行きとも約1.9mである。西方向に傾斜する斜面上に立地している。ピット底面は概ね同じ標高である。P1に相当するピットはSI-303と重複しており、検出できなかった。

SB-302 (第192図)

桁行き2.8m、梁行き2.4mの南北方向に長い建物跡である。西方向に傾斜しており、ピットの深さは異なるものの、底面の標高はいずれもほぼ同じである。P2、P5は桁行きの柱筋上にあることから、柱間の距離が等間隔でないものの、1間×2間の建物跡と判断した。どのピットから出土したものか不明であるが、土師器高台付坏が出土している。

SB-303 (第192図)

桁行き1.9m、梁行き1.7mの建物跡である。P4を除いてほぼ同じ深さに掘り込まれている。柱筋上からやや外側にずれるが、SB-302と同様、P2、P5は本建物跡に伴うものと判断し、柱間1間×2間とした。

SB-305 (第193図)

建物構築に際して、新たに谷斜面を掘削して平場を造成しており、他の掘立柱建物跡とは立地面が異なり、独立した存在である。この平場は、東西約7m、南北約25mの規模を有している。

建物跡は南北方向に棟が長く、柱間は2間×3間である。梁、桁方向とも1間は1.6~1.7mほどである。確認面は西側に傾斜しているが、P10、P15を除いていずれもほぼ同じ深さに掘り込まれる。全てではないが、柱の接地痕跡も確認している。南側で検出したP11、P12は、掘り方は浅いものの、柱筋が揃い、柱間間隔が同じであることから、建物跡に伴うものであろう。また、北側でもP13、P14、P15を検出した。各ピット間の間隔は広く、建物跡の北側梁行きとは1mほどしか離れていない。しかし、建物跡と比べると、ピットの径、深さが同じ規模で、柱筋が平行であることから、塚か橋のような建物跡に付随するものと判断した。

第24表 C4区 土坑計測表(1)

( ) は推定値

遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SX-303	土坑	5F25-6	① N-94° -E	0.7	0.5	0.1	古代
			② N-83° -E	0.9	0.7	0.3	
SK-308	墓坑	5F15-21	N-39° -E	(2.3)	(1.8)	0.7	古代
SK-320	墓坑	5F25-1	N-7° -W	3.7	3.1	0.5	古代
SK-309	土坑	5F25-1	N-27° -W	3.9	2.1	0.4	古代
SK-310	土坑	5F25-1	N-26° -W	2.3	1.8	0.5	古代
SK-311	土坑	5F25-1	N-34° -W	1.3	1.1	0.8	古代
SK-317	土坑	5F25-7	N-21° -W	3.3	1.2	0.6	古代
SK-316	土坑	5F25-6	N-91° -E	1.5	1.1	0.3	古代
SK-323	土坑	5F25-6	N-40° -W	1.7	0.9	0.5	古代
SK-318	土坑	5F15-21	N-4° -W	1.3	1.2	0.2	古代
SK-312	土坑	5F25-1	N-70° -W	1.3	0.7	0.3	古代
SK-313	土坑	5F15-21	N-69° -E	1.1	0.7	0.2	古代
SK-315	土坑	5F15-21	N-30° -W	1.1	1.0	0.3	古代
SK-324	土坑	5F35-2	N-96° -E	0.7	0.7	0.1	古代

### 3. 土坑

第1区画と第2区画には、ピット群とともに土坑群が検出されている。しかし、その分布は散漫で集中するような状況は窺えない。これらのうち、中世以降の土坑を除き、出土遺物から古代の土坑と判断したものを報告する。

#### SX-303 (第194図)

5F25-6に位置する。調査時当初、周辺で鉄滓が出土していたことから鍛冶遺構を考慮していたが、竈に類似した焼成施設が検出できただけで他の鍛冶関連の要素は確認できなかった。周囲では柱穴や壁、床などを検出することができず、積極的に堅穴住居跡とは判断できなかったが、斜面地に分布していることから、竈部分を除いて削平してしまったために確認できなかった可能性もある。

焼成部は壁面がよく被熱しており、その火床に相当する部分も赤化が著しい。袖に相当するような構築物は確認できないが、覆土には被熱した砂のブロックが堆積していることから、天井部を有していたものと判断できる。火床部分には片岩が立った状態で出土した。その他には甕が出土している。

竈の脇では火床のみの炉跡を検出した。構築物のようなものは確認できない。灰が多量に堆積している。土師器の小皿、坏がまとまって、しかも逆位の状態で出土している。

竈の前部では円形の土坑を検出した。基盤層の砂ブロックを多く含み、炭化物も見られる。焼成施設よりも古く、直接関連づけられないことから、むしろ墓坑の可能性が高い。

#### SK-308 (第195図)

5F15-21, 住居跡群の分布域の外側に位置する。いわゆる「有天井土坑」の形態に類似している。土師器の坏、甕の底部がまとまって出土した。坏の中には、灯火器として使用された破片も出土している。

#### SK-320 (第195図)

5F25-1に位置する。住居跡群と同じ分布域に属する。やや張り出しをもった円形の土坑で、覆土中位に炭化物層が、この上下ではロームブロックを含んだ褐色上が堆積している。炭化物層付近では坏を主体とした土器が多く出土している。遺物の出土状況や覆土から墓坑の可能性が高い。

#### SK-309 (第196図)

5F25-1, 住居跡群の分布域の外側に位置する。長方形を呈するが、南側壁の一部は0.5mほど外側に張り出している。また東側も径0.8m、深さ0.3mの円形の穴が床面から掘り窪められる。土師器坏や甕が出土している。

#### SK-310 (第196図)

5F25-1に位置する。第1区画の台地側縁辺に属する。楕円形を呈し、平らな底面を有する。須恵器坏や甕が出土している。

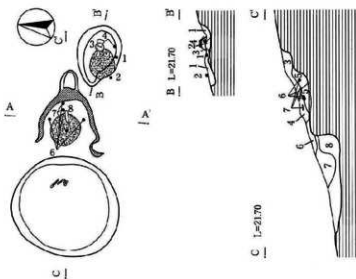
#### SK-311 (第196図)

5F25-1に位置する。住居群とほぼ同じ分布域である。円形の土坑である。平面規模は小さいものの深く掘り窪められている。平滑な底面を有し、壁は屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。小皿が出土している。

#### SK-317 (第197図)

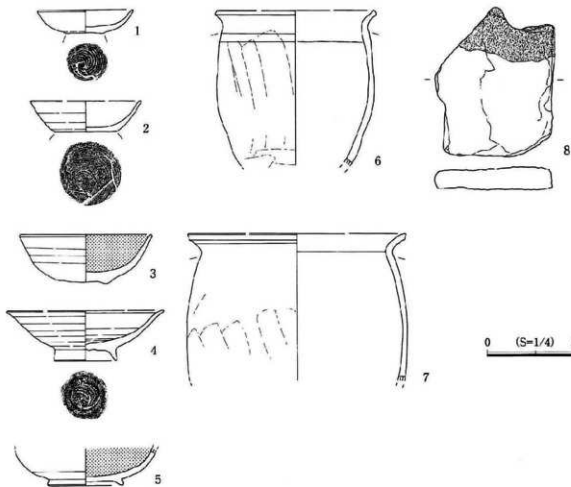
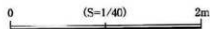
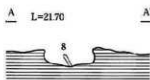
5F25-7に位置する。第1区画の台地側縁辺に分布する。不整な楕円形で、底面も平滑でない。壁はなだらかに立ち上がる。土師器の椀や甕が出土している。





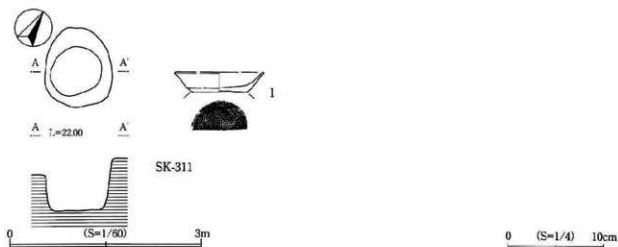
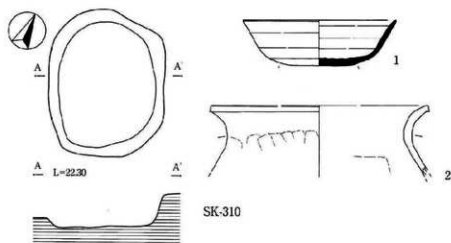
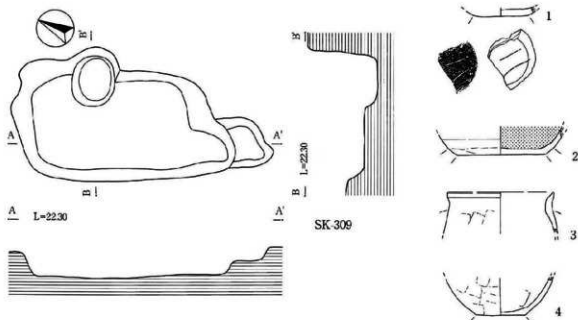
SX-303 土層説明

1. 焼成土。
2. 灰色土。灰層。粘性あり。
3. 焼成褐色土。焼土粒を含む。
4. 赤褐色土。焼土ブロックを多く含む。
5. 焼成土。焼土ブロックを多く含む。
6. 焼成土。灰を多く含む。
7. 焼成土。灰化物を少し含む。
8. 焼成土。砂ブロックを多く含む。

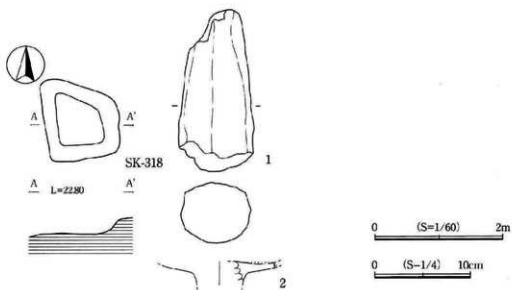
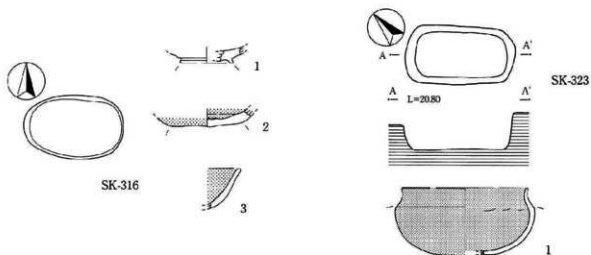
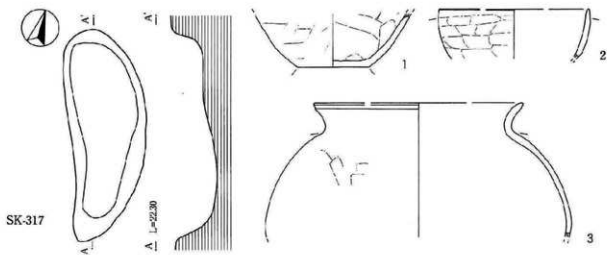


第194図 SX-303 実測図及び出土遺物

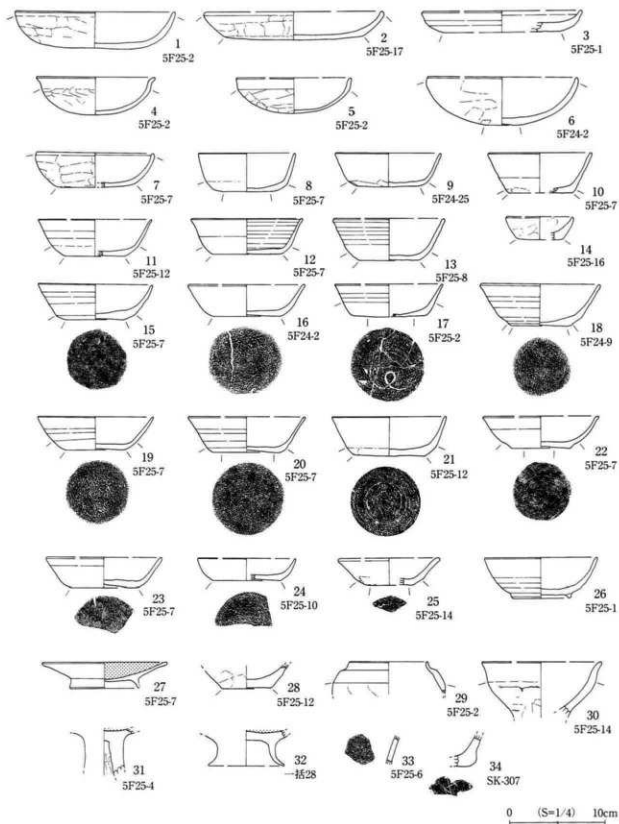




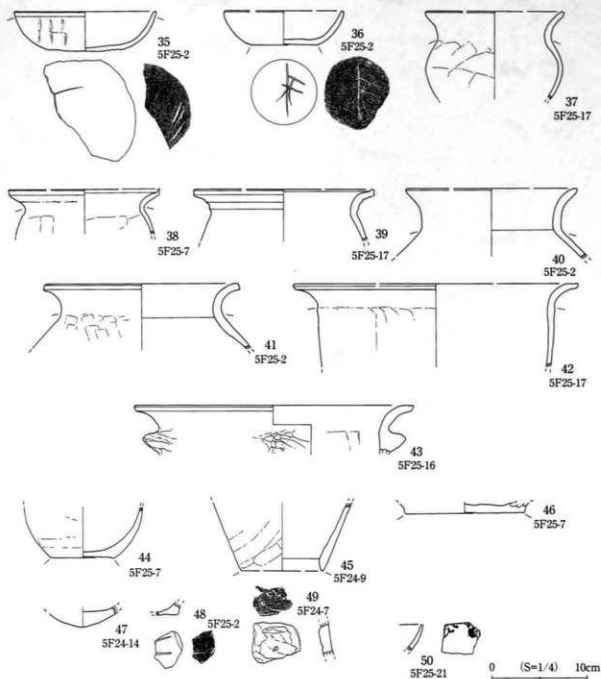
第196図 土坑 (SK-309~311) 実測図及び出土遺物



第197図 土坑 (SK-317, 316, 323, 318) 実測図及び出土遺物



第198図 遺構外出土遺物(1)



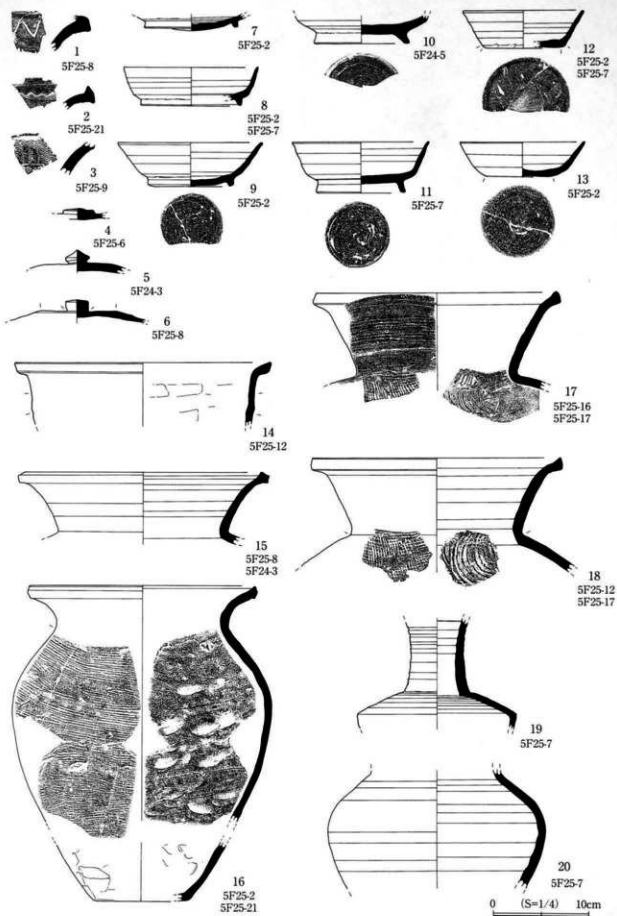
第199図 遺構外出土遺物(2)

SK-316 (第197図)

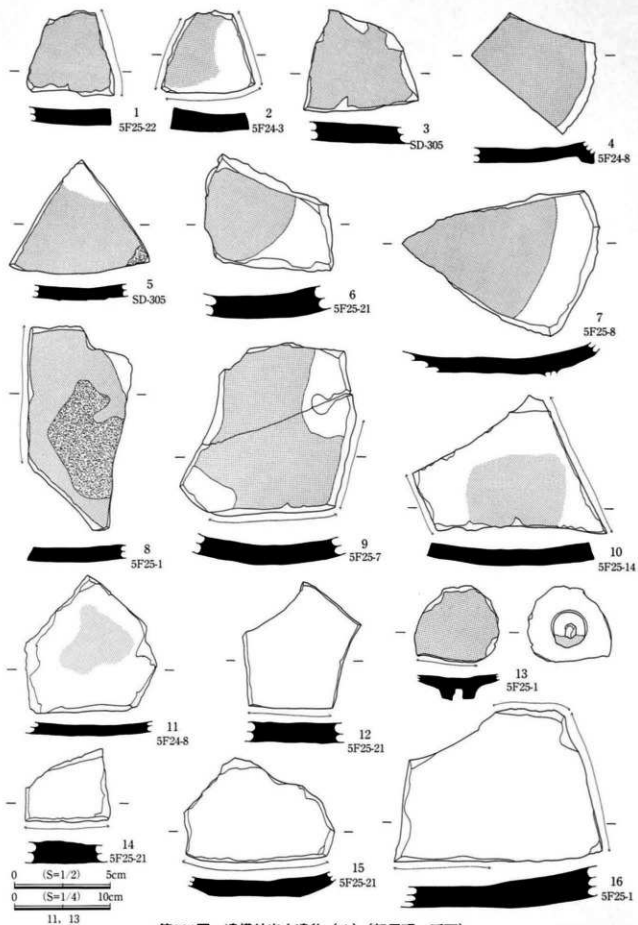
5F25-61に位置する。住居跡群と同じ分布域に属する。楕円形を呈する。内面に黒色処理が施された土師器環が出土している。

SK-323 (第197図)

5F25-61に位置する。住居跡群と同じ分布域に属する。長方形で、平滑な床を有し、壁は屈曲して急角度で立ち上がる。赤彩された土師器環が出土している。

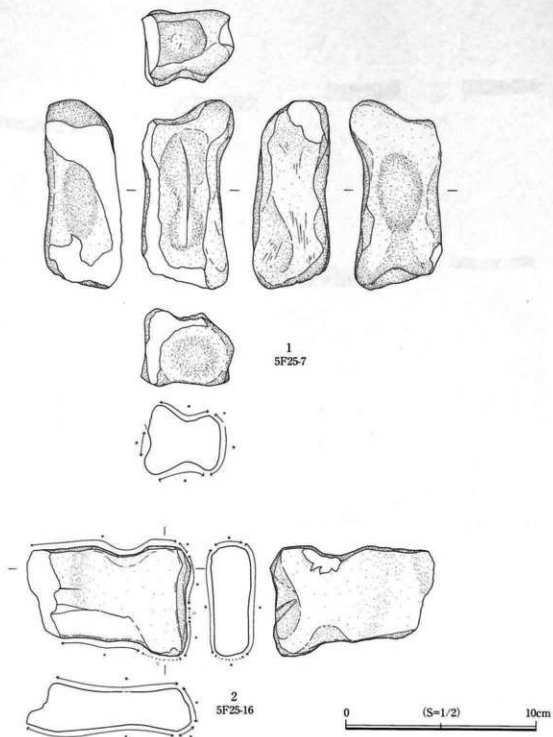


第200図 遺構外出土遺物(3)(須恵器)



第201図 遺構外出土遺物(4)(転用硯・砥石)

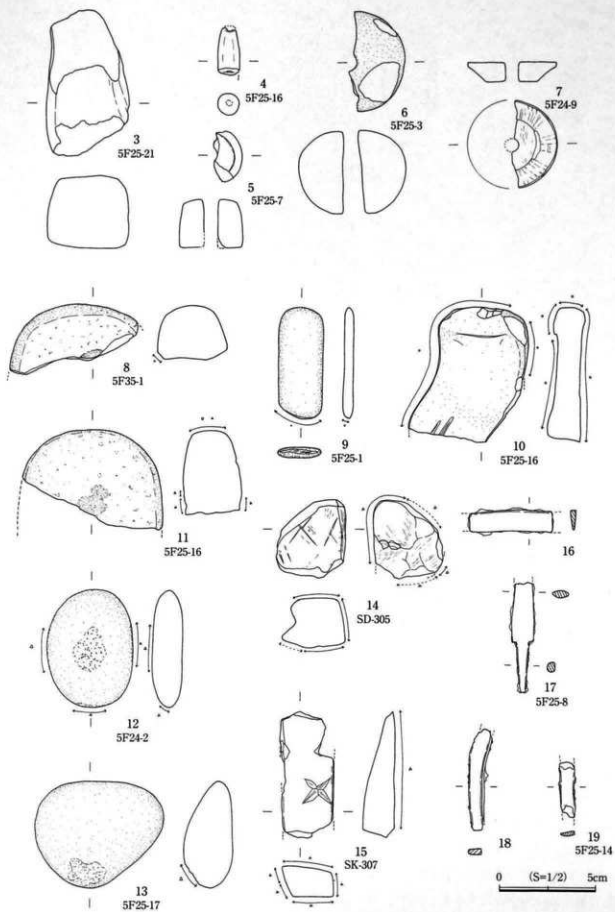




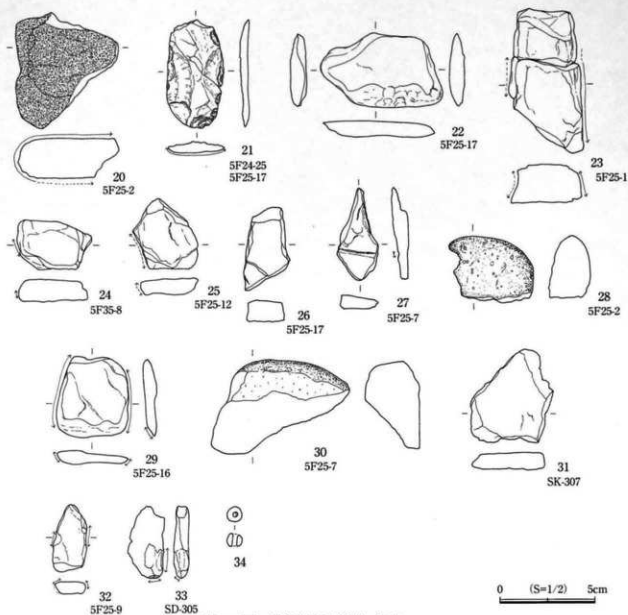
第202図 遺構外出土遺物 (5)

SK-318 (第197図)

5F15-21に位置する。住居跡群の分布域の外側に属する。やや不整な方形を呈する。西側の壁は明瞭に遺存していない。支脚、高坏が出土している。



第203図 遺構外出土遺物(6)



第204図 遺構外出土遺物（7）

そのほか、古代の土坑にはSK-312, SK-313, SK-315, SK-324がある（第143図）。ほとんどが第1区画の台地側縁辺、特に北側で検出した。楕円形ないしは円形の土坑で、床面が傾斜しており、壁面はなだらかに立ち上がる。遺物は出土していない。

#### 4. 遺構外の出土遺物（第198～204図）

遺構外では古墳時代から平安時代にかけての遺物が多く出土している。しかし、調査区が斜面地であることから、本来遺構に所属していた可能性もあるだろう。

須恵器の出土が目立っており、それを転用した硯や砥石も多く出土している。砥石には須恵器を転用したものの他に片岩（筑波石）や泥岩（飯岡石）、砂岩を利用している。一方、鉄器の出土は多いとはいえない。石器類は時期を特定することが難しいが、8, 11～13などは縄文時代の可能性もある。

### 第3節 中世

中世の遺構は、第2区画の北側で地下式坑や土坑が集中して見つまっているが、造成した平場の面積に比べると遺構密度は小さい。その他の区画ではほとんど検出できず、特に第3区画、第4区画では明瞭な遺構の痕跡は確認できなかった。

#### 1. 土坑

第2区画の北側で、楕円形の土坑と地下式坑を検出した。他の遺構はなく、当該土坑が局所的に集中して見つまっている。墓に関わる性格を有している可能性が高い。

第25表 C4区 土坑計測表(2)

( ) は推定値

遺構番号	遺構種別	グリッド	主軸方位	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK-301	馬埋葬土坑	5F15-23	N-78°-E	1.6	1.2	0.4	中世
SK-302	地下式坑	5F15-17	N-63°-E	(2.6)	(2.1)	1.7	中世
SK-303A	地下式坑	5F15-17	N-68°-E	3.4	2.5	1.7	中世
SK-303B	地下式坑	5F15-17	N-17°-E	2.2	1.4	1.1	中世
SK-304	墓坑	5F15-12	N-48°-E	1.7	1.2	0.2	中世
SK-305	地下式坑	5F15-18	N-64°-E	(3.9)	2.9	1.2	中世
SK-306	墓坑	5F25-3	N-3°-E	7.9	7.1	0.4	中世
SK-314	井戸?	5F15-21	N-71°-W	2.3	1.8	1.0	中世
SK-325	土坑	5F15-23	N-65°-E	1.8	1.4	0.4	中世
SK-326	土坑	5F15-23	N-50°-E	2.1	1.0	0.5	中世
SK-327	土坑	5F15-23	N-32°-W	2.4	1.6	0.9	中世
SK-328	土坑	5F15-23	N-29°-W	3.0	1.6	0.6	中世
SK-329	土坑	5F15-23	N-23°-W	1.9	0.8	0.6	中世
SK-330	土坑	5F15-23	N-35°-W	1.9	1.6	0.8	中世
SK-331	土坑	5F15-23	N-70°-E	2.1	1.7	0.5	中世
SK-332	土坑	5F15-23	N-14°-W	1.8	1.0	0.4	中世
SK-333	土坑	5F15-23	N-0°-E	1.9	1.2	0.4	中世
SK-334	土坑	5F15-23	N-63°-W	2.1	1.4	0.6	中世
SK-335	土坑	5F15-23	N-23°-W	2.0	1.0	0.4	中世
SK-336	土坑	5F15-23	N-11°-W	1.6	1.4	0.5	中世
SX-301	土坑?	5F24-25	-	-	-	-	-
SX-302	土坑?	5F24-24	-	-	-	-	-

#### SK-301 (第205図)

第2区画の5F15-23に位置する。楕円形を呈するが、西側では壁が消失している。床は東西方向に傾斜している。東側で馬の顎骨が出土している。

#### SK-302 (第205図)

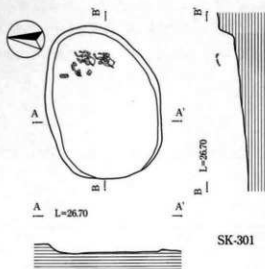
第2区画の5F15-17に位置する。地下式坑である。堅坑部と主室部の境に段差はなく、平坦である。主室奥で五輪塔(地輪)を再利用した砥石(あるいは台石)や炭化材が出土している。

#### SK-303A・303B (第206図)

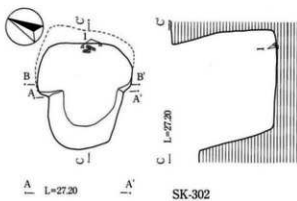
第2区画の5F15-17に位置する。ともに地下式坑である。303Aの堅坑部と303Bの主室部が重複している。遺構の形態を考慮すると、303Aの堅坑部から主室への連結部分が長い点は一般的とは言い難い。303B廃絶後に303Aを構築しようとして、固い地盤を主室にするために堅坑部が長くなったのではないだろうか。

#### SK-304 (第206図)

第2区画の5F15-12に位置する。平面形態は楕円形である。底面は平坦でなく、東西方向に傾斜している。遺物は出土していない。



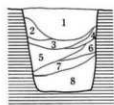
SK-301



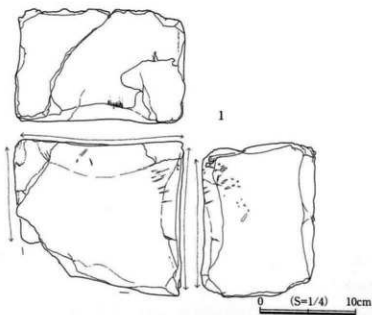
SK-302

SK-302 土層説明

1. 暗褐色砂質土、粘土を含む。
- 2, 4. 褐色砂質土。
3. 暗褐色砂質土、粘土、黒色土粒を含む。
5. 暗褐色砂質土、クムを含む。
- 6, 7. 褐色土。
8. 灰褐色粘質土、黒色土粒、粘土を含む。



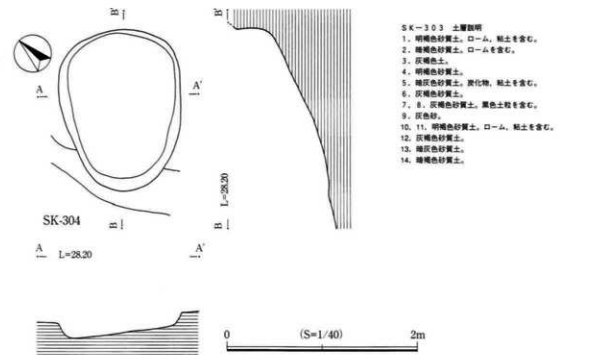
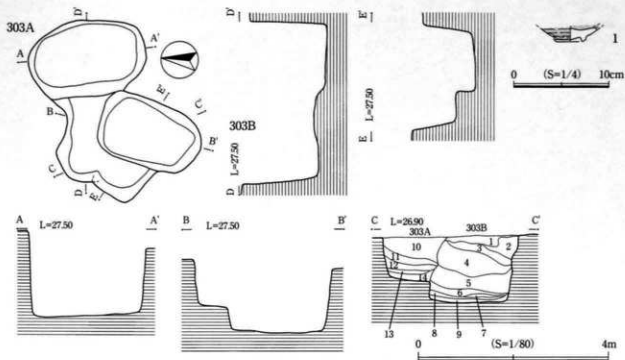
B L=27.20 B'



0 (S=1/80) 4m

0 (S=1/4) 10cm

第205図 土坑 (SK-301, 302) 実測図及び出土遺物



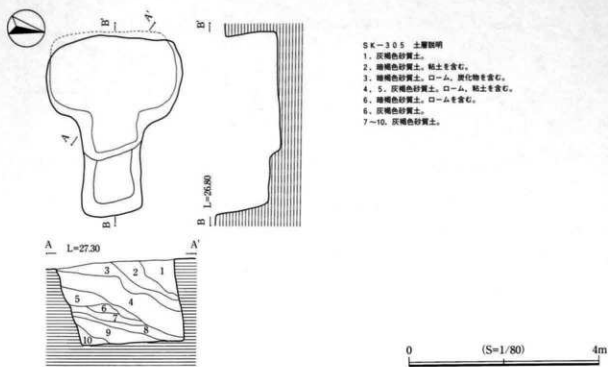
SK-303 土層説明

1. 暗褐色砂質土。ローム、粘土を含む。
2. 暗褐色砂質土。ロームを含む。
3. 灰褐色土。
4. 暗褐色砂質土。
5. 暗灰色砂質土。炭化物、粘土を含む。
6. 灰褐色砂質土。
7. 8. 暗褐色砂質土。黒色土粒を含む。
9. 灰褐色。
10. 11. 暗褐色砂質土。ローム、粘土を含む。
12. 灰褐色砂質土。
13. 暗灰色砂質土。
14. 暗褐色砂質土。

第206図 土坑 (SK-303, 304) 実測図及び出土遺物

SK-305 (第207図)

第2区画の5F15-18に位置する。地下式坑である。堅坑部と主室部との境に段差はなく平坦である。一方、堅坑部の手前に方形の掘り込みが認められる。地点は異なるが、C3区のSK-245, SK-246でも堅坑部前面に長方形の土坑が掘り込まれている点と共通した様相を示している。



第207図 土坑 (SK-305) 実測図

SK-325~336 (第208図)

第2区画の北側、5F15-23に位置する。いずれも平面形態が楕円形ないしは隅の丸い長方形を呈し、類似した規模を有する。遺物は出土していない。地下式坑の分布域の南側で集中して分布する。他の遺構は検出できなかったことから、互いに関連しあった遺構群の可能性はある。

分布域の東側には、SK-328, 334, 335と重複するように溝が巡る。さらに、2mほど間隔をあけた斜面裾にも溝とともに、やや規模が小さく、不整形の穴が分布する。これらは斜面上からの排水あるいは土留めの目的を有していたのであろうか。

SK-306 (第209図)

第2区画の中央部、5F25-3に位置する。他の土坑群とは離れて分布している。不整形な楕円形で、7m×8mの規模を有している。上屋の存在を推測させるビットなどは、遺構内外とも確認できない。南側の壁際にはさらに1.6×1.2mの長方形の土坑が掘り込まれている。覆土には炭化物や黒色土粒が混じり、埋め戻された様相が確認できる。底面付近で灰軸陶器類が出土している。これらの状況から墓坑と考えられる。東側で細長いトンネル状の掘り込みが確認できたが、当該土坑に伴うかどうか明確にし得なかった。

SK-314 (第210図)

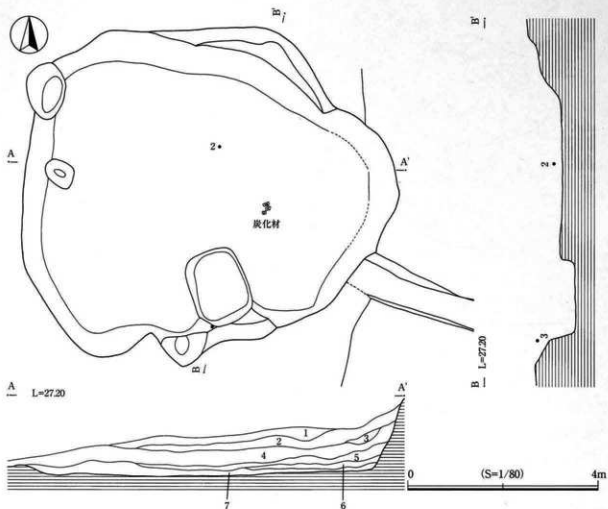
第1区画の北側、5F15-21に位置する。中世の他の遺構群からは離れた地点に分布している。楕円形の土坑が階段状に構築されている。やや接するようにSD-304が第1区画の縁辺を巡っていることから、互いに関連していた可能性がある。立地や遺構の形態、溝との関係から溜り戸のような機能を果たしていたのであろうか。

SX-301, 302 (第143図)

第3区画の5F24-24, 25に位置する。定形的な平面形態を有さず、部分的に平場を設けたり、土坑状の穴を掘削している。遺構の性格などは判断できなかった。

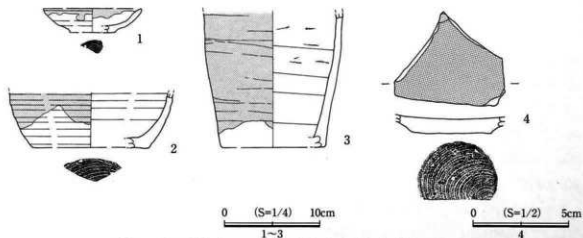




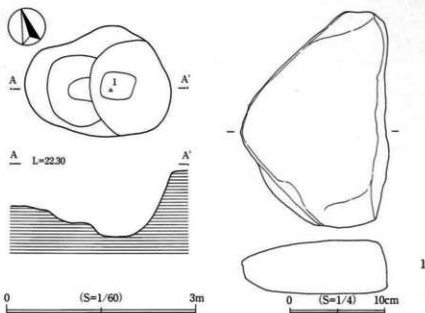


SK-306 土層説明

1. 暗褐色砂質土。ローム、粘土を含む。
2. 暗褐色砂質土。ローム、炭化物を含む。
3. 黒褐色土。
4. 暗褐色砂質土。炭化物を含む。
5. 暗褐色砂質土。炭化物を含む。
6. 暗褐色砂質土。炭化物を含む。
7. 暗褐色砂質土。黒色土。炭化物を多く含む。



第209図 土坑 (SK-306) 実測図及び出土遺物



第210図 土坑 (SK-314) 実測図及び出土遺物

## 2. 溝

検出した溝は、すべて中世に属する。幅が狭いものと、堀状を呈するものと二つの形態がある。

第26表 C4区 溝計測表

遺構番号	連結する遺構	長さ (m)	最小幅 (m)	最大幅 (m)	最小深さ (m)	最大深さ (m)	時期	備考
SD-301	SD-304, 305	7.6	1.2	2.8	1.4	2.2	中世	
SD-302	SD-501	29.2	0.8	2.1	0.1	0.8	中世	堀状
SD-303		10.9	1.0	1.3	0.2	0.2	中世	堀状
SD-304	SD-301, 305	18.0	0.3	0.6	—	0.1	中世	
SD-305	SD-301, 304	20.8	0.2	0.7	—	0.1	中世	方形に巡るか?
SD-306		23.0	—	1.1	—	0.2	中世	土手状

### SD-301 (第143, 211図)

5F14-20から5F15-16に分布する。第1区画の北縁に巡るが、長さは7mほどである。SD-304やSD-305が平行して接続している。

### SD-302 (第143図)

5F25-16から5F35-6にかけて分布する。第3区画の台地側縁に沿って巡るが、北端は第1区画と南端はC5区のSD-501と接している。堀状を呈する。

### SD-303 (第143図)

5F25-21から5F25-22にかけて分布する。堀状を呈する。第2区画と第4区画に分断しているが、第4区画では当該時期の遺構は他に検出できなかった。台地斜面がちょうど屈曲するあたりに相当することから、地割りの機能を果たしていたのだろうか。

### SD-304 (第143, 211図)

5F14-25から5F15-21にかけて分布する。第1区画の台地側縁に沿って巡る。北端付近では、SK-314と接し、さらにSD-301と平行するように接続している。